

連載専門誌

対人援助学マガジン



Vol. 3 No. 3

第11号

December 2012

対人援助学会

M O K U J I

目次		002
執筆者@短信	執筆者全員	003-011
知的障害者の労働現場 011	千葉 晃央	012-016
社会臨床の視界 (11)-	中村 正	017-030
ケアマネだからできること ~地域とつなぐ~ 連載11	木村 晃子	031-034
街場の就活論 vol.11	団 遊	035-039
コミュニティを探して (1)	藤 信子	040-042
第11回 誌上ひとりワークショップ	岡田 隆介	043-047
映画の中の子どもたち 11 「孤独なツバメたち」	川崎 二三彦	048-049
子どもと家族と学校と	中島 弘美	050-053
蠅螂の斧 社会システム変化への介入 第11回	団 士郎	054-060
学校臨床の新展開	浦田 雅夫	061-063
学びの森の住人たち (6)	北村 真也	064-077
幼稚園の現場から	鶴谷 圭一	078-083
福祉系対人援助職養成の現場から	西川 友理	084-089
我流子育て支援論 (11)	河岸 由里子	090-096
不妊治療現場の過去・現在・未来 11	荒木 晃子	097-103
対人援助学 & 心理学の縦横無尽8 fukushima2	サトウ タツヤ	104-113
ドラマセラピーの手法 (2)	尾上 明代	114-121
家族造形法の深度 (11)	早樫 一男	122-123
きもちは言葉をさがしている 第10話	水野 スウ	124-132
やくしまに暮らして 第十章	大野 睦	133-139
お寺の社会性(九) 生臭坊主のつぶやきー	竹中 尚文	140-144
こころ日記 ぼちぼち(5) (中学生日記)	脇野 千恵	145-147
これからの男性援助を考える 第九回	松本 健輔	148-151
ノーサイド 第7回 禍害と被害を超えた論理の構築	中村 周平	152-155
それでも「遍照金剛言う」ことにします(6)	三野 宏治	156-168
「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い(6)	山本 菜穂子	169-175
男は痛い! 第五回 「僕達急行 A列車で行こう」	國友 万裕	176-183
援助職のリカバリー (4)	袴田 洋子	184-187
周旋屋日記 (4)	乾 明紀	188-191
トランスジェンダーをいきる(3)	牛若 孝治	192-196
役場の対人援助論(3)	岡崎 正明	197-200
新版K式発達検査をめぐる(その2)	大谷 多加志	201-204
新連載 十代の母という生き方	大川 聡子	205-210
新連載 電脳援助(1)	浅田 英輔	211-213
編集後記	編集長&編集員	214-216

第11号

執筆者

35人

@短信

大川 聡子 新連載

皆様はじめまして。修士・博士でご指導いただいた先生方と同じ媒体に連載をさせていただくなんて、恐れ多くてなかなか原稿が進まず、新連載なのに締め切り間際になってしまいました。

今から10年前に市役所退職 立命館大学大学院応用人間科学研究科入学 看護系大学助手 修士修了 結婚 社会学研究科博士後期課程に入学 長男出産 次男出産 博士修了という、あまり一般的ではない経歴をたどっており、自分の人生自体が複雑経路だなと感じています。私がテーマとしている10代の母親も、教育を受けるべき年齢と多くの人が思っている時期に出産という、ライフサイクルが交錯する存在です。でも、学ぶことも、働くことも、結婚するかもしれないかも、子どもを持つか持たないかも、その人それぞれの価値観で、その時ベストだと思う選択をされていると思います。そうした個々人の価値観や選択を尊重し、多様なライフサイクル選択が受け入れられる社会のあり方について、連載を通して考えていきたいと思えます。

浅田 英輔 新連載

青森県の弘前児童相談所で児童心理司をしております。児相に勤めて12年

になりますが、入庁したころに始まった「弘前家族支援研究会」での団先生のワークショップに参加しております。11月にもそのワークショップがあったのですが、その時に「なんか書け」というお言葉を頂きまして、「これなら続けてかけるかも」と思えることで提案してみました。

ちょっと異色かなーとは思いましたが、でも知っておいて欲しいよなーっていうことを書き続けてみます。

相談援助に関わってる人って、電脳に疎かたりしませんか？そこをちょっとお手伝いします！

普段は、相談にきた親御さんや子どもさんとの面接のほか、施設職員対象の継続的な研修会をやったりしています。集団を扱うことが楽しいなあと思っているところです。

大谷 多加志

8月から連載を開始しました。職場で携わっている「新版K式発達検査」を軸に、「発達」や「研修」を切り口に連載を続けていきたいと思っています。

京都で合計136回開催されてきた新版K式発達検査の講習会を、9月8日・9日に初めて福島県で開催しました。講師の先生の「被災地で何かできることはないか」という思いが原点となり、半年前から準備して開催にこぎつけました。知人から「福島では子どもの発達を考える余裕なんてない。放射能からどう守るかが今一番重要だから」と言われた通り、福島県内からの参加者は1人。講習会を1度開いただけで何かができるとは思っていませんでした。でも、自分が今できることをしておきたかった。講習会に来て下さった全ての方に感謝しつつ、何か1つでも持って帰ってもらえるよう最大限の心配りをして過ごした2日間。研修の仕事の原点に立ち返った思いがしました。

岡田 隆介

最近、「エビジェネティクス」なるものについての知る機会があった。これま

での2度は関心を引かなかったが、今回は三度目の正直にして三度目の衝撃。振り返れば、自分は10年ごとにこの種の体験をしている。最初は20年くらい前の「システム論」、二度目は約10年前の「EMDR」だった。

で、エビジェネティクスの話。これまで遺伝子は「自分を複製するという生命の究極の目標のために、すべてのことは最適化され、生物は適応的に進化してきた」(R.ドーキンス)とされ、獲得形質の遺伝は分子生物学的メカニズムに基づいて否定されてきた。ところが、遺伝子の働きはもっと自由自在だという見方に変わりつつあるという。つまり、「親が獲得した形質が子孫に伝わることもありうる」と。草葉の陰でダーウィンやメンデルは慌てふためき、逆にルイセンコはガッツポーズをしているかも。

養育期の環境がその後成体になっても遺伝子上に「記憶」されるなら、幼少期の環境ストレスによる遺伝子の発現変化がストレス脆弱性を形成し、その後何らかのストレスが引き金となって疾患や虐待を「発症」させるとの説明も可能になる。そういえばWSJに、「子どもの頃に受けた虐待のDNAに及ぼす影響」が米デューク大・チューレン大で研究報告されたとあった。

こども虐待のエビジェネティックな説明、これはたいへんな切り口になるかもしれない。

竹中 尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

私のお気に入りの曲に“オーバー・ザ・レインボー”がある。最近はジェフ・ベック演奏をよく聴いている。イズラエル・カマカヴィヴォオレの演奏も気に入っている。映画「小説家を見つけたら」のエンディングに流れたのが、イズの“オーバー・ザ・レインボー”だった。はるか虹の彼方にたどり着くのは大変である。26歳の時に初めて失恋をした。その帰り道、夜道の人通りの少ない所で錆びたフェンスにかき付くようにして泣いた。愚かで幼かった私に訪れた当然

の結果であったが、ひどく落ち込んだ。しかし、今から思えば自分史の中の一ページであった。それからの人生で出くわすことを思うと、ほんの序章であった。倒れ込んでから再び歩み始めたことは、人生においていい経験となった。倒れたら立ち上がればよい。立ち上がると、新たな自分に出会える。新たな自分に恐れてはいけない。今、私は奈落に突き落とされた人の傍に立つことが多い。その人が笑顔を取り戻すなど果てしない彼方のように思えることもある。虹の向こうにたどり着くには果てしないような思いである。その人が再び立ち上がって、歩み始めるのに立ち会える時、私はその場に居合わせたことを心よりよかったと思う。人は、再び立ち上がるのは同じ場所に立っているのではない。気が付いたときには、虹の彼方にいるのである。それを仏教では「回心(えしん)」という。

川崎 二三彦

スマホ騒動と学会理事

2008年4月に買い換えた携帯電話のことだ。ある日突然、画面が真っ黒になった。一瞬電池切れかと思ったけれど、充電したばかりだからそんなはずはない。もう一度確かめると、今度はちゃんと表示される。どうやら寿命、もしくは故障らしい。が、携帯電話はもはや一時も手放せないから修理するなんて論外。取るものも取り敢えずドコモショップに出かけてみた。

「機種変更したいんです」

「ありがとうございます！ 只今1時間待ちですが……」

むろん、選択の余地はない。待ち時間を利用してビールとともに夕食を済ませ、戻った途端、

「19番でお待ちのお客様……」

ちょうど案内の声がした。スマホに切り替えることとして、一杯機嫌であれこれ質問し、注文し、にこやかに対応してくれた女性の説明をいかにも理解している風な顔をして聞いてるうち、かれこれ1時間半ぐらいは費やしただろうか。最後は意気揚々と引き上げた。

のはよかったとして、直後にハブニング。説明書や充電器などの付属品一式を入れた手提げ袋を電車に忘れてしまったのだ。幸い新品のスマホだけは鞆に納めていたから無事だったものの、充電できないからせっかく買ったのに操作できない。

ただし、捨てる呆けあれば拾う車掌あり。翌朝すぐJRに電話すると、遺失物は千葉県君津駅まで運ばれ、そこで奇跡的に確保されていたのであった。

「フフフ」

と思わず破顔、早速郵送してもらう手筈を整えたものの、スマホは直ちに使用したいから、夕方再度ドコモショップに出かけて2個目の充電器を買った。



「いやあ、昨日買った充電器を電車に忘れてしまいましたね」

2日続けて買い物をするので、照れ隠しについつい余計なことも言わなければならない。それを聞き流すスタッフの心中は知るべくもないが、対応はあくまでも愛想良いのであった。

「この袋、今日は忘れやしないぞ！」

慎重にも慎重を期して充電器入りの手提げ袋をしっかり掴み、片方の手で愛用鞆の持ち手を握りしめる。こうしてショップを後にし、戸外に出てしばらく歩いていると、どうにも肌寒い。が、それもそのはず道理も道理。手荷物に集中するあまり、はたと気づくとさっきまで羽織っていたはずのコートを置き忘れていたのである。慌ててショップに戻ると、

「お客様、こちらでしょうか」

*

というような「呆け日誌的近況」を、期せずして本プロフィール欄に毎回のよう書き続けているのを知ってか知

らずでか、過日舞い込んだ、差出人「対人援助学会」からの手紙には喫驚した。

「対人援助学会会員投票による理事選挙におきまして、先生が理事に選出されましたことをご通知申し上げます」

「な、なんだこれは？」

選挙があったことすら記憶になかった私は、開封一読、思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。

そもそも私が本学会に入会するきっかけは、本誌編集長氏からのメールだ。

「このたび、又新しいことを始めようと思っています。あなたはどんどん多忙なこととしますので、無理にとは言いません。でも、是非誘いたいと思ったのでお知らせしておきます。ご検討下さい」

見ると、メールの後段に本マガジンの企画案が添付されている。「季刊連載誌」「原稿料は出せません」とあって、「1回の原稿4頁、あるいはそれ以上」なんて規格も書かれていたけれど、とてもそんなことは無理。でも「最も短い連載」を売りにするならそれも趣向だろう、と思いついて2頁限定で書くことにしたのが、現在連載中の「映画の中の子どもたち」である。ところで編集長氏、

「連載するんだったら学会に入らないとあかんのや」

「学会費を払うんですね」

「そうそう」

「ウウム、原稿料を自分で払って連載するってわけか」

というようなことで私、連載執筆の条件を満たすべく、皆様の後塵を拝してどうかこうにか学会員に相成った次第。そんな私を、また、呆け日誌のネタが尽きないような私を理事にして、この学会は大丈夫なんですか……。

鶴谷 圭一

幼稚園の公式ツイッターをはじめて1年以上になります。ツイッターを始めたらホームページの更新がめっきり減りました。

園外保育や遠足に行くときは、僕は園長兼カメラマンとして同行します。少な

くても 300 枚、多い時で 800 枚くらい撮影しますが、これにツイッターの投稿作業が加わりまして、家で見ているお母さん方には好評ですが、こちらはカメラに iPhone にと大忙しで子どもと関わる時間はほとんど無くなりました。

最近の園外保育では、子どもたちに「カメラマン」と呼ばれております。園内にいると園長と呼ぶのにね。

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール：osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター：haramachikinder

河岸 由里子

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし 主宰（臨床心理士）

先日古くからの友達との食事が二度ほどあった。メンバーは違うのだが、どっちの会でも年のせいもあって、話題はどうしても健康や親の介護の話になった。その中で、娘である自分と実の母親との関係がぎくしゃくしているとの話があった。実母が相当な年齢になって、多少痴呆も入っているのかもしれないが、娘に対し、とても攻撃的で、きついことや嫌なことはばかり言うてくるそうだ。例えば、まだ、しっかりしていると思っている実母に対し、娘として「もう年なんだから、私に頼めばいいのに・・・。」と言えば「あんたなんかの世話にはならない！」と返ってくる。「なんかって何！」こうした、ちょっとした言葉に、「カチン」とくるので、喧嘩になってしまうそうだ。姑の世話でこういう喧嘩になるよりは良いのだろうが、「いっその事もっとボケてくれれば」とさえ思ってしまうとのこと。痴呆が進めば下の世話や徘徊の心配など、それはそれで大変だとはわかっているのだから、ただ単に目の前の面倒くささから逃れたいという意味だろう。この手の話を他の場所でも度々聞くようになった。実の親子なのだと思う。

私は 40 歳になる前に母も父も続けて亡くした。母親には痴呆があって最後の方は大変だったが、友人の母親たちとは違い、文句や嫌なこと、きついことを

言うてくることは無かった。静かで、むしろ鬱っぽかったと言える。とても賢い母だったので、上手だった書や絵が下手になって行くことがとても悲しかった。母が亡くなった後、4 か月で父も心筋梗塞で割合あっさり逝ってしまった。最後に残っていた父方祖母は父の死後わずか 3 週間で亡くなった。こうしてみると、私の両親は子ども孝行というか、子どもにとって良い人たちだったと言える。有難いことだ。

前述の友達たちと、「自分たちは子どもに迷惑を掛けないようにしよう、その為には健康維持、ボケ防止、そして最悪入所先の準備をしておこう。」という結論に至った。そうは言っても、皆まだ 10 年は大丈夫と思っている。甘いかな？

中村 周平

先日、小学校からの友人が結婚しました。電信棒で頭部を強打したのが偶然にも彼の自宅前で、親御さんに助けていただいたことがご縁で仲良くなるという変わった関係です（笑）。中学・高校も同じ学校に進学し、グラウンドで一緒に汗を流したラグビー部仲間でもあります。二次会で彼の幸せそうな姿を見て自分までニヤニヤしてしまいました。

また、その日は事故が起きたという自分にとってある意味「特別な日」でした。それが来年からは大切な友人の結婚記念日という「特別な日」になったわけです。自分たちを出会わせてくれたのも偶然、今回も本当に偶然。でもそれが自分にはすごく嬉しい偶然ばかりでした。

北村 真也

私塾「アウラ学びの森」

（<http://auranomori.com>）代表。

私塾「アウラ学びの森」

（<http://auranomori.com>）フリースクール

「知誠館」（<http://tiseikan.com>）代表。

10 月に福島県三春町を訪れました。お世話になった武藤義男先生の十三回忌にお線香を上げに行きたかったのです。武藤先生は 80 年から 90 年にかけて三春の教育長を務められ、当時、町を

あげて教育改革を実践された方です。私が先生に出会ったのは 95 年頃かと思うのですが、お亡くなりになられるまでの短い期間にさまざまなやり取りをさせていただきました。「官と民の垣根を越えるいい仕事をしてください」それが、先生に頂いた最後のコトバでした。あれから 13 年、アウラは、文科省をはじめ三つの行政のプロジェクトに微力ながらかかわっています。今回はそんな報告を先生の墓前にさせていただきます。

荒木 晃子

おもえば、今年はギアを入れ替え、走り抜けた一年だった。

元旦に届いた「母一時危篤」の一報が、私の年間スケジュールを決定したといってもいい。とにかく、一命を取り留めた母に、いつ・なにが起きてても対応できるように、できるだけ、まわりの方にご迷惑をかけぬようにと、対外スケジュールを組んだ。極力、遠方での学会発表や勉強会への参加を避けるようにし、もし病院から連絡があれば即駆けつけることができるよう、できる限りの体制を整えた。前年度から持ち越した国際会議の開催と、新規に依頼のあった業務を滞りなく終え、継続業務には支障が出ることのないよう準備を整え、身近な仲間に

“いざ”という時の対応をお願いした。常時、携帯電話の着信を気にしつつ日々を送ることは、思った以上に疲れを伴う。最終的には、この冬を迎える直前に、体力・精神力の限界を感じ、思いとは裏腹に大切にしていた業務からしばし距離を置くしか術が見つからなかった。

常に両手いっぱい大切なものを抱えていることで、非常時の対応にもろもろの不安があった。自分はそんな器用な人間ではないことくらい自覚していたし、それ以上に気がかりなのは、母にその時が訪れたとき、自分がどんな状態になるのか見当がつかないことだった。もちろん、その時がこない限り予想がつくわけがない。以前、父を看取った時には、母と共に悲しみを分かち合えた。でも、

つぎは、その母を私がひとりで看取らねばならない。いまいえることは、それは、とてつもなく悲しいだろうということだけだ。

こうやって、母をおもいながらものを書く機会が、あとどれくらいあるのかわからない。でも、いま、私がおもいを寄せる母は、間違いなく生きている。こうやって、母の安否を気遣いながらつづる文章に、物言えぬ母との思い出を紡ぎ続けているのかもしれない。点滴だけでいのちを維持する母の頑張り、いまの私にとって、一番の励みである。つぎのお正月で、母の頑張りは二年目を迎える。ありがとう、おかあさん。

尾上 明代

少し前に、映画「ツナグ」を見ました。ものすごく忙しい中、無理してでも見たかった映画でした。

すでに亡くなった誰かと会わせてくれる、特別な能力をもつ「ツナグ」。いろんな事情で「死者と会いたい人」が登場します。

映画の主人公自身(これから「ツナグ」の職業を祖母から引き継ぐ男の子)は、謎の死をとげた両親に「会わない」ことを決め、その死を受け入れ自力で乗り越えました。

彼の成長が素晴らしかったのと同時に、悩んでいる人を助ける仕事をする人にとって、(当然ですが)「自分が自分を助けることができるように」成長することが必須である、というメッセージを強く感じました。

木村 晃子

今年を振り返る時期になりました。今年、実に多くの出会いがありました。それも、全くの新しい出会いとも違い、これまで自分が大切にしてきたことの延長に、人との出会いや、新しい活動との出会いがありました。こういうのが、巡りあわせというのかな、と感じています。タイミングです。今、この時に、この人に、こんな仕事に巡りあわせる。そのことが、その後の歩みに大きく良い循

環を引き寄せてくれた、そんな一年だったように思います。この2年ほど、私の人生は停滞の時期でした。それでも、歩みをやめない限りは、復活するのだと実感しました。どんなに状況が辛くても、そんな辛さの中にも、時々温かな光も差し込んでいたりして。何もかも真っ暗闇にしてしまうこともないのだと思います。もしも、この私の短信部分を偶然に目にされた方が、ちょっと低迷だったとして、私に差し込んだ光が、言の葉にのって届くといいなと思います。今あることに感謝して。

北海道 当別町 普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

団 遊

新幹線の中で書いています。生まれ育った福知山に行っていました。実際に住んでいたのは小学校2年生までなのですが、三十年振りに行ってみて、「ここは故郷だ」と思いました。父親の転勤の経由地ですから、今は特に尋ねるべきところもありません。けれど、当時住んでいた長家を見た時は、感傷的になりました。通学路を歩きながら「よくこんな長い道を毎日通っていたな」と過日の私に感心しました。

駅では傘を持って改札口で父親を待った記憶がよみがえりました。幼少期の記憶は、場所に宿るのだと強く思いました。京都府内ではありますが、転勤を繰り返した父でしたから、自分には「ふるさとなどない」と思っていました。一番長く住んだ滋賀県大津市にも、特に思い入れはありません。

でもそれは間違いでした。幼少期を過ごす場所というのは、これほどまでに大事なモノなのかと思いました。これから「故郷は？」と聞かれたら、胸を張って答えます。「福知山です」。

藤 信子

私の住んでいる団地は樹が多く、夏は木陰の恩恵を受けているが、秋の紅葉はまた素晴らしい。樺並木の色づきから始まり、銀杏が周囲を明るくする様子、そ

して今は紅葉の真っ赤になったものから、緑・黄色・赤のグラデーションを見せるものまでを楽しんでいる。この団地の様子を知っている人からは「よそに行かなくてもよいでしょう」と言われることがある。そんな時、ちょっと戸惑う。確かに黄葉・紅葉を楽しんでいるけれど、それは日常の中だから、「紅葉を見に行く」とはちょっと違うような気もする。紅葉狩りに出かけるというのは、非日常の時間・空間の中に自分をおいてみることで、異なった体験ができることなのではないだろうか。しかし1日に万を越す人が集まるところには行きたくはない。今年の紅葉は久しぶりに鮮やかで美しいと言われている。歩いて行けて人の少ないところはどこだろうと、残り少ない日にちの中で考えている。

水野 スウ

ガジンが更新されるのは年があけてからでしょうから、だいが前の話になってしまふけれど。

9月末、同志社大学で開かれた、早樫さんの「二日間 家族造形法ざんまい」の研修会に、初参加しました。私はまったくの新米なので、ざんまいの域まではとてもたどりつけませんが、マガジン誌上でお名前や文章を拝見してる、早樫さんをはじめ、何人かの方たちと京都で初めてお会いできたのが、とてもうれしい収穫でした。

今回の連載や短信を目にする時、その方たちのお顔を思い浮かべながら読むことができます。本体がウェブマガジンなだけによけい、実際に会う、言葉を交わす、その人の全体からかもされる空気にふれる、といった京都での体験が、新鮮に感じられました。これからもチャンスと予定があれば、えいやっと、出かけたいなと思います。

「紅茶の時間」4冊目のエッセイ集、『紅茶なきもち～コミュニケーションを巡る物語』が12月半ばに発売開始。このマガジンに連載中の文章が、いくつかの出发点になってくれたこと、この場をお借りしてあらためて、ありがとうご

ざいます、と言わせてくださいね。

仲間と一緒に子育てしたい、からはじまった紅茶の時間。その場を続けていくうちにクッキングハウスとも出逢い、コミュニケーションを練習するあらたな場、「ともの時間」が生まれ、そこから気づいたいろんなきもちやたくさんの学びが、巡り巡って、私の中に、とてもゆるやかに還っていつているような気がしています。

私自身のきもちの循環や、いつか誰かの役にたちそうなコミュニケーションのヒントが、読んでくださる方にどうか伝わりますように、と願いながら一年がかりで、文章を綴ってきました。他に、紅茶の原点となった私の居場所の話や、目には見えないギフト、奇跡みたいな日常、私のこころの旅の話、なども。編集とデザインは、『ほめ言葉のシャワー』と同じく、娘の mai works が担当しています。

『紅茶なきもち～

コミュニケーションを巡る物語』

著：水野スウ 編集・装丁：mai works

発行元：mai works

四六版（127mm×188mm）200ページ

¥1,200（税込）

一般の本屋さんには並ばない、産地直送の本です。ちなみに、送料は一冊につき、160円。もしご希望の方、いらっしやいましたら、sue-miz@nifty.com までどうぞご連絡くださいませ。

「紅茶の時間」URL

<http://www12.ocn.ne.jp/~mimia/sue.htm>

山本 菜穂子

最近の感動をふたつ。一つは映画「のぼうの城」。大事なものは何か、何を守ることがか、ぶれない生き方がしたいな。もう一つは YouTube の映像「裸の男とリーダーシップ」。「ほほえみ」においては、私は「裸の男」なのかも。最初のフォロワーであるほほえみ隊に感謝。

早樫 一男

9月～11月の三か月、慌ただしい日々

を過ごしました。スケジュール帳に記入した予定や約束を順調にこなせたことに感謝です。

連載中の家族造形法に関しては、定例の研修会だけでなく、京都（9月29日～30日）、札幌（10月20日～21日）、金沢（11月3日）と、それぞれのワークショップで紹介することができました。出会った方々にも感謝です。

予定を順調にこなしていくには、健康管理・体調管理が重要ということで、「スポーツジム」通いを思いつきました。10月初旬、入会手続きの前の「体験」に参加。「まずは、運動不足解消！」と意気込んだものの、予想通り？「体験」としての一日だけで頓挫という結果となりました。

11月に入ってから、毎日3～40分、距離にして2～3キロ歩いています。時間は朝7時前後。ただし、室内です。通販で買ったフィットネス器具を使っています。脂肪燃焼と高血圧の予防を目指して、細々と続けたいと考えている昨今ですが、問題は「いつまで続くか」です。

西川 友里

いくつかの学校で、福祉系対人援助職の養成にたずさわっています。

この原稿の入稿は11月。11月は、どの学校でも学園祭が行われます。

私は学生の時から、学園祭が大好きです。学園祭が、というよりも、それに到達するまでの準備の時間が大好きです。教員になってからの学園祭は、少し立場は変わるものの、やっぱりワクワクするものです。

「誰かを楽しませるためには、どうしたらいいかな」と考えて、話し合い、考えあい、やってみて、失敗して、やり直して、また意見を交換する。その間に多くの人の思いが錯綜し、現実的な制約にたくさん気付き、他人と意見があわないままのこともあると知り、感情に走って大失敗をし、何にも言えずに自己嫌悪に陥り、誰かを意図せず傷つけることもあると知り、それでも話が通じる工夫をすれば、それはそれでなんとかなると知り、やっとの思いで学園祭当日を迎える。そ

うやってこの機会を活かして、成長をしていく学生達。サイコーじゃないですか！学生によっては、下手な授業より多くのものを吸収し、一回り大きくなります。

というわけで、誰もやりたがらない学園祭委員の顧問を、アホみたいに毎年志願してやっています。こういうの、物好きって言うんでしょうかね。気にしませんけど。今年の学園祭、3日前に終わりました。今年も、サイコーに楽しかったです！

中島 弘美

大阪梅田にある個人開業のカウンセリングオフィスで、家族療法をベースに子どもと家族やカップルの支援をしています。

公的な機関に勤めておられる方から、事例検討をしてほしいという要望があります。子どもの事例が多いのが、安全が疑われる虐待のケースについての依頼です。

いまおすすめしているのは、「三つの家(情報収集ツール)」をつかったのグループ事例検討法です。これは、家族療法のひとつであるソリューションフォーカスタプローチの理論に基づいて、シンプルにまとめられています。それに、利点も多々あります。ケースでおこっている状況をバランスよく把握できます。視覚的にも工夫がされていて、ノウハウも伝えやすく、ケースの整理にも役立ちます。

この事例検討研修をしていて気がついたこと。それは、「新しいやり方を取り入れるのがうまい」そんな職員さんが多くいることです。しかも女性にその傾向があるようです。

「検討を必要としている家族の、心配なこと(=心配の家)と、なんとかやれているところ、うまくできている点(=安心の家)を記入してください」と、説明するとポイントを瞬時にくみとって、短時間でさくさくっと書き込み、グループワークをこなすことができます。

情報を整理するときのものさしをすでに持っておられるのだろうと感心します。

私はカウンセリングをしているとき、受けとめることの幅は、それなりにしていると思いますが、反対にこちらから発信する、伝えることについては、本当に届いているかどうか、確信を得にくいときがあります。そのため、研修講師をしていて、私の意図していることが伝わたと手ごたえがあるとき、とても安堵します。

千葉 晃央

平和を願う資料館をつくり平和学習、反戦活動を続けてきた方、関東で働いていたけれども沖縄に移り住み辺野古で座り込みをしている方、オスプレイ離発着場が地元でできることになり、急に巻き込まれ米軍基地出入り口を封鎖している方、沖縄の方と結婚し、沖縄平和ガイドとして沖縄の戦跡を案内されている方、京都西陣で修業をして現在は沖縄伊江島に移り、自ら宿の建築をして経営されている方...そんな方々に沖縄平和反戦研修を経験しました。京都の福祉事業所のスタッフの方々が毎年実施してこられ、今回6年目の研修でした。沖縄では生きていく人にも当然お会いしましたが、多くの今は亡き方々にもお目にかかってきたような気がしてなりません。辺野古で上陸艇6機による訓練を見て、那覇空港を横切る戦闘機を見て、沖縄高速の上を飛んで行ったオスプレイをみる。その一方で雄大な自然が沖縄にはあります。またオスプレイが担う任務をしてきた前任機はベトナム戦争のころから使っている輸送機であって、それがいまだに飛んでいることも危ない！というはなしをきくと一面的な見方ができないことだけが事実としてあるような気がします。

沖縄も原発も社会的弱者の上に成り立っていることだけが身にしみます。それが私たちが作っている社会です。自分が社会的弱者に関わる仕事をしているものとして、そして教員として、やるべ

きことがあるようにあらためて感じました。



辺野古 女性米兵の姿も



地中あちこちに眠る不発弾 白い大きなものは模擬原爆 投下訓練も沖縄でヌチドゥタカラの家(命はたからの家) 伊江島



沖縄自動車道上空を飛ぶオスプレイ 1トンの模擬貨物で訓練中

三野 宏治

群馬に来て7か月が経ちます。仕事で

東京や埼玉にでかけることがあります。また今年は調査で熊本へ行ったり、帰省で群馬と大阪・京都を車で往復すること数回。以前の生活では考えられないくらいの距離を移動し、様々な場所を訪ねています。

ただ、仕事・調査で行く場合、滞在時間が限られていることもあり、何を見るわけでも、何を食うわけでもなく帰っています。何を見て何を食えばよいのか、名所や名物を知らないし積極的に知りたいと思わないのが主たる原因と思われる。

浦田雅夫

最近、いろいろなイベントの裏方をよくさせてもらっています。人に来ていただくにはどうしたらよいのか。対象者のニーズになっているか。主催者のニーズではないだろうか。ニーズの把握が大切だなと再認識させられます。いよいよ寒い季節になります。皆様、おからだいっそう大切になさってください。

中村 正

京都と大阪で仕事をしていた連れ合いが仕事先を変えるという。以前から話しはでていたのだが、本決まりになった。アラブ首長国連邦(UAE)にいくという。日本語教育学が専門で、日本語を教えにいく。年明け早々の2月から予定は3年間である。「・・・7つの首長国により構成される連邦国家である。メソポタミア文明とインダス文明との海上交易の中継地点として栄えた・・・世襲の首長による絶対君主制に基づき統治されている。・・・石油の富によって成り立つ、つまり国民の労働とその結果である税金に拠らずして国家財政を成立させる典型的なレンティア国家・・・国民の政治への発言力も発言意欲も非常に小さい。・・・UAE国籍を持つ国民はゆりかごから墓場までの手厚い政府の保護を受けている。・・・UAE全住民に対する国民の割合が20%に過ぎない・・・」などとウィキペディアにでている。なかなか理解しにくい、興味津々である。我が家は10年に一度くらいは一家離散状況となる。この前は2003年から2

004年にかけてシドニーに滞在していた。団編集長らに遊びに来てもらったことがある。その時は子どもが小学6年だったので行き来したり、シドニーの学校を確保したりしたが、今回は連れ合いの単身赴任になりそうだ。でも時々私もアブダビに行くことにしよう。ワールドワイドの視野と行動力をもつ連れ合いから教えられることは多いが、今回の赴任先は想定外であった。成人した娘と日本で父子生活となる。

サトウタツヤ

前回、「今回からは、福島のことなどを書いてみたい。なるべく長く色々」と宣言したことなどすっかり忘れて、時間とは何か、を書き始めていたが、やはり福島のことを書こう、と思い直した。前回の続きではないが、最新の福島。最近、二ヶ月に一度は福島に行っている。昔の同僚にも会う機会が増えた。同行している学生たちも何か得ているようだ。

大野 睦

ネイチャーガイド 有限会社ネイティブビジョン 代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長 BLOG やくしまに暮らして <http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

2012年も終わりが近づいてきました。今年ほど全速力で駆け抜けた年はなかったかもしれないなあと思いつつ振り返ってありました。皆様にとって屋久島の景色がホッと一息、気分転換になることを願いつつ、あと一ヶ月、悔いのないように走り続けたいと思う今日此頃です。

坊 隆史

同僚たちに誘われて京都の愛宕山に登った。標高が924mと京都市内から目立っていたため、以前から興味もっていた。山頂付近からは視界に収まった京都市街を一望することができた。普段アウトドアに接することが少ないためいい機会であった。聞くところによると、片道2時間近くかかる山を毎日登っている人もいるらしい。同僚の一人も月に

数回は登っているらしく、嫌なことがあれば登山をしてセルフケアに励んでいくとのこと。確かにわかる気がした。初心者にはほどよい難易度で、登頂した時の達成感もある。正の強化がはたらき、また別の山に挑戦したくなった。登山療法として援助活動に使えないだろうか、と登山の時まで対人援助のことを考えてしまった自分にもセルフケアが必要かもしれない。

松本 健輔

カウンセリングルーム

HummingBird 主宰 主宰

<http://www.hummingbird-cr.com>

夫婦のカウンセリングをしていると本当によくこんな相談に出会う。妻が子どもの教育(勉強やスポーツ)に熱心になり、夫との関係が悪化。妻は子どもへの関心が薄いと夫を罵倒。夫は子どものためじゃなくてお前の押しつけだと非難。

カウンセラーという中立の立場としてどちらが正しいとは言える立場にはないが、『その行為が誰のためのものなのか』を考えることはとても大切なことだが、夫婦で共通の認識を持つことはなかなか難しいと最近切実に感じる。

岡崎 正明

うちの地域で、このたび集会所の建て替えが議論となった。高度成長期後半に造成された古い住宅地。年々住民も建物も高齢化が目立つ。今の集会所は耐震化なんて言葉が生まれる前の産物で、築30年は越えている。

「助成金が出る今のうちに建て替えるべき」「急がず修繕しながら使えばいい」どちらの主張にもそれなりの理由があった。私は答えが出ず、初めてまともに議論の場に参加してみた。

会場の9割はいわゆる高齢者と呼ばれる年齢層の方々。しかし元気だ。この地域を作ってきた自負と気概を感じる。かといって一部の人が独断で、ということもなく、話し合いも大変民主的で、検討の材料となる情報(予想される負担や

建設候補地等)も可能な限り提供された。

議論は白熱し脱線もしたが、最後は多数決となった。

結果は今すぐの建て替えはしないことに。しかしほとんど意見は半々。それだけに微妙な空気が流れた。

私はちょっと勇気を出して手を挙げた。「みなさんが自分のことだけ考えるのではなく、地域にとっていいことは何かを真剣に考えておられるのを聞いて、ここに住んでよかったと思いました。ありがとうございました」

拍手があがった。会場の空気が少しゆるんだようだった。

もちろん本心からの発言だった。どっかの国みたく、一部の人間が決めたことが、ものすごいスピードで進んでいくというのは、なんだか危なっかしい。それなら例えなかなか物事が決まらなくても、いろんな意見が自由に表明できる方が健全な気がする。本屋でゴーマニズム宣言の横に日教組の本が並んでいるのが嬉しくなる性質なのだ。それが生き物の多様性ってもんだって。

ただ、それを効果的な場面で「狙って」言えたことについては、自分をちょっと褒めてやりたくなった。こんなのが面接場面で出せれば、なお良いのだが。

牛若 孝治

私のように、視覚に障害があり、白杖を携帯していると、外出先や交通期間内で、こんな会話をすることがある。

A「私(僕・俺)の家族にも、障害者がいるから、あんたの気持ちわかる」

私「そんなこと軽々しく言うもんじゃありませんよ。第一、障碍っていても、どこの障碍かわからんでしょ。あんたは善意のつもりで言っているだろうが、それを聞いた俺は嫌な気分です」

A(きょんとんとして)「ええ。そうなんですか?でもほんとにわかるんです」

私「それは、相手のことをわかったつもりになっているだけで、あんたの思いをただ相手にぶつただけの押し付けがましい野蛮な態度ですよ」

私はあけっぴろげな人間だから、どん

なに大勢の人がいても、怒るときは体を張って大声で怒る。障害者だから怒らないだろうという、なんの根拠もない悪しき思い込みを払拭させるのが私の役目であるから、どんな好奇心で見られようと、私はこれからも怒り続ける。そして私は、そのようにして怒っている自己を愛している。

袴田 洋子

今回の「援助職のリカバリー」を書くのは、けっこうしんどい作業でした。理由は、「援助職」になってからの話だからだろうと思います。

これまでは高校、大学、と、プロになる前の話、でもプロになってからのダメダメぶりを振り返るのは、かなりイタイ作業でした（苦笑）

でも、時々イタイ思いをするくらいが自分にはちょうどよいかもかもしれません。どうぞ、お読みいただけたら幸いです。私ほどのダメダメ援助職は居ないかもしれないと思いつつ、昔の私のような若いスタッフを育て中の方がいらしたら、どうか、ひとつでも良いところを見つけて、認めてあげて、褒めてあげて頂きたいと思う所存です。

生意気言って申し訳ありません。

乾 明紀

もう10年以上も馬券を買ってないが、日曜日、深夜のニュース番組で競馬のジャパンカップを観た。番組では、三冠馬と三冠牝馬が競う史上初のレースになったことを熱心に伝えていたので、どうせ煽りだと高を括っていたら、豈図らんや素晴らしいレースを見せてもらった。最後の直線、残り400メートルを切った時、前方進路を塞がれた三冠牝馬が、フランス凱旋門賞二着の牡の三冠馬に体当たりしながら進路を確保し、その後は三冠同士が並走しての叩きあい。人馬一体となった文字どおりの一騎打ちとなった。どっちが勝ってもおかしくない一騎打ちを制したのは体当たりを

して進路を切り開いた三冠牝馬だった。興味のある方は、JRAのWEBサイトでどうぞ。久しぶりに淀の競馬場に行こうかな。。。

國友 万裕

この頃、アラフォーに続いて、アラフィーという言葉が流布し始めました。アラフィーとは、around fifty、すなわち、50歳くらいの人という意味なのだそうです。僕は、最初、アラフィーとは、「あら、気が付いたら、50歳」という意味なのかと思っていました（笑）。僕もアラフィーです。1964年の2月生まれなので、後1年ちょっとで50歳になります。

考えてみると、僕は、50歳にふさわしいものを何も持っていません。僕が20歳の頃、50歳の男と言えば、妻をもち、子供をもち、家を建て、社会的地位も勝ち得た男性というイメージがありました。僕が20歳の頃は、まだ景気がよかったし、普通に生きていけば、自動的にそうなるのだと思っていたような気がします。

しかし、実際アラフィーになってみて、イメージしていたものを何も持っていない自分に気がつきます。僕は、パートナーもいないし、仕事は非常勤だし、貯金もありません。もっとも、僕が20歳の時に比べると社会そのものも変わってしまい、真面目に生きていてもリストラになったり、過労死したり、自殺したりするアラフィー男性は山のようにいますし、離婚が増えているので、アラフィーでシングルという人は珍しくもありません。それに僕は、今の自分の生活がそれほど不幸だとは思っていないし、もっと自信をもってもいいのですが、やはり何も得られなかった自分が何となく惨めに感じる時はたびたびです。まだまだ男は仕事で成功して、妻子を養ってなんぼという価値観を持っている人は多いです、僕も無意識のうちにそういう価値観を内面化しているでしょう。

僕は、少年の頃に重い十字架を背負い、

今でもそれを完全に下ろすことはできません。しかし、今年は、新たな友達もでき、仲間と温泉に行き、海水浴に行き、キャッチボールをし……少しずつ、少年時代に失ったものを取り戻しています。

DV 被害者あさみまさんの『いつか愛せる』はとても素晴らしい本ですが、僕も、いつか少年時代を取り戻せる、いつか十字架を下ろせる、いつか僕を傷つけた人を許せる……そう思って、日々を生きていきたいと思います。

脇野千恵

先日、地域にある薬物依存からの回復施設「ダルク」の10周年フォーラムに参加しました。このような施設は全国的に広がっていて、女性のための「ダルク」もできています。基本的には当事者だった人が施設長となり、入所者を回復させていくプログラムを実施していますが、入所するには、地域から遠く離れることが求められます。大抵は、親がわが子を手放すことに躊躇するそうです。会場には、全国から祝いに駆け付けた当事者、その家族が大勢いました。ちょっと強面の男性たちと、いかにも家族の問題に闘い続けてきた、いや今も闘い続けている家族の姿があり、考えさせられました。午前中はそういった家族の体験話。本場に重い重い話でした。

これから、薬物依存症はアディクションあるいは嗜癖というそうで、昨今の依存症は実に様々で、買い物、ギャンブル、ゲームなどなど複雑になっているとか。精神科医、弁護士、牧師、行政の福祉協会の職員のシンポジウムは、それぞれの立場での提言が面白いものでした。弁護士のパネラーは、「こういった場所に裁判官を呼べるといい。いつも被告に対して、なぜやめられないのか、反省しているのかといった質問ばかりする。ここに来て家族や当事者のことを知れば、心ある裁判官や検事は、もっと人間らしい質問をすることができるのに」と。精神科医は、「臨床医は当事者の話を聞かず、

薬で治そうとする。薬物依存について学んでこなかった医者だから仕方がないが」と。パネラーに教育者がいなかったことが残念でした。

団 士郎

2012年、秋の東北巡業はむつ市、仙台市、多賀城市、大船渡市、二本松市、福島市の六都市になった。各所で様々な形でパネル漫画展をやった。



(大船渡市会場)

加えて、埼玉の文教大学内で漫画パネル約十点が二ヶ月余り展示された。夏にはウイングス京都で、被災地からの避難者支援プロジェクトの一環としての展覧会もやった。

一〇年やる計画なので、来年も又秋から巡回が始まることになる。昨年、スタートしたときは、どうなることかと思ひ、どんな意味が生み出せるだろうかと思案中だった部分があった。しかし二年目を終えて、今まで明確には見えていなかったモノが、くっきりとしてきた感じがある。

一週間余りのギャラリー展示空間は、イベント講演会や貸し画廊展示とは、まったく違った場になることが、よく分かった。



(津波被災後、そのままの100円shop)

けっして多くの観客が、そろそろ見に来るわけではない。ポツリポツリだと言っていい。その人達が、立ち止まり、受け取った冊子に目をやり、またパネルに眼差しを戻す。



(二本松市会場)

それをその場においてアテンドしてくれるスタッフがいる。ここに生まれる一期一会の空気が何かを生みだす。

単純化しては語り難い思いが、たくさん漂う被災地において、巡り合わせで関わることになった人々の、新たな物語が助走し始めている。



グループワークの視点

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 011

千葉 晃央

2012年1月24日 札幌市白石区のマンションで知的障害のある妹（40）と姉（42）とみられる遺体が見つかった問題で、この姉は約1年半前から3回にわたり区役所に生活相談に訪れ、生活保護申請の意向をみせていたことが、市役所への取材で分かった。姉は自身の仕事や妹の世話をしてくれる施設も探していたようで、その最中に急死し、連鎖的に悲劇が起きたとみられる。（毎日新聞より）

札幌市ではこの後、福祉制度を利用していない在宅の知的障害者の世帯に対して訪問を重点的に行いました。その中には施設などを利用せずに、ずっと家族と一緒に暮らしている方もいたことが取材で紹介をされていました。家族が自営業で、そこで働いていたり、家事手伝いをしている方もいたり、殆ど家から出ないで過ごしている方もありました。

そこでは、親が親自身亡き後の障害を持った自分の子を心配している姿が複数ありました。「私が元気でいるうちは私が…」と

いう声は知的障害者の労働現場にいても、ご家族からよく聞こえてきます。

一方で本人がどうしたいのか？ということをもより重視する価値観に基づいて、家族の意見よりも本人の意見を大切に！という考え方も、もちろんあります。本人が決めるとき、選択肢をあげてきてみてご本人が選ぶ。この時、注意しなくてはいけないのは、その選択肢を当事者がどれだけ理解して決めたのかです。そこでは、いかに理解してもらえよう努力をしたかが問われます。以前、この連載で施設行事の旅行の行先をみんなで投票して決めた過程を書きました。あのやり方のように、絵や写真で伝える努力、また、利用者の方と事前に実際に行ってみるといいうのも知的障害の特性を考えると重要になります。

■ 集団という小社会へ

生物として、加齢とともに新しいこと、新しい環境に適応することにエネルギーを使うようになるのは容易に想像がつかます。多くの親が子らよりも先に亡くなるというのもまた現実です。家で行ってきたきめ細やかな対応を、家ではない場所で、公共の福祉サービスを中心的に利用して実現することはなかなか難しいです。

人は誰もが、家族から離れ、次の生活の場で新たな社会、新しい集団に参加をしていきます。これは人が成長する上で歩む道です。その道程では、家族にしかわからない、「家族にしか理解してもらえない表現ではなく、より多くの人に伝わる表現方法を身に付けていく。

そういった場としても知的障害者の労働現場は機能しています。家族とは違う「集団」という小さな社会での経験の積み重ねを保障する場でもあるのです。

■わたしにもできる！

集団の場面では、お互いがお互いに影響を与えます。あの人がしている仕事を自分もしてみたい！あの人みたいに一般就労をしたい！まずはあの人といっしょに、あの仕事をしたい！…。仕事をする動機づけになります。反対に、よくないとされることも影響を与え合います。

作業中のマスクを着けていない人がいるとそれを真似する人が現れて、それがまた「かっこいい」という価値観を生んでいたりすると、なかなか手ごわいのです。わかっているけど、そういう砕けた、ラフな感じが「かっこいい！」というのは多くの人が少年期、青年期に経験してきた感覚です。実年齢と、発達年齢の両方の発達課題が併存する可能性もある知的障害の特性を考えると「仕事だから」「お給料もらっているから」「危険だから」と職員が伝えるだけではうまくいかないことも多いです。そういう時には集団という視点から働きかけることも重要になってきます。職員が言わずに、友人が言う。個別にではなく、全体に伝える…。試行錯誤です。



集団、グループのメリットとして、モデリングなど学習理論に基づいて、影響をお互いがしあうことは明らかにされてきました。特に少年期、青年期には、家族よりも友人、同僚など、同年輩、もしくは少し上世代から影響を受けることが多いとされています。その点からも福祉現場での集団のという枠組みでみる視点は過小評価することはできません。

助けてもらう経験、葛藤に直面する経験、同時代を生きる輩から影響を受ける経験、役割を期待される経験、ライバルができる経験、苦手な人や場面に出会う経験…いろんな意味でよい面も悪い面もあるのが集団での経験です。今は悪い経験のように見えても長期的な視点でみるとそうでないことも起こります。そんな経験ができるのも集団という場です。そこで何を抽出し、どういう演出をし、どんな意義があるとするのか？そして、そのことでどういう働きかけをするのか？その結果何を利用者に提供できるのか？そういうことにエネルギーを注ぐことが援助職に集団場面では求められています。

■捨てた集団援助技術

「福祉現場の多くが集団という環境なので、もっとグループワークの視点がないといけないと思う」という指摘を聞くことができました。心の底から同感しました。施設、グループホーム、近隣住民、地域生活を支える支援者ネットワーク…すべてがグ

ループです。グループで目的を共有し、福祉的なことに価値を置いて進めていくとき、そのポイントや視点、分析等が「グループワーク」として社会福祉の実践活動として整理されてきました。

少し前まで、福祉専門職の教育において、グループワーク（集団援助技術）という分野は、ケースワークとコミュニティワークと並んでソーシャルワークの一分野として長年成立してきました。セツルメント運動、



YMCA、ボーイスカウトなどを起源として、教育、医療、心理、福祉など広い裾野を持ちながら、その中でも共通なこと、集団をみるポイント、集団の成長にそった援助のプロセス等の経験知がたくさん積み上げられてきました。社会福祉領域の国家資格である社会福祉士の養成課程では、以前は教科書1冊ぐらいグループワークを取り上げていました。しかし、現在、教科書2冊のうちたった1章分しかグループワークに関しては扱われていません。

理由の推測はできます。集団で起こっていることを研究でどうとらえて、どう伝えるのかという難しさ、対象者の合意が前提という研究上の倫理が年々厳格化されたこ

とによる研究での大きな労力の必要性、グループワークの実践家はアクティブな人が多く机より、現場にいたために研究者層が薄かった…などです。

1冊から1章に削減されたことによるコンテンツの減少はすさまじいです。その背景には、ジェネラリストアプローチ（課題に対し、直接その対象に働きかけていくだけでなく、同時に他の枠組み、つまり、地域や制度や集団にも働きかけていくソーシャルワークのアプローチ）をいう考えがソーシャルワークの最新の流れとされたことも大きいです。このアプローチにグループワークは統合されたということになっています。

「地域でその人のニーズに適した複数の支援機関による支援を組み合わせ、それらの支援機関のネットワークとともに暮らす」これが様々な歴史の変遷を経た今の福祉おけるひとつの目標とされています。地域というグループで暮らし、支援者のネットワークというグループに支えられる…ど

こをとっても現場ではグループ場面ばかりです。

■ グループを資源に

現在、福祉現場では、個別支援計画書は立案されますが、グループに対する計画、アセスメント、インターベンション…の視点は制度上直接的には扱われていません。個別支援計画書を立てて、結果を求める。これだけを複数利用者がいる場面で個別にバラバラにしているのは集団場面が生かされません。集団の場ですので集団のストレングス（強み）が発揮できるよう援助者の視点、そこでの工夫、試行錯誤もしたいところです。

集団でいる場面をグループワークの視点で見ることが、現在ある状況からけられる「のびしろ」ではないかと思っています。

（写真：橋本総子）



社会臨床の視界

(11)

日常に潜む暴力

中村 正 (立命館大学大学院応用人間科学研究科)

1. 日常に潜在するみたくないものを描く - ミハヤエル・ハネケ監督の作品

ミハヤエル・ハネケ監督(オーストリア)の作品が好きだ。『白いリボン』(2009年)に続き、『愛(アムール)』(2012年)が第65回カンヌ国際映画祭で二度目のパルム・ドール賞となった。パリのアパートが舞台だそう。脳卒中で倒れた妻を介護する80歳の夫の日常を描いている。2013年春に日本公開だという。早く観たい。彼の作品はとにかく後味が悪い。胸騒ぎがする。全身に逆剥けが起こりそうな感じがする。日常の不安が喚起され、恐怖へと変わっていく。自らの内側に巣くう闇が浮かび上がる。際限なくあおり立てられる悪感情である。ノンフィクションのサスペンス、スリラーのような感じがする。

『隠された記憶』(2005年)という作品は送られてきた奇妙なビデオテープを観ている夫婦の会話からはじまる。その家をひたすら玄関口から写しただけのテープなのである。これは何なのかと夫婦の会話が続く。夫は少年時代の実家が身元引き受けて養子に迎えたアルジェリア人少年をいじめたことを思い出し、これは彼が仕掛けた復讐に違いないと確信する。さらに子どもが口から血を吹いている様子を描いた不気味な絵も届いた。なお続いて送られてくるビ

デオテープの映像はさらにプライベートな領域へと入り込んでくる。徐々に不安が恐怖へと変わっていく。記憶の底にあったいじめ体験が恐れに変わる。脳裏にこびりついた罪悪感。そして今度はとうとう息子がいなくなった。一方で妻は夫の友人との不倫に陥っていた。それに息子は気づき、家庭内離婚状況となった。映画の最後がシュールである。息子とそのアルジェリア人の息子は友人だった。結局、何も不可解さは解けずに映画は終わる。観ているものはひたすら想像するしかない。その過程で自らの記憶の底がかき回され、意識の上の方へと我が身の罪悪が浮かびあがり、日常を共にする人への懐疑のまなざしが深まる体験をすることとなる。

『ファニーゲーム』(1997年)はありえない殺人事件。休暇で別荘にきていた家族の家に「卵ください」といって二人の若者が訪れる。好青年のようにみえるし、話し好きで愛想もいい。清潔そうな白いシャツを着ている。ところが徐々に暴力がむきだしになっていく。愛犬が殺され、家族がロープでくられ、理不尽な暴力がエスカレートしていく。犯人二人はそれでも普通の会話と行動をつづける。冷蔵庫をあけ、テレビをみる。家族が逃げようとしてロープをほどく。首尾よくことが運ばないとテープを巻き戻すようにして映画自体を巻き戻

す。その巻き戻された場面を見せて観ている私たちに同意を求める。「そうですよね」と語りかけるのだ。その段階で返答を迫られる。「娯楽」としての映画を前にすすめるためにはそこでついつい同意してしまいそうになる。この劇中劇により観ている私は共犯者にしたてあげられていく。この家族の最後はどうなるのだろうか、是非、観てほしい。

『白いリボン』は第一次大戦前、ナチスが支配する前の北ドイツの小さな村が舞台。村は何ともいえない不穏な雰囲気には覆われている。厳しい規則が支配する敬虔なクリスチャンの家庭での子どもへの抑圧。地主と牧師のもつ封建的な権力。農民支配の理不尽な暴力。忠誠の印として子どもたちは白いリボンを胸につけることを命じられる。共同体の外部からやってきた教師がこの物語の語り部である。徐々にこの村の得体の知れない不気味さを描きだしていく。こんなシーンがある。厳格な父の飼っていた鳥が死んでしまい落胆する。しかし小さな息子が鳥をくれる。それをかごにいれ、なかで自由に飛び回る鳥と忠誠をつくす息子に満足している様子が映る。すべては不自由のなかの自由。白黒フィルムであることも手伝って、ナチズムへといたる共同体の空気がそのものが伝わってくる。

ハネケは日常にある恐怖、怯え、不安、監視、鬱屈、不信、危険を描く。後味は悪いのだが一度観てしまうと脳裏から離れない。清濁併せ吞んで生きている自分に嫌悪感をもつか、さらに記憶の底へと沈めていくか、いろんな判断を迫られる奇妙な物語につきあうこととなる。

他にもたくさんあるがすべては観ていない。影というテーマもあり、迷宮世界の描写でもあり、欲望と禁欲のあいだもうまく

描かれている。現代社会の不安と不穏と恐れ感覚の把握は見事だと思う。「社会臨床の視界」には欠かせないと思っている。作品は『ピアニスト』(2001年)、『ファニーゲーム USA』(2008年)、『セブンス・コンチネント』(1989年)、『ベニーズ・ビデオ』(1992年)、『71 フラグメント』(1994年)、『カフカの「城」』(1997年)、『コード・アンノウン』(2000年)、『タイム・オブ・ザ・ウルフ』(2003年)がある。

2. 事件の背景にある日常の暴力への想像をはたらかせると恐怖に陥る

ハネケは日常の暴力や不安や恐怖を描くが、それらは残念ながら現実的なことでもある。長崎県西海市でストーカー被害を受けていた女性の家族2人が殺害された事件(2011年12月)、神奈川県逗子市で女性が元交際相手の男性に刺殺された事件(2012年11月)、尼崎の一家・親族巻き込み殺人事件、大津のいじめ事件とその後の顛末等、偶然重なるいくつかの出来事は繰り返されている。たとえば「桶川ストーカー事件」がある(1999年10月26日に埼玉県桶川市高崎線桶川駅前で、21歳の女子大生が27歳の元交際相手とその兄が雇った男性によって殺害された事件)。「北九州監禁殺人事件」は2002年3月に北九州市で発覚した監禁、殺人事件。弱みにつけこみ監禁をして金を強奪。拷問と虐待によってマインドコントロールをかけ、被害者同士で虐待させた。大津のいじめ自殺は1986年2月、東京の中野富士見中学校2年の男子生徒が盛岡駅のトイレで自殺した事件と重なる。「このままじゃ生き地獄になっちゃうよ」と記された遺書が残されていたが、「葬式ごっこ事件」と称して学級担任がいじめに加担した

ことでも関心をもたれた事件を思い出させる。

類似の事件が起こると、その背景や経過を知る由もない私たちにとっては突然のニュースのようにして眼前にあらわれるように見える。もちろんどんな背景があるにしろ突発的な通り魔のような事件はなんともしようがなく恐怖である。とはいえ家族や友人・知人同士が事件となる場合はそこまでにいたる相互行為のつらい日常が続いていたと想像できる。ハネケ監督が描きそうな不気味で不穏な日常である。それが抜き差しならなくなる事態となり、その関係性への幽閉という過程もみられ、結果として塀のない檻のようにして密着度が利用されていく。

3 . 関係の非対称性

1) 潜む場としての関係性

ハネケの映画で描かれているような日常に潜む暴力性を少し整理していくことで、不安を整序したいと思う。私が関心をもつ身近な対人暴力としてのいじめ、家庭内暴力、虐待、ハラスメントは学校、家族、職場という日常を共有する者同士におこる。親子関係(老いた親と子ども、未成年者と親の双方の関係含む)、夫婦関係・男女関係(デートバイオレンスや元夫婦関係含む)、工作上的先輩・後輩の関係、部下・上司の関係、教師と生徒・学生との関係等の指導・被指導等はすべて非対称な関係である。そこに権利侵害が発生しないように<社会>が禁止や規範を構築し、社会制度として定着させ、日常の人間関係の枠をつくる。

親密さ intimacy という言葉には性的な関係も含意されるので共棲関係や共生体と

言い換えてもよい。愛着関係も含まれる。こうした関係にあっては互いの境界侵犯がおこりやすいという特性がある。融合的、一体感、情緒的、親近感、相互了解性という面と、それらが容易に支配とコントロールへと転嫁されること、依存性、万能感と承認欲求が実現される関係という面もある。これらは表裏一体である。社会における他者同士の関係とは一線を画するものと観念される特別な関係となる。

非対称な関係である親子関係と夫婦関係・男女関係はジェンダーと世代に関して、資源、勢力・権力等の配分が異なり、それを前提にして家族という社会制度が構築され、法規範や道徳が生まれ、感情的共生が成り立っている。生々しい現実の生活が営まれる場となり、もめ事も起こり、広い意味での相互ケア関係がある。こうした剥き出しの生の現場であるという意味において暴力生成の可能性がある。暴力 violence と同じ語源に由来する生命力 vitality や生きること vie という言葉を重ねると理解できる事態である。

さらに、親密な関係性において暴力を誘発する「脆弱さ」が含まれていることも忘れてはいけない。「虐待誘発性」という意味もあるヴァルネラビリティ vulnerability である。傷つきやすいこと、弱さ、脆弱性と訳される。この言葉はシステム論でも使われ、「外部から操作したり情報を引き出したりしようとする攻撃の余地があること」を意味する。家族をシステムとしてみるアプローチには親和的な表現である。愛情と暴力、正義とケア、保護と自立等の相反する事項が反転して連続する結節点をなすのがこの脆弱性である。世代とジェンダーを変数にして家族には非対称性ができ、それを根拠に凹凸の組み合わせのような強いき

ずなができるのでこうした関係の錯綜が生成しやすい。家族のなかの暴力はここを起点に生成する。

2) 非対称性は両義的

また、非対称性は両義的である。家族としてのケア責任の負荷をかけられる過程に葛藤や不満、怒りが発生する。しかし他方で、だからこそ家族という関係の、喜怒哀楽を含んだ独自性が根拠づけられもする。関係としては密室化し、閉じていき、相互に訴求しあうきずなができる。この両義性は親密な関係性や共棲・共生関係における相互扶助的行為がケアという機能を果たすことに由来する。育児、介護、看病、介助という直接的ケアが家族の営みであり、福祉的機能を果たす。これを根拠にして問題行動への責任という関心を向けられることもある。たとえば加害者家族がそうである(子どもが非行にはしたとやいじめた側の責任を問われる)。不登校やひきこもりへの対応も家族が前景化する。薬物依存となった人を抱える家族も抱え込む。家族のケア責任への負荷の外延は広い。

こうしてみると、ケア行為を介して愛情と暴力が最接近し、依存と自立、教育(しつけ)と学習(成長)、甘えと抵抗等、相克し、相反しつつ、相補するという関係性が成りたっているといえる。家族の問題には「介入と支援」という両面からアプローチが求められるゆえんである。家庭内暴力に即していえば、陰性感情と陽性感情を共に含みこんだ相互行為が自他の境界を越える過程とともに存在し、ここに暴力の芽が宿ることを念頭においた対応が求められる。つまり、ケアにかかわる相互行為というミクロな地点からこの社会的で公的な課題で

ある脱暴力と脱虐待が必要となること、言い換えれば、「親密圏における公共性のミクロポリティクス」である。

3) ケア行為が内在させる暴力誘発性

家族同士のケア行為は社会制度や社会規範によって根拠づけられていると述べたが具体的には以下のものである。夫婦にあっては相互扶助の義務がある(民法第752条「夫婦は同居し、互いに協力し扶助しなければならない。」と定める)。高齢者介護の際には家族養護者、親子関係は親権や保護責任ということが根拠となっている。親権は親が子どもを育てる権利と義務の総称である。これは子どもに義務教育を受けさせ、養育する責任と義務をあらわすものであり、親の権利というのは何をしてもいいという意味ではない。親の責任といった方がいいのだろう。親権は身上監護権(子どもの身の回りの世話をしたり、教育をしたり、しつけをしたりする権利・義務)と財産管理権(子どもの財産を管理したり、子ども名義の契約などについて同意をしたり、代理をする権利・義務)からなる。通例は父母が親権者となる。虐待や育児放棄等があれば家庭裁判所によって親権が制限される。

また、高齢者虐待防止法にいう養護者とは、「高齢者を現に養護する者であって養介護施設従事者等以外のもの」と定義されている(高齢者虐待防止法第2条2項)。養介護施設従事者とは老人ホームや介護老人福祉施設などの養介護施設の業務に従事する者である。養護者は在宅で高齢者を養護、介護する家族、親族、同居人を意味する。

高齢者虐待については、子ども虐待における児童相談所による「介入と支援」のようなシステムはまだ整備途上であるが、子

どもとその配偶者等が養護者となることを想定し、虐待をなくす課題とともに養護者支援を打ち出していることが特徴である。虐待防止制度は介護にともなう諸困難の除去を想定している。たとえば介護のスキルや制度理解の欠落の補填、そして何よりも仕事とのかかわりで介護離職の困難が想定されるので養護者支援が重視されるべきだという筋立てである。もちろん就労継続支援は不十分であるが、ここではケア行為に関わる配慮が虐待理解において成立している点が大切である。高齢者虐待の理由に「強いられた介護」や「介護疲労」があり、怨恨や嫌悪等の陰性感情が生起してネグレクトが起こる事例が少なくないことがデータで指摘されている。さらに夫や息子が主たる介護者となる際の虐待リスクは高いのでこの点も「介入と支援」の対象となる。これらを勘案すると家族のケア行為にかかわっての脱暴力の課題は刑事罰的な方向性だけでは成り立たないということになる。

さらにDVの場合は夫婦間の相互扶助がジェンダー化されている点の理解が重要である。相互扶助や協力義務と関わり暗黙にジェンダー規範が動員される。女性がその役割を期待され、ドメスティックサービスの義務を果たしてないと思いつく男性がDV加害となりやすいというデータがある。高齢者夫婦における夫や息子介護の場合にもジェンダー規範が入りこむので、高齢者虐待といってもジェンダー暴力的であり、夫の妻介護時の虐待はDVに他ならない。

また、家庭内暴力に関しては感情が重要な変数となる。私的領域や親密な関係性には独自の感情的交流がある。ケア行為と感情は家族という関係において赤裸々になることが許される（と加害の側からは認知されている）。そこで感情表出には「公私区

分」がある。同じケアの相互作用でも公的なサービスの場合は契約となる。家族ケアの場合は、私的であり、公的領域と区別される独自の「感情解放領域」として観念される。それこそが家族だからだとされていく。他方で、家族はジェンダー化された秩序をもち、それを再生産する場でもあることから、感情の表出と規則はやはりジェンダー化されている。家庭を暖め快適な親密さをマネジメントする責任は女性性や母性に期待され、そうした相互作用を営み、関係性を維持する役割を負わされる。解放された感情を受け止める役に女性や母親がなるという意味である。解放された怒りの感情は暴力となるがそれを甘受すべきだという具合のジェンダー作用へと至る。

4. 加害のナラティブの観察

相互作用に関与する関係者はその状況を独特に意味づけていく。認知の枠であるが、これを「状況の定義」という。それは主観的である。虐待、DV、ハラスメントの加害者たちは独特な認知に満ちている。虐待する親も「これは躰だった」といいはる。自分にとって都合のよい考え方である（私は好きな言葉ではないが、認知行動療法では「認知の歪み」という）。日常生活はこうした主観的現実の錯綜する「場」である。

私は加害のナラティブという視点から虐待者のコミュニケーションをグループワークで聞き取る。「最初はささいなことで・・・。」といいわけする。「妻は口がたっしゃなんです。」ともいい、「あれは言葉の暴力ですよ。男は口下手なのでついつい手がでてしまうんです。」と語り、「俺を殴らせる方にも問題はあるでしょう。」と都合のよい言い方をする。弁解にもならない理

屈である。「DV法や虐待の法律がありますがそれは家のなかのこと。殺人事件じゃないので余計なお世話です。」とさえぎる。「だって俺は稼いできてるんです。毎月の仕事は大変なんです。」と言い張る。「安らぎの場をつくるのは妻の仕事！」と思いつく。その妻自身も働いていたり、家事や育児をまかせていることは棚に上げている。こうした説明をおこなうこととなる。

その後、弁解もみられるようになる。「もうそのときは頭が真っ白で。」という。「瞬間湯沸かし器みたいに爆発するんです」とか、「小さいときからの癖でどうにもできない。」とか、「男ってこんなもん。みんなそうですよ。」、「気がついたら手が出ている。身体反応です。」、「落ち着くと謝るんです。もうしないって。」と終わる。

身体への暴力さえ振るわなければよいとも思っている。妻がパート先の忘年会に行くことをだめだという。どうしてなのか理由もいわない。妻の動静についていちいち指図する。抑制と禁止のコミュニケーションとなっている。他人の前での見下しが日常的なこととなっている夫婦もある。そうした男性は連れ合いの外見や性格を馬鹿にしたような発言も平気です。

もちろん以前に紹介した加害者臨床実践はこうした言明を受け止める。加害のナラティブに独特な意味世界をあらわす語彙と文法をとおして彼らの認知の枠を理解するためにである。さらにこの段階では自分の暴力による被害の理解は視野に入っていない。グループワークやカウンセリングにおいてまずはその被害による傷つきについて理解をすすめる（被害者理解は修復や謝罪の前提である）。体の傷だけではなく人格が脅かされる。親しいと思っている人から受けるので特別な傷つきとなる。家庭内暴力

は長期にわたり、繰り返し、断続して起こる。紹介したように「それはささいなことだった」とよく殴る人は釈明するが、ささいなことであればあるほど理不尽であり、そのことの恐怖は殴る側には想像できない。そんなささいなことでどうしてこんなに暴力が起こるのか、いつ起こるのか、いつ終わるのかという具合に恐れをいだきながら日々を一緒に過ごすこととなる。「卵の殻の上で暮らしているようだ」、「地雷とともに生活しているようだ」と被害者は語る。長期化するということは日常化するということなので、暴力の被害者は、いつもなにかに怯え、敏感になり、息苦しい日常となる。乳児や要介護老人などは声さえあげられない。こうなると安らぎの場としての家庭どころではなくなる。やっかいなことに、世間体もあり、加害者が殴らない時もあり、場合によっては謝罪もするので、なかなか表面化しない暴力となる。こうした環境に長くいると、正常な感覚が麻痺する。家族を訴えることとなるので、援助を求めることすら罪悪だと感じてしまう。

家庭内暴力被害者の心理は独特だ。表れ方は多様だが、いくつか共通性があるとされる。

一つは、暴力を振るわれたその時の出来事が、突然、思い出される。再体験である。繰り返して、そして衝動的に記憶がよみがえる。悪夢を見ることもある。リアルに想起されることにより、恐怖が高まる。それを思い出させるようななんらかのきっかけからそれらは起こる。その都度、心理的な苦しさや発汗などの反応がおきる。

二つは、その傷を思い出させる契機や出来事に関わるような刺激を無意識的に避ける。あるいはそうした刺激に敏感にならないように防衛心が作用し、感情鈍麻がおこ

ることもある。その時のことを想起させる行動、風景、人間、場所、感情、言葉などを避ける。心と行動のひきこもり状態が慢性化する。

三つは、過覚醒（自律神経系の興奮や過覚醒の症状）だ。入眠困難、中途覚醒、不眠などである。普段でも一つのことに集中できなくなることもある。ささいなことに神経が過敏になる。髪を搔くために手を挙げた他人の動作にもビクッとしてしまうような感覚だ。過剰な警戒心ともいえる。

こうした不安定な心理的状态をもたらすので、親しい者同士の暴力は特に深刻な被害となることの理解をすすめていく。夫婦喧嘩やしつけだったとってすまされないのが家庭内暴力の被害であることについて学習をし、加害のナラティブのもつ都合のよさに気づくことが脱暴力の第1歩である。

5. 暴力の微視的相互作用

こうした微細な相互作用を重視するのは脱暴力へと向かうコミュニケーションプロセスを把握し、暴力肯定の語彙と文法を理解し、それを修正する支援に役立てたいからである。コミュニケーションをとおして対人暴力が肯定されていく言語的実践や言語的構築を組み替えていくためである。相互作用としての男性たちの対人コミュニケーションの言語的、行動的、意識的な再構成を地道に繰り返すなかでしか脱暴力への学習が進まない。暴力を振るうこともコミュニケーションだと心底思っている男性が多いこともある。そこで、家庭内暴力あるいは親密な関係性における暴力について、ミクロな相互作用を把握する微視的社会学 micro sociology のアプローチを紹介しておきたい。このアプローチは暴力行動が生成

する文脈について焦点を当てる。

1) ミクロな過程の把握 - 儀礼的暴力と相互作用

対人的相互作用とそれが構成される関係性は、これまでも、社会的きずな、心理的な愛着関係、精神分析的な家族関係（オイディプス）や転移・逆転移関係として対象化されてきた。ここでは相互作用を把握するための微視的社会学についてランドール・コリンズのアプローチを検討してみたい（Randall Collins, *Violence: A Micro-sociological Theory*, Princeton University Press, 2008 にもとづいている。以下に引用した頁はこの書物からである）。

微視的社会学 micro sociology、微視的民族誌 micro ethnography、相互作用儀礼論 interaction ritual 等と表現されている。コリンズは暴力、紛争、不平等、人種的民族的对立等において、構造的問題に還元されがちな暴力論の傾向を批判している。彼は *Violence* という書物において「暴力の微視的相互作用論」を展開する。そこでは家庭内暴力やいじめも論じられているので、それについて検討を加えておこう。

コリンズは相互作用論からみた家庭内暴力を次の4類型に分けて考えている。暴力的ではない家族同士の葛藤 unviolent domestic conflict、限定され均衡のある喧嘩 limited and balanced fights、昂じていくパニック forward panics、冷酷で暴力主義的な拷問的事態 cold terroristic torture-regimes の4つである(p.148)。後二つは深刻な暴力となる。このからの広がりなかで家庭内暴力が特徴づけられている。

これら4つはミクロメカニズムとしてみ

た場合、連続的であるが、段階としては区切りもある。これらは人間の相互作用が「ひきこみあう過程 entrainment」であることに関連している。相互に訴求しあうような関係性では「人々は暴力に長けていない」とコリンズは考える。暴力を戦略的に用いているわけではないという意味である。むしろ逆で、人々は相互に連帯する動物であり、そもそも何らかの暴力が生じた場合、緊張や恐怖に直面し、それらを何とか処理し、対応しようとするものであるという。

こうした相互作用は儀礼のようにして機能しているという。背景にあるのは社会が「聖なるもの」を維持することで成り立つ共同性（＝紐帯、きずな、連帯）が不可欠であるという宗教社会学的な理論である。近代社会の「聖なるもの」は個人そのものである。社会的にいえば人権ということである。個人の名誉、尊厳、人格を大切にすようにして相互作用を営む必要がある。他人同士の関係に関して、これはわかりやすい原理である。では私的な領域としての家族をはじめとした親密な関係性においていかにして個人は尊重されうるのか。

親密な関係性の相互作用においてもめ事や紛争が発生すると、人々はその状況内の緊張を処理することを強られる。関与者たちはその関係を維持しようと行動する。親密な関係性にもめ事は不可避なのでそれをなくすような志向が働く。紛争、暴力へと至るリスクも秘めているので、それを回避するように相互作用の儀礼があるし、そうすることできずなが維持されていく。

家族のきずなを維持するように連帯にむけて努力するという親密な関係性におけるひきこみあう相互作用の特性こそが暴力へと至る皮肉なパスをつくるとコリンズはいう。へと昂じていくパニックの段階にお

いて相互作用に関与している人々の「ひきこみ」の「自己強化ループ self-reinforcing loops of entrainment」がつくられていく。この「ひきこみ」の連鎖が高じていくとパニック状況が現出し、自らの行為と感情を処理するために暴力を振るっている側が自分でその状況にひきこまれていく。その段階では「感情的なトランス状態」に陥る。

コリンズは の forward panic という言葉でこの過程を説明し、暴力論の軸においている。 の forward panic は緊張と恐怖に直面した場合、個々のエピソードを暴力へと至らしめる道ができ、何らかの暴力の理由が発見され、場合によってはねつ造され、暴力が行使されていく。虐待やDVをする理由が加害者によってつくられていく。その際に、非対称性をもとにして「弱い対象」が選択される。この弱さは先述した「暴力誘発性」を表現する「脆弱さをもつ構成員」に他ならない(p.19)。こうして暴力を振るわせる側に問題があるという枠があがる。自分は正義の側であり、矯正のための暴力なのだという都合のよい認知ができあがる。「これはしつけである、家のこときちんとしない妻が悪い」という理由づけはこうした意味で頑強に枠づけられた認知である。

2)「生活の仕方 a modus vivendi」としての暴力

深刻な DV、虐待、ストーキングとなるのが の暴力主義の拷問である。それは冷酷かつ持続的に進行するという。はそのパニック性が高く、もめ事から暴力へと急速な展開となる。は犠牲者を支配するための過程としての暴力が慢性的に現出する事態である。犠牲者の「ひきこみ」が加害

者にとっては快楽となる。誰かを常に虐待することで快楽を得る習慣的な虐待者となる。この相互作用で用いられるのは、他人に強い力、結婚生活上の資源、感情的な貶めの行為、地位を顕示するための市場的な力の利用等であり、それらをとおして暴力が日常化する。先述したように具体的には、「食べさせてやっている」、「役立たず」、「いつもこうだから無能なんだ」等と相手を意味づけ暴力を含んだ「生活の仕方 a modus vivendi」ができあがるという。

また、長期と短期のひきこみ技術があり、スロープを転げ落ちていくようにして被害者化がすすむ。被害者は絶えず防衛的になり、受動性が増し、徐々に対面することへの緊張と恐怖が増加していく。加害者の顔をうかがい、その個々の動作に反応し、読心をおこなう等して暴力を回避する事前の努力を続けることになる。これらは攻撃者の感情の転移、加害者の視点の内面化、攻撃者への同一化といわれる事態である。逃れられない関係性としての家族や親しさのなかでの相互作用がこうした現象の背後にある。

コリンズが暴力を儀礼的に把握しようとしているのは愛情等の感情をとおして結びつく諸過程を重視し、絶えず、地位の確認をし、尊敬し、卑下したりする家族内対人関係における葛藤やもめ事やその解決法の把握に適したアプローチだからである。会話、身振り、表情等の微視的な過程がここでは重要となる。人格を傷つけていくということは貶められていくことに他ならないので、「地位降格のための行為」が儀礼のようにして反復して展開されていく。この暴力性は高い。モラル・ハラスメントや心理的感情的な暴力やいじめに見られる人格破壊、カルト集団による人格攻撃による従属

化等を想定するとこの儀礼的辱めや攻撃のもつ効果は甚大であることが理解できるだろう。

コリンズは、人種・民族、ジェンダー、年齢、貧困等、暴力の背景要因に帰属させず一時的に判断停止し、そこからみえてくる事態を徹底的に記述していくという手法をとる。その相互作用過程の描写をとおして進行している人々のやり方に注目する。それは学習の過程、状況に關与する技術を内面化する過程、相互作用をとおして他者として非対称性を帯びさせられていく過程を把握しようとするアプローチである。

このアプローチは、暴力的な個人的要因や人格的要因、暴力に結びつくような社会的構造的変数を前景化させない「相互作用と状況」のアプローチである。多様な暴力が遍く存在する社会なので、日常的な相互作用と状況の描写をとおして暴力の微視的過程が抽出され、マクロ的な構造的変数のミクロな次元における実践的細部が活写されていくエスノグラフィックで臨床の知にも通底するアプローチである。こうして、分析の中心を相互作用におくことで、個人（＝暴力性向のある犯罪者人格）社会的背景、文化、動機等の各々の要素に還元できない一連のシークエンスとしての相互作用をとらえることをめざす。

6．コミュニケーションをとおした暴力の実現と脱暴力への努力

こうした相互作用と関係性からの暴力生成論においては「感情的なものの優位」が指摘されていく。暴力へと至る緊張には「感情的エネルギー-emotional energy」があるとコリンズはいう。それは親密な関係性という表出の形式をとおして発現し、内面化

される学習と感作の結果である。その場として家族がある。「感情共同体」としての家族という〈場〉のもつ特性があり、親子、夫婦、男女、老若等、非対称な関係性をとおして感情が生起し、交錯する。その中の非対称性に即して「感情的エネルギー」が発現されていく。殺人、戦争、子ども虐待、ストリート暴力、人種的民族的紛争、警察暴力、DV等の生活圏での暴力の詳細記述が試みられていく。共通して人格を貶めていく暴力が見いだせる。それを正当化する偏見は感情によって増幅され、維持され、非合理性を帯びる。

もちろん、そのように構築されるシステムとしての家族関係は構成員の入れ替えや個人の加齢とともに時間軸で変化する。システムとしての家族を把握したのは、構成員の総和以上のものとして家族を対象にした家族心理学や家族療法の原理である。時間軸とともに非対称性が変化し、パワーとコントロールの力の向きが変化し、生態学的な場としての構成が変わる。これを「関係性のライフサイクル」という。

また、法化社会の進展で関係性をささえる規範と制度が変容し、家族の外部から力がくわえられる。これは主観的であった「状況の定義」の公的な変更である。たとえば、「夫婦喧嘩ではなくDVである」「しつけではなくて虐待である」「放任ではなくネグレクトである」「執着する恋愛ではなくストーキングである」「小言や叱責ではなくモラル・ハラスメントである」等と別様なかたちでの意味づけがなされていく。一般的に言えば、親密な関係性や具体的な対人関係にかかわる「公共的なものの拡大」あるいは「親密な関係性の構造変化」である。別言すれば、認知の社会的な規模での変更といえる。では、家庭内暴力をはじめとした

対人暴力の把握や脱暴力のプロジェクトにとってどのようにこのアプローチを役立てることができるのだろうか。以下の二つにまとめておく。

第一は、対人暴力の諸過程、諸相、諸段階の把握のもつ微細さである。一般に、家庭内暴力の全体に渡る特性を把握するために、身体的暴力、言語的暴力、心理的・精神的暴力として機能的な面に注目して表現されることが多い。対人暴力としてみると、暴力へと昂じていく過程で、被害者化という軸には非対称な関係性に根ざした「からめとり」があり、そこには「人格的貶め」が重要な契機となっているということをコリンズの相互作用論は指摘している。被害者の人格を貶めていく暴力の段階があり、主従関係のような地位変容がもたらされる。互恵的で相補的な関係に向かう契機としての非対称性ではなく、逆に、対等ではない方向に向かう契機として非対称性が位置づけられ、尊厳の剥奪のように作用する暴力として存在する。被害者の無力化、正当化するための「中和化の技術」と「被害者非難」、「加害を被害にすりかえるコミュニケーション」、「被害者の加害性を引き出す巧妙さ」等がすすむ。その結果、「尊厳の剥奪」「被害者に加害者の視点を内面化させる」という地位降格のための服従化技法が発見されていく。暴力の核心にある人格否定や従属化である。この指摘の意義は大きい。

第二に、家族という環境における相互作用の特性が「家族の日常活動（ケア行為、感情共生体、多様な揉め事、葛藤、陰性・陽性感情、愛着形成、食の共同等）」そのものにあることの指摘である。この日常行動にそくして感情が表出される。親子、夫婦、男女、老若、資源と権力の有無等の非対称な関与者がおり、感情的エネルギーがその

あいだに充填され、家族のきずなやつながりを感じさせるようにして存在している。この関係性の環境は構成員にとっての生態学的環境となっており、ひとつのシステムとしての共感情的、間身体的な共生体ができあがっている。もちろん家族構成員のそれぞれの状況の定義があるので同じ現実を生きていても意味づけは異なる。しかしシステムとして存在感は大きく、暴力をも含む日常性が営まれていく。家族・親族の巻き込み型の殺人事件はこのエコロジカルプロセスそのものである。

この2点は脱暴力のプロジェクトを組織する際の準拠点として位置づけることができる。相互作用の視点がここでのテーマであったがさらにこれを日常的な相互作用として位置づけなおしてみよう。ハネケの描いた日常性に潜む暴力の切開である。

7. 親密な関係性というシステムの特性と暴力

1) 暴力を含んだ「つながり」の型の把握

相互作用論の見地から暴力を考え、環境との相関で逸脱行動を位置づけるというアプローチとして、犯罪社会学、社会病理学、逸脱行動研究のなかの日常行動論 routine activity theory がある。それは犯罪と日常生活の関連を問い、犯罪者人格を想定せず、犯罪を「行動機会、選択機会の問題」として見る立場である。環境犯罪学とも呼称され、刑事政策や治安対策に実践的に活用されている。しかしこの方法は諸刃の剣とでもいえる点を内包している。たとえば環境浄化論に結びつき、監視社会の理論的支柱となるからである。ここではそうした点に注意しつつも、その理論的中核のひとつで

ある日常行動理論に焦点を当てて家庭内暴力を検討してみる。このアプローチの理論的中心人物であるマーカス・フェルソン (Marcus Felson) の、なかでも家庭内暴力について述べた箇所を中心に検討しておこう(*Crime and Nature*, Sage Publication, 2006 からの引用である。 *Crime and Everyday Life* (『日常生活の犯罪学』守山正監訳、日本評論社)。

フェルソンの見地は犯罪の生態学的な把握 crime ecology である。犯罪行動や犯罪活動の把握のために、プロセス、相互依存、変化・変容、分布、量についてとらえるアプローチである。次の三点が犯罪の成立に欠かせないという。潜在的な加害者 a likely offender、適切な対象・標的 a suitable target、監視者の不在 the absence of a capable guardian against the offender (p.42) という要素である。「犯罪は日常の合法的活動に養われた日常活動 (ルーティーン・アクティビティ) としてみることができる」(p.320) として、「犯行者の思考方法 (p.85)」をとりだす。行為とその時の環境を詳細に記述することで犯罪機会を描写することが目指される。たとえば、ある男性の身体的な密着欲求や親密さを求めるニーズがあり、その実現のための日常行動があり、それらの延長線上に暴力や虐待があると考え。突然に豹変した逸脱者として犯罪者が異常者として登場するのではない。「犯罪者それ自体は一貫した行動としてある (p.90)」という。こう考えると、しつけと虐待、コリンズのいう との暴力と DV、モラル・ハラスメントと心理的言語的暴力と名誉毀損、高齢者虐待と介護者の疲労、陰性感情の生成等は一続きのものであり、逸脱行動と日常行動は「不連続の連続」というかわりにあることを

日常行動理論は主張する。日常生活のなかの彼や彼女の必要性にもとづいて暴力が組み込まれている。上記の3つの成立要件は家庭内暴力についてはすべて満たしている。

感情的きずなをむすび、感情を解放してもよいと考える都合のよい認知をもった加害男性が潜在的にあり、は文字通り、脆弱な非対称性のなかに置かれた対象者がいて、家族に監視者はいない、のである。

このような日常行動理論は、犯罪や逸脱を、その出来事やエピソードを囲むより大きなエコシステムにおいてみることを提案する。さらに、当該の問題行動を本来的なニーズと関係づけることを提案する。暴力をとおして充足させようとしていた別の要素を取り出すのである。暴力を振るうことで実現させていた事項が犯罪者の環境、つまり意図的に選択し、構成している生態学的な「つながり」のなかに埋め込まれていると考える。この「つながり」の型を見極めていく。家族もしくは親密な関係性という生態学的な環境について、この型をフェルソンはシンバイオシス symbiosis として把握している。シンバイオシスは「相互共生関係」と訳されているが、二人の人間が心理的に相互に依存しあって相手から有益もしくは有害な強化 reinforcement を受けるような関係にある場合に使う。たとえば「母子共生」に近い。

フェルソンはこのシンバイオシスがいかにして暴力を生成させるのかについて検討し、その下位類型を提案している。共生は相互に利害を共にしながら一緒に生活している様式であるが、なかには、寄生 parasitism、片利共生 commensalism、

相利共生 mutualis-m(共に利益がある)

受動的支持 passive assistance(助けることや傷つけることなしに一方が他者から得

る利得)の類型がある。フェルソンは、家庭内暴力が生成する場合は、パラサイト型(寄生)に当てはまるという。こうした環境にあって、第1に他者を命令に従わせる、第2に加害者のいう正義を回復する、第3に加害者の自己イメージを擁護し、守るといった利得が暴力にはあるという(p.86)。共生・共棲の場合、状況、エコシステムとしての親密な関係性として家族をみると、その三つを含む生態学的に固定した緊密なシステムとしての家族というメッシュのような場が浮かび上がる。

さらに共生・共棲としての家族システムには「組織、適応、変態・新陳代謝、変化、成長、再生産、反応・興奮・感応性(p.169-)」の諸相とその変化がみられる。暴力の生成に関わるシステムの要素である。家庭内暴力が生成する関係性はこうした生態学的な特質をもつ。

2) 日常活動理論の特徴

日常活動理論は人が逸脱行動をとおして何らかの生存と生活に必要なニーズを満たしていると想定する。逸脱行動が必要なように自らを構成し、対人関係を組織していると考えられる。日常生活における暴力、虐待の幅は広がりがある。触法行為、逸脱行動、問題行動、ネグレクト行動(何もしない)、歪んだ愛着行動、示威行動等であり、それらは同心円上につながるシーケンスとしてある。また、身体化、症状化、行動化が優位となる非言語的コミュニケーションという様相も帯びる。先述したシンバイオシス(相互共生関係)というのは「生のかたち」「生活の仕方」であり、非言語的コミュニケーションを伴い、非対称的な関係が相互に関わり合うことを前提としたひとつの

システムとして安定均衡する。コリンズのいう相互作用は人が連帯をとおして共同する生を営むことを前提にした議論であり、生の様式としてのシンバイオシス（相互共生関係）と重なる。何らかのニーズの充足とそれが肯定的ではないかたちで満たそうとする際に用いられるのが暴力と虐待である。暴力と虐待が、その行為者にとっての防衛、抵抗、保身、愛着、注目、逃避、試行、快樂等のライフスタイルとしてあり、それをとおして対人関係をつくり、相互作用のかたちとして定着させ、それを許容するようなミクロ環境を自らの周囲に構築していると考えるのが日常活動理論である。

しかし一方、社会の変化は急で、先述したように公的な「状況の定義」が変化している。当該行為は徐々に触法行為として定義されるようになってきている。システムとしての安定性が揺らぐ。他方で、暴力と虐待の行為者はその独自の認知と行動と感情の表出の連関において自らの問題として定義するのではなく、周囲の問題として観念し、被害者も「まきこみ」、システムとして暴力を含んだ環境をつくりだしている。その過程では中和化、正当化、他罰化等がみられる。もちろん、社会の側にもそれを可能にし、加担するような暴力肯定的な意識（体罰容認）があるので、それを養分にして共犯関係が持続することは看過できない。その共犯関係は社会そのものの意識や態度の内面化ということなので、社会のもつ意識や態度それ自体の書き換えが求められるという意味で社会臨床的な主題となる。

さいごに - 脱暴力への未来のためにハネケから学ぶこと -

私は本マガジン第2号で紹介したように

加害者臨床に取り組んでいる。刑務所のなかだけでも、虐待した親子や夫婦の分離の制度だけでも、養護者から虐待されている高齢者を保護するだけでもない、日常のなかから脱暴力を志向する実践プロジェクトと位置づけている。コミュニケーションからのミクロな平和構築である。

対人暴力をなくす取り組みを社会がプロジェクトとして意識することはひとつの希望だと思っている。そしてこの希望には根拠がある。ミクロな社会関係の基礎である家族や親密な関係性は暴力や虐待を生成させる過程でもあるが、そうではない人間を形成する場であることの方が多からである。両義性に根ざし、葛藤や不満やもめ事があっても暴力と虐待が前景化しない「家族の関係力」がそこにはある。たとえば、外部資源とつながること、社会的ネットワークの役割が大きいこと、育ちの過程における問題解決の力が醸成されていること等に力点を置いた「家族のストレングス」である。それを調べてみたい。家族フィールドワークである。微視的社会学からみた日常の暴力性論はこれと裏腹な関係にある。相互作用と関係性をとおして、もめ事から暴力へと昂じていく、コリンズのいう暴力類型の と のタイプの暴力を振るう人間のマインドセットがどのように形成されるのか、それへの応答性のある「介入と支援」の内容はどうあるべきなのかの確定のためにもこのフィールドワークは必要だと思う。そのためにも問題行動・逸脱行動をおこなうことで何かを実現させている、あるいは満たしていることを日常活動理論と相互作用論にもとづき明確にした上で、リスクではなく、そこで満たされている、問題行動や逸脱行動をとおして実現しようとしていたニーズをより健康的なものへと置き換え

る方策を見極めていく「介入と支援」が大切だろう。以前にも紹介したことがある加害者臨床における「善き生活 Good Life Model=GLM」というアプローチである。脱暴力と虐待の契機は暴力と虐待をとおして実現させている本来のニーズの吟味からはじまる。

ハネケの「日常に潜む暴力」を描く手法は、顕現しているものの裏側に進行している別の事項を読み取るということを教えてくれる感性の鍛錬の機会を提供してくれている。「いま・ここ」の現前で進行している事態がもつ隠れたメッセージを解読し、社会のもつ指示作用と方向づけに関して、少なくとも気づくための社会読解力は身につくので、「社会臨床の視界」になくってはならない「まなざし」なのである。

なかむらただし

(社会臨床論、臨床社会学、社会病理学)

ケアマネだから できること



～地域とつなぐ～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

* これまでは、ケアマネの出会った家族たちと題して執筆してきました。今回の11号からは、少し角度を変えて連載を続けようと思いました。ケアマネと家族、のみならず、地域、人、制度・・・等々、ケアマネだからできること、できたことをお伝えしていきます。

～「連携」という言葉の疑問～

ケアマネとして仕事をしていると、「連携」という言葉をよく聞きます。連携の名のもとに、専門職同志がつながりあうことは悪いことではないし、援助対象者を中心にケアチームが一丸となることは好ましいことに違いありません。けれども私は、この「連携」という言葉に少々疑問を持っています。

例えば、介護保険サービスの利用者が、ケアマネをはじめとして、サービスを提供する専門職との関係が深くなっていったとしても、その人の「生活者」の部分は、きちんと「生活の場」につなが

っていているだろうか。「生活の場」、つまり「地域」のこと。

私は、介護を必要とする人の担当になると、それまであれこれ心配していた近隣住民が「ケアマネさんがいるから」という理由で、それ以後のつながりが希薄になっていく、という現象を幾度となく感じたことがあります。それは、本末転倒な話です。介護の社会化を謳った介護保険制度ではあるけれど、所詮、制度で賄えることなどしている、と思うし、制度になったサービスのあれこれ、制約も多い。本当に私たちが暮らしの中に求めるような柔軟な対応は難しいのが現状です。例え、なんらかの公的サービスが必要となったとしても、地域住民同志のつながりが希薄にならないようにしていかなければならないと感じます。そして、ともすれば「もう自分などなんの役にもたたないから。」と、地域と疎遠になっていく高齢者自身にもエンパワメントしつつ、その人の持っている力を生かし続ける場所を見つけ出していく

ことも、ケアマネに求められる役割ではないかと思っています。

「連携」という言葉が、専門職同志や、専門職とサービス利用者だけにとどまらず、利用者と地域にも広げられるように意識して、日々の仕事を展開したいと思っています。そして、そのためには、個別ニーズが地域にとってどのような意味を持っているのか、地域で共有していけるような動きが必要です。

とは言っても、個人の問題を地域で共有することには、壁もあります。そんな壁をどんな風乗り越えながら地域支援をしていけるのか、日々考えあぐねていることも含めながら、「ケアマネだからできること」をお伝えしたいと思います。

ある日の相談内容

80歳 女性Aさん 独居

この数カ月体調不良があって、短期間の入院を幾度となく繰り返している。外出も減っているようだ。入院の際は救急車を呼んでいる。そろそろ一人暮らしも何かと大変ではないのか。「介護の人に相談したらいいよ。」と近所の人Bさんが本人へ話をし、近所の人から介護の相談の電話があった。

ケアマネは、相談の電話を受け、この女性Aさん宅を訪問することにした。古い住宅街の中に公営住宅も交じっていた。Aさんは、この公営住宅に一人で住んでいるようだ。

訪問し呼び鈴を鳴らすと、かなり時間がかかって、Aさんが玄関ドアを開けてくれた。

「近所のBさんからのご紹介で伺いました。」と声をかけると、「ああ、聞いているよ。汚けれど、まずは、あがってください。」そう笑顔で部屋の中へ招き入れてくれた。

Aさんの部屋は手狭になっていた。散らかって

いる、というよりは、本来の部屋の大きさに対して荷物が多すぎるような印象だ。家具の合間にできたわずかばかりのスペースに「さあ座ってください。」と座布団を勧めてくれる。

「お一人暮らしは、いつ頃からですか？」ケアマネが尋ねると、「もう20年以上もたつね。町の中で店をしていたけれど、主人が亡くなってから、店も閉めてここにやり住んだのですよ。元は、大きな一軒家に住んでいたからね、荷物がね、収まらなくて。」と部屋の中を見渡ししながら言う。「そうでしたか……。ところで、Aさんは、このところお体の調子が優れないとお聞きしました。いかがですか。」Aさんが話をする時には、常にここにこしている。「いやあ、もう年だから。80も過ぎていし、あっちこちね。」話しぶりからは、深刻な様子はない。ケアマネは、Aさんの普段の暮らしの中で、何か介護サービスが役に立てることはないか、介護サービスの説明をしながら、あれこれとAさんの暮らしぶりを聞いた。Aさんは、「私は困ってないよ。今までの通り生活は続けて行けるから、大丈夫ですよ。この間は、近所のBさんが、心配して声をかけてくれたけれど、私は大丈夫だから、もう来てくれなくていいですよ。」そんな風に話は終わった。本人が困難を感じていず、サービスも希望しないとはっきりと意思表示されては、あまり無理にサービスの話をして、と思い、初回の訪問はこのあたりでと終了した。けれども、台所に重ねられた食器の山や、テーブルに出し放しになった古くなった食べ物。玄関に置かれた幾つものゴミ袋。ケアマネは、ご本人の話とは別に、なんらかの支援の必要性を感じていた。きっと、この様子を近所の人も心配しているのだろう。

「今日のところは失礼します。時々、近くに寄った時にお声をかけさせていただいてもよいでしょうか。」とケアマネが声をかけると、Aさんは「散らかっていますけどね。こんなところで良かった

ら、どうぞ来てください。」話好きなAさんの好意とも感じられた。

Aさんの家の玄関を閉め、止めてあった車に乗り込もうとした時です。

「あの、Aさんのところに来てくれる介護の人ですか？」と声をかけてきた女性がいる。

ケアマネがちょっと会釈をすると、その女性は近づいてきて「最近ね、Aさんの様子がおかしいのですよ。もう一人暮らしは無理かもしれないね、とみんなで言っていたところですよ。」と話す。ここで、立ち話でAさんの話をするというのは、ケアマネとしての守秘義務に反する行為だ。ケアマネは、その女性に向かって「あの、どちらにお住まいでいらっしゃいますか。」と尋ねた。女性は、あそこだよ、と指さして自分の家を教えてくれた。何か聞いたら色々教えてくれそうだなとは思いつつ、「このあたりを時々回らせていただいておりますので、これからもよろしくお願いします。」そんな曖昧なあいさつで話を切り上げた。

さて、事務所に戻って今日のAさんとのやりとり、Aさんの生活状況、近隣住民の声を思い返してみた。Aさんは大丈夫、とは言っていたけれど、やはり何らかの支援を要する状況だろう、と感じる。もう少し、Aさんのことをしっかり理解しよう。そして、Aさんにとって必要な支援を考えていくこととした。

2度目の訪問

物忘れもあるようだというAさんのところには、翌週2度目の訪問をした。幸いAさんは、ケアマネのことを覚えていた。訪問すると、抵抗なくケアマネを家に招き入れてくれる。その日は、Aさんが日ごろどんな風に過ごしているか、日課を聞いてみた。Aさんの話だと、午前中に買い物へ行ったり、午後は散歩をしたりしているということだった。毎日何かしらの用事で外へ出るから、近所の人と顔を合わせるし挨拶もしているという。

特に、角の家の人には何かと世話になっていると話していた。角の家？前回、ケアマネが訪問した帰りに話しかけてきた女性の家だ。どんな付き合いなのだろう。聞くと、以前Aさんが飼っていた犬を、預けたという。Aさんは、ほぼ毎日犬の様子を見にその女性の家に行くという。ケアマネは「Aさんの犬を私に見せていただけませんか。」と聞いてみた。すると、Aさんは「いいよ。」と返事をしてくれ、その女性の家まで二人で行くことにした。

呼び鈴を鳴らすと、先日会ったその女性も気さくに玄関を開けてくれた。Aさんのことは「おばさん」と呼んでいる。ケアマネはその女性に「Aさんの犬を見せていただきたいなと思って一緒に来ました。」と挨拶すると、その女性は、どうぞ、どうぞと部屋に入れてくれた。小さな室内犬が元気にAさんのそばに寄ってくる。「もう、預かって4年になるね。・・・ところで、おばさん、介護の人に何か相談しているの？」女性がAさんに声をかけた。Aさんは「別にね、お世話になることもないと思っているのだけれどね。」

その女性は、今度はケアマネに向かって話始めた。Aさんが長く一人で暮らしてきたこと、最近は体調をよく崩すこと、傍からみていると心配がたくさんある。介護のサービスを受けてなんとか安心して暮らせないものか。Aさんは、その話が聞こえているのか聞こえていないのか、知らぬ顔で犬をなでている。Aさんに、この女性が心配してくれていることを、聞いてみた。Aさんは、「本当に心配してもらってありがたいけど、私は大丈夫だから。」考えは変わらないようだ。その言葉を聞いて女性はややあきれ顔をしていた。帰り際にケアマネはその女性に名刺を渡した。そして、Aさんにも犬を見せてくれたお礼を言って別れた。

ケアマネが事務所へ戻ると見ていたかのようなタイミングで、先ほどの女性から電話があった。やはりAさんのことだった。物忘れ、ゴミ捨てが

できない、時々訪ねると鍋を焦がしていることもある。物が見当たらないと、近所の人を疑ってしまふことが増えて、近所の人もAさんとの付き合いを徐々に遠のけてしまっている。なんとかならないだろうか、ということだった。

地域の中のAさん

3回目の訪問は、夕方の時間。この時間、この住宅の人は大抵庭に出ている。家庭菜園の手入れをしている人が多い。Aさんの自宅の呼び鈴を鳴らしても応答がない。庭に回ってみるとAさんが隣の人と話をしている。挨拶すると、隣の方はケアマネに向かって「どなたですか。」と聞く。ケアマネはAさんに「私のことを紹介してください。」と言うと、Aさんは「介護の人だよ。何も世話にはなっていないのだけれどね。」と言って紹介してくれた。隣の方は、ケアマネのそばに寄ってきて「ちょっと困ったことがありますね。」と言う。どうやら、Aさんは、自覚とは別に随分と近所の人に心配された生活となっていたようです。Aさんの行動が近所の人を遠ざけ、少しずつ孤立しているようでした。このままでは、一人暮らしの継続も心配になっていきます。

ケアマネがAさんのところへ足を運ぶたびに、角の女性が気にかけてくれていました。この3度目の訪問時にもケアマネの姿を見つけると、「ケアマネさん、おばさん、ちょっとお茶を飲みに来ない。」と声をかけて家に入れてくれました。女性は「おばさん、みんな心配しているよ。ゴミを捨てることは私も手伝えるけれど、買い物も大変そうだし、ご飯作ったり掃除したりも、手伝ってもらったらいけない。」と切り出してくれた。Aさんは、「そんなに言うなら、少し手伝ってもらおうか。」と渋々サービス利用を決めた。

その後、サービス利用が開始すると、近所の方は、サービスに入るスタッフを見つけては、Aさんの様子を気にかけて声をかけてくれた。時折の

不協和音はあるものの、近所の人も、Aさんに介護サービスが入ることで、何かあった時には、サービススタッフやケアマネに声をかければ良いという「安心」が生まれたのでしょうか。「Aさんのことで困ったことがあるのですよ。」そんな電話のやり取りが時々ありながら、それでもなんとかAさんの一人暮らしは続いています。

それぞれの「安心」

一人暮らしの高齢者は、近隣住民から心配されます。一人暮らしの本人はその心配を不要と言います。どちらにも言い分はあるだろうと思います。近隣の人に心配や気が向かないような世の中では少々寂しい気がします。一方自分でまだまだやれる、と思っている段階での周囲の心配は、鬱陶しいものでもあるでしょう。そんな互いの思いを共有するところから、助け合い、や、お互い様という気持ちが生まれるのではないのでしょうか。そして、一般地域住民は、自分の身近で「何か」起こった時にどうしたらよいのか、そんな不安があるものです。どんな人にも「何か」起こる可能性は等しくあります。何か起こった時の責任問題が心配で、ちょっと心配が多くなってきた人を排除する世の中は実に暮らしにくいものではないでしょうか。私たち、専門職はそんな時に役割を發揮しなくてはならないと思います。「心配なことは連絡をください。」そう言って渡す一枚の名刺が、「お互い様」の時間を支えているのかもしれない。何かがあったら一緒に考えていく。その積み重ねが、地域の力になっていくと思います。

ケアマネは業務の中でよく地域を歩きまわります。支援を必要とする人の24時間が、どのような環境の中に置かれているのか、環境をアセスメントすること、その業務特性「足」を使った仕事成せる技だと感じます。

*紹介する事例はプライバシーに配慮し、事実を一部加工しています。

街場の就活論 vol.11

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん あそぶ
団 遊

幼保業界の就職事情概観

「職員の採用ができない」「来年はパートさんに担任を持ってもらうことになるかもしれない」「保育士派遣の業者さんの評判って、良し悪しはあるの？」。幼稚園や保育園の園長が、顔を合わせるたびに嘆いている。職員が新規で取れなくなってきているのだ。これは体感値だが全国的な傾向だ。このことは、幼稚園や保育園への就職が、過渡期を迎えていることを意味している。その事実を取り巻く周辺情報を、私の視点もまじえて報告したいと思う。

幼保の業界は、「何事も10数年遅れでやってくる」と言われている。アメリカのブームが数年遅れで日本にやって来ると言われていたのと同じで、例えば企業がブランディングの重要性を感じ様々な施策を導入してから随分経って、「園ブランド」などと言う言葉が出始め、取り組む園も増えた。何事も新しいものに飛びつければいいというものではないので、教育機関としては、まっとうな反応だと思う。

就職に関しても同様で、10年以上前に見た風景が繰り返されている。未だに教員や学校推薦が幅をきかせており、今や理系の学生ですら耳にするこ

とが減った「研究室からの推薦」と同様のことが、なお生き続けている。そのため学生はあまり多くの園を受験することはなく、また、内定を辞退することは学校の面子に傷をつけ、後輩に迷惑をかけることになるので、基本的に許されない。学校もそのように指導をしていることが多い。

仮に内定辞退などがあるものなら、学校の担当者が「園にお詫びに来る」のが当たり前で、それがないと「失礼な学校だ、もうあそこからは取りたくないな」と思う園長が多い。また、実習の受け入れも学校の担当者が「直接依頼に来る」のが当たり前で、経過観察などのアフターフォローも「あるのが当然」だと考える園長が多い。一般大学生の実習を「インターンシップ」だとすると、制度の扱われ方に随分と差があることがわかる。

もっとも、ここ10年ほどで、加速度的に学生の売り手市場となり、学校側の園への気遣い度合いは目に見えて減っているように感じる。養成学校の年配の先生に話を聞くと「昔は全学生の履歴書を抱えて、それぞれの協会へご挨拶に行くのが当たり前だった」というが、そのような姿はカゲも形もない。放っておいても決まるからである。見方を変えれば、養成学校の就職指導にかける熱意は、必要性がないため減少傾向にあるが、依然として一昔前の就職スタイルは堅持されている業界だと

言えよう。しかし私は何もここで養成校の怠慢を指摘するつもりはない。それもこれも「時代が変わってきた結果」だということを論じたい。

制度変化がもたらせた

自由競争の先に

幼保問わず職員募集に苦勞する昨今、その大きな変化をもたらせた要因は

- ・株式会社の業界参入解禁
- ・大学の四年制化の加速

ではないかと考える。それぞれ解説する。

一点目の「株式会社の業界参入解禁」については、皆さんよく御存じことと思う。つまりこれまで「幼稚園園といえ学校法人、保育園園といえ社会福祉法人」(個人立等の例外はある)だった世界に、市場の原理が導入されたのだ。まずは手始めに保育園からであるが、制度改正直後から、学習教材会社を中心に、多くの会社が新規ビジネスとして取り組みをはじめ、また、保育ベンチャーと言われる起業も増えた。

ところが職員を送り出す養成学校は、そのような状況を見越して定員増など対応はしていない。ましてや「モンスターペアレンツ」などと言われ出したころから、志願者の減少に歯止めがかからないのが現状である。その結果、箱が多過ぎるという状況を招き、「普通にやっけては採用できない」状況が生まれはじめたのである。

蛇足であるが、そのような状況が生んだ新規ビジネスの一例に「職員派遣」を専業にする派遣会社がある。本来は出産などで仕事を離れなければならなかった女性が登録し、自分のリズムで幼稚園

教諭や保育士を再開するための手段であるはずだが、実態として、心無い会社は、園の前で帰宅する職員を待ち受け、退職を勧め、派遣登録を促すことをやっていた。園職員の仕事は、熱心な園ほど自主残業が横行している。これはこれで業界が抱える課題ではあるが、20~22時帰宅といった園も、特に首都圏では珍しくない。営業マンは言葉巧みにそこをつくのである。

「今の月収は確保しつつ、もっとプライベートも楽しめる園をご紹介しますよ。だってあなたの人生なんですから、そっちも大切にしなきゃ」。需給のバランスが崩れると、そこに利ザヤを目的とした志のないビジネスがうまれるのは、どの世界でも同じである。

二点目の「大学の四年制化の加速」については、前段にある志願者減少に歯止めをかけるための施策なのだが、ここでポイントなのは四年制になること自体ではなく、総合大学に統合されたり、学部が複数になったりする中で、就職の窓口が「キャリアセンター」と呼ばれる一般就職の窓口と統合される場所にある。つまり、極端に言えば、園の求人票がトヨタや三井物産の求人と同列に扱われるようになるということだ。

これまで教員や学校推薦の影響力で、ある意味コントロールできてきた就職窓口が、四年制化とともにオープン化し、新たな窓口となるキャリアセンターの職員は、園を「資格を活かした学生のひとつの就職先」としか見なくなる。もちろん、キャリアセンターの職員は幼保の業界に詳しいわけではない。

複数の養成学校を回り担当者と話していると、現状はまだ「就職の窓口まではキャリアセンターに任せられない(エントリーシートの書き方や面接指導などは任せる)」と考え、教員がキャリアセン

ターをコントロールしていたり、幼保に特化したキャリアアドバイザーを置いているところも多い。しかし、私の目には、これらはいわば制度移行時の経過措置に過ぎず、いずれ幼保も、一般企業と渡り合いながら有資格者の勧誘に励まなければならない時がくると映る。現に近接領域の福祉関係（特に高齢者分野）などはそうっており、複数の施設を有する大法人ほど、多額の採用予算をかけられるため、良い人を取りやすい状況になっている。

立場が違えば、想いは違う

行きつく先は、天国か地獄か？

ではそのような状況を、幼保の園長先生はどう見ており、養成校の教員やキャリアセンターの職員はどう見ているのだろうか？

まずは園長先生の視点。実際に私が日頃接している園長先生たちは、危機感が高い。なんとかしなければと思っている人も多く、一緒に新しい就職のイベントを仕掛けたりしている（園就職の魅力をPRすることを目的としたイベントであって、青田買いをするためのイベントではない）。ただし、一般的に見れば「最近採用が難しくなったね～」と感想を言い合うことはあるが、具体的に何か行動することはないというのが大半だと思う。そして私が、ここで書いているような話をする、そもそも論を掲げ憤慨される。おっしゃることはその通りなのだが、だからといって何かされることはない。

具体的なアクションをすることが難しい、というのは業界の横並び意識の高さも影響していると思う。基本的に抜け駆けノーマンな世界なため、新しいことに臆病な業界なのだ。抜け駆けがダメならば、

業界で一致団結して打倒トヨタ・三井物産に立ち上がらなければならない時期ではないかと思うのだが、そのような想いを具現化できている協会や振興会は、ほんの一部だ（中には協会を挙げて就職フェアを行っているようなケースもある）。

次に養成学校の教員の視点はどうか？ これは保守的な園長先生と意見が近い。つまり、幼保への就職はこれまでのスタイルを貫くのがベストだと考えておられる。「複数の内定を目指す就職活動などとんでもないことで、口をきいてあげるんだから、辞退は厳禁。なぜなら園はみんなが来てくれるものと思って、補欠合格など出さないのだから、辞退をすれば直ちに園経営に響くのだということをよく覚えておくこと」。この意見には、多くの園長が頷くことだと思う。そして、現状は確かにその通りなのだが、一方で私が疑問に感じるのは、学生にそこまでの覚悟を迫る割に、提供される情報や選択肢は少なく、先に述べたとおり、職員が就職支援に熱心ではないケースも散見される。いじわるな見方をすると、教員の存在価値をアピールするために手放したくない既得権益と考えている面も、あるのではないかと思う。

最後にキャリアセンターの職員の視点はどうか？ はっきりしているのは、彼らに幼保への思い入れはない、ということである。彼らの命題は学生の進路指導であり、気になるのは卒業生の就職率や早期の離職率であるから、幼保にこだわる理由がないのは明確である。また、「私は商社一本で就活します」という学生に対して「色々な業界を見て回る」ことを勧めるのが指導の基本方針なので、同じことを幼保就職希望者にアドバイスするケースも、きっとあるに違いない。

その結果「色々見てみた」学生が、幼保就職をやめるケースもあり、それは条件面や先輩情報などから、仕方がない部分があると私は思う。これも、

業界の積年課題だが、彼女らが幼保を離れる決断をする最大の先輩情報は「結婚後や出産後も正規職員として仕事を続けたいなら、園就職は止めておいた方がいい」というアドバイスだ。

教員に「入学した時の想いを思い返してみませんか。何のために専門のトレーニングを受けてきたの？ 実習でお世話になった園のことを思い出して！ 幼児教育に勝る仕事はほかにあると思う？」と尋ねられても、特に幼稚園の場合、実際は30歳を前に結婚退職してもらうのが一番ありがたいと思われている世界である。そのため、職員のキャリア育成プランなどは、ないことがほとんどで、このような状況で放置されていることがある種の「異常」であることは、キャリアセンターの職員のみならず、一般企業と比較して見ることができる学生には一目瞭然なのだ。

ただし、これは園長の怠惰が招いているとは言い切れない。社会制度が、助成金の支払い方を含め、幼児教育者の長期雇用、育成を重視していないのだ。その最たる例であおりを受けているのが、男子学生だ。

志願者減少に歯止めがかからない養成学校は、四年制への移行もアピール機会に変えながら、男子学生へのPRにも積極的だ。世の中の「イクメン」ムードも追い風となり、育児や幼児教育に関心を持つ男子学生も確実に増えている。その結果、養成学校に足を踏み入れる男子も増えてきた。ところが、実際は彼らの就職先がほとんどない。そのため、保育士や幼稚園教諭の資格を持ちながら一般企業への就職を強られるケースも少なくない。その理由は、先に述べたとおり「主に金銭面の理由から長期雇用が無理だから」だ。つまり「男子一生の面倒は見られない」と尻込みする園長が多いのである。

結果、男子学生の増加に伴い養成学校に起こったことは、公務員試験対策の強化である。つまり、男子学生が幼児教育の実践者として生きる道は「公務員になり公立園に行く」以外になかなか見当たらないからなのだが、一方で「公立園はいずれなくしたいのが政府の考え」というのが業界の常識だ。もはや八方ふさがりである。

はたして被害者は誰なのか？

ここまで、私的な意見も含めて、過渡期を迎えた幼保業界の就職事情を概観してきた。園長、教員、職員の誰かが怠けているわけではないし、みんな一生懸命なのだが、ベクトルが同じ方向を向いているとは言えず、市場の原理に飲み込まれつつある、といったのが現状だろう。このままではそう遠くない未来に一般就職市場に同化してしまうことになるのではないかと思うのだが、それは決して良い結果を導くとは思えない。

ただ一方で「これまで通り」がベストではないとも強く思う。今、幼保の業界が取り組むべきは、これからを見据えた、有資格者の就職スタイルの新しいモデルを構築していくことだ。すでに、株式会社園は、養成学校に大型バスで乗り付け、学生を園見学ツアーという名のもとで連れ出し、多少の接待をし、青田買いを始めている。このままでは「採用予算あるところ勝ち」になるのは目に見えている。横並びで息をひそめている間に共倒れになられるのは、我々のように園を応援している第三者の立場からしても、非常に悲しいことなのである。

また、さらに気がかりなのは、「この議論の中に子どもの姿がない」ことである。園長の立場から言うと、職員採用に四苦八苦することなど、ない方

がいいに決まっている。教員の立場に立つと、就職に一定の影響力を残せた方が、保身の意味も含めていいと考える人がいることは否めないであろう。キャリアセンターの職員の立場に立つと、少しでも長く働けるいい職場に学生を送り込みたいと願うであろう。そして学生に立場に立つと、選択肢は少ないより多い方がいいと感じるのが普通だろう。どれもすべて、真実だと思う。

では、園で育つ子どもにとって、よりよい先生と出会うためには、どういう就職活動のあり方がベストなのだろうか？ 幼保の園長と教員と職員が、今一度話し合うべきテーマはこの点にあると思う。

「ココキャリ」というインターネットサイトがある。これは幼保業界に絞った「リクナビ(新卒専門の情報検索サイト)」だ。掲載している園は株式会社園が多いが、徐々に学校法人や社会福祉法人の園も増えてきている。掲載料は、聞いた話によると30万円だとか。園が気軽に出せる金額ではない。波は、確実に押し寄せてきているのだ。

文/ だん・あそぶ

立命館アジア太平洋大学非常勤講師

「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸(実習)にした授業を展開している。代表をつとめるアソブロック株式会社が、幼保の環境づくり支援事業を行っている。10月には6人の園長とともに「幼稚園園長の本音フォーラム」を東京国際フォーラムで開催。業界内で話題を呼んだ。

コミュニティを探して

(1)

藤 信子

先の連載は、個人が心理療法（カウンセリングも含む）などの心理的ケアへアプローチすることは、自分は精神的な病気ではないという抵抗も含め、誰もが簡単に思いつくことではないだろう、ということについて 10 回にわたって考えてみた。自分が心理的に悩んでいて（精神的な問題を抱えて）、それを誰かに相談するには、自分が問題を抱えていることを解決したいこととして、その方法を探すという行動が必要なのだと思う。ところが、自分の問題を客観的に把握するという習慣を、私たちは持っているとはいいがたい。むしろこの 20～30 年ほどの間、自分のことを考えるという習慣を身に着けるような、教育やしつけは私たちの周りから抜け落ちていって

るような気がする。誰かの作った価値観、良い大学や良い会社に入ることが良い人生につながると子どもたちを追い立て、そしてその背景はお金に関する価値のみを肥大化させていった体験だったのではないか。多様な価値を切捨ててひたすら走り続けることを自らにも子どもたちにも強いてきた結果は、自分について考える余裕はなくなるだろう。その中で傷ついた時、誰かに相談することを思いつくことは難しいだろう。

自分を見つめること、考えてみることはそのようにできる環境が必要なのだと思う。地域保健の問題で、公衆衛生の概念が無くなったということを、この頃聞く。私が 1998 年

保健所の難病の訪問カウンセラーを始めた時は、保健師は地域担当だった。それがしばらくして感染症、精神保健、母子、難病などの専門担当制になった。これは大阪府の場合だけれど、他の都道府県なども同じだと思う。私はそれまでの乏しい知識で、保健師が地域担当であることこそ、その地域・家庭との付き合いの中での、保健師が相談にのることのできる強みだと思っていた。赤ちゃんの相談にのりながら、家族の他の成員の問題なども念頭に置くこと、そういう環境を考えて予防を考える観点が大事なことだと思っていた。そこで保健師さんに聞くと、現場ではそう考えているが、政策を考える人達は違うようだとされた。その時は何故そんな不合理なことがあるのか、とわからないままだった。そしていつの間にか、保健所は統合され数が減っていった。この保健所から公衆衛生が消えたことは、予防医学などの観点の導入と関連しているようだとは、知人たちの話である。疾病予防は個人の努力の問題とされている。そこで疾病や障害は、個人の問題に限定されていく方向は、市場原理の考え方から誘導されているのではないかと思いついた。

私は公衆衛生を学んだわけではないので、その考え方は、若い頃に読んだクローニンの「城砦」で、主人公が下水道の問題に取り組んでいることくらいしか知らない。今回再度読もうと思って書店に行ったが、「城砦」は売

ってなかった。クローニンを読む人は今頃はまだもういないのかなと思った。疾病予防のために環境を整えるということが、公衆衛生の考え方なのだろうと思う。以前に比べ、医療の進歩を考えると、個人がより早く自分の状態を把握し、予防と早期の治療を考えるほうが、環境を整備するよりコストの面からは良いような感じなのかもしれない。しかし、環境は設備だけの問題ではない、人間関係も環境である。ここで取り上げたいのは、自分の状態を把握し、予防や治療に訪れることの無い人たちのことである。それは心理的な問題だけではなく、身体の問題でも言えることだろうと思う。

他者と自分の問題について考え理解する傾向を育ててこなかったのは、私たちが人とのような関係性を築いているのかという面からも見る必要があるだろう。広井(2006)は、現代の日本人の「自分の知らない(なじみのない)他者に対しては殆ど全く顧慮せず、またコミュニケーションをとらない」そしてこれは「自分の良く知っている他者(あるいは同じ“集団”に属するも者)に対してはむしろ異様なほど気を使ったり、あるいは“水入らず”と呼ばれるような強い親和性が支配することと表裏の関係にある」と指摘している。ウチに向かう関係が濃い場合、自分についての理解を伝えることが起こりえない可能性がある。そしてソトに対してはコミュニケーシ

ヨンをとらないとしたら、ウチを持つことが無くなると、その人はどうなるのだろう。独り誰にも理解されずにいることになる。病気にもかからず、経済的にも不自由せず、独りで暮らせる人ばかりならいいのかもしれない（本当にいいのかと言われるとわからない）。しかし、子育てに困ってアブユースに至る人、働けなくなってどこに相談することのできない人、自分の思いで孤立した人など関係性から切れている人は存在する。関係性の中でないと自分のことを振り返ることは難しいと思うけれど、どうしたら関係性は作れるのだろうか。

自分が帰属意識を持ち、支えあえるようなコミュニティを人はどのように作っているのだろうか。これからはばらくコミュニティを探してみようと思う。モデルを求めるというより、身近な場面や文献の中からその関係性の作り方を見つけていきたいと思っている。あえて文献の中と書いたのは、コミュニティの諸側面を分析する中で、私たちができることを、考えていく必要があると思っているからである。正直どのような展開になるかは、予想していない。予想しないで進みながら考えるのが、この連載に向いているのではないかと思っている。

—文献—

広井良典（2006）持続可能な福祉社会.ちくま新書

誌上ひとりワークショップ

シリーズ2

～ 家族の交流パターンを変える ～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

前号で「誌上一人ワークショップ ～家族援助は街のアパレル～」が終わりました。今回から一人ワークショップの第二シリーズとして、SSTの手法を取り入れたライブ事例検討会をスタートします。また、しばらくおつきあいください。なお、事例はもとの内容に大きく手を加えて創作しています。

1. 導入

「まず簡単に自己紹介をしてもらいます。そして、全員に共通していることや当てはまるものを探してください。見るだけで分かるものとか、あまりに主観的なことはだめですよ」

「なにが見つかりましたか」

「全員、子どもが二人いることが共通していました。Twitter をしていること、docomo の携帯をもっていることも共通しています」

「属性のようなものはなんとなく分かってくるけど、行動特性のようなものは当たりをつけて尋ねないと見つからないでしょ？ということで、ジョイニングをかねて情報の種類と集め方を体験してもらいました」

2. ケースの決定

「今日、ここに10名の方が参加しておられます。みなさんは、全員、対人援助に関連したお仕事をしておられます。これからいろんなケースの話がでてきますが、それらについて一切漏らさないということを知っていただけたらと思います。はい、守秘義務を了承していただきました。ありがとうございました」

「さて、みなさんの胸の内には、いま気になっているケースがきっとあると思います。うまく信頼関係をつくれなとか、どう理解したらいいのかわからないとか、どんな支援ができるか見当がつかないとか。代表的なケースを一つ思い浮かべてください。ではそれを、順番にコンパクトにみんなに紹介して

ください。Cさんからいきますか、どうぞ」

「時間に余裕があれば、すべてをみんなで考えたいのですが、残念ながらそうはいかないので一例だけ選んでください。すべてを聞き終えて、今日、どの話を取り上げるか。話し合っ誰のケースかを決めてください」

「決まりました？ Aさんのケースですか？わかりました。では、Aさんに詳しくそのケースを説明してもらいます。前に出てもらっていいですか？相談内容、家族状況、初回面接の状況、面接の経過、現在の状況、いま心にひっかかっていること等を、30分くらいでお願いします」

3. ケースの概略

家族構成：現在は母子二人の生活。

母親：31歳。3年前の離婚を巡るゴタゴタにより、抑うつ的となり精神科クリニックに通院。服薬中。入院歴はない。離婚後、生活保護を受給（現在も）。中卒後、家出し暴走族グループに入り、仲間宅を泊まり歩いた。その後、デリヘルやスタンド、居酒屋等で働く。本児の父親とはスタンドで働いていたときに知り合う。19歳で同棲、妊娠、結婚。27歳で離婚。その頃に実父が死去したこともあり、祖母と連絡をとるようになった。祖母との日常的なつながりはほとんどない。幼い頃から、短期だった実父の暴力を受けて育った。

本児：12歳（来談時）小6。小柄、散髪嫌いではぼさぼさの髪、風呂嫌いで不潔。ふてくされた表情をしているが、ときに緩むと可愛い。母親との衝突はあるが、他人に対する反抗的・攻撃的な態度はない。成績は常時下位、勉強は大嫌い。昼過ぎに起きてきて、明け方までTVゲームをする生活。いつも一人。小さいときから友達と遊ぶことを好まなかった。万引き等はなし。

兄：16歳。公立高校2年。小さいときから本児と相性が悪く、高校入学と同時に通いやすい祖母宅に。その間の交渉・決断は一人ですべて行った。母や祖母との関係は悪くない。成績良好。サッカー部で熱心に活動している。

父親：44歳、土木建設会社に勤務。幼少時より、言うことを聞かない本児を殴っていた。酒を飲んだときは、母親に対する暴力もあった。本児が小学校3年の頃、勝手に出て行ったきり戻らず、そのまま離婚。住居は分かっているが、連絡はとっていない。現在、生活保護受給。アルコール依存症。

父方親族：情報なし。

母方祖母：60歳。徒歩で20分くらいの所に借家住まい。パート就労、健康状態は良好。

夫（祖父）は3年前に死去。母親とは電話で話をする程度。兄は頻繁に出入りし、現在は居候。本児はあまり寄りつかない。

相談内容：「小6の長男が学校に行かず、夜通しネットでチャットやゲームをしている。また、昼夜を問わず自転車でフラフラ徘徊する。どうしたらいいか教えて欲しい」。

初回面接：初回面接：母親と本児（小6）が来所。待合室では二人でしゃべっている。清潔感はないが非行親和性も感じさせない。入室後、相談員と目を合わさず落ち着かない。質問には無言。たまに首肯。時折、母親の説明に反発し言い返す。母も負けずと大声でやりあう。そうこうするうちに、本児はふてくされて退室。母は止めない。力は母が勝っている印象。

経過：初回以後本児は来所せず、不規則な母親のみの来談となる（週一回の約束が月1回程度）。本児はもともとおとなしい子で、小1の頃から登校しぶりがあった。怠学傾向が顕著になったのは、小3の離婚の頃から。父親からは、尋ねられたことにはっきり返事をしないとよく殴られていた。止める母親にも手を上げていた（特に酔っているときなど）。兄はうまく立ち回り、父親に気に入られていた。

中学生になると、「早く食事をしなさい」「ゲームの音量を下げなさい」と注意すると興奮し、暴れてガラスを割ったりするようになる。足や肩を蹴られた母親が包丁を持って身を守り、近所の人やパトカーを呼んだことが何度かあった。警察官が来ると、本児はさっさと自分の部屋に引っ込んだ。母親は警察の介入を望まず、児童相談所の家庭訪問や一時保護も拒んだ。

中2になっても相変わらず昼夜逆転で、深夜までパソコンでゲーム・チャットをしている。一度、警察官がパトカーにのせて一時保護所に連れて行ったが、その日のうちに無断で帰宅。以来、警察も様子を見て帰るようになっている。

Aさんの気がかりな点：母親の要望に応える支援ができない。子どもにニーズがない。このままの形で相談を受けていていいのだろうかと迷っている。本児のアセスメントもできておらず不安（現状は、検査も受診も難しい）。警察・学校・児相との連携がうまく機能していない。

「はい、ありがとうございました。よく整理されていたので、とてもわかりやすかったです。それでは、Aさんの力になれるように、みんなで考えていくことにしましょう。まずですね、面接の様子という状況をロールプレイでやってみようと思います。クライアント、母親ですが、その役をしていただく方をAさんに指名してもらいます」

「(A) ええと、Bさんをお願いしていいですか？」

「(B) はい、やってみます」

「ありがとうございます。じゃあ、別室でBさんに最近の面接の様子を伝えてください。ロールプレイのイメージを共有できたらいいので、再現にこだわる必要はありません」

「打ち合わせの間に、みなさんにはお願いがあります。この後、ロールプレイを見て感想を言うわけですが、簡単なルールがあります。一点目はロールプレイの感想です。必ず、『～したのがよかった』『～しなかったのがよかった』という形で発表してください。二点目ですが、他の人の意見に対する感想は『そうそう、それに付け加えて～』という形でお願いします。

今日、Aさんだけでなくみなさんに知ってもらいたいのは、参加者の数だけ視点があり、考え方があり、可能性があるということです。正解がなんて気にしないでいいです、そんなものがあるのかどうかもわかりませんが、否定的なコメントや反対意見も要りません。では、よろしくお願いします。みなさんの発表はホワイトボードに書きます」

4．養護教諭Aさんのロールプレイ

「(T役) 夏休みはどんな様子でしたか？」

「(M役) この間教えてもらったNPOの塾に誘って見たんです。お昼が出るからって。そしたら、

週に一回、月曜日の昼食の時間だけ行くようになりました。食べるだけ食べたら、さっさと帰ってくるんです。わけがわからない、あれで意味があるのでしょうか」

「(T 役) 私は、家に閉じこもるよりずっと意味があると思います。こんなふうによくいと予想しておられたんですか？」

「(M 役) いいえ、まさか昼食で釣れるなんて、思ってもみませんでした。ただ、あいさつも会話もいっさいなしです。食事だけなんて、恥ずかしくないんですかね」

「(T 役) 家にずっといることに飽きたのかもしれないですね」

「(M 役) そういえば、8月のはじめごろにフラッとおばあちゃんの所に行きました。わたしは大歓迎なんですが、母はたいへんだったみたいです」

「(T 役) そこでも昼夜逆転に近い生活でしたか？」

「(M 役) ゲームを持ち込んでましたから、たぶん」

「(T 役) お年寄りにはガラガラした生活を好まないから衝突したのかもしれないですね」

「(M 役) そうなんです。もともと口うるさい人ですし、兄ともめたみたいで、4、5日して戻ってきました」

「(T 役) じゃあ、行くのも帰るのも自分で決めたということですね」

「(M 役) まあ、そういうことになります」

「(T 役) 帰ったとき、彼はなにか言ってましたか？」

「(M 役) 別に。あいかわらず深夜までネットして、昼ごろ起きてくる生活です。注意したらパトカーが来るようなことになるし、言わないとずっとあのままでしょうし、このままでいいのでしょうか。何かできることはないですか？」

「(T 役) お気持ちはよく分かりますけど、いまできることはなさっていると思います」

「(M 役) そうでしょうか、しんどいです、一緒にいるだけで」

「(T 役) あの、いまのままでいけないと思われるのは、特にどの部分ですか」

「(M 役) すべてです。学校に行かず、昼間寝て、夜はネット、注意したら暴れるし」

「(T 役) でも、最近はパトカーの回数がぐんと減っていますよね」

「(M 役) だからといって、何も変わってないんですよ」

「(T 役) 夜間徘徊しても犯罪を犯すわけでもないし・・・」

「(M 役) 先生、はっきり言って、あの子、おかしいくないですか？」

「(T 役) 別におかしいとは思いませんが、それとは別に、いつか専門医の意見も聞いてみたいとは考えています。タイミングを見て考えましょう」

5 . 感想

「ありがとうございました。拍手！お二人ともうまいですね」

「(A) Bさんが上手だから、雰囲気がよく出せたと思います」

「Bさん、どんな感想を持たれましたか？」

「(B) 最初は不安がいっぱいだったのですが、いま適切なことをしていると言い切ってくれたので、安

心しました」

「なるほど。では、みなさんの感想をうかがいます。さきほどの留意事項、『～したのがよかった』『～しなかったのがよかった』『そうそう、それに追加ですが～』を忘れないでくださいね」

「(C) Bさんも言ってましたが、いまやっていることが最適だと言われたのはよかったと思います。ウツがあるし、そこまで支えないと途切れてしまうような感じがします」

「(D) そのことの付け加えですが、“パトカーの回数が減ってる”と具体的にあげられたのは説得力があったと思います」

「(E) NPOの塾に連れて行ったこと、祖母宅に行ったことなどを肯定的にとらえているのがよかったと思います」

「(F) そうそう、祖母宅から帰ってきた決断をきちんと評価しているのがすごいと思いました」

「(G) ウツの母親を絶対に責めないという姿勢がよかったです。これまで子どもとバトルをしてパトカーが来たこともあったけど、母親失格なんかじゃないというメッセージが伝わってきました」

「(H) 診察や検査をすすめるタイミングが良かったと思います。突き放す感じがしませんでした」

「(I) “しんどいです、一緒にいるだけで”のあと、“いまのままでいけないと思われるのは、特にどの部分ですか”と具体的な話にもっていったのはスゴイと思いました。あそこで感情の話になったら、もっとしんどくなっていったかもしれません」

「(J) わたしも同じ感想を持ちました。一見、行き詰まっているように見えるけど、共感しながらいないに現状に意味や価値を認めていくと、収まりのいいところに落ち着いていくと、そんなふうに見えました。勉強になりました」

「ではAさん、みなさんの意見を聞いていかがですか？」

「(A) 母親の“これでいいのか、他にやらないといけないことがあるのではないか”という焦りは、わたしの気持そのものなんです。だから、みなさんに“それでいい”と言われて、すごく楽になりました」

「母親の気持ち、クライアントの気持ちを実感できた？」

「(A) その通りです。なにしろ切羽詰まった状況なので、共感するだけじゃなくてある程度は自分の考えを率直に伝えよう意識しました。でも、いざとなったら難しく、受け止めるのがやっとだと思っていたのですが、いまはこれでよかったのだという気になっています。ほんとにありがとうございました(拍手)」

「はい。せっかくの盛り上がりですけど、ここでちょっと休憩を入れましょう。Aさん、Bさん、いったん役から抜けましょう。目を閉じて肩の力を抜いて深呼吸します。心の中でご自分の名前を呼んで返事してください。私が目を開けると言うと、すっかり役から抜けます。はい、目を開けてください。ではみなさん、このあとさらなる高みをめざして進みたいと思います」(続く)

映画

の中の

子ども
たち

第11回
孤独なツバメたち

～デカセギの子どもに生まれて～
—知らなかった彼らの青春、彼らの人生—

川崎 二三彦

舞台挨拶

映画館に通うようになって数十年になるけれど、監督の舞台挨拶というものに出くわしたことはなかった。だから、ブラジル映画祭の初日に上映された本作品でのそれは、初体験となる。

「ブラジル移民の子孫、つまりは日系ブラジル人が、長い時を隔てて、今度は日本にデカセギに来ており、中でも浜松は、日本で最も多くのブラジル人が自動車製造関係の派遣労働者として暮らしています。映画は、彼らと共にやってきた子どもや来日後に生まれた子ども、つまりは第2世代となる若者5人を追いかけたものです。賛否はあるでしょうが、ご覧になって是非とも率直なご意見、ご感想を聞かせてください」

というようなことが上映前に語られたのだが、挨拶したのは浜松学院大学の津村公博教授。実はこの人が本作品の共同監督の一人なのである。

「なぜそんな人が映画監督を？」と疑問に思ったのだが、そもそもの出発点は、多文化教育を専門とする彼が日系ブラジル人青年の生活実態を調査すべく、土曜の夜毎、浜松市内で若者たちにインタビューを繰り返していたことに始まる。もちろん映画化なんて毛頭考えもしなかったのだが、2008年、日本人のブラジル移民百周年を機に、



この調査に同行した NHK ワールドテレビのディレクター中村真夕が、魅力的な子どもたちに惹かれて「ドキュメンタリー」を作りたいと言い出したことが、本作誕生のきっかけだ。

リーマンショック

とはいえ、彼らの生活は過酷だ。たとえばユリ。彼は10歳で来日したものの、中学時代から非行に走り、手には「Hustler」と書かれた刺青が彫られている。映画では、少年院を退院した後の彼が登場するのだが、ブラジル人ギャング団を作っていたと告白する。ただし、「別に悪いことをするためにギャングを作ったんじゃない」「表の社会で成功するのは難しいけど、裏の社会の人たちは、自分のことをリスペクトしてくれるから」という。

あるいは19歳のエドアルド。母子で来日し、日本とブラジルを行き来していたのだが、外国籍の子どもに義務教育は適用されないせいか、彼は中学を中退して働き出す。今では帰国した母と別れ、一人日本で生活しているのだが、驚いたことに、一日の仕事を終えたと、夜間にブラジル人中学生に英語を教え、自らも勉強して大学に行く夢を持っているというのだ。

ところが、撮影を始めてすぐの2008年9月、リーマンショックが起こる。ために自動車産業は大打撃を受け、浜松でも外国人派遣労働者である彼らは真っ先に失業し、窮地に陥ってしまう。

渡り鳥

15歳の少女パウラをおそう運命も例外ではない。日本で生まれ育ち、今では恋人もいて、中卒後すぐ自動車関

連工場で働いていたのだが、彼女の両親が帰国を決意するのである。

「私は恋人とずっと一緒にここに居たいけど、親の決めたことだから……」

彼女はそう話し、未踏の「祖国」ブラジルに旅立って行くのであった。

先に紹介したユリも、やはり帰国する。一方、大学入学を目指していたエドアルドは、大麻所持で起訴され、強制送還を命じられたのだが、日本に残ることを決意して雑踏の中に消えて行った。

映画のタイトルに使われた「ツバメ」は、渡り鳥のように自由と見えて、実は居場所が定まらない彼らを象徴してのことだ。

ドキュメンタリーに前もってストーリーがあるわけではないから、彼らがバタバタとブラジルに帰ってしまうことは想定外であった。そこでカメラは、彼らの帰国後の姿を追ってブラジルに渡る。映し出されたのは、たくさんの家族を支えるために働き、夜学に通うパウラであり、結婚して子どもが出来たユリ、あるいは浜松でブレイクダンスのチームを結成していたコカが、帰国後、ダンスを通じて地元の若者と交流している姿であった。

日系ブラジル人の今

上映終了後、再び登壇した津村教授に会場からいくつかの質問が出された。

「彼らのその後が気になります。彼らは今どうしているんでしょう？」

こう尋ねたのは、なるほど「私も当事者の一人です」と自己紹介した女性であった。



教授は、「取材した5人のうち、4人もが帰国するとは思ってもみなかった」と話しつつ、その後の彼らの様子を丁寧に説明した。彼は研究者として調査するだけでなく、現在も彼ら若者と交流し、日系ブラジル人中学生に対する支援活動も続けているのである。

次に発言したのは、やはり少し年配の日系ブラジル人。この男性は岐阜県在住だが、映画が京都で上映されると知って、わざわざやって来たのであった。

「大変すばらしい作品だった。日本で大きく成功した人もいるけれど、一方でこういう現実があることを、日本人もブラジル人も、もっと知るべきだと思う」

こんな発言に答えて、津村教授は次のように話す。

「この映画は、なるべくメッセージ性を薄めて青春群像として観てもらおうよう意図しましたが、リーマンショック後に策定された『日系人離職者に対する帰国支援事業』は、手切れ金のようにして本人に30万円、扶養家族1人当たり20万円を支給するだけで、支給を受けた人は『当分の間』再入国が認められません。だから……」

暗に日本政府の政策を批判していたが、過酷な状況にもかかわらず、決して日本のことを悪く言わない彼ら若者たちへの冷静かつ熱い思いが伝わる発言であり、また、映画であった。

* 2011 / 日本・ブラジル

* 鑑賞データ 2012/10/20 京都シネマ

* 公式HP <http://lonelyswallows.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/18909>

<これまでの連載>

- 第1回「プレシャス」 <http://bit.ly/9qGWXm>
- 第2回「クロッシング」 <http://bit.ly/rYwUnO>
- 第3回「冬の小鳥」 <http://bit.ly/eGJ1d9>
- 第4回「その街のこども」 <http://bit.ly/hzhB9t>
- 第5回「八日目の蟬」 <http://bit.ly/keXFwL>
- 第6回「いのちの子ども」 <http://bit.ly/pm8V0p>
- 第7回「ラビット・ホール」 <http://bit.ly/wF8G4a>
- 第8回「サラの鍵」 <http://bit.ly/HI2MsL>
- 第9回「少年と自転車」 <http://bit.ly/LXzFK4>
- 第10回「オレンジと太陽」 <http://bit.ly/QtU4sl>

子どもと家族と学校と

⑪

『どこからが問題？なのか、早期発見、早期対応』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美

問題がいろいろある学校生活

現在、この複雑な社会で暮らしている子どもたちは、何かの問題を抱え、困難なことに直面することが少なくない。

発生する場所は、学校内だけでなく、生活している地域、そしてインターネット上にあり、児童生徒が被害を受け、思わぬところで、加害者側になっている。

このような環境のなかで、クラス担任は、さまざまな事象に対して、どの程度から「これは問題だ！」と判断して対応するのだろうか？

何が問題？どの程度からが問題？

つぎの内容をイメージしてみてください。

『あなたは、中学1年生のクラスを受け持つ担任教師です。あるとき、35名の生徒うち、ひとりが欠席しました。保護者から風邪をひいたので欠席すると連絡がありました。そして、その翌日、始業時間前に欠席連絡がありました。さらに、翌日も連絡が入りました。欠席は連続三

日になりました』

さて、クラス担任のあなたは、この時点でどのようなことが頭の中にめぐっていますか？

欠席している生徒がクラスでどのような表情をしていたかを思い浮かべてみる。明日は登校してくるかなと期待しつつ、インフルエンザが流行し始めているのかもしれないと考える。

持病やアレルギーは？クラブ活動は？教科科目の成績など、急な変化はあったか、学校行事で本人が気にかけているようなことはなかったか、などを見直してみる。

保護者、お母さんは在家庭それとも仕事？何人きょうだいなのか、同じ学校に兄や姉は在籍しているか？妹や弟は何歳？家族構成を再確認する。

保護者から生徒への対応について要望はなかったかと情報を整理する。

判断のための情報集め

「うちのクラスの生徒、三日連続欠席だけれど、何か気がついたことありますか」と他の教科担任、クラブ顧問に様子をき

いてみる。

何か困っていることがあるのか？いじめがあったかな？不登校かな？もしかして、子どもの安全が疑われる状態？

情報を集めて仮説を立てつつ、今後の動きを考えていく。

こちらから保護者に電話をするとしたら、自宅あるいは携帯？父あて、それとも母？本人と会うことはできるのか。家族が家庭訪問に抵抗を示すことはないか？保護者は担任に相談しにくいと思っているのか、これまで、なんとなく気になることや疑問点のようなことを感じたことは？

いろいろと想像力を働かし、家族と話し合う前に、もういちど情報を整理する。

スケーリングクエスチョン

ある生徒が連続三日にわたって休んでいる場合、担任のあなたは、今の時点でどのぐらいの問題意識を持ち始めるだろうか。その支援の必要度合いについて、数字に置き直して考えてみる。

1 ←————→ 10

必ず支援が必要だということを10、支援は必要なしを1とすると、今の時点でこの生徒に対するスケール＝問題意識の尺度は、1～10のうち、どのあたりになるだろうか。

あるひとは、5のところ印を入れた。まだ判断できる情報が集まっていないから5。

あるひとは、1のところ印を入れた。

インフルエンザかどうか、高熱が出ているのか、医師の診断はどうなのかなど、病状の確認をする。そのうえで、メンタルな問題の可能性を含めて考える。

メンタル以外でも家族の生活状況で、お母さんが病気がち、父親は単身赴任など、知っておくべき情報はないかと収集する。

再び、スケールについての話にもどる。このスケールのうち何点が妥当だと断定するものではなく、人によって受け止め方は異なる。

ここでは、スケールを頼りにするよりもその数字にした理由に注目をする。

なんだか気になるなど感じる人がひとりでもいる場合は、いろいろな可能性を考えて、支援するために動く準備が求められる。

だれかが問題だと感じた時点で、問題が存在し始めるのだ。

30日休むと長期欠席児童生徒

実際は、長期欠席の児童生徒として、統計上にあらわれる規定の欠席日数は、30日や50日だ。

わかりきっていることだが、29日間の欠席日数では、長期欠席として当てはまらない。もちろん、三日休んでいる場合も長期欠席ではないが、今後この欠席日数がどうなっていくのか年度末には、規定日数の範囲にはいる可能性もある。

欠席している、その背景などをしっかり把握していく必要がある。

担任教師の中には、問題意識を感じるとすぐに対応するタイプ、じっくりみて

から動くタイプ、見守ることが多いタイプ、解決するのが得意なタイプ、教員にもさまざまな先生方がいる。

何人かの教員の目を通して、つまり担任を中心に学年団で情報を共有して協力体制を整えることが必要だろう。

問題行動への対応が先で メンタルな問題はあとまわし

生徒同士がケンカをしてけがをした、万引きで警察から連絡が来たなど、法に触れる問題行動の場合は、即時の対応が必要だ。

一方、連続して欠席している生徒の緊急性は高くなく、目の前で事態の変化があるわけではないため、対応があとまわしになりがちだ。

また、担任によっては、問題行動の児童生徒に対する対応は慣れていても、メンタルな問題はよくわからない、得意ではないと自覚している教員もある。

問題視しない親と気にしすぎの親 保護者の意識の差

親によっても受けとめ方がまちまちだ。学校を連続して三日休んでしまうと、授業についていけなくなるではないかと、勉強の遅れを心配する親。

病気かもしれないし、不登校かもしれない、怠けているのかもしれないし、どうも様子がおかしいけれど、親に話そうとしないので、子どもへの対応をどうしたらよいのかと困惑する親。

あまり学校がかかわってほしくないと思う保護者もいれば、できれば、相談にのってもらうことを待ち望んでいる保護者もいる。

はずすことができないのは、親が、子どもの状況をどう受け止めているのか、子どもの様子そのもの情報把握と、親の受けとめ方を区別して理解しておくことだ。

その日のうちに家庭訪問

「私は、生徒が二日連続して欠席すると、その日のうちに家庭訪問をすることにしています」

とある教員は話す。

インフルエンザ等の医師の診断があつたとしても、学校の様子を生徒と保護者に伝えたいのでプリントを持参して、家を訪れるという。

家庭訪問をすることで、生徒本人と会えなくても、親と協力関係を作ることができるのでというのがその理由だ。

中には、子どもが学校を休んでいても、しばらくしたら元気になって登校できると、子どもが困難な状況にあることを認めない場合がある。そのときは、「完全に不登校になるまえに、相談に行きましょう」とカウンセリングや医療機関を紹介するという。

このように、教員の家庭訪問は、さまざまな問題発生の予防になると考えられ、早期対応の一例だ。

支援の妨げになるもの

CONのカウンセリングにやってきた家族の中には、あと一日休んだら単位が取得できないと学校から示された家族がいた。

カウンセリングにやってくるまでに、すでにいろいろなドラマがあったにもかかわらず、来られなかったのは、本人が「明日は行くから」と、子どもの言うことを信頼していたのがその理由だという。

学校からは、以前にカウンセリングを紹介されていたが、カウンセリングに行くということは、子どもはだめな状態にあるということをはっきりさせてしまうので、避けたい気持ちがあったのも事実のようだ。

問題が起こった時に、解決を妨げるもののひとつが、ある状態を認めない、認めたくないという姿勢だ。カウンセリングにお世話になるとは情けないというような恥ずかしさもあるだろう。

確かな手立てをもたないまま、問題視をしないことで先送りする。そのままにするのは、事態を悪化することにつながると考えられる。

もちろん、自然に回復することも可能性としてあるが、対応可能な場合は、できるかぎり早い取り組みが、より早い解決につながると考える。

将来は、問題が起こってからの対応ではなく、問題が発生する前に対応できるように、予防カウンセリングを兼ねたさまざまな種類の教育プログラムも準備されることになるだろう。

問題を先延ばししない

現在、不登校状態にある生徒が一日も中学に登校することなく、卒業し、高校に入学することは決して珍しくない。

また、高校に入学したあとも引き続き様々な支援があり、時間がかかっても卒業でき、別の学校への転校が可能で、高校卒業の資格を手にすることができる。

高校入学することができれば、あるいは、卒業できれば、すべて問題が解決したかのような気になる。

しかし、ここでは何がどのように問題なのかを把握して、今後子どもがどうなっていく必要があるのかを描かなければ、いつまでも事態はこう着状態だ。

大学生の不登校が増えているのは、それまでの問題事項を先延ばしにしてしまったがゆえの結果とも考えられる。

関係者が協力して早期対応

問題だ、心配だ、こんな可能性があるのと、大騒ぎするのは、心理職の人に多いと言われたことがある。実際そのように感じる。

一方で、職種に限らず、年齢を重ねるうちに、危機感が薄れていく気もしている。鈍くなっていくのだ。

心配し過ぎも良くないが、何とかなると根拠もなく楽観視するのも、賛成できない。

大切なのは、問題の程度に限らず、子どもの関係者の多くの人が集まり、さまざまな立場から、気になる状態を把握して、見守りながら協力して支援することだと思っている。

螻蛄の斧

(とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第11回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

いじめ問題で大津の中学校が全国区の渦中になったとき、「第三者委員会には団さんが選ばれると思ってた」と言った人があった。何を根拠にそんなことを思うのか分からなかった。しかし、あそこはかつて私が在籍したことがある中学校であり、今また大津市民でもある。加えて、あの中学校には繋がりのある知人もいる。子どもが亡くなった直後、そんな内輪の話も耳にしていた。

しかし私は尾木ママの隣に座っていたいと思わないし、ニュース番組の取材対象になって、画面に映りこんでいたいと思わない。自分のコメントを誰かに編集されて、電波に乗せたいと思わない。特にTVというメディアは、目に見える、分かりやすいという呪縛への妥協の産物だと思う。だからずっと距離を置いてきた。ラジオの仕事は長く沢山してきたので、違いはそれなりに了解しているつもりだ。

そう思っているが、一方、自分のしていることを、多くの人たちに知って貰うことは大切だとも思っている。こちらが伝える努力をしなければ、届かない人もこの世界には沢山いる。だからメディアに露出させることが必要な場合はある。この点でラジオは弱い。近年、TV(チャンネル)の選択肢も増えて、みんなが見ているTV番組などもうないが、ラジオはもっと聞いている人が限られる。

だから近年の私の結論は、もう自分のすべき事をしていればよい。他人がそれをどう扱うかは、私に属することではない。そんなことまで意のままにすることなど出来はしないし、そうしたがったりするのも危うい。

だが、東北で展開中の、復興支援家族応援プロジェクト「木陰の物語」漫画展と小冊子の配布は、届かないと駄目である。多くの人にはではなく、必要な人に届いていて欲しいと思う。すると、やはり広報は必要である。だからマスコミから取り上げたいと言われると、受けようと思う。そして、本意の所を曖昧にしないで…と思って向き合う。

あるTV局から、震災復興支援家族応援パネル漫画展について、ローカルの震災復興支援枠で取り上げたいと、大学の広報を通じて打診があった。時をおかずスタッフから電話があり、今すぐ会えないかという。ちょうど仕事場で原稿を書いていたので、先延ばしするより、今の方が時間が取りやすいと応え、20分ほどで女性がやってきた。早速、この八月に京都で、被災地からの避難家族向けに開催したパネル展の話になった。これは昨年からの被災各地で継続開催しているものを、遠く離れた土地で避難暮らしする人たちにも、物語の力でエールをと考えたものだった。

実際、会場に来た被災者が、直接マンガの話ではなく、ひととき、避難暮らしの長期化による家族様々な苦労や事

情を、スタッフに語って帰ったりしていた。

人には皆、それぞれの物語がある。誰が正しいかではなく、一人ひとりが自分の物語を生きている。そんな物語が自然にこぼれ出て、誰かに受け止められるような空間づくりが出来たらというコンセプトの展覧会である。連続開催する東北各地では、そんなことがぼろりぼろりと、各会場にあった。

「カウンセリングだとか、困り事相談とか謳っているわけではない。その場が、巡り合わせで、そんなことの起きる場になれば、何百人がマンガを見に来て下さるよりも、意味は大きいだろうと考えている。誰にも相談などしないで、一人で抱えて生きている人が沢山ある。そんな人たちに、あなたの心の中の物語に呼応するような物語を生きた人が、昔も今も、他の場所にもいます。その方達の物語も聞いてくださいと示すのは意味があると思う！」

そんな熱い思いを、初対面の記者に語っていた。

そして結論である。「素晴らしい！是非、そういうことが起きている場面を映像に撮りたい」。

ちょっと待ってくれ。そういうことが一つでも二つでも起きることが大切なだと今話しただろう。そんな人が次々現れるわけではないことくらい分かるだろう。しかし彼女は、TVだから画がないと！、という点を譲らない。

思わず、言おうかと思ったら向こうから、「決してやらせではないんですよ」という。いやいや、それがやらせだよ！

展覧会を見に来た人が物語に触れ、会場にいるスタッフに前述のようなことを話しかけている。そういう画を撮りたいのだという。あきれてしまった。それなら会場にずっとカメラを置いて、張り付いておくことだ。

TVだから可視化された情報が…と言われても、そんな都合の良いシーンは無理だ。「それがないと、放送は…」と言うのでしばし議論になった。結局、持ち帰って上と相談してということで帰って行った。

数日後、残念ながら今回は…という連絡があった。その時改めて、貰っていた名刺を見た。TV局タイトルと名前の下に、KK…と書いてある。ローカルニュースを下請けで制作しているプロダクションらしい。

すると、デスクに座っている人から、「画はないの？」「TVだよ！」なんて言われている彼女が浮かんだ。TVだし、可視化が時代のトレンドである事もわかっている。

しかしだからこそだが、この世界には大切だが見えないものがある。見えるものはごく一部で、見えないからないわけではないことを、基本的には可視化を推進するとした上で、忘れないでいたい。

わかりやすさ、可視化は、用心が必要だ。「具体的に見せる！」、「態度で示せ！」、「証拠を出せ」というのは、結局脅しである。

若い人が勢い込んで詰まらないことを言うなぁと思ったが、若いからこそ、辛いこともあるんですよと言われているような気もした。でも、「それがTVなんです！」なんて言われても、合唱する気はまったく起きなかった。そんなこと言いながら、「決して、やらせではないんですよ！」なんて重ねている内に、自分のしていることが空しくて仕方なくなるんじゃないかいと尋ねてあげたかった。

こんな時、歳をとったのも悪くはないなぁと思う。若いということは、まだまだこの世界にアピールをしていかなければならない。80のモノならそれを100にも、120にも見せなければと、聞かされてきた気がする。今の私には、80のモノは80に見せるのがベストだ。そこに生まれるものが一番世の中のためになると思う。そういうことが腑に落ちて分かるために、私たちは齢を重ねるのではないかと思う。

(2012/11/25)

1990年11月

11/1 THU 定例受理判定処遇会議。その後続いて職員会議。会議ばかりしてという人があるが、事実伝達や、情報の共有のための会議は、削るべきではない。 unnecessaryなトラブル回避に、定期的なミーティングは不可欠である。それに全体が事実を共有することが、業務の平均的水準を維持する大きな要素になる。次の世代を育てる働きとしても、これは大切なことなのだ。

今、私が会議に出席することは皆無になった。大学院も特別契約教授という別枠で、教授会や大学運営用務は含まれていない。

社会的なポジションを要請されたりもしていないので、会議に出席することもない。もっともこれは、通俗的なレベルでの社会的信頼が低いのかもしれないから、恐縮すべきことかもしれないが、自分ではまったくそう思っていない。

今は何かを引き受けるか受けないかは、自分で決めている。あらゆる事について、そうしようとしている。これはとても清々しい気分だ。

でも最近、嫌ではないが過重だと思うことを一つ引き受けた。そばで見っていた人は、自分で断りなさいと忠告してくれた。

11/2 FRI 地域児童福祉司、心理判定員と3人で、現在進行中でありながら、少々手詰まりなケースの協議をした。昼休み「国連平和協力法」反対のデモに。久しぶりに歩いたが、参加者500人(主催者発表だよ)と思いのほか多い。

午後、講演とワークショップの打ち合わせに出雲児相からH川さんが来所。夕方、家族面接の5回目をした。しょうがない母親だと前評判のあった人が、きちん

きちんと息子二人を連れて通ってきている。

夜は編集者講座。講師がねじめ正一氏。詩人のH氏賞をとった後で、鈴木志郎康氏が講師をしているカルチャー・センターに通った話に、感ずるところがあった。

昼休みデモなんてすっかり懐かしいことになった。この頃そんなことは見かけなくなった。

家族面接もして、編集者講座にも通ってねじめ正一氏に会う。なんだか、今と比べても文化的日常だなぁと思う。

11/3-4 SAT-SUN 文化の日。何もなかった。レンタルビデオを3本借りて見た。「マイライフ・アズ・ア・ドッグ」久しぶりに、登場人物、時間設定、場所に豊かなコンテンツを持った作品を見た感じがした。映画とテレビ作品の違いは、無限に大きいのかもしれない。「セイ・エニシング」青春映画は好んでたくさん見ている。その流れの一本。「スイッチング チャンネル」キャスリン・ターナー主演のTV'局物。三本ともそこそこ面白かった。しかし手帳を見ると、去年の今日、「最後のアドレス」リノ・ヴァンチュラ主演を見ていたのだが、それは89年で90本目の作品だった。しかるに今年はこれで53本。好きなことなら、時間を工夫して量をこなさなくちゃ。

いつの頃からだろう。年間に観ることの出来る映画本数がガクッと減った。映画館に行く頻度も、DVDを観る頻度も大幅に減ってしまった。

観なくても特別に困るモノではないなどと、ありきたりなことが言いたいのではない。そういう変化が何だか詰まらない。

読書量が減らないのは喜びだが、あの頃

は、鑑賞した映画タイトルをメモし、星取り表を付けていたのが懐かしい。今じゃ、見る尻から忘れてしまう。

11/7 WED 行事の関係で、受理判定処遇会議が一日早くなっている。ケースの運びのことで、担当福祉司と判定員に意地悪なことを言った。

何がなんでも上手くやりたいことがあるのなら、考えられるすべてのことを、骨惜しみせずやっておくことだ。結果が出た途端にする後悔の種など、誰にでも判るのだから。失敗の多い人は、プロセスで甘くなることが多いのだ。苦言のせいもあってか、すこし担当のテンションが高まっている。

20年前にこんなことをスタッフに言っていたのか……。厳しい上司だったのかなあ。記憶の中にはこんなシーン、微塵もない。不思議だが記憶機能の身勝手さを思う。どんなことだったのか、それでどうなったのか、気になるところだが、思い出す術がない。

11/8 THU 八木町で「府児童委員研修会」。民生委員と兼んでいる人の多い仕事である。午前中、杉本一義さんの話を聞く。初めて聞いたが、なかなか面白かった。午後、「地域の児童福祉の現状」をテーマに話す。45分の制限時間が短くて、あれもこれも、つい舌足らずになる。

こういう場で話をするとフロアーから、「京都府さんは、どうお考えなのか？」なんて憤りを隠した質問が飛び出す。「京都府さんなんて言われても、そんな奴は居ないぞ！」と腹の中で思いつつ、違和感の中で応えることになる。まあ、おおむねは上手くやり過ぎて、それが組織の一員としての僅かながらの評価にも繋がるのだろう。しかし私にはまったく関心がないし、つまらない質問や、方向違いの矛先は、

それを指摘したくなる自分を隠せない。

11/9 FRI 睡眠不足なのか、体調なのか、とにかくえらいので午前中寝ていた。午後から出て、セミナーのためのレジュメ作りをし、講演のメモなども作った。

夜の編集者講座は小説家・橋本治氏。源氏物語の現代語訳のプロセスを聞いた。このごろ金曜日は、よくビデオを借りてくる。今日は「病院へ行こう」、「木村家の人々」をつくった監督の作品。とにかく面白かった。「計画性のない犯罪」、何かにチラッと書いてあったので覚えていた。

身勝手な公務員の気もするが、長い目で見たとき、社会資源たる人材を、どのように組織が養成したかがポイントだ。京都府はこの時期、私やその部下達を、長い目で見て人材として育てて、今の時代に届けたと思う。

11/11 SUN 娘を連れて近くの遊園地に行った。設備の安っぽいジェットコースターをはじめ、いろいろな乗り物は、整備状態や耐用年数への不安が重なって、中々スリルのあるものであった。

琵琶湖大橋たもとの今は廃業した遊園地だ。最後の頃、スクリー状態のアトラクションは、逆さ向きになると、何かの部品がポロッと落ちた。これにはびっくりしたが、下車時に従業員に渡すと、ちらっと見て捨てた。そこで改めてスリル満点になった。(これはギャグ)

時代のスポットライトを浴びていた場所が、陰りを見せ、やがて廃墟になっていく。こういう事は人にも起きる。ブームを作ったりする人にこの傾向が強いように思う。私はこういう物事のあり方が大嫌いだ。

一方、人生の中で、わが子の手を引いて遊園地に行く時期は限られている。その頻度は、決定的に少なかったなあ。

11/12 MON つかこうへい演出の時代から観つづけている風間杜夫・平田満・石丸謙二郎の芝居「夜明けの花火」を観に、大阪に出た。「即位の礼」とどう関係するのか判らないが、街の人出が本当に少なかった。阪急東通商店街のガラガラの店で寿司を食べた。

こんなメンバーの舞台を観ているのは我ながら自慢だが、それも通じなくなった。小劇場や小さなステージは今も青春に繋がっているんだな。

11/13 TUE 家族面接継続中の少年が、教師を殴ったと報告を受ける。「おっと」と、速やかな対応を求める学校を、気を悪くさせないように、しかしこっちはバタバタしないで、続けていくことが肝要。

月末の児相研セミナーの申込が190人を越えた。宿泊はとっくにオーバー。「嬉しい悲鳴」などと馬鹿な慣用句を使っている場合ではない。会場が狭いのだから困るのだ。多く集めるほど良いみたいな発想は、戒めなければならない。規模がそのものの性格を決定づけてしまうという側面を軽視すべきではない。

対教師暴力は小競り合いも入れると、外から見ている身には日常茶飯に思えた。中学生と大人がもみ合っている空間というのが、不思議な場所に思えて仕方がない。今の私は、中学校も、高校も好みではない。歳を取って短気になってきたのだと思う。

11/14 WED 月例家族療法ビデオカンファレンス。夜、日程変更の編集者講座。筑摩書房の松田哲夫さん。出版企画のはなし、「文学の森」「哲学の森」文庫サイズの「にほん文学全集」などの四方山話。その後、飲み会。三条小橋の「めな

み」。小グループのこういうポジションがごろ僕には居心地がいい。

私は酒を飲まないで、宴会に行くことはない。ちょっといっぱいという機会もない。だからこういう場は限られているのだが、この講座に出るようになって、時々、こういう機会をチョイスするようになった。誰かが熱く話しているのを、そばで聞いている。今の自分とは遠くにあるものだが、興味深いことがあれこれ浮遊する。こういう経験を徐々にしてゆけばいいのだと思い始めていた。何かになろうとして受講していたのではない。受講生はほぼ一般企業人だった。

11/16 FRI セミナーの参加申込が210名を越えた。我々スタッフや近県の当日参加者はいれないでこの人数だ。全部で200名位を考えていたから、ちょっと困っている。うまくさばかないと、混雑に苦情が出そうだ。

人集めが目的ではないとは分かっているけど、申し込みが多いのを嬉しがっている。

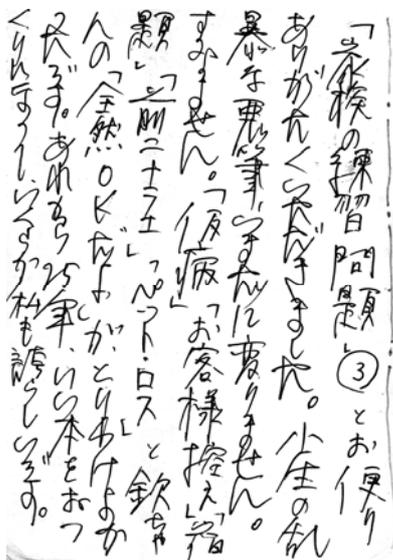
11/17 SAT セミナーの記念品選びに付き合った後、映画「飛ぶ夢をしばらくみない」の封切日に行った。久しぶりだなあ、封切初日なんて。土曜日の午後の映画館、観客12人、新京極はイッパイのひとつみなのに。山田太一の小説は、ものすごく興奮して読んだのだが。映画は、やっぱり駄目かなあ。石田えりのヌードがめざわりで邪魔だった。帰宅してNHK「結婚まで」山田太一脚本をみる。とても面白い。映画よりずっといい。

山田太一さんのドラマは基本的に今もずっと見続けている。お歳をとられたと思うし、往年の輝きには陰りもある。しかしそれでも、事件

ばかり起こして、びっくり箱のような物語しか書けないシナリオライターとは違う。

二十五年以上前、初めて一コママンガ作品集を自費出版したとき、読んで貰いたくてお送りしておいた。そうしたらお礼の感想を下された。とっても嬉しかった。

最近も「家族の練習問題(3)」を出したとき、ふと思い出して、久しぶりにお届けした。そうしたら、このようなお返事を下さった。四半世紀前に戴いたはがきで「癖の強い字だなあ」と思ったことを思い出した。



「家族の練習問題(3)」とお便り
ありがとうございます。小生の乱
暴を御覧いただきありがとうございます。
すみません。休養中。お客様控えです。
是非「前二ナエ」の「ト・ロス」と「欽
人の「全然」の「カ」がとりあげよ
うです。お礼も「練習問題」の本をお
くりしてあげよう。よろしくお願いします。

11/18 SUN 昨日の夜中からビデオばかり見ている。「俺達は天使じゃない」ロバート・デ・ニーロ。なかなか面白くてきている。カナダ国境沿い、川を挟んだ小さな町を舞台に、一昔前のヒューマン・コメディ。とてもよくできていていい。「ハイ・パブリバ」ユーゴスラヴィア映画。強引に一言でいってしまえば、思春期版「スタンド・バイ・ミー」。しかしあれより遥かに描き出されているもののふくらみは大きい。是非薦めたい一本だが、人に薦めてあまり面白くなかったと言われると、ひどくガッカリしてしまうので言わないことにする。

夜、小学校時代の恩師・西村先生の紹介という人から電話があって講演を依頼される。引受けるつもり。

映画好きは今も昔もだが、この時より更に遡って昔からそうだ。小学生の頃から好きなものの一つだったように思う。さらに、時期によってはマニアックなコレクターだったこともある。だから年季が入っている。ユーゴ映画なんて記載を見ると、この20年の間にさえ、様々に続き続けた変化の世界に生きてきたのが実感できる。今はもうユーゴスラヴィアという国がない。

映画に関しては今、家族療法学会誌に数年、「連想映画館」と題して連載をしている。読める人は限られるだろうが、関心があればどうぞ。

11/20 TUE 朝五時半に家を出て、大阪空港から徳島に行った。先月に続いて、県児相の職員研修。準備をして、ビデオ、スライドなど持っていった。しかし材料が多いためか、自分の話の盛り上がりが何か違う。時間が足りなくなるだろうという予測も外れて、余るくらいだった。これは初めての経験だった。

日本エア・システムの徳島便は、空に上がった途端に着陸準備にはいるような短時間飛行だった。午後には大阪に戻って、喫茶店で「職業別幻話帳」眉村卓のイラストを描いた。それを持って夜の「桂べかこ独演会」のサンケイ会館(産経新聞社のビル。ホールもある)へ行って、文化部の上村さんと一時間ほど話した。

べかちゃんの話は、いつものことながら明るく、気取りのない心地好いものだった。

今読むと、ずいぶん自分勝手な動き方をし

ている。よくこれで勤まったなと思わないでもない。しかし一方、この時点で心にあったものと、今の自分の中にあるものに、基本的な変化はない。

その時々々の立場はわかまえたとは思。しかし、立場立場で何でも言えてしまう、心にもないことも出来てしまうのはごめんだった。

極力、何かのフリをして生きることはしてこなかった。自分の中に公務員退職の意志など微塵もなかったが、行動は今の自分に向かっていたのだなぁと読みながら思った。

そして、この時点で自分はとても良く機能する公務員だと信じていた。

11/21 WED 久しぶりに新幹線でワープロを叩いている。読売広告大賞の授賞式に行く車中だ。今年は欠席するつもりだったのだが、代理出席についての電話問い合わせを受けているうちに、気が変わった。巧くいっていることは変えないことである。今年の式は、福田繁雄さんの講演と、受賞作品一つずつに寸評があって、いいものだった。その後新宿に回って、映画「櫻の園」を見た。

どういうわけか、この読売広告賞では二年連続で入賞していた。会場では、「連続入賞というのは凄いことです」と、何人もの方に言われた。実際、連続受賞している人はほとんどなかった。

漫画家だけの賞ではない。ユーモア広告部門の作品として連続受賞していた。前回書いた読売国際国際マンガ大賞は二十年応募し続けたが、こちらは連続受賞したせいで三年目にはもう応募しなくなった。

今考えてみると、簡単に結果が出ないものの方が、自分のためになると思える。出ない結果を追い求めながら試行錯誤する間に、確実に人は成長する。それは夢が成長

するということでもある。

どういうわけだろう。この後一週間の日誌記録がない。大会準備に大わらわで、記録していなかったのだろうか？

11/30 FRI 第16回児相研セミナーの開会。順調な滑り出しだが、外は季節はずれの台風。基調公演は出演の役者が驚くほどの大成功。客が作った部分の大きさに改めて感じ入る。講座も好評。

交流会だけが、マネージャーの甘い見込に、一杯食ってとんでもない混雑。後で調整してくれたが、多少問題残し。まぁプログラムじゃないところでよかったか。

長々準備してきた大会は、大成功で終えた。懇親会は会場での宴会などにしないで、嵐山のレストランを、貸し切りという約束で予約していた。ありきたりな宴会パターンを考えると、なかなかセンスの良いアイデアだと思っていた。

しかし当日行ってみると、二階部分に一般客を入れていて、懇親会の参加者が多めになった分、対応キャバが不足した。わずかに数人のお客のために、全体の印象が悪くなってしまった。その客達も、ほぼ貸し切り状態の喧噪の中で食事しても、落ち着かなかっただろう。

店の事情もあったのかもしれないが、「約束が違うじゃないか！欲張るから、みんなの評判を落とすことになるんだ！」と腹の中で怒っていた。

学校臨床の新展開

— ⑪家庭を支える社会資源 —

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

いわゆる「尼崎事件」について

尼崎を中心とした、同じ容疑者と思われる殺人、遺体遺棄事件が、その残忍性ゆえとても注目されています。そして、週刊誌などのマスメディアでは、容疑者の生育歴について、「幼少期から、放任されていた」など、その不遇な家庭環境について取り上げています。どのような意図をもって報道されているのか、わかりませんが「とんでもない親のもとに育つと、あのようになる」と読み取る人たちも多いのではないのでしょうか。

すべての大人はかつての子どもです。子ども時代をいかに豊かにすごすか、まともな大人、つまり信頼するに値するような大人と出会うか否かということが、子どもにとって、その後の成長・発達や人生そのものに大きく影響を与える要素のひとつであるということは誰も疑いのないことでしょう。

その信頼するに値する大人は、親だけではありませんが、子どもと親との愛情の絆（＝愛着）は、すべての土台となります。しかし、子どもたちのなかには、不運にもその愛情の絆を得ることができずに、不適切な養育環境下で育つこともあります。

「児童福祉法」第1条では、「すべて国民は、児童が心身ともに健やかに生まれ、且つ、育成されるよう努めなければならない。」

同第2項では、「すべて児童は、ひとしくその生活を保障され、愛護されなければならない。」

同法第2条では、「国及び地方公共団体は、児童の保護者とともに、児童を心身ともに健やかに育成する責任を負う。」とし、家庭とともに社会的な子育てについても言及しています。

つまり、何らかの事情で家庭に恵まれないう、あるいは十分な養育が受けられない場合には必要に応じて、家庭に代わったり、

補ったりしながら、子どもを社会全体で育成する責任があるということです。虐待や不適切な養育下にある子どもたちを「とんでもない親のもとに育つ子」と嘆くだけでなく、その状況下にあるときに、教育の場で、あるいは地域で、社会的に包摂することが求められます。そういった支援が届かなかったり、見過ごされたりした場合、虐待や不適切な養育下にいる子どもたちが加害者や被害者として事件や事故にかかわるリスクが高まります。

家庭とともに子どもを支える

小学校就学前、家庭とともに子どもを支える児童福祉機関として、保育所があります。いまや、共働き家庭が一般化し、もはや子どもがいる家庭では、子どもを預けるところがなければ、たちまち重大な生活問題に直面することになります。

そのため、いま、少子化にもかかわらず保育所に子どもを預けたい親が増え、子どもが生まれる前から「保活（保育所探し）」をしている人もおられます。しかし、都市部を中心に、待機児童（2011年4月1日現在約2.5万人）が依然として多い現状にあります。

これらの子どもたちが小学校入学以降に利用する「放課後児童クラブ（以下、学童保育）」についても、近年ますますニーズが増加し、全国学童保育連絡協議会による2012年5月の調査では、全国の学童保育施設数は2万843か所、入所児童数は84万6919人となっています。しかし、2012年度に保育所を卒園して小学校に入学した児童

数約48万人に対して、学童保育に入所した新1年生は約29万人で、6割にとどまっていることから、保育所を卒園した子どものうちの6割弱しか学童保育に入所できていないのではないかといられています。さらに、母親が働いている小学校低学年の子ども（末子）のうち、学童保育に入所している子どもは、まだ35%であることから、「潜在的な学童保育の待機児童」は50万人を超えているとも言われています。

祖父母との同居や、きょうだいが減り、少子化、核家族化のなか、これらの子どもたちは、放課後、家庭のなかで、ひとりで過ごさざるを得ない子どもたちです。多くの親は子どもを心配しつつ就労をしています。しかし、子どもたちのなかには、学習習慣の未定着による学力の課題、アンバランスな食生活や昼夜逆転といった健康上、生活上の問題、コミュニケーション上の課題、不登校、いじめなどさまざまな事象が生じることもあります。そのため、放課後の子どもたちを家庭とともに支える学童保育の果たす役割は非常に大きいといえます。

そのなか、民間でも学習塾などが事業内容を拡大し、放課後の子どもたちの居場所作りを積極的に推し進めるようになってきました。しかし、民間営利企業に対して、国や自治体からの補助があるわけではなく、これらの機関を利用する保護者は「塾代プラス」の利用料を支払わねばならないため、ひとり親や生活保護受給世帯など家計が潤沢ではない子どもたちは利用することができません。

学校でも家でもない、放課後のもうひとつの安心した居場所として、子どもたちが仲間とともに勉強や遊びをとおして、自分

づくり、主体形成を行うことが、学童保育の醍醐味です。学童保育の実施については、1998年の児童福祉法の改正により法定化されていますが、地域により対象年齢や実施場所、設置率の差が大きく、いくつかの小学区にまたがり、多くの児童を小さなスペースで預かなければならない地域もあります。学童保育は全国的にみると、半数以上が学校の空き教室などを使って運営されています。しかし、京都市では、留守家庭の子どもたちの問題が取り上げられだした1970年代後半から、地域の児童館で学童保育を一元化して行っています。「学校」のなかで学童保育を行うのではなく、地域の「児童館」で学童保育を行うことにより、自由来館の児童館の利点を生かし、多くの世代との交流を日常のなかで可能としています。

児童館は児童福祉法に定められる児童厚生施設であり、その目的は、「健全な遊びを与えて、その健康を増進し、又は情操をゆたかにすること」とされています。したがって、職員は、「遊び」のプロですが、今日、それだけではさまざまな家庭環境の子どもたちの支援は難しく、いま、従来の「プレイワーク」とともに、あらたに「ソーシャルワーク」を担える人材が求められています。学校でもいま「福祉的視点」が重要視されていますが、学童保育の現場では、より「福祉的視点」が必要となります。子どもたちは、学校でも家でも見せない表情や表現を学童保育のなかで見せます。いや、学校でも家でもない学童保育だからこそ見せられる顔があるのかもしれませんが。

そういう意味において、大阪市で学童保育と並行して、行われてきた「子どもの家」

事業について、いわゆる「仕訳」が行われ市からの補助が大幅にカットされ、利用者負担となることについては、怒りを感じます。子どもが、信頼するに値する大人と出逢った結果は、子どもがやがて親になるころくらいに、ようやく出てくるのかもしれませんが。あるいは出ないかもしれません。人の育ちは、効果的な結果が即応的にあらわれるものではありません。まして、対人不信、自己不信の子どもたちが、他者を、自分を受け入れ、自己肯定感を得る過程は相当な時間がかかります。

家庭、学校そして地域のなかで子どもたちは育ちます。家庭にも学校にも居場所がないけれど、ここに来たら落ち着くという場が、いま、地域に求められています。そして学校もまた、そのような機関から学んだり連携したりしていくことがますます重要になってきています。

参考HP

全国学童保育協議会 HP

<http://www2s.biglobe.ne.jp/Gakudou/>

-4. 学びの森の風景

学びの森の住人たち（6）

- 学校でもない学習塾でもない、
学びの森 という世界が投げかけるもの -

アウラ学びの森 北村真也



6. 支援って何だろう？

日常の子どもたちとのかかわりを通して、私たちはいろんなことを考え、また考えさせられています。教育という活動は、そんなインタラクティブなやり取りを媒介にして、日々その答えが更新されていく営みののだと思います。

不登校という課題を一つの社会現象としてとらえた時、そこには社会の多様化という背景を無視することはできません。子どもたち同士の関係、家族のあり方、地域のあり方がこの現代社会の動きの中で揺らぎつつあります。これまでの観念だけでは十分な理解が得られない場面が増えつつあるように思えるからです。だから私たちは、子どもたちに教育というフレームの中で関わり、また支援というフレームの中で行動しながらも、同時にそのあり方そのものを再帰的に問う必要があるように思うのです。そして、そんなことを私たちに考えさせてくれたきっかけとなった子どもがいました。それが中学1年生のY子です。

7人兄弟の2番目として大家族の中で育った彼女の切実な思いは、「できるだけ早く家を出て、一人で生きていきたい」ということでした。「企業に就職したくない」という彼女は、「技術や資格を身につけて一人でもできる仕事をしたい」、「将来、結婚はしたくないし、自分の家族も持ちたくない」とはっきり私たちに言っていました。そしてY子はそんな言動を支えるかのように、大変自律的に学習活動をこなしていました。それはまるで仕事のできる優秀な社員のよう、目の前におかれた自分自身の課題をキチンと整理しながら一つ一つ確実に片づけていくのです。

そんなY子に出会ったことで、私たちはあらためて「支援とは何か？」ということ突き付けられていきました。「一人で生きていきたい」と心から願いとても自律的に生きようとしている彼女に、いったい私たちは何をすればいいのでしょうか？そんな根本的な問いを次第に私たちは抱くことになっていったのです。



電車に乗れなかったY子

私たちがY子と初めて出会ったとき、彼女はほとんど昼夜逆転の生活を送っているひきこもり状態でした。すべてはそこから始まりました。そして、たまたまお母さんの車の事故をきっかけとして、彼女は電車に乗ってアウラへとやってくるようになります。そこから彼女はどんどん変わり始めたのでした。

現在中学2年になるY子は、他人の目が怖くて電車に乗ることができませんでした。小学校で1年半の不登校経験を持つY子は、地元の公立中学校へ行くのが嫌で、私立中学校に入学しますが、そこも1ヶ月で通えなくなり、それから約1年間、家でひきこもり生活を送ることになりました。そして中学2年の5月にアウラを訪れ、通い始めるようになりました。両親とも共働きで、しかも奈良県との県境に住んでいたY子がアウラに通うには、どうしても電車に乗ってくる必要がありました。ところが、Y子はどうしても他人の視線が気になって電車に乗れません。そこでお母さんの仕事が休みの日だけ(月3回程度)、車

に乗せてもらって通っていました。

月に3回、しかも当時のY子の生活はかなり夜型になっていたため、朝は起きれない状態が続いていました。だからアウラには、いつも午後2時頃にやってきたので、1日2時間の学習が精一杯、これでは、なかなか学習が前に進まないのが現実でした。ところが、8月にお母さんが車で事故をおこされ、幸い怪我はなかったものの車が廃車になるということがありました。Y子は、もうお母さんの車でアウラに通うことができなくなったのです。そして、それを機にY子は、9月から片道2時間の道のりを一人で電車とバスに乗りアウラに通うようになっていったのです。月に3回しか来れなかったY子が、週4日、毎日やってくるようになったのです。しかも、生活のリズムも徐々に朝方に移行していき、毎朝7時には起きて、午前中にアウラへとやってくるようになりました。そんなY子に、私はインタビューを試みました。

「Yちゃんにとって、アウラってどんなところがいいの？」

「…、そう、自分のペースで勉強できること。それに静かなところ」

「Yちゃん毎日、4時間も勉強ずっとやってるやん。しんどくない？」

「しんどくない。やっぱり自分のペースでやれるから、しんどくないんやと思う」

「自分のペースで学習できる」、「集中して勉強できる」。これは、Y子の他にも多くの生徒がアウラの気に入った点としてよく使う表現です。「家やったらできひんけど、アウラに来ると、なぜか勉強する気になってしまう」

こんなことを、言ってくる生徒も結構たくさんいるように思います。

「Yちゃんは、お母さんの車がつぶれたことをきっかけにして、自分で電車に乗って来れるようになったやん。このことって、すごく大きかったと思うんや。それからどんどんY子ちゃんは変わり始めて、朝も起きれるようになった。勉強もどんどん進められるようになった。それによくしゃべるようになった。で、僕が聞きたいのは、どうして急にどんどんいろんなことができるようになったかということ」

「確かにそれまでは、お母さんに送ってもらってた時でもアウラに行く前は、胸が痛くなって、ワーツという感じでとつてもしんどかった。でもそれがだんだん減ってきて...」

「なんで、減ってきたんやろ？」

「そうや、数学が楽しくなってきたからやわ。自分で勉強してると、数学が、だんだん面白くなってきて、それで、何か自信が持てるようになってきたんやと思う。それで、自分で電車に乗ってみると、案外大丈夫で、OKなんやと思えるようになってきた。それから、自信がだんだん大きくなってきた」

「胸がワーツって感じはどうなった？」

「もう大丈夫、今は全然大丈夫です」

Y子の変化は、実際大変大きなものでした。ひとつの籠が外れると次々とそれまで行き詰まっていたことが変化していきました。何がそうさせたのでしょうか。本人は「数学ができるようになったこと」と答えていましたが、確かに学習活動を介した自信は、彼女の生活を大きく変えるひとつの要因になりました

た。しかし、それだけではないように思います。彼女自身の中に 変容 への準備が整い、それがお母さんの車の廃車をきっかけにして、一気に動き出す。そんなことが起こったのだと思います。



わかってもらえなくても大丈夫

「わかってもらえなくても大丈夫」「私は一人で生きていきたいんです」と言われた時、私たちは目の前の子にどんな手を差し伸べればいいのか？ Y子との出会いは、私たちに「支援」そのものがいったい何なのかを、根本的に問いかけるきっかけになりました。

私はある時、ふと考え始めました。一人でいれることは、大きな能力かもしれない。そしてY子は、私以上にその能力を持っているのかもしれない。孤独をしっかり引き受けられる能力を...

私たちは、たった一人で生まれ、たった一人で死んでいきます。私たちの人生は、そんな時間軸の中の2つの点の間に彩られています。そして、この間に私たちは家族

と出会い、友と出会い、パートナーと出会い、自分の子どもたちと出会うのです。でもその終わりは、やはり一人ぼっちで迎えないければなりません。私たちは、たった一人で自分の死に向き合えるようになるためにいろいろな人たちに出会うのかもしれない。

そんな風に考えてみると、Y子はとても興味深い子どもに見えてきます。私は彼女と話しているうちに、次第にそう考えるようになっていきました。するとおもしろいことに彼女の中に少し変化が見られるようになっていきました。それは、今まで出会ったことのなかった私の対応に、彼女自身が揺らぎ始めた瞬間でもありました。

Y子は、毎日アウラに来て学んでいます。休みも遅刻もなく、毎日同じように淡々と学習の日々を送っています。ただ特徴的なのは、周りの子どもたちとほとんどコミュニケーションを取らないこと、周りに人がいようがいまいが、彼女は全く同じように学習を続けるのです。

普段はほとんど自分から話すことのないY子ですが、私の問いかけには、徐々に自分の考えや思いを話してくれるようになっていきました。そんなある日、塾生全員に向けたアンケートで、彼女は「アウラでの勉強と学校での勉強の違い」について、こんなことを書いていました。

学校『集団』『非効率的』。アウラ『個人』『効率的』。学校は大勢の生徒に対して1人の先生。どんなに気を配っても少しはムラがで

きる気がする。アウラはひとりひとりそれぞれ自分のペースで進め、分からないところがあったら先生に聞く。自分で十分理解できるところはどんどん進む。とっても効率的だと思います。学校だと自分が理解できていなくてもだいたいの子が理解出来ていたら進んでしまって、自分は結局きちんと理解できずに次の勉強に取り掛かる。逆に自分が理解出来ていても、だいたいの子が理解しきれていなかったら、また最初から説明しなおし、非効率的だと思います。

私はY子の出したアンケートを見て、少し驚きました。彼女は小さな回答欄に、その枠を超えて自分の思いを書いていたからです。この文章から、彼女が学校生活に満足できなかったこと、そしてアウラでの生活に満足している様子が伝わってきます。それと同時に私の頭の中にある思いがよぎりました。それは、Y子がいつも周りを気にせず一人で淡々と学習を続けることに、ある種の問題意識を持っていた私自身に対する疑問でした。

「Y子の行動は、問題の行動 だと言えるのだろうか？」

確かに、Y子は私たち教師とはコミュニケーションをとりますが、同世代の子どもたちとは自分から話しかけることはまずありません。しかし、お昼の時間や掃除の時間などの共同の時間には、一緒に行動をとっています。そこでの振る舞いも、ごく自然なものです。ただ、自分からは一切話そうとはしないのです。私は、最初の頃、「Tちゃんと1日1回は何か話そうに」なんて指示を出していたこともありましたが、本人が全く実行しなかつ

たので、それもやめてしまいました。そして、彼女の行動をじっと観察していくうちに、「一人でいれることも、また能力ではないか」という思いを抱き始めるようになっていきました。

「Y子ちゃんは、一人で勉強しても、大丈夫？」

「はい、全然大丈夫です」

「じゃあ、周りに人がいてのと、一人で勉強するのはどっちがいいの？」

「どっちも同じです」

「じゃあ、周りに人がいようがいまいが、Y子ちゃんにとっては同じということ？」

「はい、同じです」

Y子は、大変礼儀正しい口調で、私の問いかけに答えていました

「Y子ちゃんは、家でも一人での？」

「いいえ、私は5人兄弟なんで、なかなか家では一人であることができないんです」

「一人でいることは好きなの？」

「はい、好きです。自分の時間が、落ち着くんです」

「アウラでの勉強はどう？」

「家では、落ち着いて勉強できないから、ここでの時間がとっても気に入っています」

「Y子ちゃんは、来年3年になるけれど、高校は行きたいの？」

「一応、行こうと思ってるんですが、何か通いつけていく自信がなくて…。それやったら、通信制に行ったら昼間はアルバイトしようかなあとも思うんです」

Y子は、兄弟が多いので家計の負担を気にしている様子でした。

「僕は、通信制の高校より全日制の高校へ行く方がいいように思う。Y子ちゃんは、小学校でも不登校になり、地元の中学がいやで私立の中学に入学したけど、1ヶ月でまた行けなくなった。今まで2回学校生活につまづいてきたわけや。だから不安なのはよくわかる。でもだからこそ、これを乗り越えてほしい。“学校でも私は大丈夫って”思えるようになってほしい。高校に入ることより、“私、大丈夫”って思えることがY子ちゃんにとって大きな意味があると思う。だから、全日制の学校へ行くのがいいと思うんや。それでも、もし高校に行って途中でダメになることがあっても、またアウラに戻って勉強すればいい。僕の言っている意味、わかるか？」

「はい、よくわかります」

Y子は、そういつうなずいていました。

Y子は、かつて「私は、結婚したくないけど、子どもは欲しい」「早く家を出て、自立したい」というような話をしたことがありました。そして「自立していくためにも、仕事が必要だし、そのためには、他人ともうまくやっていけるだけの術を身につけなければならない」ということも話していました。まだ中学2年生の女の子ですが、彼女なりにいろんなことを考えているようでした。それは将来のことだけでなく、自分自身のことについてもよく理解しているように感じられました。私は、そんなY子にこんな質問をしたことがあります。

「Y子ちゃん、Y子ちゃんのことをよく理解してくれた先生って今までいた？」

「ううん、先生はいつも“あなたは、こうでしょう”って言ってたけど、それってみんな

な違っていた。でも、説明してもどうせわかってくれないだろうから、いつも適当に返事をしてきた」

「そうなんや、じゃあ家族はどう？」

「家族もあんまりわかってないかも...、でも下の妹は少しくらいわかっているかな」

「じゃあ、カウンセラーの先生は？」

「そんな話、したことない」

「ふーん、そしたら、こんなこと僕と話すのは、ほとんど奇跡みたいな状況なんや」

「はい、そう思います。先生とは、なんでか知らんけど話せてしまう」

「僕はY子ちゃんのこと、かなりわかっている？」

「うん、そう思います」

「でも、なぜ僕はY子ちゃんのことわかってるって、思うんやろ。他の人と何がどう違うんやろ？」

「.....」

「ひょっとしたら、僕は、Y子ちゃんという人間に興味があるのかもしれない。僕は一人になることは基本的にいやだと思っている人間だと思う。一人の時間は嫌いではないけど、ずっと一人はいやなんや。でもY子ちゃんは違う。ある意味、僕と対照的な存在かもしれない。だからもっと知りたいと思ってきたのかもしれない」

「ふーん。そうなんですか...」

「きっとそうだと思う。Y子ちゃんが学校の先生に違和感を感じたのは、Y子ちゃん自身を普通の子の型にあてはめようとしたのかもしれないな。でも僕は僕とタイプの違うY子ちゃんを知りたいと思ってきた。そう思いながら、いろんな質問をしてきたんだと思う。だから答えやすかったんじゃない？」

「うん、そう思います」

「そうしたら、ひょっとして僕がY子ちゃんの初めての理解者になるかもしれんな」

そう言うと、Y子は、クスッと笑っていた。

Y子は、今まで自分をわかってくれる人なんていないと感じてきたのかもしれない。それは、家族も例外ではありませんでした。Y子はいつも友達に合わせて学校生活を送り、家族に合わせて家庭生活を送っていたのかもしれない。どこか相手と関わりながらもある距離感を保っていたのかもしれない。だから彼女は孤独を愛するようになっていったのでしょうか。そんな彼女をありのまま受け入れていくことで、何らかの動きが生じていくように思います。これからどのような変容を遂げていくのか、私は楽しみにしています。



ひとりであるということ

「不登校の子どもたちへの支援」という表現を私たちは何気なく使います。でも支援は、目の前の相手への「理解」を前提にしないと成り立つものではありません。もし相手を理解することなしに支援をおこな

ったならば、それは支援という名を借りた押し付けにすぎないのかもしれませんが。

では「理解」とは何でしょう？相手を理解するということは、いったいどういうことなのでしょう？これはとても一言では表現しきれない大きな問いです。ただ私がY子とのやり取りを通して感じ取った一つの答えは、「彼女の視点を手に入れる」ということだったのかもしれませんが。彼女の眼に、いったいどんな世界が映っていたのか、それをいかにして共有できるのかということだったように思います。そのためには、私の中にそれまで当然のように思っていた考え方を、もう一度振り返ってみる必要があったのだと思います。そうしないと、Y子の視点に立つことができなかつた。彼女の眼に映し出された世界が見つけれなかつたのだと思うのです。

「ひとりであることが好き」というY子は、今日も黙々と自分の学習をこなしています。自分で解説を読み、演習をこなし、答えを確認する。その学習活動は、とても自律的であり、しかも正確です。昼休みは、黙って本を読み、みんなでおこなう掃除の時間もとても丁寧に作業をこなしています。そういう意味では、彼女は模範的な中学生なのです。違いがあるとすれば、唯一いつもひとりであることです。

「Y子ちゃんは、この前ひとりでいることが好きだっていったでしょ。もう少し、聞いてもいい？」

「はい」

「Y子ちゃんのこと、家族の中でわかって

る人いないっていったけど、それはさびしいことじゃないの？」

「いいえ、全然」

「じゃあ、たとえば国がもしY子ちゃんの生活を保障してあげるっていったら、Y子ちゃんはすぐにでも家を出て一人で暮らしたい？」

「うん、そうしたいと思う」

「そうなんや...、それってすごいなあって、思う」

私は、Y子の返事に少し戸惑いを持ちました。

彼女にとって家族って何なのでしょう？ただ働けないY子の生活を経済的に保障するだけのものなのでしょう？

これって、家族の問題なのでしょう？

それともY子の問題なのでしょう？

あるいは、問題なんて何も無いのでしょうか？

Y子は、私たちよりもずっと成熟した側面を持っているのでしょうか？

私の中で、いくつもの疑問がわいてきます。

私は、かつてY子の在籍校の先生に彼女の様子を話したことがありました。しかし、その先生は彼女のそんな側面を「問題」として捉えようとしていました。「これが、Y子の先生嫌いの原因かもしれない」と私は直感的に感じて、もうそれ以上話すことをやめました。少し、Y子の気持ちがわかったかもしれません。

私たちは「ひとりである」ということを本当に引き受けているのでしょうか？

私は、なかなか「はい」という自信がありません。高校生の時にフロムの『愛するとい

うこと』を読んで、他人を愛するための条件として、ひとりである ことの受容ということが挙げられていたことに、まだまだ本当に他人を愛することなんて無理かもしれないと思った記憶がよみがえってきます。そう考えるとY子は、わたしたちよりずっと大人なのかもしれない。だからまずこのY子の持つ側面を、すごいことだと受け入れることから始めなければならない。彼女は、この側面を誰からも理解されることなく、しかも問題として捉えられて育ってきたのかもしれない。だから、他者に対してあらかじめにも似た感情を抱きながら、適当に合わせてきたのかもしれない。そうすると、他人にあわせる自分と本当の自分とのなかにある種の乖離が生じ、彼女は常に不安定な状態をおくることになったのだろう。そして、思春期に入って何かの対人関係のトラブルが引き金になり、彼女は自分自身を閉ざしてしまったのかもしれない。

ひとりであることの受容 = 大人になること そう考えると、Y子の心の中には、数多くの葛藤が経験されているのかもしれない。その心のひだにしまわれた経験を一つ一つひもとき、共有していくことで彼女は、もっと成長していくのかもしれない。彼女の変容は、私自身の変容を伴いながらともに 大人への階段 を昇っていくことになるのだろうか？



ひとりであることをめぐって

アウラに学ぶ不登校の子どもたちのうち小中学生は、それぞれ学校に籍を置いています。ここでいう学校の多くは、それぞれの住所地にある公立学校です。だから彼らは、学籍をその学校においたまま、アウラで学習活動を行っているわけです。そして私たちは、その在籍校と常に連携をとるようにしています。ちょうど不登校の子どもたちを中心に据えてそれぞれがサポートできる体制をとっているのです。しかし、「ひとりがいい」というY子にとって集団性を重んじる学校はあまり居心地のいい環境ではありませんでした。そこに彼女の大きな葛藤があったのです。

Y子は、その日初めてたった一人で在籍校に足を踏み入れ、学年末考査を受験しました。1年前までほとんど家から出ることもなかったY子ですが、アウラに自分で通い始め、毎日学習活動を続ける中で彼女なりの自信を取り戻し、今まで誰にも話しをすることのなかった自分自身を表現するようになって、今日のテストの受験へとつながったのだと思います。

す。

そんなY子がテストを学校で受験している間に、在籍校の校長先生がアウラに訪ねてこられました。学校とはこれまでも何度か情報を交流させてきたので、私も安心してY子の状況をお話することができました。

「いつもお世話になり、ありがとうございます。今回、Yさんが学年末考査を受験できるようになったのも、アウラで丁寧に指導いただいているからだと思っています。1年前は、名簿にも名前を記載しないでほしい。家庭訪問もしてほしくない。と、学校からすれば、手も足も出せない達磨状態だったのですが、アウラに通い始めてからは、どんどん本人も力をつけはじめ、テストまで受験できるようになったのですから、本当にすごいことだと思っています」

「そうですね。本当にY子ちゃんは変わりました。ずいぶん力強くなってきたと思います。毎日あの子は、淡々と自分の生活を送っています。その根底には ひとりである ことを引き受ける力があるんだと思います」

「ひとりであることを引き受ける力とは？」

「以前にも、学年主任の先生には少し電話でお話したんですが、彼女は“ひとりであることが一番好き”っていうんです。そしてそのことを小学校の高学年頃から自覚するようになっていったんです。小学校の先生は、Y子が孤立しないようにといろいろ配慮をしたのですが、それはY子から見ると余計なお世話で、そっとしてほしかった。彼女から言わせれば、学校の先生の彼女への理解はほとんどの外れで、本当の気持ちを話しても理解

してもらえなかった。そしてそのうち、理解してもらおうという気持ちがなくなっていったそうです」

「よくわからないです...、彼女は孤立してひとりであることを望んでいるんですか？」

校長先生は、私の話すことがよく理解できないようでした。その理由は簡単です。先生にとっては、ひとりであること = 孤立であり、そこにはネガティブな意味づけがあるからです。学校管理者としては、生徒が孤立することは防がなければならないことなのです。ここに学校の先生とY子との ひとりであること をめぐる認識の違いがあります。学校には学校独特のフレームがあるのです。そしてそのフレームを通してY子を見つめると、彼女はいつも 問題を抱えた子ども であり、生徒指導の対象となるのです。実は、Y子自身もこのフレームの違いに戸惑いを持ってきたのかもしれませんが。

Y子の様子を観察すると、彼女はとても自律的な子どもであることがわかります。それは学習面だけではなく、生活全般にも言えることでした。お母さんの話によると、彼女は小さい頃から大変手のかからない子どもだったそうです。7人兄弟の2番目という立場から、彼女は周りの手を煩わさないことに価値を見出してきたのかもしれませんが。何でもひとりでやり遂げようと無意識に行動をとってきたのかもしれませんが。

そんなY子が思春期に差し掛かる小学校高学年の頃、彼女は人間関係の難しさに直面します。本来 ひとりである ことを好んでいた彼女でしたが、周りがグループを構成する

ようになると彼女も否応なく、どこかに属さなければならなくなりました。そして自分が望んでいなくても周りに合わせるが多くなり、彼女はしだいにストレスを感じる機会が増えていきました。そんなある時、彼女は友達関係の中で ひとりである ことを選びます。そしてそのことがきっかけとなって、彼女はクラスの中で孤立することになり、次第に学校を休むようになっていったのです。

私はY子を通して ひとりである ことをあらためて考えてみたいと思うようになりました。彼女を 問題を抱えた子 と捉えるのではなく、ひとりである ことを引き受けられる自律的な子どもと捉えることで、Y子の違った側面が見えてくるように思ったからです。彼女は、小学校高学年頃から自分自身を表現することにためらいを覚えるようになっていきます。それは彼女が「自分を理解してくれる人なんていない」と思うようになっていったからです。「家族さえ、私のことを理解してない」と言い切るY子のその心のひだに私自身が触れてみたいと思うようになっていったのです。

「私はY子と話しているうちに、“すごいな”と思うようになっていったんです。まず彼女は14歳でありながら ひとりである ことをしっかり受け止められる子どもだと思うんです。私も、今までかなり子どもたちに出会ってきましたが、その中でもY子のような静かな強さを感じる子どもはなかったように思います。それでいて、彼女は決して孤立しているわけではありません。自分自身を閉ざすのではなく、私ともこんな話をするんですから…。つまり、彼女を問題の子どもとし

て捉えるのではなく、自律的な子どもとして捉えなおしたとき、彼女は私に自分の心の内を話してくれるようになった。だからこそ、彼女をある固定されたフレームの中に押しとどめるのではなく、彼女は彼女のままでありながら、周りとの関係を構築していけるようになれば私は考えているんです」

「なるほど、そうかもしれません。なかなか、そこまでの対応や考えは、現場の教師にはできません。先生であるからこそできるのかもしれない。いい勉強になりました。そして、今後Y子さんの対応を学校としてどう捉えて、どうサポートするのか、学校に持ち帰って考えてみたいと思います」

「ありがとうございます。先生にご理解いただいて大変うれしいです」

「いやこちらの方こそ」

こうして、校長先生との話は終わりました。Y子のことを通して、私はあらためて ひとりである ことを見つめ直し、私とY子との関係性を通して、校長先生は学校としてのY子への関わりを見つめ直そうとしています。思い返せば、こうして一人一人の子どもたちから、私は多くの宿題をもらいながら、その教育を考えてきたのかもしれないと、あらためて感じさせられました。



話さないという関係

「話さないという関係」があるということ、私たちはY子から学びました。たとえそこにコトバが介在しなくても、確実にそこにある種の関係が芽生えます。コトバ少ない彼女でしたが、私たち、そして一緒に学ぶ仲間たちとの間で、何かを確実に得ていたのかもしれませんが。

「T子が定期試験を受験したため、今日はY子が一人で学習をしていました。そんな時、メール便が届き、Y子が先日受験した定期テストが学校から届きました。Y子の結果は、全教科平均以上、中には9割近くの点数もありました。生まれて初めて受験した定期テスト、しかも授業を一切受けていない状態ですから、この結果に私は大変満足しました。

「Y子ちゃん、すごいやん。大したもんや」
私のそんな言葉かけに、彼女はうれしそうに微笑んでいました。

たまたまその日の午前中は、Y子と私の二人だったこともあり、私はT子との関係について彼女に質問を投げかけました。

「Y子ちゃん、Y子ちゃんにとってT子ちゃんは、どんな存在？」

「……」

しばらく私は彼女の返事を待ちましたが、彼女は首をかしげたままでした。

「じゃあ、質問を変えよう。Y子ちゃんは、

T子ちゃんと全然話そうとはしないけど、T子ちゃんがいてくれるのと、いてくれないのとでは、違いがある？それとも、いてもいなくても同じ？」

「……、いてくれた方が、いいかな？」

「じゃあ、いてくれるのといてくれないのとでは、どんな違いがあるんやろ？」

「……」

Y子は、言語化できないようです。

「それじゃ、今度は僕のことを考えてみて。Y子ちゃんは、いつもほとんど質問することなしにひとりで勉強しているだろ。僕は、自分の机で自分の仕事をしている。同じ部屋にいるけれども、ほとんど会話はしない。Y子ちゃんにとって、僕が同じ部屋にいて勉強するのと、僕がいなくてたった一人で勉強するのとでは、違いがある？」

「はい、全然違うと思います」

こんどは、Y子は瞬時に返事を返しました。

「今度は、すぐに返事が返ってきたね。じゃあ、どう違うんだろう？」

「うーん、……」

この質問は、なかなか難しいようです。

「Y子ちゃんは、あまり他の人と話そうとはしない。今まで学校の先生たちは、それをきくと 問題 とみとみてきたんだと思うんだ。でも僕は、そうは思わない。話さない関係 だってあると思うんだ。たとえ仲良しそうに話していても、陰で悪口を言う関係だってあるように、話をしなくたっていい関係だってある。Y子ちゃんは、あまり人とはなさいけれど、僕はY子ちゃんなりに関係を持っているように思うんだ。だから、それがどんな関係なのかを知りたいって思うんだ」

「なるほど」

Y子は、私の話にならずにいました。

Y子が私と話すときは、決して多くを語ろうとはしません。彼女の言葉数は多くはないのです。そればかりか、返事が返ってくるまで大変時間がかかります。それは、彼女が言葉を紡ぎだす時間であって、自分の思いを言語化するのにかかる時間のように思います。それが彼女のリズムなのかもしれません。彼女の内面にある言葉にならない思いを、私は推し量りながら質問をし、彼女はその言葉にならない思いを言語化しようとするのです。

「私は一人の方が、気を遣わなくて楽、でも先生がいてくれることで、とっても安心する」

これがY子の思いでした。

「安心するって、質問できるからって意味？」

「それだけじゃなくって、具体的じゃない安心っていうか...、なんかそんな感じ」

Y子は、私との関係の中で、話さない関係があることを自覚したように思います。話しているから関係があるのではなく、話しているが、話してまいが、関係があるところには、関係があるのです。そしてこの関係は、彼女に 安心 を与えます。ひょっとすると、Y子にとってT子の存在も、この 安心 を提供してくれるものかもしれません。ただいまのY子にとって、そのことは自覚できていないのかもしれませんが。ただT子との関係を私との関係の中に投影してみることで、新たな認識が生まれるのかもしれません。



ひとりで生きていくために

アウラの日常の中で生きているY子。それはいつも淡々と流れる日々。でもその時間の流れの中でも、彼女は少しずつ変化していきます。ある時、彼女のコトバが増えていることに気づきました。これまでは、黙っていることが多かった彼女ですが、今では自分の意志をコトバで表現しようとしてくれます。ひとりで生きていくためには、自分自身をどこかで表現していかないと誰も自分の存在に気づいてくれないということを感じ取ってくれたのかもしれません。

その日もY子は、黙々と中間テストに向けた学習に取り組んでいました。自分でテスト範囲を確認し、それに向けた学習計画をたて、やるべき課題とまだやらなくていい課題とを選別し、そこに優先順位をつけ、しっかりとその準備に取り掛かります。今日も学校から送られてきたプリントの束を、彼女は見ごとに整理しながら、ファイリングしていました。「こんな子だったら、仕事をまかせても安心できるなあ」Y子は、私にそんな思いを抱かせる女の子です。

1 学期も折り返し地点が過ぎ、Y子も、進路を具体的に考えないといけない時期に来ています。学力的には、平均以上のランクの全日制高校への進学を十分考えられるのですが、ひとりであることをことのほか愛してやまない彼女は、どうしても全日制高校へは行きたくないようです。

「Y子ちゃん、進路のこと考えた？」

「……」

「家の人は、どんな風に言ってるの？」

「私立は、無理って…」

「じゃ、公立高校？」

「……」

どうしても、自分の進路のことになると黙ってしまいます。

Y子の場合、どの高校がいいのかということよりも、まずどうすればひとりで生きていけるようになるのかを考えるべきなのかもしれません。とにかく「ひとりがいい」というY子。「家が嫌」というわけではないのですが、「早く家を出てひとり暮らしをしたい」というY子。そんなY子を 問題を抱えた子どもとして捉えてきた大人たち。そのまなざしを、彼女は敏感に感じながら自分の中に取り込んでいったのかもしれない。そしてY子は、小5からしだいに自分自身の殻の中に閉じこもるようになっていきました。

「Y子ちゃんは、ひとりで生活できるようになりたいんだ」

「はい」

「でも、今すぐは無理でしょう。生活していくためには、自分で働かないといけないし、

そのためには何らかの能力や、技術を身につけないといけない。どうしたらいいかなあ？」

「……」

「だからY子ちゃんの場合は、ひとりで生きていけるようになるために、どんな進路が考えられるかということかもしれないな」

「はい」

「例えばどんなことをして、生きていきたいって思うの？」

「パソコンでイラストを書いたり、ホームページのデザインをしたり…」

「ということは、自分の部屋でできる仕事がいいんや」

「はい」

「そしたら、そういうイラストとかデザインとかの腕を身につけないといけないかもね。なかなかひとりで生きていくのも楽じゃない。まず、Y子ちゃんが自分のできる技術を磨いて、それを外に向かってアピールしないとイケない。そうしないと、Y子ちゃんがそんな技術を持っていることが、誰にもわからない」

「なるほど」

「だから、腕をいかにして磨くか、そしてそれをどうやって他人に伝えるか、それをクリアしないとひとりで生きていくのは難しい。あの、アナウンサーでもフリーの人っているでしょ。彼女たちは、みんなそうして自分を売り込んで生きている。Y子ちゃんだって同じ、黙っていたら誰も気づいてくれない。そうしたら、なかなかひとりで生きていけるだけの仕事を手に入れられない」

「それで、進路はどう考えていこう？」

「わたした的には、通信制の高校に籍を置いて、昼間はアルバイトをする」

「どんなアルバイトならできるの？」

「工場とかの、作業」

「なるほど、誰かと対面なくていい仕事か...」

「でも、それで高校は卒業できるかもしれないけど、どこで技術を身につけるの？ひとりで生きていくためには腕を磨かないといけないからなあ...」

「そうですね」

「そう思うよ」

Y子がこれからどんな人生を歩んでいくのか、それは私たちにはわかりません。ただ、この思春期の真ただ中のごく限られた期間の中で、ある時間を共有し、そこで何かを感じ、何かを考えていったという事実こそが、Y子自身にとってそして私たち自身にとっても、大きな意味を持つことになったのだと思います。

私たちの考える「支援」というのは、「双方向の学びあい」を指しているのかもしれませんが、「支援をする側」「支援をされる側」という枠組みの設定はあるのかもしれませんが、そこに「理解」という要素が入ると、それは「学びあい」という状況を作り出すように思います。私たちはY子の支援をしながら、確実に彼女から多くのことを学んだのかもしれません。



『幼稚園の現場から』

11・イブニング保育

原町幼稚園(静岡県沼津市) 園長 鶴谷圭一

たまたま編集長と知り合いということから、対人援助マガジンに幼稚園園長として書かせてもらっています。これまで10回のインデックスを出してみました。なんの脈絡も無く行き当たりばったりだなあ…、それなのに載せてもらって感謝しています。

第1号	2010年-6月	エピソード
第2号	2010年-9月	園児募集の時期
第3号	2010年-12月	幼保一体化
第4号	2011年-3月	障害児の入園について
第5号	2011年-6月	幼稚園の求活
第6号	2011年-9月	幼稚園の夏休み
第7号	2011年-12月	実際の事例から一怪我の対応
第8号	2012年-3月	どうする保護者会？
第9号	2012年-6月	おやこんぼのすすめ
第10号	2012年-9月	これは、いじめ？

11回目からは、原町幼稚園で行われている「教育実践」について書いていこうと思います。教育実践というと固い感じがしますが、言い換えれば「日々子どもたちとやっていること」ですね。

日本全国の幼稚園数はざっくりと行って13,000、そのうち私立幼稚園8,000、残りが公立ということになると思いますが、その教育内容たるや千差万別、実にバラエティーに富んでいます。その中の一つの実践と思って読んで頂けたらと思います。

夜の幼稚園を楽しもう

さて今回は、つい先日(11/21・22日)終わったばかりの『イブニング保育』についてレポートします。

午後3時

いつもなら降園バスが走る時間に園バスがお迎えに出発しました。園バスを利用せず保護者が送迎する子どもたちもポチポチ登園してきます。

門や園庭で「こんにちは！」と元気な声が交わされています。子どもたちも自分で言いながらなんとなく、はにかんでいる様子が“いつもとちがう幼稚園のはじまり”を予感させて、ワクワク感が高まります。



夕暮ってうただけでテンション上がるね！

かばんの中にはお弁当が入っていて、今日は“夕食弁当”が楽しみの一つなんです。自分の保育室に入った子どもたちはいつものようにかばんを置いて、着替えをして、園庭に出てきて遊び始めます。そのうち園バスも到着して仲間が増えてきました。

子どもたちは、思い思いにブランコや鉄棒、砂場あそびや、足蹴り二輪車にまたがって園庭で遊んでいます。いつもより興奮気味で、話す声がついつい大きくなってしまっています。だってこんな時間帯に外で友だちと遊べる日っ

て一年に何回あるでしょうか。

だんだん日が傾き夕暮れになるにつれ、子どもたちのテンションは逆に昇っていきます！教師は、楽しい反面はしゃぎ過ぎて怪我をしないか注意しながら一緒に遊びます。部屋に入る時間は年齢ごとに活動内容が異なるのでそれぞれの年齢ごとに呼ばれて部屋に入っていました。

午後4時半頃

この頃には全員が部屋に入って、その日の主活動(一斉保育、設定保育などと呼ばれるいわゆるクラス単位でおこなう授業のような時間)に取り組みます。

各年齢のおおまかな流れはこうなります。

トイレに行ってホームルーム(出席をとったり歌を歌ったり、出席帳にシールを貼ったり)

主活動(イブニング保育のメイン活動)

午後6時頃

夕食弁当(約30-45分)

帰り支度(約15分)

午後6時45分ちょうど

降園バス出発(お迎え引き渡し)

さて、午後3時から6時45分までの4時間弱の間に、幼稚園に来て子どもたちはいったい何をしているのでしょうか？

年少組〈よるのたんけん〉

まず、年少の主活動から見ていきましょう。

年少の活動テーマは、

〈たんけん！夜の幼稚園！〉

11月の静岡県の日没は4時半頃、部屋に入る頃には周りが薄暗く、部屋でホームルームをしている間にぐんぐん暗くなってきています。

年少の部屋では、ホームルームが終わってまずお弁当の準備。テーブルにお弁当セットを出して支度をしたら「み

んな、お家から持ってきた懐中電灯を鞆から出してきて」と先生が言いました。

各々に鞆からいろんなタイプの懐中電灯、ペンライトを出してきました。余談ですがほとんどがLED電球の白い光でしたね。

さあ、ここからが演出です。

「みんな、外はどのくらい暗くなったのかな？電気を消してみよう、カウントダウンいいかな！5・4・3・2・1!!!」

スイッチを切った途端に「ワー！キヤー！」の歓声があり、みんなが一斉に手持ちのスイッチをオン！私たちが予想外でしたが、LEDが多いことも影響しているのでしょうか、30人のライトがキラキラしてなんとキレイなイルミネーション効果！



〔ワーキレイ！天井に向かってライトをグルグル〕

じっと持っている子どもなんていませんから、ライトをグルグル動かして天井を照らすのがいちばんキレイでした。その次に、先生の指示する場所をその場所から一斉に照らします。トイレ、壁掛け時計、写真、ピアノ…暗い部屋なのに、一瞬でそちらに光が集まり、年少さんといえどもモノがある場所をよく把握しているなあ、と感心。

そのうち変わったことを発見する人が現れます。お弁当を照らしてみたり、机の下を照らしてみたり…コップの中に入れてみたら行灯みたいになって、みんなでやってみたりしました。

ひとしきり遊んだあとで、全員のライトを消して先生が「夜って暗いね」と改めて実感。そして部屋の電灯のスイッチを入れるとパッと明るくなり、「電気ってすごいね」とまた実

感。



[みてみて！コップに入れたら黄色になった]

そのあとは、ペンライトを持って、園庭や園内を歩き回り探検をしたのです。その様子は、もちろん楽しい様子がいっぱいですが、書ききれませんのでご想像におまかせします。

探検から帰ってきたら、用意しておいたお弁当を食べながら探検話も弾んだことでしょう。



年中組〈オシャレなディナー〉

年中組は、イブニングを始めた4年前からずっと同じ活動を続けています。テーマは、

〈キャンドルホルダーづくり！〉

活動自体はそんなに珍しい内容ではありません、昼間でもできる活動ですが、このイブニングでやることに意味を持たせています。

早めにホームルームを終えた年中組は、汚れても良いスモックに着替えて、ガラスのキャンドルホルダーに、ガラス専用の絵具を使って自分のものをデザインします。



[集中してデザインに取り組む年中さん]

そして、でき上がったホルダーにろうソクを入れ、夕食弁当を、その灯だけで食べるのです。オシャレなレストランのような雰囲気、しかも自分の作ったキャンドルホルダーを眺めながらの夕食弁当は格別おいしそうです！



年長組〈ゲラゲラ影あそび〉

年長組は、今年は、「かがくのとも」という月刊絵本に「なんのかげ?」という影遊びが載っていたので、実際に遊んでみよう!ということから、ホールに大きなシートを張って裏からライトの光を当て影あそびを楽しみました。



最初は絵本のように、先生が用意したモノの影を見て当てる「モノ当てゲーム」。角度によって違うものに見えたり、光源の距離によって大きさが変わったりする様子を体験しながら遊んでいきます。

次に、「お友達当てっこゲーム」になり、みんなが目をつぶっているところから、そっと選ばれた数人がシートの裏でポーズをとって誰か当てるゲームをしました。しかし、普通に立っているとすぐにわかってしまいました。



髪形や顔の輪郭、体形だけでなく、その日着ていた服からも、子どもたちには誰が隠れているか瞬時にわかってしまうのです。そこで、ジャンパーのフードをかぶったり、モノを持ったり、二人組になったりしながら出題者は工夫し始め、徐々にレベルアップしていったため、30分以上もの長い時間をかけて皆が集中し、全員が出題者になることができました。しかも、誰かが登場するたびに笑いが起こる楽しい

雰囲気、そして友だちとの繋がりがとても感じられた活動となりました。

その後、屋上に出て月や星、幼稚園周辺の自分たちの住む街の夜を眺めて帰ってきたのです。



これまでのこと

イブニング保育は今年で5年目になります。最初は、園舎建築のために、毎年恒例の夏の納涼祭りができない、せめて盆踊りだけでもできないかということで考えました。「必要は発明の母」とも言いますが、まさにそこで生まれた苦肉の行事といえます。そこで良かったのは「わざわざ夕方来て盆踊りだけじゃつまらない、なにか活動を考えてくれ!」と先生たちに要求し、「盆踊りの夕べ」というようなベタな名前にしなかったことが今につながっているのだと思います。

いやほんと、ネーミングって大事ですよ!

翌年には園舎も完成し、納涼祭りもできるようになったので「回こっきりの行事だったのに「なんか楽しかったから」ということと「イブニング保育」という名前のおかげで続けてこれたのです。時期は最初の年と同じ夏の時期です。

ところが、4回目となった2011年は台風が来て延期になってしまいました。予定が取れずに12月の終業式前の2日間が無理やり充てられました。

「寒いじゃないですか!」

「風邪ひいたらどうするんですか!」

「いったい何やるんですか!」と保護者の皆さんからちょびっと後ろ向きの声もあびつつ、まあまあイルミネーション

も飾ってほら、いい雰囲気ですやりますから！となだめすかして…確かに寒かったけどなんといっても「日没が早い！」というのが思わぬ収穫だったのです。

おまけに、冬のイブニング保育だと終了時間のお迎えが早くてスムーズ！（夏はお母さんのお迎えが遅かったり、お迎えついでに園庭で遊んだりしてしまう子がいたので…）

なので、今年も冬のイブニングとなった訳です。

参考資料

幼稚園関係の方で、興味がある方のための情報

イブニング保育の目的

- 【1】夕方から夜にかけて幼稚園で過ごし、非日常の園生活を楽しむ。
- 【2】普段あまり気にとめない“夕暮れや夜”のいろんな現象に気付いてみる。
- 【3】夜ならではの印象深い活動を経験する。

キーワード

「夜って なんだね！」

活動計画のための段取り

日没予定時刻に合わせて登園時刻を設定。

大まかな計画案を作り、時間割を決める。

2日間の登園日を割り振って名簿を作成し、保護者にお便りで登園日の可否を伺う。*1

それぞれの家の都合を考慮して最終的な登園日名簿を作成、発表。（但し前日変更も可）

平行して各年齢ごとに活動案を立て、教材準備

当日のバス添乗等の確認

当日の日中預り保育希望者の確認と段取り *2

*1/原町幼稚園は年少・年長まで2クラス(合計60人)ずつ6クラス(180人)あります。イブニング保育では、バスコースごとに人数を半分に分け、2日間行ううちのどちらか1日だけ保育日、もう一日はお休みにしています。夜間にバスを走らせる時間をふだんの半

分にすると、夜なので少人数で保育を行いたいためです。

ただし、幼稚園の都合だけで押しきろうとすると、どんなに良い活動

でも保護者の不満は解消されませんので、保護者の都合で最終的に登園日を選択できるようにしておきます。

*2/昼間に仕事をしている母親も多いので昼間に預りが必要な方は預かれるようにしています。年少より一学年下の満3歳児クラスも、日中の保育を行います。

資料その他

キャンドルホルダー/IKEAのガラス製が安くて丈夫。セットでキャンドル購入がお勧め。80円程度/一人分

園内のディスプレイ用のアロマキャンドルもお勧め

ガラス用絵具は

絵本「かがくのとも 2012年11月号・なんのかけ」

福音館書店 ¥410

掲載の写真はISO値を上げてスローシャッターで撮影していますので、実際よりも明るく写っています



[屋上でライトをグルグル]

まとめ

イブニング保育は幼稚園ならではの活動だと思います。夕方6時7時まで、さらに子どもたちがいる保育園の子どもたちにとっては、日常的に園で夜を迎えているからです。

2日間かけて行いますが、そのうち1日はお休みになってしまいます。今年も日中の預り保育希望者を募りましたが、1日5名もいませんでした。仕事(パート)をしているお母さんも多いのですが、予め休みをとったり家族で協力してイブニング保育に備えてくれていました。ありがたいことです！



幼稚園の行事の中では、習得する活動と、感じる活動があると思います。たとえば運動会で発表する跳び箱やダンスは、習得した成果を発表するという意味合いが大きい。

遠足などのようにその行事活動そのものが楽しく、何かそこから子どもたちが経験し、感じてくれることを期待する活動もあります。

イブニング保育では、時間帯が変わることで子どもたちの表情に昼間とはずいぶん違った高揚感があふれ、何人もの笑顔が何度も見られました。

「だから何かしらイイことがあるに違いない」、...そんな思いで続けている活動です。



[バイバイ！夜の園バスも走ります。街の人たちがあれ？何でこんな時間に！？って顔で振り返るそうです。

都会の幼稚園では、預り保育の送迎バスが夕方には走っているそうです。だから珍しいことでは無いでしょうね。]



ツルヤシュイチ

(幼稚園勤務29年/うち園長10年目)

<http://www.haramachi-ki.jp>

福祉系 対人援助職養成の 現場から^⑪

西川 友理

2012年11月初頭、時の文部科学大臣、田中真紀子氏が、3つの大学の設置を認可しないと、かするとかといった、すったもんだがありました。

この一連の出来事について、テレビや新聞では、様々な文化人や識者が「つまり文科相はこういう事を問題にしているんですよ」と、語っています。しかし、人によってその解釈が少しずつ違ってきます。大学には問題がある、と、共通しておっしゃいますが、どれを問題としているのかという話になると、「これが問題」「あれが問題」「それが問題」と、微妙に違う意見が出てくるのです。それだけ多く、問題と認識出来る事柄が存在する、ということかなと思います。

こんな時期に言うか、とか、もうちょっと関係する人達の事を考えてよ、などといった手続き的に問題と思われる行動はありましたが、文

科相の発言とそれに伴う文化人や識者の様々なコメントは、少なくとも「大学とは何か?」という疑問を、世間に知らしめるきっかけになったと思います。

私も大学で、社会福祉士の養成に関わる授業を担当させていただいていますが、様々な文化人や識者の方々と同じく、問題と思う事柄がぶつかる事があります。

社会福祉士養成をする時に

例えば、授業内容について。

社会福祉士の養成カリキュラムには、「相談援助実習指導」という授業があります。この授業では、実習前教育として、法律、制度、援助

技術などの復習とともに、挨拶、電話のかけ方、訪問する際の礼儀といった社会的常識やマナーについて指導することがあります。具体的にこのような内容の指導をしろという規定がどこかにあるわけではありません。この授業に含まれるべき内容として、厚生労働省が提示しているものの中には、「社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する」という記述があり、「資質、倫理、自己に求められる課題把握等」を指導する手段として、私はマナー教育などを利用しています。

けれど、ある先生がぼやきます。

「…でも、こういう指導って、大学がやることやないよなあ…。だって、大学って高等教育機関やよ。挨拶やマナーなんて、家の躰でやることやんか…。」

さらには、学生指導において。

ペーパーテストは高得点。出された宿題は完璧に提出。無遅刻無欠席。…といった、成績評価上げはほとんど問題がないにもかかわらず、コミュニケーションの方法が偏っていて、いわゆる空気を読めない、人の顔を見て話をするのできないなど、社会性に不安定さがある学生もいます。

ある福祉系大学のA先生が、1人の学生に、言いました。

「演習授業での様子などを見ていると、あなたの感情コントロールや、コミュニケーションの方法はずいぶん独特で、社会福祉の現場で働くには、いろいろと工夫がいると思うんだ。正直、今のままではあなたが希望している施設での実習には行かせられない。どうかな。一度、専門の心理判定を受けてみたら？」

翌日その学生の親御さんが大学に来ました。

「Aってのはどいつだ！子どもから聞いたぞ！」

「うちの子が障害者だと言うのか！医者でもないくせに！名誉毀損だ！」

「授業料もちゃんと払っているのに、実習に行かせられないとはどういうことだ！」

と、ものすごい剣幕です。

ベテランの大学事務職員がなんとかその場をとりなして、親御さんには不承不承お帰りいただきました。

事務職員はカンカンです。

「A先生、訴訟問題になったらどうするんですかっ！」

「そう言われても…誰も言わないなら、私が言わないわけにはいかないと思って…」

「とにかく！もうちょっとうまくやってください！」

…A先生の同僚の先生が、言いました。

「基本的に大学は、勉強したいと言って、入試に合格して、授業料払って来ている人には勉強させなあかんとこころやからねえ。実習に行きたい、といって来る学生には、出来るだけ実習させてあげたいよねえ…。でも、社会福祉士として資質に欠けている学生を世に出して、世間の利用者さんに迷惑をかけちゃいけない。難しいところだよねえ…。」

「だからって、アスペルガー症候群や発達障害じゃないかと疑って、専門家の判定を受けてみれば、なんて、大学の教員が言ってもいもんなのかねえ、どうかねえ…。」

社会福祉士の相談援助実習は、養成校、学生（実習生）、施設・機関、実習先利用者、という、四者により成り立っているものです。現場と養成校が協力し、これに学生が実習生として関係する。社会福祉士の実習において、これらは実習四者関係という倫理的な共同体として認

識されています。常に実習四者の関係に配慮することで、養成効果が高くなり、また安全性の確保された実習となります。

養成校は、実習先施設・機関に対して、実習が出来るだけの知識と社会性を持った学生を実習生として送り出すという責任があります。だからこそ、実習に行く学生に対しては、実習前後の指導も含め、知識、技術の教授と共に、社会的常識やマナーの指導、社会性に不安定さがある学生への指導などを行う必要があるのです。

時々は、アスペルガー症候群や発達障害が疑われる学生もいます。軽度の知的障害と思われる学生もいます。そんな学生にとって、医学的・心理学的判定を受け、その結果を自己認識することは、実習の在り方を考える上でも、将来の進路を考える上でも、大きな手がかりになります。

一定の障害があるという判定が出たとしても、社会福祉士の欠格事項にはまずあてはまらないため^{注1)}、そのまま養成カリキュラムを受けて国家試験を受験する事に、制度上何の問題もありません。ただし、社会福祉士には、相手の心身や生活の状況をおもんばかる事が不可欠です。これが難しい学生にはその学生に見合った教育方法を考える必要があります。専門的な判定は、教育方法や周囲のサポート、学習環境の調整を考える上で非常に有益なのです。

しかし、どのタイミングで、どんな場面で、誰が、「判定を受けてみたらいいのではないかな」ということを、どういう根拠で、どんな風に伝えるのか。それを考えると、とたんに難しくなります。多くの場合、医学的・心理学的な判定の結果は、実習だけに関わるものではなく、その学生の人生全体に関わるものであるからです。

ソーシャルワーカーを設置している大学なら、こういった声掛けはその方の仕事になると思う

のですが、設置している大学はあまり多くありません。^{注2)}

判定を受けているか否かに関わらず、社会性に不安定さがある等、特別な配慮が必要な学生の場合、実習先の選定も難しくなります。

「そういう学生さんが社会福祉士資格を取得出来たら、すごいじゃないですか！ぜひうちの施設で、実習して下さい！」

と、大歓迎で受け入れてくださる施設は少数派で、多くの施設は

「普通に実習生を受け入れるだけでも厳しいのに、特別な配慮が必要な学生さんとなると、対応しきれません…。」

と、断られます。

「ここで断ったら福祉施設としての名がすたる！」

と、頑張って実習指導をしてくださるも、期間半ばで、

「すみません、やっぱり利用者さんへの影響がひどくて…実習中止にさせていただきます。」

となる場合もあります。

利用者への悪影響があり、実習四者関係が崩れてしまった状態で、実習を続けるわけには行きません。こういった場合の実習中止と言う判断は、当然です。

私が携わっている専門学校では、社会福祉士になるために、マナーや社会常識の知識・技術を教えるのは当然と考え、それ専門の授業を必修科目として設定しています。

専門的な判定が必要な学生だと考えた時々は、「社会福祉士にはこういった資質や、こんな社会性が求められる。でも今、私たち教員からは、それがあなたに欠けているように見える。きちんと判定を受けて、今後の事を考える必要があると思う。あなたはどう思う？」

と、教員がこちらの考えを伝え、学生本人に、自分自身と向き合わせます。時には、学生が家族と、学生の特性や将来について話をすることもあります。

しかし、特別な配慮が必要な学生に対し、実習先を選定する時の難しさは、大学とそうは変わらないと思います。

以上のような状況を踏まえると、現在、社会福祉士養成校が抱えている困難の背景には、2つの問題点があると思います。

文科省と厚労省

1つは制度上の問題です。

社会福祉士の受験資格を得られる学校を養成校といい、「養成施設」と、「福祉系大学等」の2つに大別されています。

養成施設は、厚生労働省に申請をして、審査を受け、養成校として認可されます。

福祉系大学等に当たる大学や専門学校は、学校を設立する際に文部科学省の認可を受け、養成校の認可を受ける際に、文部科学省と厚生労働省に科目認定の申請が必要です。いわば、福祉系大学等は文部科学省と厚生労働省の汽水域に存在していると言えます。

学校教育法には、大学は「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させること」を、専門学校は、「職業若しくは實際生活に必要な能力を育成し、又は教養の向上を図ること」を目的として設置される、とあります。

文部科学省が管轄する範囲、つまり教育機関としての主たる目的は、大学では学芸の教授研

究であり、専門学校では職業や實際生活に必要な能力の育成ということになります。

養成校は、社会福祉士及び介護福祉士法にある「相談援助を業とする者」と定義されている社会福祉士という職業を養成する所です。

つまり、養成校の指定を受けている福祉系大学等は、大学なら教授研究と同時に専門職養成をしなければならず、専門学校は職業や實際生活に必要な能力の育成と同時に専門職養成をしなければならぬということです。目的が違うものを同時に行わなければならないので、当然ズレが生じます。

特に大学は、本来の目的に職業能力育成に関する教育がないため、ズレが生じやすくなります。専門学校は本来の目的が、「職業能力の育成」であるため、教え導いて一定の技能を身につけさせる意味の“養成”とは、ズレが生じにくい。したがって、同じ養成校でも大学と比べて養成教育がなじみやすいということになります。

個性化(?)した学生の問題

もう1つは、学生それぞれが抱える問題です。

ゆとり教育等によって、学生の知識や考える力が低下した、ということは、もうあらゆるデータにより証明されています。私も時折、基本的な文法や助詞の使い方などの指導をすることもあります^{注3)}。これに加えて、少子化の影響からか、一部の私立大学や専門学校等では定員割れが続き、経営のために、基礎学力の習熟度が低い学生でも入学を許可せざるをえないというようなことが起こっています。入試問題は極端に軟化し、ひどい時には「入試では、名前さえ書けば合格できる」という噂のある大学に、ま

さにそのレベルの学生が入学し“大学生”として生活していることもあります。

このように養成校には、基礎学力の習熟度が低い学生が、思いのほか多く在籍している、ということが問題として挙げられます。

また、地域との人間関係の希薄化により、世代などの立場が違う人達と話をする機会が日常生活に少なくなった事で、社会的な賢さ、強さ、柔軟さなどの、社会性が低い傾向が多くの学生にあります。今や多くの大学がこれに気付き、社会人基礎力の強化を図るプログラムを取り入れている状況です。

また、学力的にも社会性にも問題がないのに、様々な家庭内の事情から、勉強したいのにどうしても学校に行けない、または中途退学をせざるを得ないという学生も、近年増えてきました。

これらの問題のうち1つ、または複数が絡み合い、それが心身の不調となってあらわれる学生もいます。

だからと言って、全ての大学生の学力が低下し、社会性が低く、生活環境が整っておらず、不健康だというわけではありません。

非常に学力が高い学生、社会性がある学生、経済的にも精神的にも生活全体が安定している学生、イキイキと元気な学生もたくさんいます。

あらゆる点において、出来る学生、出来ない学生、満たされている学生、不足している学生、そのどれもが、極端な状況にある学生が多いように感じるのです。

その根底には、不況による経済格差、小中高校における教育格差、人生において多様な人と関わる関係性、遊び場や世代間交流があったか等の文化資本や人的資本などの格差、といったものがあると思います。

一時期、「個性を尊重した教育」「個性を生かした教育」という事が盛んに言われていました。私は、学生が“個性化した”というより、

“多極化した”と感じます。学生一人ひとりが良くも悪くも強烈な状況下にあり、“平均的な学生”という言葉が成り立ち難い、という言い方も出来るでしょうか。

このような実情をふまえ、大学においても、画一的な指導や教育は馴染まなくなり、よりきめ細やかな、学生一人ひとりに見合った教育が必要とされていると思います。

養成校としての大学、専門学校

文部科学省が規定する教育機関としての在り方と、厚生労働省の規定する社会福祉士養成校としての在り方の狭間で、学力・社会性・生活背景、心身の状況等がそれぞれに極化した学生たちに対し、各学校はどのような教育を行えば良いのか。まさに冒頭の「大学とは何か?」、それぞれのスタンスが問われているのです。

私は、社会福祉士養成校の指定を受けている以上、社会福祉士という専門職を養成する義務と責任があると思います。そのカリキュラムを、各々の学校においてどのように消化し、具体的な授業内容、指導方法に落とし込んでいくのか、社会的にどのような役割を持ち、責任を果たすのかという事を内外に示し、義務と責任を果たしていくというスタンスを、明確にする事が必要なのだと思います。

実習四者関係においても、養成校は「うちの学校はこの方法で、こういったことを教育する」と決め、施設・機関に示した上で、実習に関する合意形成を図り、それから学生を実習教育に入らせる。このような事を意識的に行うことが必要なのだと思うのです。

ある大学では、本来の大学の在り方という「そ

もそも論」ではなく、「今の学生に対応した教育」を認識し、大切にしていこうというスタンスをとっています。この姿勢には、様々な意見があると思います。しかし少なくともこの大学には、どのような役割と責任を引き受けようとしているのか、その覚悟が見えます。

ある先生は、その大学に赴任する前、選考面接の際に、こう言われたとの事です。

「うちの大学では研究者でなく、教育者として働いてもらいます。それでもよければ、うちに来てください。」

.....

注1) 社会福祉士及び介護福祉士法第3条には、社会福祉士の欠格条項として“成年被後見人又は被保佐人”

“一定程度の刑を処せられ、その執行を終わり、又は執行を受けることがなくなった日から二年を経過しない者”などとなっています。

注2) キャンパスソーシャルワーカーネットワークが実施した「大学ソーシャルワーカーの配置状況に関する全国調査」の結果報告書によると、2011年1月～2月の調査では、大学での学生支援におけるソーシャルワーカーの配置状況は、32校(7.4%)となっています。

注3) 学生の文章力などについては、対人援助マガジン第2巻1号の本連載を参照していただければ幸いです。

河岸 由里子

かうんせりんぐるうむ かかし

我流子育て支援論

～メディアの問題～

子育て支援に関わっている人なら誰もが、子ども達の社会に蔓延しているゲームやネットの問題に頭を悩ませていることと思う。今までにも各回の所々でゲームやネットの問題について述べてきたが、ここでまとめてみたいと思う。

小学生では多くの子がニンテンドーDSやPSPを持ち歩き、公園などで通信しながら遊んでいるし、中高生では、携帯電話、PSPやパソコンのネットゲームにはまり、夜中ずっとゲームをしていて、朝起きられず、不登校になっているケースも多い。

筆者もゲームをするので、ゲームの楽しさはわかる。一度始めたら、あっという間に時間が経つ。そのくらい、のめりこみやすく、興味を引き付けるように作られている。大人でも問題になるくらいのもなのだから、自分自身のコントロールも未熟な子ども達が、面白いゲームを短い時間で切り上げられるはずもない。如何にゲームをさせないようにするか、ゲームとの戦いはそれぞれ大変である。

保護者にネット環境を切って欲しいと頼んでも、中々すんなりとはいかない。大抵は「そんなことをしたら可哀そう」とか、大きい子では「暴れるから」と抵抗される。そこは、じっくりと、長い目でみて考えてもらえるよう、説得を続ける。

小さい子では、ゲーム機本体を隠したところ、見つけられたと言う話も聞く。家の中に隠しても、大抵は見つけ

られてしまうものだ。また、ゲーム機を母親が持って出たら、子どもがパジャマのまま裸足で追いかけてきたとの話もあった。ゲーム機を持っていかれることにそれ程の抵抗を見せるとしたら、依存の状態と言えよう。

中学生以降では、パソコンの接続コードやモデム本体などを持って行ってもらうが、お金を持っていると新しいものを買ってきてしまうので、インターネットの契約自体を切ってもらう事もある。

「暴れるから」と言われると、支援者としても中々お願いし辛い、「殴ってくるなら警察を呼ぶ」くらいの勢いが必要である。保護者が覚悟を決めねばならない程の問題なのである。こうした努力の結果、ゲームやパソコンが無くて平気になって、目つきも態度も随分と穏やかになった子を何人も見てきた。

ゲームやパソコンを与える上でしっかりルールを決める事、そして、ルールを守れない場合は、使わせないと言う事をはっきりと示し、守らせる力を保護者が持っていなければならない。そこには普段からの親子関係もしっかり反映されるので、要注意である。我々支援者は親子関係を見据えて、保護者が何をすべきか考えねばならない。親子関係が悪いのに、ゲームのことでさらに揉めさせてしまうわけにもいかないが、関係を維持したいからと子どもの言いなりになってしまう保護者には、心を鬼にしてもらわなければならないだろう。

子どもの問題だけではなく、保護者側にもゲームやパソコンの問題はある。

乳幼児検診場で保健師が見かけるのは、携帯電話に夢中で、子どもが何をしているか全く見ていない保護者。メールを打ったり読んだり、或いはゲームをしていたりする。また、子どものお守りにスマートフォンを与えて遊ばせている保護者も見かける。幼児がスマートフォンの画面をサクサクと操作して、自分の好きな画像やゲームを出して楽しんでいる様子を見て、「こういう機械の操作は簡単に覚えちゃうんです〜♪」と嬉しそうに語る。妊婦健診でもおなかの子に携帯電話等から音楽を聞かせている姿もある。

赤ちゃんに授乳しながら、母親がテレビや携帯をいじって居れば、赤ちゃんが母親の顔を一生懸命見つめていても気づかない。何か声を出して、まるで語りかけるような様子を見せても気づかない。これが繰り返されれば、赤ちゃんは母親の顔を見たり、母親に向かって声を出すと言う行動を控えてしまうだろう。

また、1歳半くらいの子どもたちは、とても興味が広がり、行動力が高まるから、保護者が携帯メールやテレビを見ていたり、ゲームをしていると邪魔をするだろう。そうすると保護者は怒鳴ったり酷い時は叩いたりする。子どもはじっとしていることを強要され、動き回れば罰を与えられ、じっとするためにDVD漬けにされる場合もある。こうした子どもを外遊びに連れて行く

と、のびのびと遊び、帰りがらなくなる。そこでまた保護者から詰られる。この繰り返しで、子どもは外遊びも積極的に行かなくなるだろうし、というより、保護者が連れ出さなくなり、結果として更にゲームやDVD 漬けになって行く。

こうして幼少期からスマートフォンやパソコンで子ども用のゲームに慣れ親しんでいる子どもが作られている。パソコンゲームも幼児期の子ども用の知育ゲームなるものさえ作られている時代である。保護者はこれ幸いとそういうものを買って与える。子どもの“知育”と言う名のもと、堂々とパソコンやゲームにのめりこませているのである。

小学校ではパソコンの授業があるので、パソコンに慣らしておこうという保護者の思いもあるだろうし、保護者が使っているので当然のことのように子どもに使わせている例もある。しかし、パソコン画面に見入っている時間が長ければ、目にも身体にも良いわけがない。最近は目を保護するために画面にフィルターを付けている人もいるようだ。

筆者が子どもころ、テレビ画面が目には悪いからと画面に緑色のプラスチック製のフィルター板を付けていたのを思い出す。効果があったのか無かったのか分からないが、まあ、その時代のものよりは効果が実証されているだろう。

フィルターを付けてまでも、パソコ

ンを見させたいと思うことが本当に子どもたちのためになるのだろうか？視力の問題だけではなく、人と目を合わせて話すことへの不安も生む。画面ばかり見ている子どもにとって、幾ら画面が実物に近かったり、或いは実写であっても、生身の人間とは違う。

ニンテンドーDS やこうしたパソコンゲームを幼少期から使っていれば、小学校に入るところにはゲーム中毒になっている子も見かける。背中が丸まり、顎が前に出た姿勢の子どもたち。ゲームはリセットできるが、現実の行動はリセットできないことに苛立ち、誰かのせいする様子も見られる。コミュニケーションが苦手で、同年代との関係性が育たないため、猶更ゲームにのめりこむ。悪循環である。

パソコンやゲーム、テレビの弊害はまだまだある。

テレビよりはパソコンの方がやり取りできると思うが、所詮プログラムされたもので、子どもの自由な発想や創造力を育てることができるのか疑問に思う。様々な学者がプログラムを考えているのだろうが、発見や発展の元になっている発想は、もっと奇抜で自由な物で、プログラムされたものから生まれるものではないと思うのだ。

テレビがデジタル化されたお蔭で、テレビの台数が減った家庭もあるようだが、ゲーム用やビデオ用に別のテレビがある家庭も多いし、子ども用と大人用と分けている家庭も多い。そうなると、昔のように、テレビ番組一つで

揉めることがない。どうやって上手く自分が見たいものを見られるようにするかを画策することは、例え兄弟間の事といえども、頭を使う。相手の気持ちを理解し、言葉巧みに自分の思い通りの話にもっていかねばならない。とても高いスキルである。そうしたスキルを身に着けられない状況にあるのだ。

父親が帰って来れば誰もが黙ってテレビ番組の選択権を父親に委ね、小さな事とは言え一家の主と言う意識が自然にできていた時代とは異なり、近頃では、むしろ父親が別の部屋に追いやられているケースが多いくらいである。

テレビをみたり、ゲームをする時に、兄弟がいれば必然的に取り合いと言う揉め事が起こるが、これは前述のように折衝スキルを身に付ける訓練になる。しかし、揉め事を嫌う保護者は、兄弟が揉めずに済むようにとそれぞれが別々のもので遊べるようにしてしまう。DS は、保護者も含め各自1台持っているという家族も多い。

ただでさえ最近の世の中は、さほどコミュニケーションスキルが無くても、生活に支障が無い事が多いのだから、せめて幼少期から、テレビ番組の取り合いで喧嘩になるとか、おかずの取り合いで揉めるとかあっても良いのではと思うのだが、そうはいかないようだ。

更に、兄弟を公平に扱うと言う弊害が、兄が兄らしく扱われないという現象をも生んでいる。弟や妹が兄の名を呼び捨てにしているも平気なだけでなく、物も公平に与えられる。これでは揉めるはずもない。(あまりにも弟や妹

が兄や姉を馬鹿にしている場合に、筆者は保護者に、「ご飯をよそう時には、長子からとか、兄と弟でおかずの量に差をつけるなど、兄弟間の差をあえてつけてください。」とお願いすることがある。もちろん反対に「兄のくせに」と長子であることを言いすぎてつぶす事例もあるが・・・)

そして、揉めないことを善しとされると、揉めることにイライラする保護者が増える。

子どもは揉めるのが大事だと思っているのは筆者だけか？揉めたり喧嘩したりしても、仲直りが出来るのだと言う事をしっかり小さいうちに学んでいけば、思い通りにならないことに腹を立て、嫌な奴、邪魔な奴は排斥し、消してしまえと言うような、ゲーム感覚の問題行動、いじめや殺人が起こる確率は減るのではと思うのである。

さらに、子どもたちが視覚優位で、聴覚による認知力が比較的落ちているような気がするが、これもメディアの発達の影響ではないだろうか？

近年、ラジオを聴く人が減った。ラジオは想像力を膨らませる事が出来る。車ではラジオや MD・CD が普通だろうが、テレビ機能も備えたナビが搭載され、運転者はともかく、同乗者はテレビを楽しむこともできるようになっている。

本も、IPADなどで、読めるようになっていたので少しは本好きを増やせるのかもしれないが、子どもたちに聞くと、本と言えば漫画と言う子も少なくない。学校では読書タイムを設けて、

子どもたちに読書をさせているし、読み聞かせなども積極的に取り入れている。こういう活動は子どもたちの情操教育にはとても効果があるだろう。文章から、場面を想像し、展開を自分の頭で再現していくこと、その時こどもは脳の様々な部位を使っている。視覚的に与えられるばかりの、テレビ情報やネット情報とは全く違うのだ。

また、テレビ報道も気になる。教師の権威を失墜させたのも、政治に対する信頼を無くさせたのも、将来に対する夢や希望を持たせにくくしているのも、テレビのせいと言っても過言ではないと思う。

一人の教師が何か問題を起こせば、朝から晩まで教師の問題を繰り返し報道し、まるで教師全体が悪いかのような錯覚を覚えさせる。犯罪にしても、自殺報道にしても、事細かに報道し、大人だけではなく、子どもたちも見ってしまうと言う事を考慮していない。いじめ自殺があれば、子どもたちに平気でマイクを向ける。政治家は、国会答弁で平然と野次を飛ばす。学校教育では、「人が話しているときは静かに聴きましょう」と教えているのにである。大人の政治家が人の話を聴かず、批難、罵倒する姿をテレビで見せていて、子どもたちによい教育が出来るのか？

大人の世界と子どもの世界の境界が曖昧な中で、テレビ報道やネット情報は、嘘も本当も絢交ぜに、これでもかと言うほどしつこく、声を大にして放

送している。子どもたちの現実検討識にどれだけ影響するか分からない。正しいものを正しいと、善悪の区別を覚える時期に、わけのわからない報道に毒されて、善悪の判断さえ曖昧になってしまっている。

バラエティーなどで目にするいじめの様なショーも、面白おかしく報道されていれば、子どもたちは自分たちも楽しそうだからやってみようとなって仕方がない。その結果どれだけ友達が傷つくかには思い至れないだろう。テレビでは堂々と放送され、誰もが面白がっているのだから。

報道統制されるような世界になってほしいと言う事ではないが、もう少し、報道する側が子どもへの影響を考えて、報道内容に対し、18禁のように、年齢制限を設けても良いのではないだろうか？そして、保護者がそれを管理監督出来るようにしなければいけないのではないだろうか？電波を止める事が出来ない以上難しいことは分かるが、認識装置がこれだけ発展している現代なら、子どもの顔認識、登録内容などによってみられるテレビやパソコン操作など、制限されるように作る事が出来るのではと思う。

こうした、大人の情報や娯楽に、無防備にさらされている子どもたち。本来なら、思春期に少しずつ、大人の世界に気付き、ずるさや悪さを知るべきなのに、幼児期から大人の世界の出来事に巻き込まれている。これでは、子どもたちが「大人になりたい」と思う

はずがない。どれだけ子どもの世界に、大人の世界を入れ込むのか？

以前こんなことがあった。小学校低学年の男児が女児に対し性的ないたずらをした。単なる興味本位ととるには問題があった。どう考えても、加害児童には今の時期に得なくて良い情報が入っていたとしか思えないのである。

「子ども部屋にフィルタリングを掛けずにパソコンを置くことは、子ども部屋に20人のやくざと5万冊のエロ本を放り込むこと」とおっしゃった方がいらした。

子どもだけが使うパソコンにはフィルターを掛けている家が殆どだとは思いますが、大人用と子供用を分けているから安心とは言えない。子どもたちはロックを案外簡単に外している。暗証を覚えられないからと、誕生日にしたり、書き留めておいたりする家が多いからである。

ロック外しで思い出したが、こんな事件もあった。小学校高学年の女児が、父親の携帯のロックを外し、浮気の証拠となるメールや、卑猥な写真を見てしまったのである。この子どもはショックのあまり、父親にもものすごい嫌悪感を抱いた。当然の事だろう。子どもには見られないと思っていたのだけれうが、甘いのである。

このように、子どもたちの社会には、ネットやPCがすっかり入り込んでいく。

ニコニコ動画など、子どもたちに人

気のサイトを我々大人は見てチェックしているだろうか？パソコンのオンラインゲームを、チェックしているだろうか？子どもたちがどんなものを見ているか、確認しているだろうか？

携帯サイトは、学校裏サイトや中傷メール、チェインメールなど等、問題だらけである。最近でこそ、ネットパトロールなどが盛んになってきているが、ネットを使った誹謗中傷はあっという間に広がり、酷い目にあった子どもたちも多々いた。

中学生くらいになると、携帯ネットで知り合った者同士が付き合いを始めることもある。その中で、互いの性器を写メ（カメラ付き携帯電話で撮影した画像を添付したメール）で送りあったりする。保護者は、そんな写真を撮っていることなど考えもしない。

携帯サイトやPCサイトの危険性についてのDVDも作られ、子ども達が学ぶ機会をあえて設けている学校もあるが、後手に回っているので、この効果が出るには、まだ時間がかかるだろう。

与えられる膨大な情報から、取捨選択して必要かつ有益な情報を得るための教育も大事だが、それ以前に、子どもの場合は保護者が規制をかける必要があると思っている。休みの日は一日20時間近くもゲームをしている子から、ゲームを取り上げ、違う遊びや会話、読書などを楽しむようにしたところ、キシヤスさが改善され、穏やかになった子供を何人も見ている。

人によっては、ネットやゲームで他

人とつながっている場合は、そこが唯一の外界との接点であるから、切らないようにという人もいる。確かにそういう見方はあるだろうが、筆者としては大人がコントロールできない状態を与えておくのは

反対である。中高生ともなれば大人のコントロールは及ばなくなるので、小さいうちが大事だろう。ゲーム代もネット代も、保護者が出しているのなら、それを切る権利は当然保護者にあるが、切れない人のなんと多いことか。

では、今、我々支援者は一体何をすればよいのか？

子どもたちには無限の想像力・創造力がある。玩具は殆どいらない。子ども達は、身体を使い、言葉を使い、目の前にあるものを使い、人を使って、様々な遊びを展開していくことができる。我々はそれを見守ったり、相手をしてあげるだけでよいと保護者に伝えよう。

また、最近の子どもの絵が稚拙なことから、もっともっと絵を描かせることも必要だと思う。その際、自由に描かせることが大切である。テレビも、ゲームも、玩具も減らし、保護者や兄弟、友達など、生身の人と向き合っ、一緒に遊びを創っていけるよう、助言していくべきではないか。

子ども部屋にテレビやパソコン、ゲームなどを置かない、食事の時はテレビを消す、つけっぱなしはやめる等、我々支援者が一生懸命伝えても、「食事中父親がテレビを見るのでそれは無

理」という家もある。保護者が正しい見本を見せることで、子どもは正しい行動を学ぶ。父親も食事の時だけは、テレビを我慢すべきだろう。

保護者がゲームばかりしているという家もある。テレビばかり見ている保護者もいる。子どもたちの行動修正ばかり考える前に、今一度大人の行動を見直さねばならない。それが我々支援者の仕事だと思う。

携帯ゲーム、パソコンゲームといったゲームの問題、ネットやテレビその他による情報の扱いの問題など、子どもを取り巻くメディアの問題は大きい。最近メディア・リテラシーという言葉が良く聞かれるようになった。メディアは使い方で、毒にも薬にもなるのである。子どもたちのために、大人である保護者がメディアを管理できるよう、支援者として見守り、助言して行かねばならない。

かつてパスカルは「人間は考える葦である」と言った。人間とは孤独で弱い生き物だが、考える事が出来ることは偉大であり、尊厳があるという意味とされている。それなのに、「考えること」が苦手になり、与えられる情報のみで防御し、多すぎる情報に振り回され、臨機応変さを失いつつある人たちの中で、そして更に溢れる情報の中で育つ子どもたちを、今のうちに何とかしないと、この国に未来はないのではとさえ思うのである。

次回、最終回として、境界について思う事をまとめてみたいと思う。

不妊治療現場の過去・現在・未来

連載 11

不妊シンドローム（その1）

荒木 晃子

リスク

持ち帰ったバックを開け、その書類の多さに目を見張る。机に積み上げた書類の中身は、黒紐で閉じられた約5年に及ぶ裁判記録だ。内容は、B子さん自筆の供述調書、数人の医師の証言記録、対話を録音したテープとそれを文字起こしした逐語録など、いずれも、私が過去に見たこともない重要な裁判記録と調書の数々だった。現在、私の手にゆだねられたそれらの書類は、持ち帰る道すがら感じたバックの重さよりも、机上にあるそれらのほうが、さらに重く重量感のあるものに思える。「たいへんなものを抱えてしまった」、思わずそうつぶやく。しかし、思いとは裏腹に、その書類をジャンル別に分ける手作業はすでに始まっていた。事の重大さに怖気づく意識に先行する形かたちで、行動化が起きているのだった。

B子さんから委ねられた書類に、ひと通り目を通す作業は終えたものの、最初に何処から手をつけていいものか、皆目見当がつかない。過去に経験のないこととはいえ、何かを始めなければ終わらないことは分かっていた。途方もない思いを胸に、一旦書類から目を離し、静かにいま、自分が最初

になすべきことを考える。すると、B子さんから手渡された宿題があったことに気づく。そうだ、まず、スティーブンス・ジョンソン症候群とは何者かを知らなければ、事は始まらないのだ。専門書を集め、インターネットで検索すると、意外にも膨大な量の関連情報を得ることができた。

スティーブンス・ジョンソン症候群

「スティーブンス・ジョンソン症候群とは、高熱（38℃以上）を伴って、発疹・発赤、やけどのような水ぶくれなどの激しい症状が、比較的短期間に全身の皮膚、口、目の粘膜にあらわれる病態です。その多くは医薬品が原因と考えられていますが、一部のウイルスやマイコプラズマ感染に伴い発症することも考えられます。

スティーブンス・ジョンソン症候群の発生頻度は、人口100万人あたり年間1～6人と報告されており、原因と考えられる医薬品は、主に抗生物質、解熱消炎鎮痛剤、抗てんかん薬など広範囲にわたります。発症メカニズムについては、医薬品などにより生じた免疫・アレルギー反応によるものだ

と考えられていますが、さまざまな説が唱えられており、いまだ統一された見解は得られていません。

早期発見と早期対応のポイントは、「高熱（38℃以上）」、「目の充血」、「めやに（眼分泌物）」、「まぶたの腫れ」、「目が開けづらい」、「くちびるや陰部のただれ」、「排尿・排便時の痛み」、「のどの痛み」、「皮膚の広い範囲が赤くなる」がみられ、その症状が持続したり、急激に悪くなったりするような場合で、医薬品を服用している場合には、放置せずに、ただちに医師・薬剤師に連絡してください。】【1996年11月厚生労働省「重篤副作用疾患別対応マニュアル ステイブンス・ジョンソン症候群（皮膚粘膜眼症候群）」より抜粋】

2000年11月17日朝日新聞夕刊

皮膚粘膜眼症候群とも呼ばれる、ステイブンス・ジョンソン症候群（SJS）は、1922年にアメリカの小児科医が報告した劇症型の疾患。発症から数日で全身の皮膚や粘膜がただれてむけてしまい、症状が進めば命を落とすこともある。命を取りとめても、失明するケースが多い。日本では1993年、抗生物質「コスモシン」の投与による被害が明らかになり、コスモシンが製造中止になったほか、市販の目薬やかぜ薬も含めた千種類を超える薬の副作用で発症例がある。

2000年12月1日日本経済新聞朝刊「薬で皮膚障害、死亡81件——皮膚障害の発症まれ、初期症状で早期治療を」

SJSや、より重症のTENは人口100万人あたりの発生率がそれぞれ年間1~6人、

0.4~1.2人と極めて低い。しかし個人や医薬品を問わず起こり得る可能性があり、厚生省は「初期症状が出たら治療は皮膚科の入院施設のある病院で早期に行うことが望ましい」としている。

同省によると、SJSの初期症状は発熱、発しんなど。それが急速に全身に広がってやけどのような水膨れなどになり、重症化すると呼吸器障害や臓器障害の合併症を起こす。死亡率はSJSが6.3%、TENが20~30%との報告がある。

このように、B子さんからの宿題の回答を私なりにまとめてみた。さまざまな情報を模索するなかから、SJ症候群とは、薬剤やその他医学的処置の後に起きる、副作用をいうのだと理解する。しかも、相当の重症例らしい。文献によっては、劇症型の副作用であり、死亡に至らずとも重篤な後遺症を伴うという記述もある。文献を読み、実際にインターネットで情報検索している間も、私自身が気持のみならず、身体までその重篤さに沈み込む感覚を覚える。特に、SJ症候群を発症した患者の実物写真には、おもわず眼をそむけたくなるほどだ。時折休憩をはさみながら、少しずつ文献を読破し、自分なりにSJ症候群への理解を深める作業は続く。このプロセスが、B子さんの経験へ一歩近づくために必要な経験なのだと、心中で念じながらの作業だった。

記された軌跡

SJ症候群を自分なりに理解できたと確信したころ、次の作業に取り掛かる。机上に

は、まだ手つかずの膨大な書類の山がそびえたつ。その時、数冊の医学書に交じって、多少毛色の違う書籍が目にとまった。何処から手をつけていいものか戸惑いながら進む作業の中で、“目にとまるもの”があることはありがたい。早速、一読する。

著書は、山口研一郎医師の執筆で、いまから16年ほど前に出版された書物だった。ところどころに古びた付箋が付いている、そのページを特に意識しながら読み込む。途中、文中に登場するFさんが、どうやら、現在私がインタビューするB子さんらしいことに気付く。本の最終ページに、Bさんが山口医師に送った「自筆の手紙」のコピーが挟み込んであったからだ。何の説明もないまま手渡されたバッグには、Bさんがかつて体験した、その時代の記録が詰まっていた。ここに、その軌跡の一部を紹介する。

「生命をもてあそぶ現代の医療」山口研一郎著（1995, 社会評論社. p106~p110）より以下抜粋

（登場する地名・氏名等は、プライバシー保護のため、引用に一部修正を加えた）

「(前略) 体外受精の経過中薬害を受けたFさん(37歳、結婚歴12年)の例を紹介しよう。ここには人工授精という医師の手の内に置かれた一人の女性の立場が、象徴的に表されている。Fさんは結婚5年目の1988年より不妊治療を受けた。卵管閉塞に対する開腹手術、卵管通水などを行うが妊娠せず、1991年には人工授精を開始した。6ヶ月後に5回目の人工授精を受けたが、その当日発熱・腹痛が生じ、入院。

抗生物質(商品名コスモシン)やその他

の薬剤を投与され、約1週間後ステイブンス・ジョンソン(S・J)症候群(別名:皮膚粘膜眼症候群 口腔、眼、陰部などの皮膚粘膜に急性の炎症を生じ、全身に発疹、水疱、膿疱などを起こす。抗生物質や鎮痛解熱剤の投与により発生することがある。重症化すると、眼粘膜が侵され、瞼、結膜、角膜のびらんを起し、失明することもあり、また全身衰弱で死亡することもある)を発症した。一時は生命も危ぶまれる状態であったが、数日後他院の皮膚科へ転院し、約2カ月余り入院・治療し、退院。現在も後遺症に悩まされている。

体力を幾分回復したFさんは、1991年末、ある地方の医師会へ、自らが抗生物質による中毒症を生じ、その後の診断・治療のまずさから危険な状態に遭遇せざるをえなかった経過について、事実調査を依頼した。しかし医師会から示された調停は満足のいくものではなく、証拠保全、裁判と進む中、そこに出てきたものは、「改ざんされたカルテ」「肝心な日時が2週間も抜けている看護日誌」「症状がかなり軽くなった段階の状態を鑑定した“鑑定書”」など、被告病院側にのみ有利な状況証拠であった。

ここには二つの大きな問題が横たわっている。一つは、「人工授精」という100パーセント医師側に身を預けた医療の中で生じた事故ということである。Fさんは、「治療を受けた4年間、赤ちゃんが欲しい一心で医療機関の門をくぐりましたが、待合室で待つたびに、いまにも逃げだしたい気持ちでいっぱいでした。他の女の方たちの表情をみても、笑顔や隣の人と話す様子は全く見られず、全員黙ってうつむいており、私と同じ気持ちだったと思います」と話された。

いわば彼女らは、医師に何を言われても、どんな注文をつけられても、素直に「はい、はい」と言わざるをえない存在だったのだ。

私たちが開催した会においても、「長い間、不妊治療を受ける中で、この薬はどんな副作用があるんだろう、この手術はどんな危険性があるんだろうと、不安に思わなかったことは一度もない。だけどそれを先生にきくと、『私は好きでこんな治療をしているわけではない。いつやめてもいいんですよ』『治療を選ぶか、赤ちゃんをあきらめるか、どちらかですよ』と言われ、仕方なく受けてきた」という女性の声があいついだ。医師が患者（女性）に対して、絶対的優位を占める医療現場の代表が「不妊治療」といえるだろう。

二つ目は、ここでも医師側の医療過誤（事故）に対する反省のなさが露呈してしまっているということだ。裁判における最大の争点は、病院で使用されたコスモシンやその他の薬剤とS・J症候群との因果関係である。すでにFさんに対してつかわれた2年前に、コスモシンが同症候群を引き起こす可能性が高いことが判明しており、同薬品の“効能書”にも、“副作用”として、「まれに皮膚粘膜眼症候群（S・J症候群）、中毒性表皮壊死症（ライアル症候群 TEN）等が現れることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には中止し、適切な処置を行う」と述べられている。

それにもかかわらず病院では、同抗生物質の投与中止後1週間余りに発症した病態を、S・J症候群とは気づかず治療がなされなかった。そのことの持つ医師側の「注意義務違反」は明らかであり、明らかな過失とはいわないまでも、Fさん側に誠意を

もって謝罪し、後遺症に対する補償を約束することが必要であろう。しかし事態はまったく逆の方へ進展している。Fさんは私への手紙に、

「私は金銭や被告医師に対する恨みなどで裁判をしているのでは決してありません。むしろ長年お世話になった医師ということもあり、かえって心苦しくさえ思う次第です。（中略）私は、これから生きていく自分自身のためにも、この裁判を納得のできる結果で終わらせたいと思っております。勝敗にこだわるのではなく、こころに平和を取り戻したいのです。身体に残る後遺症は一生消えないかもしれません。しかし、こころにだけは後遺症を残したくないのです。これからは家族や友人たちと共に、前だけを見つめて笑顔で生きてゆきたい…そのための裁判なのだと思います」と書いてこられた。

最近、“医療過誤原告の会”の方々とも知り合う中で、コスモシンの被害が国内いたるところで生じており、死亡や失明のケースが続出していることを知ったFさんは、「私の裁判はどのような結果になるかわかりません。私が裁判を含め今後活動を進めてゆきたいと願っているのは、被害にあわれた方々の苦しみや家族の方々の悲しみに、何かお役に立てればということです。身体の後遺症は私ではどうしようもないことですが、精神的なケアは同じ痛みを知る私ならできるのではないかと思います。今後もっと詳しく正確に全国の被害状況を知り、被害にあった方々とお会いし、共に実情を訴えていこうと思います。それがこれ以上不幸になる人を出さないために、私に与えられた使命だと思っています。念願してい

た子供には恵まれませんでした。今は多くのすばらしい方々と出会えたことに感謝できるようになりました」と語られる。その裁判の最終判決は、1996年春ごろある地方の地裁で行われる予定である。

コスモシンには1992年、厚生省の指導により新たに、「発売以来5年間で皮膚粘膜眼症候群が15例、中毒表皮壊死症が16例、計31例報告されており、このうち6例は多臓器不全等を併発し、死亡しております。つきましては、安全性重視の立場から別記の通り『使用上の注意』を改定いたしました。今後、本剤をご使用いただく場合には、発熱、紅斑、掻痒（そうよう）感、眼充血、口内炎等の初期症状に御留意いただき、このような症状が現れた場合には、直ちに投与を中止し、適切な処置をお願い申し上げます。また、本剤中止後から約2週間までの間に皮膚障害が発現した症例も報告されていますので、投与中止後も十分に経過観察するなど、ご注意をお願い申し上げます」という“注意書”がつけ加えられた。

1992年10月第2回現代医療を考える会「人工授精の実態と問題点」には、10組の不妊の夫婦が出席した。中には、10年以上も『治療』を続けておられる方もいた。彼女（彼）らは口々に、「私たちが、自らの身体の危険を冒してまで不妊治療を受け入れるきっかけになったのは、『まだ子どもはできないの?』といったまわりの人々の不用意な言葉であったことが多い。一般の方々は、私たちの行為を批判する前に、まず私たちがそこまで追い込んだことについて反省してほしい」と訴えた。私たちはこの指摘を、重みをもって真摯に受けとめる必要があるだろう。（後略）

彼女が無言で私に手渡したものは、治療の経緯や、彼女が経験した薬剤による重篤な副作用であるSJ症候群の情報ばかりではなかった。「そこから、私の新しい人生が始まったのだから、それだけは、あなたにも知ってもらいたい」と彼女が言ったように、この経験を知らずして、彼女の“いま”を理解することはできないし、彼女の“これから”を共に考えることもできないに違いない。B子さんが生きている“いま”は、B子さん曰く“私の新しい人生”の語りなのだ。著書の中で、山口医師に送った手紙にもあるように、彼女は、“こころに後遺症を残したくない”とのおもいで訴訟を起こし、采配を法廷にゆだねた。そして、その結果如何に関わらず、自身の経験を役立てたいと願い、それを自分に与えられた使命だと信じ、生きてきたのだ。著書の中の彼女は、私にそう語っていた。自分の命をかけてまで、不妊治療に挑んだB子さんの体験を、あまりにも壮絶な物語だと感じずにはいられなかった。

運命共同体

書類のひとつ一つを丁寧に読み込む日々の中、一通の長いメールが届く。渦中のB子さんからであった。

「(前略)先日は大量のお荷物をお預かりいただき、かなりご負担なのでと案じております。しかしながら、お渡しした書類を一読いただければ、これまでの経緯がお分かりいただけるかと思い、あなたに読んでもらうことにしました。前にも申し上げた

ように（むろん、お読みになったあなた次第ではありますが）、私の経験は、だれが見ても、聞いても決して気持ちのいい話ではないことは存じています。でも、それを知っていただかない限り、私の話はこれ以上進むことはできないと思います。勝手ながら、自分でそう判断し、私の過去をすべてあなたに知っていただきたく、資料をお渡しすることにしましたのです。

いま、どのあたりまで資料をご覧いただいたのかはわかりません。しかし、少なくとも、私の不妊体験を語るには、不妊治療の体験を話すだけではこと足りないことがお分かりいただけたかと思います。

先日申し上げた通り、私はこれまで、起きた事実のすべてを誰かに話した経験がありません。ですから、どこから、どう話せばよいのか全く見当がつかない、というのが本音です。もし、うまく話せなかったら、もし、だれかを悪者にしてしまうような話し方をしてしまったら、と思うと、怖くもあります。なので、あなたには「私に起きた事実を見て、ご判断いただこう」と思いついた次第です。

私の人生に起きた出来事は、私の両親や近しい人々、そして沢山の支援者の方々を巻き込みました。そのうえで、いまの私があります。つまり、私の不妊体験は、すでに私だけの体験ではない、との思いに至っているのです。子どもができないことも、医療事故が起きたことも、おそらく、だれの責任でもないかもしれません。強いて言うならば、私が“自分の子どもを産みたいと強く願うすぎたばかりに起きた出来事”、とでもいうのでしょうか。もしかすると、あの時、私が子どもを望まなければ、一連

の出来事は、起きなかったのかもしれないね。私は今でも、不妊治療したことへの後悔も、そのことで経験した稀有な出来事に対しても、誰一人として恨みに思うこともありません。その反面、自分の命よりも、わが子の命を求めた結果、起きた出来事への代償は、どんな時も私を憂い、何があっても変わらぬ愛を注ぎ続けてくれた両親や近しい人々に払われていたことを、後になって知ったのです。唯一、そのことだけが悔やまれてなりません。私が自分の命にかえてでも欲しいと願ったわが子の誕生は、結局、自分の命を犠牲にしてまで得ようとした私のエゴだったのかもしれない。そして、自分の命を犠牲にするということは、父と母の宝を犠牲にすることだったと気づいたのも、ずっと後になってのことでした。私がまだ見ぬわが子をおもう、そのずっと以前から、両親が愛娘である私を慈しんでくれた真実に、その時は、目を向けることができなかった。まさに、母の愛は時に盲目、ということばがありますが、本当にその通りだと思います。愚かにも、まだ見ぬわが子に、母親としての愛情を注いだのだと思いたい。いえ、そう思わなければ、つじつまが合わないのかもしれませんが。むしろ、そうやって、つじつまを合わせ、生きてきたのかもしれない、そう思うのです。

皆そうであるように、私の人生も決して順風満帆ではなかった。常につじつまを合わせて生きているのなら、当然ですね。それでも生きてこられたのは、両親や近しい人々に囲まれ、日々過ごすことができたからです。先日のシンポジウムで、私はいまいちど、不妊という宿命を背負った自分の人生を、洗い直したいと思いました。もち

ろん、時間をさかのぼることも、過去を塗り替えることも、かなわないことは分かっています。でも、私と同じ“不妊という宿命”を背負い、これから生きていこうとする仲間たちにとっては、大きな意味のあることだと思のです。どうか、いま、不妊に悩む方々や、これから不妊で悩むかもしれない人たちのために、不妊の先へと続く道を切り開いてください。私のこれまでの人生が、その一石として役立つことを願っています。

お渡しした資料は、単なるいち個人の経験でしかありません。でも、あなたなら、沢山の方々の個人的体験を知ることができる。これまでも、そうやって研究を進めてきたことを伺い、いち資料として、私の体験を提供させていただこうと決心しました。ひとは、失敗や挫折から学ぶことが多いと聞きます。私の人生に起きた事実を他者からみると、何が失敗で、どこを挫折とよぶのか、あなたの目線で考えてみてください。そして、それをあなたが研究することで誰かに役立ててほしいのです（後略）」

おもいを綴った長文に、運命共同体を感じた。その中に、「私の不妊体験は、すでに私だけの体験ではない」、とあるように、この資料を手にとった段階で、私もその共同体の一員となったのである。いま、自分の内に、ふつふつとわきあがる、この感覚は、おそらくB子さんが「私の使命」とよぶものと同種のものなのだろう。たとえ、彼女の過去を共に生きることはかなわないまでも、彼女の新しい人生の運命共同体にはなれるかもしれない。いや、すでに、その協働作業ははじまっている、そう確信した。これから資料を読破するためには、うごめ

くこころの内をセルフ・コントロールする大きな力と、膨大な資料に記録されている経過を研究者として客観的に観察し、深い考察をもって分析する必要がある。そう、自戒する。

(次号へ続く)

対人援助学 & 心理学の縦横無尽 8



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

福島・ふくしま・Fukushima (2)

福島訪問 2012.11.3 11.05

はじめに

歴史の機能とは何か。歴史には物語の機能があり、制約はあるものの、様々な出来事を「つなぐ」機能を果たすものだと言える。もし、出来事をつながないのであれば、それは単なる出来事の羅列であり、それは歴史とは言えない。そして歴史研究のもう一つの機能として、再(評価)がある。これは異なる文脈からの再評価という意味で捉えることもできる。物事の意味は文脈によって多様に変化する。過去の出来事もまた、後続のどのような文脈に位置づけるか、あるいは、後にどのようなことが起きるかによってその意味が変わってくる。

卑近な例で恐縮であるが、筆者は立命館大学に奉職する前は福島大学の教員(1994-2001)であった。このことは、筆者にとって前歴の一つにすぎなかったが、2011年の東日本大震災(とその後の放射能人災)によって、大きく意味が変わった。東日本大震災という事実が、それ以前の出来事である筆者の福島大学在籍という事実を変更することは不可能であるが、個人にとっての意味づけは大きく異なることになったし、周りの見方も変わった。そしてまた、福島大学に在職していたということの意味が現在の筆者の生き方を多少なりとも変えている。学生と共に復興のために少しでも役立ちたいと考えている。

2012年6月の訪問は第10号で紹介した。9月にも訪問したが、そのことはまたいつか書くことにして、11月初旬の訪問について書いてみたい。

今回、研究員・学生・院生と10人規模で福島に出かけた。勝手に言っているのだし、場合によっては飛び込みに近い形で訪れた場所もあった。しかし「来る」ことについて、私

たちが「行ったら迷惑ではないか」などと躊躇していたのは全くの杞憂だった。

今回は、学部生の黒田絢子さんを中心とするサトゼミ生が、福島県の情報発信事業「いいね！ふくしま」に採択されたため、その取材をかねて、福島県に出かけた。前回、前々回は浜通り（海岸地域）に足を伸ばしたが、今回は福島県の魅力をワイドに知ってもらうため、中通りの福島市訪問を中心にしつつ、会津地方を訪れた。福島県は、会津、県庁所在地の福島市がある中通り、そして浜通りの3つの地域に分かれており、それぞれ、風土と魅力が異なっている。

2012年11月3日

この日は福島大学の学園祭の日だった。誰にアポをとったわけではないが、学生委員とか学部長（福島大学では学類長と呼ぶ）はいるだろう、と勝手に考えて突撃。案の定、多くの元同僚に会えた。また、学生達の突然かつぶしつげな質問にも答えてくれた。



行政政策学類長・辻みどり先生は当日のことを語ってくれた。



地震直後、まず重要になったのは水の確保。また、学生の安全確認。幸いなことに福島大学学生に震災による犠牲者はいなかった。次に、放射能の問題が明らかになったときに、学生を自宅に戻すかどうか、ということが問題になった。国が「放射能は大丈夫だ」と言っているのに大学が学生を福島から出すなんておかしいではないか、それは放射能が危ないって言っているのと同じだからやめるべき、という反対論があったという。これについては、結局、帰りたがっている学生を大学が支援するのは人道にもかなっているということで一件落着となった。この件に限らず、安全・安心をめぐる見解の違いは、大学のみならず多くの人たちにとって非常に重要であるにもかかわらず、というか、重要な問題であるからこそ、複雑な影を落としているとのことである。さて、いくつか、当時の様子を示すものが、動態保存の形で残っているので写真に収めさせてもらった。写真左は、2011年3月の張り紙である。教員たちが、様々な手配をしていたことを示すものである。写真右は、とある方の、研究室。2011年3月11日大震災後の様子。行政政策学類棟の7階の部屋だそうです。



佐々木先生の部屋を訪ねたら、学生委員で待機とのことでお話を伺えた。



福島には、人がいない、子どもが遊べないと思われているが、メディアの情報に影響を受けているのではないか。たとえば、2012年の9/11にNHKが特番を放送した際、子どもが遊べない公園を映していた。子どもにもインタビューしていたのだけれど、その子も「外で遊べない」というような答えをしていた。そういう答えをした子どもがいたのは事実だろうが、放映されている実際にその公園に行ってみると、子どもが野球をしていたりする。

次に、やけに親しげな鮮魚商さんが来た、と思ったら元同僚の塩谷先生でした。



次は千葉先生と修士課程一年生の佐藤くん。佐藤くんは2012年4月から福島に来たとのこと。Rのマーク入りのチョコレートをおみやげに差し上げました。



家族がバラバラになっていることの複雑さを様々な角度から語ってくれました。

11月3日は土湯温泉に宿泊。向瀧旅館。11月1日に再オープン。つまり、震災の被害を復旧するのにそれだけの時間がかかったということ。

11月4日



旅館の前で記念写真を取り、五色沼を經由して喜多方へ。今回の目的は福島の良いさを伝えるということも重要なので、裏磐梯という観光ルートを移動して、景色の美しさを実感し、それを伝えることにした。



この景色。これが福島である。

さて、喜多方、と言えばラーメンなので、もちろん食べた。



その後、お土産屋さんも営む漆器店、木之本漆器店へ。何を隠そう、ここは私の母の実家、つまり「おばあちゃんち」なのである。現在の当主は私にとってイトコにあたる遠藤久美さん。孫がいるとは思えない！



久美ちゃん（と幼い頃は呼んでいた）は、「一番大きく変わったことと言えば、住んでいるひとが2つに分かれたこと」だと感じているという。助けが必要な人／助けたい人という二分法、あるいは、ここから逃げなきゃいけないという人／この場に残ってがんばっていかなくちゃという人、の二分法が立ち現れたというのである。

喜多方市は、震源からも原子力発電所からも遠かったのだが、もちろん、様々な影響を受けている。6000人の方が避難してきているとのことである。地震直後、とにかく店を開けていたそうである。店を開けていることによって、多くの人が、止まり木のよ

うに木之本漆器店を訪れてきてくれたとのことである。実際に、商売になったのかといえはなっていないのだが、店を開けていたために、この店で一息ついていった方々がいたし、後日再び訪れてくれた人もいた。それで良かったと思う。

放射能について、恐れているわけではないが、やはり情報が少ないと思う。チェルノブイリの事故など誰もが知っているのだから、そこから得られたこと得られなかったことなどを丁寧に説明してほしいし、それがなくて、疑心暗鬼になりがちのところはある。喜多方市は修学旅行生が多かったのだが、去年はゼロになった。裏磐梯地方は実際に放射能の数値が低いとは言えない以上、仕方無いのか、と思う面もある。そういう意味で、福島を経済的打撃は、もしあるとしても、どこまでが風評被害で、どこからか実害なのかわからない、という気持ちもある。

ただ、外の人が思うほど、悲壮感があるわけではない。現在来ていただいている方々がもう一度来たいと思ってもらえるように、努力すべきだとは思う。

安全論者もいれば非・安全論者もいるわけで、結局どっちを信じるかは自分次第である
これは全てのことにはいえるし、風評被害の問題もそうであると考え

喜多方から福島市に戻って来て向かったのは - これまでも何度か訪れている - 高橋果樹園の高橋さん。ふくしま土壌クラブとして活動するなど、地元の農家としてできることをやる、という姿勢に貫かれている。奥様は知る人ぞ知る、元「ミス・ピーチ」。お二人の真摯な姿勢には常に頭が下がる思いである。

高橋さんは、実は色々なことをやってきた。しかし、除染などは、一生懸命やれば、そんなに汚染されているのか、と思われてしまう側面もあり、複雑だとおっしゃっていた。本当に真摯に色々なことをやってきた。その努力が結果に表れてきているという自信もうかがえた。「福島の果物のおいしさをアピールする」ということが大事だというのが今の心境だそうである。

高橋果樹園の努力については、いつか、きちりと、文章にまとめて皆様にお伝えしたいが、慎重に書く必要があるので、時間が必要である。



夕方は福島大学の元同僚たちと軽く宴会。福島大学時代の大学院の教え子の鈴木実氏、立命館大学元ゼミ生の日高君（福島県立医大助手）も参加してくれました。元々は縁もゆかりもなかった二人が福島で知り合いになってくれる、というのはうれしい。教師をやっていて、幸せな気分になれることのひとつである。

11月5日

11月5日は、福島民報社を訪れ、社内にある財団法人 福島民報厚生文化事業団事業団を通じて寄付を行った。今回の寄付は、「立命館大学・応用社会心理学受講者学生有志＋研究部職員有志」の名前で行いました。5名がその代表として写真に収まり、翌々日の福島民報の新聞紙面を飾りました。

ちなみに、福島には地方新聞が二紙あるのですが、それは福島民報と福島民友。福島新聞というような名前ではありません。明治時代における自由民権運動発祥にふさわしく、新聞に「民」の字が使われているのでしょう。



その後、松川にある避難所へ。ほぼ飛び込みに近かったが、大歓迎してくれた。



おわりに

今回も、また、いろんな言葉に出会った。

「おおサトウタツヤか。よく来た。でも、来るのが遅いじゃないか！」 と言ったのは福島大学の小島先生。何も言わずに、顔を見るなり、いきなり、である。しかし、震災後、一年半後、ということが前提になっている。

「ちょこっとでもいいから、みなさんに福島に来て欲しい。何もお買い求めいただかなくても、みなさんが来てくれている、ということが自信になる」とは 土湯温泉 向瀧 支配人氏。

「こうやって皆さんに関心をもってもらって、来てもらえるのが、うれしいです」と言ったのは福島民報記者氏。

「一度来てくれるのもうれしいけれど、それっきりの人たちよりも、何度も来てくれる人たちとの関係は、また別のもの」と言ってくれたのは高橋果樹園の経営者 氏

「また、いつでも来てくださいね」と送り出してくれたのは、川内村松川避難所の管理人 氏

福島を、可能な限り繰り返し、訪れること。そして、その時、その時の福島の様子を伝えること。おいしい福島の名産品を味わってもらうこと。今できることはそうしたことだけなのかもしれない。

というわけで、私たちは、立命館大学の学園祭での「いいね！ふくしま」展示を行った。福島の人たちの写真と、高橋果樹園のリンゴジュースである。



ドラマセラピーの手法（2）

「 発 展 的 変 容 」

～加害者への治療セッションを一例として

尾上 明代

ドラマセラピーの手法紹介 2 回目の今号では、アメリカにおけるドラマセラピーのパイオニアの一人、David Read Johnson が開発した「発展的変容」を取り上げる。

1. 発展的変容の特徴

プレイスペース（遊び・劇空間）でセラピストが共に演じる

まず、ドラマセラピスト自らがクライアントの共演者となって演じながら導くのが、大きな特長の一つである。セラピストが、指導者・監督という立場で、クライアントに指示して進めていくものが多い中、このアプローチは、セラピストが演技空間に自ら入り、文字通り自分の身体や感情を使ってクライアントと出会い、関わる。セッション内容は、前もって予定されることは一切なく、また決まったゲームやワークをすることも一切ない。セラピストは、セラピールームのドアを閉じたその瞬間から、強力な遊び・演技空間を創り出し、それを保ちながらセッションを進めていく。すべてがどんどん変化変容し続けるプロセスが創

られる。終わりの時間になったら、クライアントを残してセラピストは先に部屋を出ていき、その日のセッションは終了する。いわゆる言語的シェアリングや振り返りは、しない。つまり、それらもプレイスペースにすべて包含させる手法なのである。

発展的変容のプレイスペースにおけるプレイとは、「そこで発生することは全て現実の表象・想像された存在の表象であり、また描写としての演技である」と参加者同士が相互に約束・同意の上で行うものである。（おもちゃや小道具を使わずに）人と人が直接「出会って遊ぶ」のであるから（つまり、想像力を使うしかない）、結局はドラマ的なもの、架空の世界を演じることになるのである。

英語の play には遊ぶという意味と同時に、何かを「する、行なう」という意味がある。「行なう」対象は、「現実」のような何が起こるかわからない状態での活動ではなく、ゲーム、ドラマ、スポーツ、音楽など、決められた約束事の範囲内での架空の交流、活動になる。発展的変容の「遊び」

ということばも、その範疇で使われており、演技、劇、ふり、という意味と同じで、「クライアントと遊ぶ」「遊び空間」などと言う場合も、上記の意味が含まれている。

人と人が直接関わる

セッションに使う部屋には、いくつかのクッションと証人の輪 (Witnessing Circle) と呼ばれる丸い布 (セラピストが、クライアントと自己の内面的感覚を静かに観察したいとき、ドラマ空間から出て座るための布。そこで、次の場面への衝動やイメージが創り上げられると、ドラマ空間に戻っていく。) が1枚あるのみで、それ以外のもは一切置いていない。クライアントが子どもの場合もちろん同じで、人形やおもちゃは一つもない。Johnson は、その理由を次のように説明する。

これら実際の物体があると、投影の対象物になってしまう。発展的変容では、そのような投影は、人間に向けてもらいたいと考えている。そうすることで、お互いがより早く出会うことができ、また、そこに介入できるようになる。投影の対象になるとき、物体は、人間が行なう対応とは異なり、自分の扱われ方に応じての回帰的な反応ができず、そのため、劇の進行が固定化されてしまう。この固定化されるという効果は、他の形のセラピーの場合、助けになることもあるだろうが、発展的変容の場合は通常、その進行を阻害する。(Johnson, 2000, 2009, 参考)

回数や対象者

目的や状況に合わせて、少数回のセッ

ションを実施することもあるし (もちろん1回でも可能)、多数回 (多い場合は100回以上) 受けるクライアントもいる。回数を重ね、プロセスが進行するとともに、プレイ (遊び・劇) の内容も表面的な劇 (surface play) → ペルソナ (対外役割) の劇 (persona play) → 親密な劇 (intimate play) → 深い劇 (deep play)、という段階を経ていく。また個人セッションもグループセッションもできる。

対象者の可能性も広い。病気や問題、悩みを抱えて受ける人もいれば、創造性を高めたい目的の芸術家、また自らの楽しみのためにセッションを受けに来る人もいる。

開発されてから約30年間の実践については、さまざまな研究論文で報告されている。それらの対象者には、PTSD・精神病・薬物乱用などの患者、被性虐待児、ホームレス、高齢者、暴力性の高い男性 (退役軍人など) が含まれていることからわかるように、難しい対象者に効果を生み出すことが可能だ。もちろん、セラピストの熟練と、的確で継続的なスーパービジョンが必須の条件である。

影響を受けた分野と概念

発展的変容は、さまざまな分野から影響を受けている。その一部を紹介すると：ピアジェの研究、ウィニコットとスターンの研究、対象関係理論、精神分析の自由連想、クライアント中心療法、家族療法、オーセンティックムーブメント・音楽療法などのクリエイティブ・アーツ・セラピー、サルトルらの実存主義哲学、ポストモダン作家 (特にデリダの解体という概念)、フーコーの特権と権力の概念、仏教、特に空 (く

う)・自然(じねん)、色(しき)の乱れと無常の概念など。演劇分野では、スポーリンの即興劇、グロトフスキの持たざる演劇、マイズナーのメソッド、音楽からの影響としてジャズ理論と方法論全般などなど。

このように、多岐にわたる分野が発展的変容の実践と理論構築に貢献している。

2. 事例：加害者の治療として

ではここで、この手法の具体的な治療事例を、Dintino と Johnson の共同研究：「加害者と演じ遊ぶ ～発展的ドラマセラピーにおけるジェンダーダイナミクス」から紹介する。(Dintino & Johnson, 1996, 参考)

クライアントが「被害者」であることは、よくあることだが、「加害者」の場合(しかも重大な犯罪である場合)は、どのようなスタンスが治療者に必要だろうか。また、女性に対する犯罪を犯した男性加害者に、女性治療者が対応する場合は、どのようなことが起こるのだろうか。

この論文は、発展的変容を暴力性の高い加害者の支援・治療にどのように使うのか、さらに、男性クライアント対女性セラピストのダイナミズムについての考察など、興味深い報告となっている。

冒頭で Dintino と Johnson は、加害者クライアントとの「プレイ」による治療の要点を、サラ・ヘイリー(Haley, S. (1974) *When the patient reports atrocities*, *Archives of General Psychiatry* 30) を引用しながら、以下のように述べている。

加害者クライアントと行なう、プレイスペースによる治療には幾つかの重要なポイントがある。まず、「加害者」自身の中には「犠牲者」が内在しているということ。さらに加害に対する自責の念が渦巻いており、被害・加害・自責の感情が錯綜しているという点である。

そして、加害者から残虐行為を行なうという感情が示された場合、支援者が、目の前にいる「人」「感情」にただちに共感するのは難しい場合が多い。クライアントが被害者であれば、その心情に共感するのは、支援者にとって大きな障害となることは少ない。しかし、それが加害者の残虐な感情であった場合、共感して遊ぶ(劇をすることができない事態が発生する可能性がある。

故に、「残虐性」など大きな負の感情をプレイの中で扱う場合は、まず自分自身の中の「残虐性」や負の感情を探索し、それと共感し対峙できることが重要な前提となる。

さらに、「残虐な行為・感情」がプレイされたとき(セラピストはそのプレイの一部になり、クライアントを受け入れ、一緒に演技するのだが)、そのような「受け入れ」はそれらの行為を受け入れることではない。援助者が行なうのは、善悪の感情を失ったときに発生した要因を患者とともに探索することだ。プレイスペースをしっかりと作ることが、セラピスト・クライアント双方に、その区別をはっきりさせる。

そして、現実と「プレイ」との区別は、悪そのものか、悪の「表象」のプレイであるかどうか、危害を加えるか、危害を加える「振り」をしているかどうかであり、その境界が実際のプレイスペースで行われる

べきプレイ（遊び・行動・演技）の「限界」として設定される。

セッションのプロセス

具体的事例として、ベトナムで残虐な殺戮行為をした戦争帰還兵たち（男性グループ8人）と女性ドラマセラピスト(Dintino)のリハビリ治療セッションのプロセスが、彼女とスーパーバイザー(Johnson)の考察・指導とともに紹介されている。上記の加害者クライアントという側面に加えて、女性援助者対男性加害者クライアントというジェンダーのダイナミズムが働く様子が記述される。

セッション初期、クライアントたちによる性的示唆・行為、糞尿行為などのプレイ、女性セラピストへの反応を確かめるような言動が繰り返される。それらにセラピストが影響を受けて、屈辱を与えられているような感情が起こり、自由な遊びや劇を創る彼女の能力も邪魔される。投影や転移感情と「遊ぶ」ことが難しくなり、現実との境界が揺れる。しかしスーパーバイザーからの指導と、セッションの意義の共有をすることで、セラピストはクライアントのプレイと内面の関係を再確認して、積極的にプレイすることでセッションを続ける。

その後クライアントたちは、セラピストに対する反抗から離れたが、自分たちで「バブル嬢」と名付けた巨大な女性性器を作り上げる。セラピストはそれを受け入れられない。スーパーバイザーとの考察のあと、

セラピストは、その巨大像を拒否することをクライアントに宣言。皆で、バブル嬢を天井の隅にしまう。クライアントたちの劇はその後、内面の弱さの表象のプレイに変化する。そして、一人の男性が子どもを出産し、PTSDで無感情の子どもが生まれる。その子どもが他の遊び道具に変化し、巨大性器の中に戻っていく。セラピストがバブル嬢に帰ってもらいたいと言うと、クライアントたちは一人ずつバブル嬢への自分の思いを述べる。

「彼女は体重500ポンドのダンサー。」

「120ポンドで子供の時、虐待された。」

「本当は善良なんだ。いじめて悪いと思う。」・・・

ここでグループ全体が、急に哀しみの感情に覆われる。

「実は、彼女は帰還兵一人ひとりと一緒に仕事している。」

「彼女は、押入れに週末閉じ込められていた。」

「刺青いっぱいだね。」・・・

その後、バブル嬢を来たところに返すことにした。何人かは、気持ちよさそうな声を出し、そして、彼女を空の彼方に押し返す。

次にクライアントたちは、「PTSDの木」を作り上げ、その木を皆で切り倒す。その根がクライアントたちにつながっており、それを一人ずつ掘り起こし、それがどんな根であるか皆で描写する。根は男根とのアナロジーとなっており、一人一人が、弱い根しか持っていないことを、悲しく物語る。激しい感情と弱々しい内面との関連が、象徴的に演じられながら認知されていく。

そして全ての根は、魔法の箱（セラピー

の中で登場したアイテムを、毎セッション後に入れるための想像上の箱)に入れられ大事に保管される。

考察

「ジェンダーダイナミクスは多くの投影の入れ物になる。異なったジェンダー間での演じ合いの中でこそ権力、権威、搾取、欲望、不確かさなどについての問題がとても良く表出されやすい場となるからだ。」
(Dintino, Johnson, 1996)

一般のセラピーでは(またドラマセラピーであってもセラピストがディレクター役をする手法においては)権威をもつ立場の指導者が、客観的に指示やアドバイスをしながらセッションを導いていくが、発展的変容を使うと、セラピストとクライアントがプレイスペースという同じ土俵で共に演じ・遊ぶので、「権威者」の立場が何度でも入れ替わることができる。発展的変容ではこの「イメージの転換」をプレイ・治療の基本、そして変容の根本として扱う。通常セラピーでの転移、逆転移、投影などが、プレイの中の表象の変化として具体的に演じられる、と言える。身体と感情で演じるがゆえにホリスティックなプロセスとなる。

退役軍人たちは、最初は権威をもつ女性に対する恐れや憎しみを投影する外的対象として、女性セラピストを標的にした。しかし、遊び・演じる空間がしっかりできあがったあとは、バブル嬢やPTSDの木のような想像上の対象を創り出した。その後はもっとフレキシブルに女性の役を彼ら自

身で体験し始め(子どもを生むなど)、最終的には、自分の中にある弱い部分、恥を感じる部分を認知することができた。同時にセラピストは逆転移感情的な怒りを縮小できて、本来、親近感をもたらすものである遊び・劇を通して彼らと内面的に関わることができた。

Dintino と Johnson は、「ドラマセラピストは、癒しの場としてのプレイスペースを信頼することで、偉大な力の治療プロセスを促進させることができることを信じている。」と強調する。

「加害者クライアントを治療するとき、彼らが暴力的な内面を投影することはその後の安定にとって根本的に重要なプロセスであり、また悪逆な形象が表出されたとき、セラピストがそれに耐え、受け入れることは、必要な治療ステップである。そのような段階のとき、プレイスペースの特質(=そこは現実ではない)をしっかりと双方が理解することは、セラピストが平衡感覚を保つための大きな助けとなる。セラピストは、クライアントたちに、過去の暴力行為や、将来再びやってしまうかもしれない可能性を認識させつつ、かつ、異なった行動を選ばせるという重要な仕事をしているのである。ドラマセラピーの中で、この選択というプロセスが生き生きと蘇ってくる。というのは、プレイスペースの動きの一つひとつの瞬間は、暴力的な行為をするかしないか、セラピストへの暴力を制御するかしないか、つまり、女性への暴力をするかしないか、という選択の連続なのだ。」(Dintino & Johnson, 1996)

つまり、瞬間瞬間の選択の繰り返しの中で、将来、暴力を振るうことをしないという体験を先取りして行なっている。一回ではなく、何回も何回も暴力の誘惑に打ち克っていき、という連続が最も重要な治療プロセスだと思う。暴力的な行為をしないという選択ができれば、それは、セラピストへの暴力の抑止を意味し、つまりは女性への暴力を抑止することに繋がるのだ。

発展的変容とは

事例を提示したあとで、ここで改めて Johnson 自身の簡潔な説明を紹介したい。

「プレイ」の中に、患者の内面の無意識、別の自己などが、通常の「制限、抑圧」なしで登場し、そして、変化し変容して、その他の自己と統合されていく。これは、昇華、自我を作るための退行とも呼ばれ、ドラマセラピーの大きな特徴である。

発展的変容が意図する主要な効果は、個人がもつ、存在の不安定への恐れを減少させること、特に「身体」、「他者」、そして「変化」に関連しての恐怖を減少させることだ。発展的変容は、この効果を達成するために、個人をゆっくりと具象化・身体化が求められるような状況のなかに置いていく。この具象化は、今・ここでの他者との出会いに焦点を置き、常に変容していくものだ。ここで求められているものは、私たちが自由であるという感覚を制限している、「身体」「他者」そして「変化」というものが劇として・遊びとして演じられるということだ。そして、それらが、より少ない怒りや恐怖の感覚で受け入れられるようにするのである。発展的変容は、このことを達成するた

めに、表現することを繰り返し実践していくことで、「現在」という感覚を大きなものにする。自分を他人へ与える、他人に自己を自分に向けて与えさせる能力が高まるにつれ、世界への障壁はますます少なくなる。(Johnson, 2000, 2009, 参考)

「壊れたおもちゃ」という概念

Johnson は、発展的変容のセラピストは、クライアントの(生きている)おもちゃだ、という概念をもっている。しかし、その「おもちゃ」は全く不完全であり、それが当然だ、それで良いのだという。以下に引用する彼の主張は、私の気に入っている一節である。

発展的変容では、人を改善するとか、精神的対立を減少させるとか、性格上の欠陥を修復するなどという試みをするのではない。むしろ、私たち人生のこれら有害な諸側面をできるだけ完全に開示し、その開示に伴う恥、当惑、嘘、心配・不安という反応が、洞察、ユーモア、受容、赦し、そして「ま、仕方がないか!」という反応に置き換えられるようにすることだ。全ての遊びの道具、「おもちゃ」と同じように、私たちは最終的に壊れていくし、また他人の操作の誤りでも壊れるのだ。部品が足りない、前のようには、回ったり、話したりできない。電池の残りが少ない、ボタンがうまくはまらない。しかしながら、私たちがそのような不完全であっても、遊びたいという意欲が打ち克つのである。そして、私たちはおもちゃと同じように、また持ち上げられ、遊ばれ、世話をされ、喜びを与えられ、そして、時には何年もの間、遊戯室や寝室

やおもちゃ箱に保管されたままにもなる。ちょうど私たちが、愛しているけれど壊れている人たちを自分の身近にいつも引き寄せているように。これが結局、存在するということの全てなのだ。(Johnson, 2009)

Johnson は、この手法の出典の一つとして、仏教の三法印（諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜）の中の最初の二つをあげているが、上で述べられていることは、そのような悟りの境地に近いと言えると思う。そして、かなり強い、生きる、というメッセージだ。受容・受忍の中から、生存への大いなる意志を汲み出そうという力を感じさせる。本来、悟りが終着点でなく、再生の端緒だと理解すれば、Deep Play（この手法で長期セッションを続けた最終段階）にも、悟りと同じエネルギーとモメントがあると言える。

最後に ～David Johnson の素顔

私は今年 2 月に、David を初めて日本に招き、東京で彼のワークショップ、続けて彼のパートナーである Hadar Lubin（トラウマ治療が専門の精神科医）のワークショップを開催した。ワークショップの最中、震度 3 程度の地震があった。二人にとっては、地面や建物が揺れる初めての経験だったようだ。David はセッション終了後、私に「もしもあの時、もっと大きな揺れになって逃げなければいけなくなった場合は、さてどの窓から逃げようか、どうやって彼女を守ろうかと思ったよ」と話し、「愛『妻』家」ぶりを垣間見せた。（参加者たちへの心配はその後のようだった・・・）翌日、二人

仲良く箱根観光へ旅立って行った。

ところで、彼の発展的変容研究所はニューヨークにあるが、実践を行っている研究所は、世界各地に広がっている。アメリカの他の場所に 6 箇所、カナダ、イギリス、ベルギー、フランス、チェコ、オランダ、ギリシャ、南アフリカ、イスラエル、香港、オーストラリアである。（何度かお会いする中で、日本にも作るようにという、彼の密かな希望を感じている・・・）

また PTSD 治療センターもニューヘイブンに開設している。彼は、発展的変容の目的は、クライアントが不安定さや怖れがあっても生きて行けるようにすることだ、という。そのセンターは、元消防署だった跡地に建てたそうだ。危険や PTSD にまつわるイメージが強くあるところを選んだのだ。また、9 1 1 テロのビル崩壊時のかけらがセンター建設時に使われている。トラウマ治療を扱うような場所では、平和な雰囲気を作ったり、リラックスできる音楽が流されたりしているイメージがあるが、そのようなところに、人が持っている苦しさを堂々と取り出して、取り組むという彼の哲学が表現されているようで興味深い。

また彼は、人生の無常、全てのものが変化し続けていることを、この手法を教える中でいつも言っており、例えば、手法の説明やテキストも常に書き変えることで、そのことを体現している。よってテキストは出版したことがなく、しばしば変化・進化した原稿をインターネットなどで更新する。最新版にも「これこそが発展的変容なんだ、とは絶対に思わないで！ あなたが読んでいる間にも、変更されるかもしれないから」

と書かれていて、こちらも興味深い。

この手法の全容は、とても数ページでは説明し尽くせないが、具体的な事例を提示したことで、その意義がほんの少しでも伝えられたとすれば幸いである。

今回は、退役軍人へのセラピー事例をとりあげたが、他にも、精神障害をもつホームレスの人たちへの治療セッションで、彼らが人としての尊厳・自尊心を取り戻していった事例や、家族から性虐待を受け続けていた8才の男の子が回復していった事例等々、この手法だからこそ、より良い結果に結びついたらと理解できる実践が数多くある。

文献

Dintino, C. and Johnson, D. R.
(1996) *Playing with the Perpetrator: Gender Dynamics in Developmental Drama Therapy. Drama therapy: Theory and Practice, Volume 3*. London: Routledge.

Galway, K.C. Hurd, K. & Johnson, D.R.
(2003) *Developmental Transformations in Group Therapy with Homeless People with a Mental Illness*. In Wieber, D.J. & Oxford, L. K. (Eds), *Action Therapy with Families and Groups: Using creative arts improvisation in clinical practice* (pp135-162). Washington D.C. American Psychological Association

James, M. Forrester, A. M. & Kim, K.C.
(2005). *Developmental Transformations in the Treatment of Sexually Abused Children*. In Haen, C. & Weber, A. M. (Eds), *Clinical Applications of Drama Therapy in Child and Adolescent Treatment* (pp.67-86). Taylor & Francis Group.

Johnson, D.R. (2009). *Developmental Transformations: Towards the Body as Presence*.
In Johnson, D.R. & Emunah, R. (Eds.), *Current Approaches in Drama Therapy*. C.C.Thomas.

Johnson, D.R. (2000). *Developmental Transformations: Towards the Body as Presence*. In Lewis, P. & Johnson, D.R. (eds.). (2000). *Current Approaches in Drama Therapy*. C.C.Thomas.

家族造形法の深度

11 事例検討における家族造形法の展開

「アウトサイド」と「インサイド」

早樫 一男

家族造形法を使った事例検討の場合、事例提出者（彫刻家役）の作る作品（家族彫刻）は、あくまでも事例提出者によるケース（家族）のアセスメントや見立てです。

「アウトサイド」から理解した家族イメージを「造形」というかたちで、視覚的・具体的に再現したものと言ってよいかもしれません。家族メンバーを配置することによって、家族システム（全体）へと視野を広げることができます。

家族役からのフィードバックはさまざまなヒントを与えてくれることとなります。「インサイド」からの声と言ってよいかもしれません。家族役に対して、細かな情報を伝えていないのに、実際の面接の中で語られた「言葉」を、家族役がフィードバックの言葉として語るという不思議な体験はこれまでたくさん経験してきたところです。このような場合、事例提出者のアセスメントが大きく間違っていなかった考えることができます。

事例提出者にとって予想外の言葉がフィードバックされたなら、それは新たな気づ

きにつながっていきます。

家族造形法を使った事例検討は、従来から行われている机上の事例検討ではなく、体験を通じた事例検討法である分、ライブ感覚も含まれた展開であるということについてはこれまでも言及したところです。

また、展開によっては、事例提出者はもちろん、参加者にとっても興味深いものとなります。

これまで紹介しているように（第2号～第5号 参照）、第一段階は、事例提出者のイメージとして思い浮かぶ家族（造形）を作ります。そして、各メンバーからのフィードバックとなります。

その後の展開の一つ（第二段階）を紹介します。

居心地のよい状況（関係）を作る 確認する

各メンバーの感想（フィードバック）はさまざまです。自分自身の姿勢や相手との

関係（距離感や視線の向きなど）を通して、「とても楽だ」「あたたかい」「安心できる」といった肯定的な感想がある一方、「窮屈」「しんどい」「居心地がよくない」「居場所がない」などといった否定的な感想もあります。もちろん、その両面について、語られることも少なくありません。

そこで、これらのフィードバックを丁寧に確認した後、『それぞれにとって居心地のよい状況を作ってみましょう』と提案することが少なくありません。

家族が自ら動く

他の家族の動きに触発されて動く

その際、家族役に対して、自ら動くように教示しています。もちろん、ある家族役の動きに触発されて、他のメンバーが動いても構いません。ある家族メンバーの関係の変化は他にも波及するからです。それは家族がシステムである所以です。

「居心地のよい状況」が作られていくプロセスや家族の動きの変化を「アウトサイド」から見ていると、は大変興味深いものです。

最終的に「居心地のよい」家族造形を作った後は、改めて、しばらく静止し、その時の気持ちに焦点をあてます。その後の各メンバーからのフィードバックは、静止している時に感じたことだけでなく、完成するまでの動きを通して感じたことも語ってもらうようにします。

ファシリテーター役は、家族役同士の意見交流はもちろんのこと、事例提出者や観衆役などとの交流にも心がけます

改めて、「アウトサイド」と「インサイド」

最初の造形は事例提出者が「アウトサイド」から見た作品ですが、家族役が主体となった「居心地のよい状況」は「インサイド」からの作品となります。

前述したように、「居心地のよい状況」が作られていくプロセス（家族役の動き）について、興味深く注目していると、新鮮な発見をすることもあります。それは、家族の変化のありようです。

ところで、第一段階は事例提出者が「アウトサイド」から造形を作り、「インサイド」の声に耳を傾けました。「居心地のよい状況」を家族役自らが作るという第二段階は、「インサイド」からの動きを「アウトサイド」が見守っているのです。

準備に時間を要する必要がない（事例提出者のケース理解と簡単な家族情報があればいい）、参加者が一体となって事例のことを体験的に考えたり、味わうことができるなど、対人援助現場における利便性と展開可能性、面白さはさまざまです（第6号～第8号 参照）。

対人援助とは、援助者が「アウトサイド」から見た理解（アセスメントや見立て）と利用者や家族による「インサイド」からの語りを「家族の物語」として織り込んでいく作業なのかもしれません。

家族造形法を通じた事例検討はこのようなことを示唆しているようです。

きもちは、 言葉を さがしている



第10話

水野 スウ

わが家で週一のオープンハウス「紅茶の時間」をはじめから、2012年の11月で丸29年。文字通り、誰でもどうぞ、の場所なので、実に実にたくさんの方が通り過ぎていきました。

ふりかえればどの時代にも、印象的な登場人物さんがいて、紅茶という場に、意味深い彩りや、新しい気づきをつけ加えてくれていたなあ、と今あらためて、有り難く、想いします。

人間スクランブル交差点のような、紅茶の時間にやってくる人たちは、割合からすれば、40代から上のおんなの人たちが圧倒的に多いのだけど、そこに時折、若い人がまざることもあって。

今回は、そんな若者たち、SちゃんとTくんの話、少しばかりしようと思います。

Sちゃんのこと

同じ団地の同じ通り、わが家から歩いて20秒のところに住んでるSちゃん。最初は、当時、小学5、6年生だったお姉ちゃんが、近所の同級生たちと紅茶によく遊びに来ていたのです。今から10年余

り前のこと。

そのお姉ちゃんが小学校を卒業する時、「中学に行ったらもうあんまり紅茶にこれないと思うけど、そのかわり、4月からは妹が来るので、スウさん、よろしくお願いします」とあいさつされました。

その申し送り通り、4月になると一人で紅茶にやってくるようになったSちゃん、お姉ちゃんとは6つ違いの妹。これまで保育園に通っていたので、6時に閉まる紅茶には一度も来たことがありませんでした。

両親がとも働きで核家族のおうちの子の多くは、小学校にあがると同時に校区の学童クラブに行くことになったろうから、Sちゃんにとって、来はじめの頃の紅茶は、いわば、週一の私設学童クラブ、のようなものだったかもしれません。

同じ団地に住むNさんは、子どもと遊ぶことにかけて天才みたいなおばちゃん、紅茶に来る子どもたちの、いつも大の人気者。もともと顔見知りのSちゃんも、このおばちゃんがめっちゃ大好

きで、Nさんが仕事の合間をぬって紅茶に顔をだすなり、もううれしくてうれしくて、毎週、遊んで遊んで、と、金魚のふん状態になってそのおばちゃんから離れようとしなない。

根っから子ども好きのNさんなので、子どもと遊ぶのはそりゃ楽しい。だけどその一方で、紅茶は、彼女自身にとっても、他とはひときわ違う意味をもった場所だったようです。

多種多様な人との出逢いがあり、様々な本音の話しに真剣に耳を傾け、そこからまた新しい自分を発見したり、等身大の自分を語ったり、と、いつもは家にこもって仕事している自分への、紅茶は、貴重なごほうび時間。

仕事が忙しくて、紅茶へも限られた時間しかいられない、という事情もあったNさんは、ある日の紅茶で思いきって、そんな自分のきもちをSちゃんに伝えました。

これって、双方にとって、とても大事な通過点だったんだろうな、と思う。Nさんは、相手がまだ小学一年生であっても、きちんと自分のきもちを伝えなきゃいけない、と思ったことで、あらためて紅茶と自分の距離について考え、紅茶が、自分にとって、ただおしゃべりするだけの場ではなくて、こころの栄養をくれる、とくべつな時間と場所であったことを、なお実感したみたいでした。

そしてまたSちゃんも、大好きなおばちゃんのこと、ここは独り占めできないとこなんだと知り、同時に、そのおばちゃんにとっての紅茶がどういう場所なのか、幼いなりに、ほんの少しだけど理解したんじゃないかなかったらうか、と思います。

紅茶な時間の過ごし方

それからSちゃんは、相変わらず毎週の紅茶に、学校から帰るなりやってきたけど、見てるとほほえましくらい、けなげに、徐々に、おばちゃんのお金魚のふんじゃなくなっていきました。

おばちゃんを含め、おとなの私たちが真剣に話したり、誰かを聴いている時は、その場に居ながら、Sちゃんは静かにひとり遊びをしています。

そして人が少なくなる頃あいをみはからって、「ねー！紙芝居はじまるから、見てみて」と、お気

に入りの紙芝居を木枠の舞台ごと引っ張りだしてきては、残ったおとなたちの前で演じてくれることもありました。

紅茶にくるとたいてい、まずは宿題をすまして、それから、紅茶の本棚にある好きな絵本を読んだり、話しかけてくるおとなからの、「紅茶にはいつも一人で来るの?」「この間もここで会ったね、覚えてる?」といった質問にもハキハキ応えては、しっかりしてるね、とほめられたり。時には同級生たちを何人か連れて来て、紅茶で子どもたちだけで遊ぶこともありました。

小学3,4年生の頃だったか、同じクラスの不登校の子と、ある時期は毎週のように紅茶で遊んでいた。学校に行ってる子と行ってない子が、なんとなく一緒に居られる、紅茶というゆるやかな空間。

なんで学校にこないの?などと、その子に一度も訊かないあたりが、ここに来続けてるSちゃんならではの、紅茶な態度だったなあ、と思います。

こういう場所に不慣れなおとなは、わりとあれこれ尋問するけど、紅茶の仲間とよべる人たちは、あたらしくやって来る誰に対してもむやみやたらと質問しないこと。個人的なことは、その人その人が話したくなかった時、自然と話しだすものなんだ、ということ、Sちゃんはきつとからだ感覚で知っていったのでしょうか。

肩書きや、どこどこの所属、ということがいっさい問われない紅茶の場の空気を、彼女もいつのまに、いっぱい吸い込んでいたのだろうな、と思います。

「こころカード」

紅茶では、その時々顔ぶれに応じて、「ところで、いきなりですが」と私が言いだし、簡単なワークショップのような、ゲームのような、非日常の時間が突然はじまる、ってことが結構あります。

そのワークショップを純粋に楽しみたくてする場合もちろんあるけど、会話の流れが、噂話や、

誰かの個人攻撃に走りそうな気配のする時など、しばしばいくつかのゲームに、場の空気少々入れ替え係をしてもらうのです。

その中でも、とくにSちゃんのお気に入りなのが、「こころカード」ゲーム。

「心」という字がはいっている漢字一文字を、思いつく限り何枚でも、折り紙一枚に一つづつ、書き出していく。「優」「恋」「聴」「志」「思」「芯」「想」「愛」「慎」「憶」「慶」「怖」「葱」「快」「意」「情」、等等。

ほんの数人でしてもすぐ、その場に何十という漢字が並ぶ。その中から、今日の自分のきもちにあった漢字のカードを一つか二つ選んで、なぜそれを選んだのか、短く話す。

たったこれだけのことだけど、意外なほど、自分でも無意識だったその日のきもちにふっと気づいたり、発見したり、そこから会話がふくらんでいったりと、思わぬ場面に展開していくことが何度もありました。

ねっ、スウさん、今日もまた、こころカードしよう、しよう、と自分から言い、これまでに何回もしてきて、たぶんおとなの誰よりもたくさん、心のつく漢字を書き出せるようになったSちゃんが、ある日の「こころカード」で選んだ一枚は、「悲」という字でした。

「あのね、この間、おじいちゃんが死んだんだ。もう年だったんだけどさ、一緒に暮らしてなくてさ、何だかやっぱりさ……。だから、今日はこの字にしてみた」

あ、今日のSちゃんはこのことが言いたかったのか。いつも明るくふるまっているSちゃんにしたら、いきなり自分から言うには少々戸惑いみたいなもんもあったかな、それでこころカードのちからを借りて、そのきもち、みんなの前でちょっと出したくなったのかもしれないな、って思った。

カードでキーワードを出せた後は、その場にいた数人のおとなたちが、Sちゃんの語るおじいちゃんの話に、ゆっくりと耳を傾けたのでした。

「ん」しりとり

彼女のもう一つのお気に入りゲームは、「ん」しりとり。

ふつうのしりとりなら、「ん」で終わる言葉を出した方が負けになるけど、「ん」しりとりは、「～ん」ではじまって「～ん」で終わる、いわばルールがさかさまのしりとりです。

例えば、新幹線——専門——問診——心音——温暖——だんだん島のみかん——感心——心臓のお医者さん——サンタさん——サンドイッチマン——マンガ大好きどらえもん——問題解決本——ほんまは、あかんねん——ねんころりん——リンカーン、といった具合に続けていく。

このしりとりも、その日その時の顔ぶれで、繰り返し楽しんだゲームだけど、ある日の紅茶で、ちょうど「ん」しりとりしてる最中に、40代くらいの、うつむき加減の、はじめての男の人がやってきました。

一応ルールを説明してから「ん」しりとりを誘ってみたけど、どうやらその気はなさそう。一体何やってるんだ、ここはそもそもどういうところだ、っていう顔で、ブスとしたままそこに居て、紅茶を入れても黙ったまま会釈して、一口すすりただけでした。

Sちゃんやほかの人たちとしりとりを続けながら、私が「もうそろそろネタも切れたね、今日んところはここまでにしようか」と言って、「千円」を区切りに、「ん」しりとりを終わろうとしたその時、これまでひと言も発しなかった、初紅茶の彼が、小声でぼそり、「えんしゅうりつはさんてんいちよん」。

!!「円周率は、3.14」そう言った彼に、うまい! と拍手したら、はじめてその人は顔をあげて、ちょっとだけ笑いました。

翌週の紅茶に、その人がふたたびやって来た時すかさず、Sちゃんが「あ!円周率さんだ!」高らかにうれしそうに、そう呼んだものだから、その瞬間、彼は思わず、自然な笑みを浮かべてしまった。

その日の紅茶がとりわけはやってなかったこと

も幸いしたんでしょう、紅茶を何杯もおかわりしながら、問はず語りに、彼はどろどろにたまっていた胸のうちをいっぱい語ってくれました。

大のおとなだって

時には重た苦しい空気になることもある紅茶のさまざまな場面で、私は何度、Sちゃん存在に助けられたことだろうか、と思う。彼女は、きまって毎水曜日の何時間かを紅茶で過ごし、私たちの会話の中にはめったに入ってこないけど、その分、実にしっかりと私たちの話を聴いていました。

何もなくていい、ただ、そこに居ていい、という紅茶の時間で、等身大の、素のままの、自分をさらけ出すおとなたちが、こんなにもたくさんいることを、Sちゃんは、何度も何度も目のあたりにしたはず。

見た目は立派な大のおとなが、いつも陽気にみえるあのお母さんが、美人のお姉さんが、学校の先生や看護師長さん、社長さん、それにお坊さんだって、時にはおちこんだり、悩んだり、しんどかったりすることがあるんだ。弱音をはいて、弱みを見せて、時には泣くことだってあるんだ。

ふつうの小学生にしたら、日ごろそうそう目にしないだろう場面に、Sちゃんは紅茶で何度も立ち会ったことになります。

Sちゃんに限らないけど、子どもとんやかやおしゃべりしてると、その言葉のはしばしから、家族の風景や親ごさんの価値観、ご夫婦のかたちなど、時にとてもリアルに見えてきます。

「うちのお母さん、体育界系だからさ」とSちゃんが言うように、ガンバルも、根性も、気合いも、きっと嫌いじゃなさそうなお母さん。一時、スポーツクラブをやめなくなったこともあったけど、「言ったって、うちはどうせやめさせてもらえんからね〜」と、紅茶でこぼしたこともあったっけな。

だけどね、そういうきっぱりしたところがまさにうちのお母さんなんだ、と彼女は十分わかっているんだよね。何より、お母さんを大好きなこと、こっちにだっていっぱい伝わってくるし、だからこそ親のことを、実によく見ているなあ、って思

う。

「お姉ちゃんとあたしと、子ども二人育てるのって、親ってほんとに大変だよなあ」なんて、ちょっとおとなな口調でSちゃんが言う時、その口調の中に、両親への感謝もいっぱい感じられるのです。

子どもの前で、おそらく弱さは見せないタイプの、Sちゃんのお母さん。でもそんなお母さんにだって、つらい時や泣きたい時も、きっとあったろう、あるんだろう。

Sちゃんは紅茶に來続けて、いろんなおとなたちの、等身大の姿も涙もたくさん見てきたことで、同年代の他の子たちよりは、はるかに豊かに、子どもには見せない両親の様々なこころ模様だって、想像することができたのじゃないかなあ、と思います。

中学校へ

小学校を卒業する時、Sちゃんは、私にすばらしい感謝状をくれました。そこに書かれていた私の肩書き(!笑)は、「紅茶の学校 校長先生」でした。

6年間、ほぼ皆勤賞だった彼女にとって、たしかに紅茶はもう一つの学校だったと思います。私の役職名が、校長の他にも、紅茶おかわりいれ係、みんなの話きく係、ゲーム係、といろいろ並んでいて、ああ、よかった、校長さん、って肩書きだけじゃなくって、と、そのあたりがとてもうれしかったです。

中学にいったら、部活もはじまり、お姉ちゃんがそうだったように、めったに紅茶にはこれなくなったSちゃん。それでも、学校が早く終わる水曜日、期末試験にはいった水曜日、台風で学校が臨時休校の水曜日、などにはきまって紅茶にやってきました。

実をいうと、Sちゃんが中学生になる時、失礼ながら、私はちょっと心配もしていた。何をしなくても、ただbeでいることがまったく赦されている紅茶は、たとえていえば、まるで温泉みたいに、

ゆるい場所。だけど、今どきの中学校は、もちろん全然、ゆるくない。

どの子どもも、小学生の時とは比べものにならないくらい、点数や結果といったdoを求められ、それによって評価されるのだろうな。そんな場では、Sちゃんのまっすぐな正義感や率直なものいいが、逆に彼女をつらくさせることもあるんじゃないか、なんて懸念が、なくはなかったのです。

でもどうやら、それはあんまり私が心配しなくてもいいことだったみたい。Sちゃんは、現実の学校と、非日常の、いつときシェルター的な役割を持つ紅茶との違いを、6年間、紅茶に毎週通うことで、自ら充分に、学んでいたようでした。

高校へ、そして

「紅茶ってさあ、家とも学校とも違う場所だよ、そしてなぜか不思議と、思っていることがすつと言葉になっていくところなんだ。学校じゃ、こんなふうには絶対いえないもん」

ある日の紅茶でそう言ってくれたSちゃん。

今もたまに紅茶に顔をだしては、学校でのいやなこと、家では言えないお母さんへのぐちなど、ぼろりと口にするので、また自分のきもちをリセットする、そんな技を彼女はもうすっかり身につけていました。その程よいバランス感覚を見ると、ああ、この子ならどこに行っても生きていけそうだ、って思えてくるのです。

Sちゃんは小学生の時から、大きくなったらマッサージする人になるんだ、いろんな人の肩こり治してあげたいんだ、と言ってました。大工しているお父さんの肩を、もんであげると、きもちいいなあ、上手だねえ、と何度も言われて、やがてそういう夢がふくらんだらしいです。

中学3年生時点で、背丈はもうとうに私を追い越したSちゃん。高校でもまたバレーボール部にはいって、背もさらに伸びた。

夏休みに久しぶりに来た時、高校卒業したら石川を出ちゃうかも知れんけど、結婚して子どもが生まれたら、その子つれて絶対くるからさ、スウさん、それまでずっと紅茶続けててよね、と真顔

で言われました。

ひえ～～、そんなに長く続けられるかどうかわかんないけど、でもそう思ってもらえるのは、うれしいことだねえ、と返す私。

Sちゃんはこの春、高校3年生になります。マッサージする人、からもう少し具体的に目標が定まってきて、今は作業療法士になるための学校進学を、めざしているところです。

Tくんのこと

およそ20年も前になるでしょうか。「紅茶って、オレみたいなのが、行ってもいいとこながけ？」と富山弁で電話をかけてきた男の子がいます。

オレみたいなの、の中味は、学校に行っていないオレ、という意味だったとわかり、彼にも、紅茶は誰でもどうぞな場所、なんだとわかり、以来、Mくんはわが家の紅茶にやってくるようになりました。一時期は毎週のように、それも富山から一時間半くらいかけて、自転車で。彼はその頃たしか、17.8歳だったと思います。

その2年くらい後だったか、Mくんが実行委員長になって、不登校を語るシンポジウムが富山大学で開かれました。パネラーの全員が不登校を体験している若者で、その一人が、Mくんより少し年下の、石川のTくん。

彼の話をお聴くのは、私にはその日がはじめてだったけど、あ、そういえば、小学校の途中から学校に行っていない、という3兄弟妹が石川にいたんだ。その真ん中がこの彼なんだな、と話を聴いているうちにわかりました。

その後しばらくして、Mくんから電話がかかって。富山の時にパネラーの一人だったTくんが、今度は金沢でシンポジウムを開こうとしている。もしよかったら、その会のうちあわせを、スウさんちでさせてもらえないだろうか。そんな経緯があって、金沢でのシンポジウム実行委員会を何回か、わが家で集まってすることになりました。

「学校って何？」

小学5年生の時から中学と、ずっと不登校だっ

たTくんは、その時、19歳。金沢の通信制高校に通っていて、Tくんの当時のガールフレンドがその高校と同じ場所にある進学校の生徒だったこともあって、彼には、通信制高校ともだちとふつう高校ともだちとの、両方がいたのです。

おそらくそんなつきあいの中から、学校に行っていようといまいと、どうやら誰にとっても「学校」は大きな存在で、問題で。それにそもそも、「学校」っていったい何なんだろう、と考える機会が、彼にはとりわけ多かったようでした。

そこで、金沢でのシンポジウムは、学校に行てなかった子と学校に行ってる現役高校生、あわせて7人が、同じテーブルにつき、「学校って何？」をテーマに、パネルディスカッションでおおいに語りあおう、ということになりました。

なるほどねえ、確かに、不登校のシンポジウムという、学校に行かなかった・行けなかった子が体験を話して、不登校の親たちや、不登校に関心のある先生とかおとなたちが聴きにきて、でも学校に行ってる子もその親も、そこにはめったに来ない、というのがこれまでのスタイル。

今回、若者たちがしかけようとしているこのシンポジウムは、その意味で、1998年時点では金沢にかつてなかった、新しい試みかもしれない。実行委員長のTくんのそういう着眼点が、私にはとても新鮮でした。

このシンポジウムの宣伝を兼ねて、Tくんと一緒に、二人で金沢市内のいろんな学校をまわりました。19歳の実行委員長が熱く語るシンポジウム計画を、行った先々の高校の先生たちは、思った以上に関心を示して聴いてくれたようでした。

また、学校に向かう車の中で、いつもTくんは私にいろいろと質問をし、私は私で思ったことを言い、また彼も感じたことを言い、その移動時間はまるで、車中二人紅茶のようでもありました。

若者たちのシンポジウム

当日は大きな会場に、何百人もの参加者。司会もパネラーもスタッフも、全員若者たち。弁護士さんや東京シューレ代表の方の対談に続いてはじ

まった、10代の7人によるパネルディスカッション。

テストは必要？からはじまって、「学校って何？」ってなに？／学校に行ってる・行てないで線を引くことについて／いい不登校と悪い不登校ってあるの？／義務教育について／自分らしく／人生の目的、などなど。

まったく予定調和的でないディスカッションがすごくおもしろかったし、会場の親からの質問に対しては、子どもが学校に行かないことで、不安なのは子どもよりもむしろ親なんじゃないか、ってニュアンスでパネラーが即、切り返すあたり、私も親の一人として、リアルにはっと気づかせられる場面がたくさんありました。

ディスカッション、とってもよかったよ、せっかくだから冊子にまとめたらいいよ。そう言って、テープ起こしを申し出てくれるプロのおとながあらわれたことから、若者たちが編集してのなかなかユニークな冊子、『学校って何？～これが僕らの生きる道』も、ほどなく完成しました。

うちの本棚にあった、もう残り一冊となったその冊子を、今、10数年ぶりにめくってみたら、おしまいのページに、私はこんなふうに書いてます。

「自分たちでしたいことする時、元気はうちからわいてくるし、したくないことさせられたら元気なくなるのが（子どもだって、おとなだって）、はっきり見えた数ヶ月間でした。

石川・富山の若者たちが集まったの打ち合わせ会は、毎回、熱いパネルディスカッションそのもので、うん、こりゃ当日絶対おもしろいぞ！と確かに予感したけど、当日は予想をはるかに越えてました。どのパネラーも自分の言葉を持ってたこと、違う意見にもきちんと耳傾けていたこと、この当たり前が、ほんとはすごいことなんだと思いました。

火の玉になっていろんな人との出逢いに飛び込んで行った実行委員長も、舞台に乗った人も乗らなかった人も、『学校って何？』にかかわったすべての人の、これは“成長のものがたり”です。まぜてくれてありがとう、私自身、とっても楽し

かった。]

このシンポジウムが大好評で、また、それを記録した冊子も思いのほか広く読まれて、一時、Tくんはあちこちからお声がかかったり、講演会で話す機会など、かなりふえたようでした。

シンポジウムに参加した人や、彼の話をお聴いた人が紅茶にくることも結構あって、「不登校だったのに、Tくんってすごいねー」とか、「ああいう不登校ならいいわねえ」といった感想も時折、私の耳に聞こえてきます。

そのつど、私は、んん？ とひっかかりながら、ああ、こういうことか、学校に行ってる・行っていないの線引きのことや、いい不登校・わるい不登校という分け方やとらえ方など、ディスカッションで語りあわれたのって、まさにこういうことだったんだよなあ、と若い人たちが語ってた言葉の意味を、あらためてとらえ直すことが何度もありました。

不登校のヒーロー？

ちょうどそんな頃だったか、Tくんがふつうの紅茶の日に来て、だけど6時の、紅茶を閉める時刻になってもなかなか帰りにくそうにしている。いったん玄関に出て帰りかけ、それからまた思い直したみたい、「スウさん、聴いてもらいたいことがあるんだけど、まだいいですか」って言って、もう一度、家にあがったのでした。

どうやらその頃の彼は、まわりから、まるで不登校のヒーローみたいに見られてる感が強かったようで、そのことへの違和感が、どんどん増殖していたのだらうと思います。顔立ちがジャニーズ系のかっこよさもあいまって、よけい、そんなふうに見られてしまったのかもしれない。

その日、彼が私たち夫婦の前で少しずつ、ちょっとずつ、話してくれたのは、まずは、世間が勝手に抱くTくんに対するイメージと、彼が思うところの、自分自身の実像との、大きなギャップのことでした。

ほんとの自分はちっともすごくないし、いつもきれいなところにいるわけじゃないし、弱いところも、ずるいきもちも、いっぱい持っている。だけど、そうじゃない部分ばかりいつのまに強調されて、なんかすごい人みたいにかん違いされて、そうじゃないっていても、誰にも信じてもらえそうもなくて。

そうかあ、そんなふうに感じてたんだ。それって確かに、しんどいし、キツイことだろうね、と思いつつ、そういうことを本当に苦しいと感じる彼の、まっすぐすぎるほどの正直さに、ちょっとびっくりもしたのでした。

荷物をおろすと

黙って聴き続けている私に、彼はそれから、自分がいかに弱虫だったか、ずるい人間だったか、それをまるで証明しなきゃなりません、みたいな真剣さで、子どもの時からのいろんな話、親とのこと、兄妹とのこと、ともだちとのこと、つかえつかえ、汗をかきかき、顔を真っ赤にしながら（緊張すると、彼はすぐ赤くなるたちらしく）、必死に、なんと真夜中までかかって、語り続けたのでした。

全部語り終えて、ふう〜っと大きなため息をついた時、やっと、お茶でもいれようか、のど、乾いたでしょ、と言えたぐらいの、緊迫した空気の中に、私たちが居たこと、その時点で私もやっと気がつきました。

その瞬間に、彼の表情がいちどきにゆるんで、弛緩して、でれでれになって、とろけちゃいそうな顔になったこと、今でもはっきりと覚えています。全くジャニーズ系じゃなくなって、芯から解放された、のびやかな、なんとも子どもっぽい顔になっちゃった彼でした。

一人で抱えていた重たい荷物を、よいこらしょ！ って、おろし終わると、こんなふうからだごと変化しちゃうこともあるんだ、と、ここまではっきり私に見せてくれた人って、彼がはじめてじゃなかったかな、と思います。

スウさんにこんなこと話したら、なんだ、そん

な人だったのか、とがっかりされて、軽蔑されるんじゃないか、嫌われるんじゃないか、とこわかった。だけどスウさんには、嘘をついたままの自分でいたくなかったんです。

どうしても話さなくちゃならなかった、というその理由が、私の前で自分をごまかしたくなかったからなんだ、とわかった時、なんとまあ、不器用で、だけど誠実なんだろう！ と、おとなの私の方こそ、胸がきゅっとしめつけられる想いがしました。

彼が必死に話した内容の一つ一つよりも、あの緊迫した数時間を、私たち夫婦と一緒にわかつ持った、ということの方が、きっとずっと大きな意味があったんじゃないだろうか。あの時間は、Tくんにとっても私にとっても、その後の互いの関係性において、関所のような、越えなきゃいけない峠のような、大事な通過点だったんだな、と今でも思うのです。

不登校を誇りに

その後、Tくんは、東京で何年間か介助の仕事につき、やがてケアマネジャーの資格をとり、数年前に結婚して、今は関西で、自立生活センターの、介助者を取りまとめるコーディネーターとして働いています。

24時間の介助を必要とする人のかたわらにいて、時には言葉を持たない人に付き添い、寄り添い、身近の生活の手助けをする仕事。ある利用者さんから、介助の仕事は、君の天職だねえ、と言われたことが、彼には心底、うれしかったらしい。そして彼自身、今はそう思っているようです。

何より、不登校をしていた経験が、介助者としての彼の仕事に、現在とても活かされている気がする、と、ある時、とてもうれしそうに話してくれました。

学校に行っていない、というだけで、まわりの人から、時に見下され、軽蔑され、差別され、ともだちから理不尽なことを言われ、自尊心をぐちゃぐちゃにされたこと。ともだちの親からも、うちの子とはもう遊ばないで、あの子も行かなく

なると困るから、と言われたこと。

だけでも、自分がそういう経験をしてきたがゆえに、彼は、重い障がいのある利用者さんともにいる時、上から目線に立つことが、決してできない。そのことが、介助の仕事をするのに欠かせない大切なことの一つだと、彼はいつ頃からか、気づいたのだそうです。

あんなに苦しくてしんどかった、その渦中にはまったく“負”にしか思いようもなかった経験が、人生のどこかで、新しい意味を持って見事に反転する。そういうことが、生きている途中で、本当に起きるのですね。

支援センターにバイトではいつてくる学生たちには、自分の不登校をよく自慢しちゃってるんです、なんて話す彼、不登校を誇りにすら感じてる彼は、いかにも彼らしい、いい人生を生きてるんだなあ、って、しみじみ思ったことでした。

名づけ親

Tくんが紅茶に来だしてから、はや15年余り。

私たち夫婦のありようや、娘と私の親子関係、家族のかたち、そのどれもこれも、紅茶に来はじめの頃の彼にとっては、ものすごいカルチャーショックだったらしい。

夫婦の、どっちが上でも下でもない、どなったり、命令したりもしない、たいらな、認めあう関係性。彼の目には、まさに不思議に映った、親子間、夫婦間の会話や空気。私たちにしたら何気ない日常のすがたが、その後の彼の、家族観や夫婦観に、おおきな影響をおよぼしたみたいです。

不登校をしていた子どもの頃は、死ぬことばかり考えていたという彼。将来、仕事をしている自分も、結婚する自分も、かけらほども想像することができなかった、というTくんが、今は、互いにその生き方を応援したいと思えるパートナーと出逢い、その彼女とあたらしい家族をつくり、その上、父親にもなりました。

実は、パートナーが妊娠数ヶ月目の頃、Tくんからある日、とても真剣なお願いごとをされたの

です。生まれてくる赤ちゃんの、名づけ親になってほしいという、よもや思いもしないリクエスト。

そんな重大な役目を、まさかまさか。だって名前という大事なものは、あなたたち両親か、本物のおじいちゃんかおばあちゃんがつけるものだよ、といったんはおことわりしたものの、Tくんが、「僕らの人生にとってとても大切なひとに、子どもの名前をつけてほしいんです」と本気で言うこと、彼のパートナーも同じように思っていること、二人が二人とも、私たち一家の存在を、おおきな意味での家族だと思ってきてくれたこと……などを知った時、そうかあ、こういう家族のありようもまた、この若い夫婦が独自に進化させていった、新しい家族観なのかもしれないな、と思いました。

親が名前を考えると、どうしたってその子にいろんな期待をこめすぎるだろうし、その子をどこか、自分たちの所有物みたいに思ってしまうことがあるかもしれない。何より、生まれてくる子には、たくさんのひとの間に、いろんな人との関わりの中で、育てて行ってほしいと願ってるんです。

そう言われた時、とりわけ最後の、「ひとの間に」という言葉に、何かすとんと納得しました。そうだね、それが本来の「人間」、なのだものねえ。

というわけで、生まれて初めての、ゴッドマザー役を。

彼らの間に生まれてきてくれた女の子の名前は、良きことを想う——想良、と書いて、そら。

木+目と書く「相」の字は、生い茂った木を見ることで、木に象徴される自然から、ちからをもらう、という意味があるようで、その字に「心」がつくことでさらに、ひとを思いやる、という意味もくわわる。

そんな想いをこめ、どうか、良きことを想い、ひとを想い、しあわせなところで生きられる子でありますように、と願っての、想良ちゃん。

私たち一家を、おおきな家族とみなしてくれてるTくん夫婦。ちなみにうちの娘はすでに、想良ちゃんにとっての、血縁によらない“おばちゃん”なのだそうです。

想良ちゃんがいつか思春期をむかえて、両親に

反抗して、時には家出なんかしたくなった時に駆け込める、シェルターの家出先を、今からいくつか確保しておきたい、というTくんですが、まずは娘のところか、その家出先候補の第1号、なのですと。

通過点

誰かと出逢って、つきあいを続けていく中で、大切に思えるひとと私の間には、やっぱりいつも、見逃せない通過点があるんだなあ、とあらためて思います。

何をもって、その人を信じられるか。その人を大切な存在だと思えるか。どうやって、その通過ポイントを、ともに越えられるか。

Tくんの場合ならまさしく、あの深夜にまでおよんだ彼の等身大のカミングアウトだったと思うし、私のところに現在住んでくれている、他の誰かれを思い起こしてみても、やっぱり、その人その人、と私の間に、一つ一つ物語をはらんだ、通過点というものが、確かに存在しています。

出逢って何十年たとうと、最初の時から距離の変わらない人もいれば、ごくたまにしか逢えないけど、忘れられない出来事や事件といった重要な通過ポイントを共有して、いまだに強いつながりを感じられる人もいる。

その人が今生きている人であっても、この世にはもう居ない人であっても、ともにそのポイントを分けあって越えて来た人とは、この先もきつとずっとつながっていけるのだろうか……。そんなことを、この第10話を書き終えたたった今、ふっと感じました。

2012年11月25日

やくしまに 暮らして

ネイチャーガイド

大野 睦



第十章

冬の屋久島



はじまりのとき

南の島、南国に冬はないと思われがちであるが、屋久島は日本列島の北から南までの気候や植生が見られる島である。秋があまりはっきりしないままに急に冬がやってくる、と言った印象を受ける屋久島。このツワブキの花が咲くと秋も終盤、そして冬のはじまり

のときを知らせてくれる。

このツワブキが満開になる頃、まだスキもとても綺麗で秋真っ盛りとも言える景色もすぐ隣り合わせに見られる。

もうひとつ、冬のはじまりを知らせてくれるのがぼんかんの収穫。はさみ入れが終わり、本格的に収穫のシーズンとなる。そしてお歳暮の商品として屋

久島から島外・県外へと出荷されてゆく、観光シーズンとしては終わりつつある季節ではあるが、何かと忙しい屋久島の冬のはじまり。



正月



屋久島のお正月は、天津日高彦火々出見命、つまり山幸彦を主祭神として祀る益救（やく）神社では、大晦日から元旦にかけて厄払いの年越し奉納太鼓の演奏が行われ、厳かな時間が過ぎ

てゆく。この益救神社の奥社は九州最高峰である宮之浦岳にあり、山岳信仰の島の歴史が今もなおしっかりと残されている。



また、この宮之浦岳山頂付近の平均気温は北海道・札幌並みの気温であり、この屋久島が日本列島の北から南まで見られることを教えてくれるひとつの証でもある。

そして人々に恵みをもたらしてくれるのは山だけではない。屋久島の北に位置する一湊はサバ漁が行われるところで、正月には海に向けて大きな門松が飾られる。



積雪

私がこの島に暮らし始めた頃には毎年2月に雪まつりが行われていた。北国から雪が届くのではなく、屋久島でも積雪は見られる。毎年12月の初旬には初雪が確認され、寒波などで天気

が荒れ模様になったときには山岳部への道路は積雪や凍結のため通行止めとなり、屋久島の山は人を寄せつけない厳しい季節となる。





北国ならではの緊張感のある凛とした空気が冬の屋久島にも張りつめる。しかしながら森で見られる景色は屋

久島独自のものであり、北国とはまた違う。

大野 睦 BLOG

やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

お寺の社会性

生臭坊主のつぶやき

九

竹中尚文

1. さようなら

また、お葬式の話である。またかと思いながらも、坊さんの話にお付き合い願いたい。

お葬式の弔辞に「さようなら」という言葉が気になる。先日のお葬式でも耳にして気になった。ホントに「さよなら」って言っているの？ また、会ったらどう言うのだろうか。

かつてのお葬式での弔辞は、吹き出しそうな文章もあった。本人は言葉に酔うような感じで読み上げているが、どこかで聞いたようなフレーズだと思えば、演歌の歌詞だったりした。また、ある時は「暑い夏の日、あなたは私に冷えたビールを飲ませてくれた。あの時のやさしさに、私は今も感謝している」と読み上げたその人

は、アルコール依存症であった。

張り詰めた悲しさの中で、そうした弔辞は緊迫感を和らげる働きもあったかもしれない。今はそんな弔辞もすっかり耳にすることがなくなった。決まり切った定型文を読み上げるような、味気ない弔辞が幅をきかせるようになった。その中で、何か自分の言葉で語りかけようとして、「さようなら」という言葉が飛び出してくる。

告別式と言うのは別れを告げる式ではないかと、おっしゃる方もおいでだろう。だが、私は告別式とは云わない。お葬式と言う。お葬式と言うのは「とぶらふ」のである。「とぶらふ」とは、「とむらう」ことであり「たずねる」ことでもある。すなわち、お葬式は、

生と死について尋ねることである。私の知る坊さんは誰も告別式とは云わない。

一方、最近は「お別れの会」というのが流行っている。先日、友人が電話をくれた。恩師が亡くなったので、お葬式に行った。そうしたら「お別れの会」だったそうで、彼はずいぶんと違和感を覚えたと言う。まず、手を合わせたいのだが、そんな雰囲気ではない。長男が付けた戒名もどきが掲げてあったそうだ。火葬の後、お骨を拾ったのかと尋ねると、拾ったそうだ。私の友人は、あんなことでいいのだろうか、少し憤っていた。

お骨を拾って帰ったら、そのお骨をどうするのだろう。たとえ散骨をするにしても、それはある種の宗教行為であろう。どうせ宗教行為を始めるのなら、それなりの教理や思想を伴った宗教がよからう。新たな人生観に出会うチャンスかもしれないのに。

私は、友人の憤りに共感を覚える。それは、「お別れの会」って

亡くなった方がかわいそうだなあと思う。自分が死んでいくなかに、みんなから一斉に「バイバイ！」って言われたら、さみしいだろうなあと思う。一人、舟でこぎ出したら、岸边からみんなで一斉に石を投げつけられるようなものだ。「お別れの会」というのは、生きている人たちのことしか考えていない儀式であるように思う。

そうすると、お葬式をすれば亡くなった方のことを考えているのかと言われると、必ずしもそうではなからう。「とむらい」の中に、人間の死とその人生をどれ程に考えているのだろうと、疑問に思うこともある。それは形ばかりの儀式に過ぎないと思うこともある。多く人はそうしたお葬式が大半だろうと思われるかもしれない。ところが、そんなものではない。私が出会ったお葬式の大半の場合は、大切な方が亡くなった悲しみとその人の死と生についてのこされた人々は思いをめぐらせている。

儀式の様式にかかわらず、大切な方の死という時に会って、その時だからこそ人間の生と死について考えてみて欲しい。

2. 人間関係

「さよなら」という言葉を少し考えてみたい。日常生活の中で、「さようなら」という言葉はよく使う。学校から帰る時、先生に「さようなら」と言っても違和感はないだろう。恋人とデートの後、「さようなら」と言うのかな。学校に行くのに家を出るとき、「さようなら」と言うことは少なそうだ。

「さよなら」という言葉が使われるのは、その状況と人間関係がかなり反映されているように思う。お葬式においてもそうだろうと思う。

私の人生でたいへんにお世話になった方は多いが、亡くなった方は少ない。その少ない中の長尾雅人先生の人生は今も私を導いてくれる師である。辻岡昭臣師の言葉は今も私の指針とな

ることが多い。共に今を生きる私の大切な存在である。

”tuesdays with Morrie” (Mitch Albom /published by Doubleday) 『モリー先生との火曜日』(別宮貞徳訳/NHK 出版)はとってもいい本である。その中でモリー先生は死を前にしてかつての学生ミッチ・アルボムに人生とは、死とはという特別講義を火曜日ごとにする。その特別講義の記録のような本である。映画化もされジャック・レモンの遺作になった。いい映画だった。まだ見ていない人には、DVDにもなっているので、お勧めだ。原作の本は全米のベストセラーであった。死を受け入れる人生を描いた。死を伴わない生はない。死が人生に意味を与える。単に亡くなった人の思い出を大切にするという話ではない。亡くなって往かれた方の生と死が、今の私の人生に寄与してくれているというのである。そんな関係においては、亡くなったからと言って「さよう

ら」とは言わない。

とは言いながらも、本当に大切にしている人が亡くなったので、自分がしっかり生きていくために別れの言葉を告げる人に出会うこともある。ずいぶんとタフな方だなあと試みてみる。

3. 悲しい話し

先日、妻が友達と出かけた。帰ってきて「今日はとても悲しい話し」を聞いたと言う。

妻の友人で嘉田さんと言う人がいる。嘉田さんの友人に木田さんがいる。木田さんご夫婦には、一人息子があつた。勉強がよくできて首都にある大学に進学して、卒業後は公職に就いたそうだ。ご夫婦にとっては科挙に通つた自慢の息子と言うところだつた。その息子さんが交通事故で亡くなつたそうだ。

木田さん夫婦は、「神も仏もない」と嘆いたそうで、悲しいお別れの会を開いたそうだ。悲しみの中で暮らす内に、木田さんの奥様

は癌で亡くなつたそうだ。夫は、妻のお骨を息子と同じ沖繩の海に散骨したという。

この話の悲しさは子供を亡くす辛さである。さらに悲しいことに息子さんの死が生かされなかつたことである。木田さんご夫婦は仏と成つた息子さんに会えなかつた。息子さんがご夫妻の人生を導くことなく、奥様は亡くなられたのである。

息子さんが仏と成つたと言うことなど、分からないではないかとおっしゃる方もおいでだろう。見えないことは存在しないと言うことだろうか。肉眼で見えないものは、他にもある。心が見えるだろうか？命が見えるだろうか？思いやりが見えるだろうか？人生が見えるだろうか？

大切な方が亡くなって、失望感にさいなまれ、悲しみの底によんでしまう。大切な方が亡くなつたからといって、別れではない。仏となつたその方との出会いによって、その命を私が受け継いでいくのである。

「神も仏もない」と嘆いた木田さんはどのような宗教観をお持ちだったのだろう。

よく「家内安全」と言うお札らしきものを見かけることがある。私の願いや要求を聞き入れてくれるのが、神や仏なのだろうか。初詣にたくさんの人々がお参りをするのは、そのような宗教観かもしれない。たしかに人々の願いや要求を受け付けてくれる宗教施設は多く存在する。

一方で、加持祈祷はしないが人の悲しみに寄り添い、その出来事に共に向き合う宗教もある。そこに新たな人生観に出会うこともある。そうした宗教も私たちの社会で、決して少数派ではない。しかし、教会のドアを押したり、お寺の門をくぐる人は多くない。

数年前に、スマートフォンが売り出された。新たに携帯電話を購

入しようかと思う人は、携帯電話かスマートフォンかの選択をした。そしてスマートフォンが売れている。通信機器の進む方向を決めたのは消費者の選択だった。

同じようにこれから社会が宗教に対していかなる選択をするのだろうか。次世代にどんな宗教を残していくかを決めるのは、社会の一人ひとりの選択である。私はカリスマのある宗教者がリードしていく社会であって欲しくないし、何の思想思索も伴わない幼稚な宗教儀式のみが残るようにもなって欲しくない。

こころ日記

「ぼちぼち」

(6)これでよかったのかなぁ…

脇野 千恵

いつも子どもたちの進路選択の大切な時期になると、遠い昔の自分のことを思い出します。人生で初めての試験によって決まる自身の進路についてです。高校入試にどのように向き合い、悩み選択したのだろうか。今ほど情報やデータも少ない時代ですが、実力テストや定期テストがあると、やはり点数にとっても敏感になったものです。

もっと大切なのは、担任との関係です。色々なアドバイスをもらっても、信頼関係がないと、どうも受け入れることができません。私が3年の時に担任をしてくれた先生は理科の男の先生。ちょっと顎がしゃくられていたので、皆かげで“三日月”といっではからかっていました。一口に言うと怖い先生。授業中は妙な緊張感があり、怒りの標的にならないようにと目線や態度にとっても気をつけて生活していました。

私自身は家庭の事情が色々あり落ち着かない日々でしたが、それでもぼんやり

ながら教師になりたいなあという希望を持っていました。今ほど相談のための懇談会などもなく、ある日突然希望とは全く違う高校入試を告げられ、返す言葉もありませんでした。親との確執もあり、ただただ従うしかなかったことを覚えています。きっと私の知らないところで、親との話し合いがあったのでしょうか。

私も3年生を数回担任しましたが、いつも自分の苦い思い出が浮かんできて、私でいいのだろうか、私にそんな進路指導ができるのかと不安に思ったものです。

Y美は、陸上部でした。短距離が得意で、部活動にとっても熱心。学級ではどちらかというと寡黙でしたが、当番の仕事も嫌がらず引き受け、いわば学級では手のかからない子でした。

陸上の大会では、近畿大会出場に手が届くような成績を残し、学校では優良選手の一人でした。

彼女の将来の夢は何だったのか？正直覚

えていません。中学校では、ちょうど今ごろの時期になると、色々な高校の先生がやってきました。つまり中学校での大会記録が良い生徒の情報を集め、高校の部活動をより強化するために優秀な選手集めに奔走するのです。

推薦というのがそれに当たりますが、それには色々な条件が付いてきます。優秀な選手ほど、いくつかの高校の選択枠が広がるのも事実です。それを選ぶのは、もちろん本人です。三年間、年末と年始に数日の休み以外には、ひたすら部活動に心身共に打込むことが、まず第一の条件です。

正直、私が親なら、「そんな生活むりちゃう？」と、いくら自分の子を褒めちぎられても、辞めるよう言ってしまうでしょう。（我が子には、そのような機会はありませんでしたが）

私学であれば、やはり気になるのが学費のことです。親としても一番気にかかることでしょう。

当然のごとく、Y美にも某私学高校からの話が持ち上がりました。彼女との進路相談の中では、家庭の経済的な事情もあり、公立高校一本のみの受検と決めていると聞いていました。しかし、高校の先生からの申し出を勝手に断るわけにはいきません。彼女にそのことを告げると、親との相談の上相談に応じることになりました。

彼女の陸上部での成績や学校生活や部活動での態度などから、是非にうちの高校へと言われました。走ることが大好きなY美です。とても魅力のある学校生活を思い描いたにちがひありません。

しかも、親の気持ちを大きく動かしたのが、学費免除の条件でした。Y美自身、高

校へ行くこと自体が経済的負担をかけると遠慮がちだった高校進学です。私学となると、とても自分から行きたいなどとは言えません。

しかし進路は、急展開。彼女は高校の様々な部活動のプログラムにも同意し、入学することを決めたのです。

推薦となると、進路先が皆より早く決まります。ある意味子どもたちは、そういった友だちをうらやましく思ったりする時期でもあります。

彼女には、まだまだ先の公立の試験まで頑張る友だちのために、何かできることをしてほしいと頼みました。彼女は、学級文集や卒業に向けての行事の手伝いなど、惜しみなくやってくれました。

3月の卒業式を終え、4月、彼女は爽やかな表情で、高校の制服姿を見せに来てくれました。毎日の練習は大変だけれど、充実していると。中学校では見せたことがない、はきはきとした口調が印象的でした。

しかし一年後、Y美の良くない噂を聞きました。部活の中での人間関係がうまくいかず、学校に行っていないということでした。頑張っているものと思い込んでいた私は、どうしたものか、と同時に両親の顔が浮かんできました。

とても親思いのY美です。実は、進路決定したころ、父親は失業中。その中で選択したスポーツ推薦での入学です。親の期待も大きかったのではないかと想像すると、胸が痛みました。

しばらくして、Y美が不登校が理由で退

学してしまったと、高校の先生から連絡がありました。これから先どうするのかと心配していたところ、彼女は私のところにやってきました。

彼女の顔を見て、なぜ学校を辞めたのかということは、聞くことができませんでした。とても人に気をつかう子です。寡黙な上、スポーツ界の上下関係の厳しさには、到底ついていけなかったのだということが察せられたからです。

彼女は申し訳なさそうに、次のステップとして、夜間高校にいきたいので手続きをしてほしいということを告げました。退学してもあきらめず、高校進学を志す気持ちに、私は心から応援やりたいと思いました。

過年度生として、無事に夜間高校に入学したY美は、時々学校にやってきては、

「先生、うちの学校茶髪ばかりやで。トイレ行くと煙もうもうやし。」

と夜間高校の実態を報告してくれました。しかし、彼女の表情はあの中学3年生だった頃の穏やかさに戻っていました。心底高校生活を楽しんでいるという雰囲気でした。

やはりY美は、走ることが好きだったのでしょう。夜間高校でも、陸上部に入り頑張り始めました。夜間高校ですから部活の部員も少なく、しかも毎日熱心に練習する生徒は希少価値だったと思います。高校体育大会では、もちろん代表選手として出場し、優勝しました。そして、選抜選手としての活躍は止まらず、近畿、そして全日本大会に出場することができたのです。

あの東京の国立競技場で自分の走りを見せたY美。その感動を早速報告しに来てく

れました。推薦入学した高校では、いくら頑張ってもそのような夢は実現しなかったことでしょう。

その後彼女は高校を無事に卒業し、今は自立しています。

私の話に戻れば、いい年をして何を今さらと思われるかもしれませんが、あの時もっと自分の考えを伝えることができれば、もっとしっかりしていればと思うことがあります。誰もが言う違う人生があったのではないかと。

しかし、今は思いもしなかったその高校で、普通ではできないたくさんを経験でき、今の私を支えとなっている多くのものは、その時の先生たちから学んだことです。まあそれはそれでよかったと思っています。

思春期にある子どもたちは、もうわけがわからずにいます。卒業した子どもたちに、受験期のあの頃のことを聞くと、自分でも何を考えていたのかわからない、とにかく周りの人に一杯迷惑をかけ、むちゃくちゃなことを希望していたなあと答えます。

その時はこれが最良の進路選択と考え、生徒達を送り出しても、その先はわからないものです。正しいとか、正しくないという問題ではなく、子どもにとっての進路決定とは何なのでしょう。いつ、だれが、どのようにして決めるのがいいのか。

今でも、一人ひとりのその後が気になる私です。

(中学校教員 脇野千恵)

第9回 これからの男性援助を考える

婚活中の女性の視点から考える

男性が婚活で成功する援助②

松本健輔 坊隆史

「ありのままの自分を好きになってくれる人を捜したいんです。」

上記の台詞は、お見合いで上手く行かなくなった時、また厳しい婚活の現実を知った時に、男性からよく聞かれる台詞である。前稿で女性が結婚相手として男性に何を求めているのかを論じた。一方、男性もまた希望の女性を追い求める。男性が女性に何を求めているのか、何が障害となり婚活が上手くいかないのかを明らかにした上で、本稿では、どうしたら婚活で成功できるのかを考え、そこで男性援助という視点まで何ができるのかを論じていきたい。

1、男性の希望条件

白河ら（2008）は、「女性経験値」の低い男性ほど女性に対するビジュアルの要求水準が高いと主張している。それが正しいかどうかは定かではないが、全体的に男性の女性への希望はとても単一的だ。お見合いパーティーでは、女性から男性への票はある程度割れるが、男性から女性の票は一極集中する。その基準はビジュアルと年齢だ。つまり、ほとんどの男性は結婚相手として若くてかわいい子、または綺麗な子を探しているのだ。結婚相談所の入会前のヒアリングでも希望を事細かく話すのは女性のみで、男性は年齢のみを条件に挙げる場合が多い。つまり、子どもを作ることを考えて20代と。後は可愛い、綺麗と思えるかどうかなのだ。

ちなみに、男性が結婚相手を選ぶにあたり、ビジュアルと年齢のどちらが優先事項かを考えると、著者の感じる限り年齢の方が重要視される気がする。著者の主観ではあるが、見合いパーティーでは美人の30代より、非美人の20代のほうが支持される傾向がある。それは著者のみならず、多くの相談所関係者が語っている。この傾向はさらに結婚を意識した結婚相談所では顕著といえる。それだけ男性にとって年齢は大きな意味を持つ。

そして、実はもう一つ男性が女性の求めている大きな要素がある。それは冒頭で示した男性の台詞だ。つまり、自分をありのまま受け入れて欲しいという女性に対する願望である。しかしそれは婚活という場面で上手く行っていない時に出る表現として以上に、交際、

結婚など今後の異性との関係を大きく左右する要因でもあるように思われる。

さらに、大切なことがもう一つある。それはお見合い後のお断りも、いざ交際が始まった後のお断りも圧倒的に女性から男性に交際を断ることが多い。そういう意味で男性は最初希望を言うものの、始まってみると、選ぶというより選ばれる立場になることが圧倒的に多いのだ。

2、男性は何をすべきなのか

さて、ここから本来の男性視点での話をしたい。これまで前稿で見てきたように、要求水準の高い女性に対して、男性はいかに婚活で成功し結婚へ進むべきなのか。今まで多くの著名人がそのための方略を考えている。

「婚活」の生みの親である山田昌弘は、これから男性が結婚するのに求められる能力を経済力とコミュニケーション能力だと主張している(2008)。また、心理学者の小倉知加子は結婚とは「カネ」と「カオ」の交換であるとしている(2003)。他方で、セックスという視点でも、門倉貴史(2009)は複数の統計データを用いて、男性は経済力が低いと女性とセックスすらできないことを主張している。

つまり、彼らの共通点の一つは経済力だ。しかし、婚活で成功するために経済力をつけると婚活中の男性に援助するにはあまりにも難しい時代だ。経済力をつけるという努力をしているうちに適齢期(今は私語かもしれないが)を過ぎるほど時間がかかる場合の方が多いだろう。さらに、経済力があっても婚活で失敗する男性は沢山いる。現代の女性、少なくとも婚活市場に集う女性は生活のため、お金のためと結婚できるほど割り切りはよくないようだ。そう考えると、男性が婚活を成功させるために最初に取り組む努力としては不適切な気がする。

次にコミュニケーション能力について考えたい。コミュニケーションとはデジタル大辞泉によると、「社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うこと。言語・文字・身振りなどを媒介として行われる。」とある。端的に言うと、伝える力といったところだろう。では、伝える力を伸ばすことはスムーズに婚活を成功させるために必要なのだろうか。半分は正しく、半分は間違っているように感じる。会話が楽しかったからまた会いたいとお見合いのお返事をする女性が多い一方で、断りの理由として、「仕事の愚痴ばかりで嫌だった」「いきなり子どもが産めるかどうか聞かれた」などがよく聞かれる。彼らの伝えたいことは確実に伝わっている。伝わった上で拒否されているのだ。ちなみに他にお見合いでよく女性から聞かれる断り文句には以下のようなものが多い。「喫茶店で一円単位の割り勘を求められた」「あまりに服装がださくて。。。」「店員さんに横柄で、なんか怖くなった」。つまり、コミュニケーション以前の問題が多いのだ。振られた男性達に断られた理由を伝えてみるとみんな一様に同じ答えが返ってくる。「嫌がられる理由がよくわからない」

詰まるところ女性のニーズを把握できないことが一番大きな問題なのではないかと思う。相手が何をすると嫌な思いをするのか、その理由はどうしてなのかそこがまったく分かつ

ていないのだ。彼らの中には「自分だったら嫌じゃないのになぜ」という思いがある。そこには、男女の違いや、さらに突き詰めると個人差があるという感覚が抜け落ちている。

3、これからの婚活における男性支援の方向性

婚活での男性を支援は、男女の違い、個人の違いを理解する手助けをすることが根底にある気がする。それは、婚活ということに限らない。夫婦カウンセリングの場面でも根底に流れるのはまったく同じである。つまり、異性がどうしてそう思うのか分からないという場を埋めていく作業だ。文化的であれ、生物学的であれ性差を理解し、さらにそれをマイナスからプラスに転換するコミュニケーションをすることがとても多くの問題を解決することになる。とはいえ、実行することはそんな簡単なものではない。

たとえば、著者の経験上以下のようなケースが多い。「奢って欲しい」という女性の願望は、女性からすると「大切にされたい」という精神的な欲求である場合が多いが、男性、特に奢ることに抵抗を感じる男性は「女性に負けること」「利用されている」「お金で判断されたくない」と解釈することが多い。お見合いの場面で、第一声で「子どもは産めますか」と言う男性は、結婚を考えた時に一番大切だから聞くと合理的に考える。一方、女性はデリカシーのない相手と男性を見る。夫婦の会話ではこんなことが多い。仕事の愚痴を言う妻に、夫が必死で考えたアドバイスをする。妻は「そんなこと言って欲しいんじゃない」と怒る。夫は相談されたのだからアドバイスしたと合理的に考える。そして感情的に怒っている妻に「アドバイスを素直に聞けないなら相談なんかするな」と言ってしまう、関係が悪化する。もう少し複雑な例をあげるとこういうこともある。「仕事の愚痴を妻に言うのは悪い」「男らしくない」と思って、家では会社のことを一切話さない夫。妻は夫が会社のこと、気持ちを話してくれないことを不満に感じてイライラする。結果、まったく関係のないところ、たとえば子どもへの愛情が感じられない、帰りの時間が遅いなどで喧嘩になる。夫は妻が何をイライラしているのかの本当の理由に気づかず、ただヒステリックな人と感じる。

どれも性差、個人差によって生じるすれ違いと言える。だが、実際当事者はそれが性差、個人差からくる問題と気づくことはあまりない。また、気づいたとしてもその違いがなんなのか、さらにそれを埋める方法を知らない。かくして男女ともに、関係を悪くしないためと思いつつ、関係を悪くする間違っただけの方向での努力を続ける。自分が正しいと思うことをしていたら、相手にも通じると。

婚活の相談、そして夫婦のカウンセリングを通して、最近あることに気がついた。女性は男性に多くの物を求める。それは結婚前の高い条件であったり、結婚後の情緒的なケアであったりする。つまり、自分を幸せにして欲しいという願望だ。一方男性は、認めてくれる人を探している。ありのままの自分を許して認めてくれる人だ。相手が何かをしてくれないと男性から文句がでることは稀だ。むしろ、自分を認めてくれないこと、自分に対して不満を言うことへの不満が語られる。相手に求めることの男女の共通する点は、どち

らも受動的行為であるという点だ。しかし、どちらも受動的行為であるということは確かだが、丁寧に紐解いていくとその本質は大きな隔たりがあることがわかる。

男性援助という視点に立った時に、男性にこの違いを理解してもらい、まずは自分から相手のニーズを満たす存在になる必要があることを伝え、さらにそれが結果として相手から認めてもらえるようになるということを理解してもらい促しが必要なのもかもしれない。正しいかどうかは別として、未だに男性が主体的に恋愛を引っ張ってほしいというニーズは高い。したがって、婚活で成功するためには、男性が女性の気持ちを理解して、満たしていくことが何よりも重要だ。そしてそれは経済力という自身の努力ですぐ結果がでないものや、コミュニケーション能力という曖昧なものではなく、性差、そして個人差を知ること、それを元に相手を喜ばせる必要性があることを知り、実践することだと思う。さらに付け加えるならば、実践が利他的行動ではなかなか難しい。そこに自分の利益が見えるとなると状況は変わっていく。男性の利他的行為、つまり女性のニーズを満たすことで、相手に認めてもらい、受容してもらいという、実は利己的行為になるのだということを知ることとはとても大きなモチベーションになる。また男性のプライドを保つための砦にもなる。

著者は、婚活セミナーを男性にする場合、ワークを通して「なぜ女性はそう考えるのか」「違いをどうしたら確認できるのか」「そしてそこで知ったことをどう生かすのか」を実際使えることができるように援助している。不思議なほど彼らは「納得」すると実行に移す。

最後に

小谷野敦(1999)は、自身の著書「もてない男」の中で、もてないことは別に恥ずべきことではないと何回も繰り返し主張している。これまで、男性が婚活をスムーズに行い成功するために何が必要かを論じてきた。しかし、著者も、恋愛を好まず、結婚を望まない男性を無理矢理結婚へ向かわせるように矯正することを望んでいる訳ではない。ただ、女性と関わりを持ちたいけれど上手く関われない、そういう思いのある男性には適切な援助が必要であると思う。結婚は「自然」なことではなくなりつつある現代、より結婚をする男性への援助が求められてくるのではないだろうか。

また、本稿では著者自身が現場で感じたことを要視し、議論を進めてきた。今後、より客観的に説得力を持って説明していくために、実際の統計データをとった上で語ることを次の課題にしたい。

引用文献

小倉知加子(2003)「結婚の条件」 朝日新聞社

小谷野敦(1999) もてない男 恋愛論を超えて ちくま新書

門倉貴史(2009) セックス格差社会 宝島社

牛窪恵(2009)「エコ恋愛」婚の時代 光文社新書

山田昌弘・白河桃子(2008)「婚活」時代」 ディスカヴァー・トゥエンティワン



ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(7)

～ 混乱からの脱出～

中村周平

今回は、在宅生活を始めてから一年が過ぎ、復学した高校での様子について触れていきたいと思います。多くの不安を抱えながら高校への復学を考える中、施設面における課題や人間関係で、これまでとは違った壁にぶつかることとなります。また、自身の事故の経緯については聞く度に二転三転していき、学校やラグビー部への不信感はさらに大きなものとなっていくことに。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」、「両親へのインタビュー」で交わされた会話の内容を手がかりに、当時の私と両親の心境についても書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=I、父親=T、母親=Hとする。

4 ひと時の高校生活

1) 高校への復学

事故から1年半後の2004年4月、高校に復学することになりました。在宅での生活にも慣れ、トレーニングの毎日を送っていた頃で、最初は、この復学のことで大変悩みました。ただ、家にお見舞いに来てくださった高校のある先生が「君はもう十分単位を満たしているから、復学しなくても卒業できるよ」という言葉が心に引っかかりました。それは私の身体を気遣った言葉だということにはわかっていました。しかし、ラグビーと勉強の両立を目指し、奮闘していた高校生活。それが事故によって最後まで通わずに、ただ卒業証書をもたらすだけでいなくなってしまうことに納得できない何かがありました。また、このままいなくなってしまうことで、私の事故はさらに風化してしまうのではないかという不安もありました。

ただ、怪我をする前と同じように通うためには難しい問題がいくつか存在していました。まずは、私の通っていた高校が車いすで通うには、あまりにもハード(施設)面が厳しかったということです。怪我をする前、自転車を降りて押さなければとても登ることのできなかつた校門からの急な坂道は、車いすの私にとって一つ間違えれば、命を落としかねない危険なものでした。また、玄関前の階段、校舎間の段差、エレベーターのない校舎など怪我をする前まで何でもなかったものに、行く手を阻まれることになりました。その後、復学に向けて高校と話し合っていく中で、通学には介護タクシーを使用すること、校舎へは既設のスロープを使用して入り、一階の入り口から一番近い教室を割り当ててもらうことが決まりました。実現は困難だと思われたエレベーターも、話し合いの末、設置してもらうことができました。また、以前と同じように授業を受けることが難しかったため、各教科を担当して下さる先生方が、授業内容を私でも答えられるよう工夫して下さいました。

こうして、週2日、しかも1日2時間という限られたものではありましたが、私の高校生活が再

スタートしました。1年間休学していたことで、私の同期生は3月に卒業してしまい、1学年下のクラスで高校生活を送ることとなりました。突然復学してきた車いすのクラスメイトを、周囲はなんとか迎えようとしてくれていました。しかし、ラグビー部の後輩以外、誰一人顔も名前もわからないクラスで過ごす時間は非常に辛いものでした。そのためか、私から打ち解けようと行動を起こすこともできず、それを感じ取ったクラスメイトも積極的に関わろうとする人はいませんでした。休み時間も介助のため来てくださっていたヘルパーの方と二人で過ごすことがほとんどでした。唯一、当時ラグビー部のマネージャーをしていた後輩が気軽に話しかけてくれました。彼と話している時だけ、高校生活を実感することができました。

2) 補償をめぐって、調停に至るまで

「自分の事故のことはしっかりと調べてくれている」。そう思っていた私にとって、監督の「何もわからない」という言葉は裏切られたと思う以外の何ものでもありませんでした。不安は一気に「不信感」へと変わっていきました。その後、事故が起きた試合の笛を吹いていたコーチの方が私の家を訪れた際、両親が事故の経緯について知っていることを話してほしいとお願いしました。そのコーチから話された内容は、私の記憶とも、監督が言っていたこととも、異なるものでした。「これはおかしい、本当に事故はちゃんと調べられているのだろうか」。両親と話し合い、事故後ラグビー部内でどのような話し合いがおこなわれたのか話してほしいという願いを、再度監督に伝えました。その後、以下のような返事がありました。「事故後、その場にいた指導者5人で数回にわたり話し合い、パスをしてうつ伏せに倒れ込んだところにパスを受けたプレイヤーが相手プレイヤーからタックルを受け、首の上に倒れ込んだ」という結論に至った。その場にいた選手、見ていたOBらにも数人聞き取りをおこなった。病院で『お前の首の上に乗ったのは や』と言ったのも、 本人が『もしかしたら僕が乗ったか

もしません』と伝えてきただけで、確証はとれていない。これだけ大きな事故が起きたにも関わらず、私の事故に関する記録は口頭での話し合いと数名へのヒアリングだけで作られた「事故報告書」しか残されていないことが分かりました。さらに、その後、その話もまた二転三転していきます。

「本当のことが知りたい」。監督やコーチが答えてくれないならば、あの場にいた選手たちに聞くしかないと思いました。1年遅れで復学したために周り是一年下の後輩ばかりでしたが、その後輩たちにある文章を送りました。「事故から2年が経とうとしているが、私自身なぜこのような事故が起きたのか全く分かっていない。2年前の11月17日、一体何が起きたのかみんなが知っていることを教えてほしい。これは決して犯人探しをしているのではなく、私は真実が知りたい」という内容でした。事故から2年が経とうとしており、私の記憶も事故当初と比べて霞みつつありました。「答えも返ってこないかもしれないが、あの事故はなぜ起きたかを一緒になって考えていってくれる、二度とあのような事故を繰り返さないというきっかけになってほしい」という思いでした。しかし、私が文章を渡してほしいと一任した当時のキャプテンは、内容を見て、これは自分一人では判断できないと考え監督に相談し、最終的に私の首の上に乗ったと考えられている生徒への精神面を配慮することが優先されました。結果、文章が選手たちに配られることはありませんでした。

I: 「その友達に対してとか、一切ないわけや？首の上に乗った子とかにどうか...それについてはなにもない？」

S: 「その話を進めていく中で、何故原因を追求できないかっていう話になっていった時期が調停の前にあったんですね。僕の事故があったあと、その子は責任を感じて、二週間ほど学校に来なかった。それで先生というよりもその子の同期ですよね、そのメンバーが電話かけたりとか、家に行って話をして」

I: 「その男の子の？」

S: 「はい。ちょっとずつ来れるようになった。それで今やっと毎日来れるようになったときに、この話はできひん...原因究明とか。でも家族と不思議に思ったのが、学校側として、事故にあった人間もいれば、事故に関わったメンバーも確実にいるわけですよね、加害、被害というわけではなくて。その子に対しての心のケアみたいなものは、学校側から殆ど無かった」

I: 「事故に関わったメンバー？その上に乗った子も含めて？」

S: 「形としてなにか話をしはったと思うんですけど、そういうときってその子の支えになったのが同期のメンバーが『君のせいじゃないよ』と」

I: 「その自分に乗ったかもわからへんって子は君のところに来たわけ？」

S: 「その後1回か2回ですかね、リハビリを手伝いに来てくれて」

I: 「それは同級生？」

S: 「年下です。(中略)1年の終わりから...だから(ラグビーを)始めて半年かそれぐらいですかね」

I: 「だから学校としたら、まっそうやって一緒にプレーしてた生徒のことも考えて、なかなか原因がどうやこうやっていうのはしにくいって説明やったんや？だけどその割に、その子らに対して学校は別になにかしたわけではない、何にもやってへんことがあとでわかって、どういうことなんやろっていう話になったわけやな？」

S: 「そうです」

そして、私や家族を最も落胆させる出来事がありました。一連の事故後の対応について、一度話を整理するため両親とラグビー部の指導陣に集まってもらい話し合いをおこないました。その際、事実確認のために使われたのが偶然机の上に置かれていた湯呑みでした。「ここでポイントができて、ここでタックルを受けて...」ラグビー部の指導陣は懸命に説明されているようでしたが、私や家族にとっては誠意を持って答えてくれるように思うことはできませんでした。湯呑みによって事故の状態を表した話し合いの後、監督や

コーチからの連絡が途絶えました。「まさかあれで終わってしまうのでは」、こちらから連絡を取ったところ、翌月の頭に話し合いの場を設定するという連絡がありました。当日、監督と教頭が来られ、話し合いが始まりました。今回は紙面によって事故の状況が説明されましたが、その内容もこれまでの話とまた異なるものでした。

S:「そのあとの流れって...その湯のみのことがあったやんか。でその後調停に行き着くまでなんやけど」

H:「それが2004年の6月の話やんねえ。で監督が持ち帰ってもういっぺんって言うたんやけど、なかなか、返事が無くて、無くて、無くて...こちらから問い合わせで最終、7月の頭に持ってきはった答えが紙に書かれたもので、これまでの話のどれとも違った。というのと、当時の教頭先生と一緒に来てて、監督が『もうこのことについては、今後一切、学校では検討しない』ということをお願い渡さって、周平が『じゃあ、僕はなんでこんな怪我をしたか一生知ることができないんですね。ずっとそういう疑問を持って生きていかなきゃいけないんですね』って。それに教頭先生は『いや、事実はいつか分かる時が来る』って言ってはったのが7月の話」

「私の事故は、真実が明らかにならないまま闇に葬られてしまった」。その気持ちは今も決して消えるものではありません。

その後、ラグビー部との話し合いは打ち切られましたが、学校側と事故の補償について、話し合いを進めていくこととなります。卒業式の晩、成章高校の運営母体である、学校法人明德学園の理事長との話し合いの場が設けられました。

H:「そっからあと、しばらくは、そういうことについては空白の期間があったんやと思うわ。『話はない』って打ち切られて。であなたの卒業に関わって、『卒業=もう関係ないですよ』っていうことになっては困る。卒業したって、そっから先の人生のほうが長いんやし...ということで、卒業

式を前に理事長との面談を申し入れた。ほな、卒業式の日の茶話会の前に時間をもってくれることになったので...」

S:「全日空ホテルに行ったなあ」

H:「そう、そこで話したよね。それぞれの思いをしゃべって、理事長は『事故が成章高校のグラウンドで起きたことは重く受け止めてる』って言わはった。(中略)その時にいた、他の理事の方なんかは『言うてることはよく理解ができるから、ちょっと検討の時間が欲しい』とおっしゃったんやけど、年度が変わって、その方がいなくなるよね。で別の方が副理事長になって、待てど暮らせど検討の答えがないのでこちらから『お返事はどうなっていますか?』って聞いて、答えが帰ってきたのは2005年の5月か6月やったわ。当時の校長先生に『どうなっていますか?』と問い合わせして、ああいう返事やった」

S:「ああいう返事って?」

H:「一緒に聞きに行ったやんか、理事長室に。聞きに行ったら『学園としてできるのは、今の成章がやっているようなことを、系列の教職員に支援金をお願いすることぐらいだ』という話になって、それって『いつまでどんな形で』もはっきりしないなかで、今後の周平の支援にならんやんっていうとこで...あん時は周平自身も喋ったんじゃないかな?『納得がいかない』って。『学校で起きた事故なのに、僕の場合は目の前のお茶だって飲めない。そんな状態なのに』って。そこからあと、学校の判断は変わらないっていうことだったので、調停にするか、裁判にするかっていう話になって、弁護士先生と話を詰めていった。結局、裁判の形になったら、同級生も証人台に...っていうこともあったし、とりあえず、調停でっていう形になったのが、あなたの成人の誕生日を待って、その間に準備をして調停になったんじゃないかな?」

このころから学校側との話し合いに限界を感じるようになっていきました。

それでも「遍照金剛言う」 ことにします

第6回

脱精神科病院「アメリカの脱精神科病院」

三野 宏治

前回では1940年代からケネディ教書が発せられるまでを述べた。ケネディ教書はさまざまな要因をともなって発せられた。このケネディ教書に影響を与えた要因はその後の脱精神科病院にも影響を与える。アメリカの脱精神科病院化を語る場合にケネディ教書は考慮すべき事柄である。しかしケネディ教書によって脱精神科病院化が始まった、あるいは加速したと断ずることにはいささかの疑問が残る。教書にてケネディが脱精神科病院について述べた1964年以前より早期退院の試みや方向性は医師たちによって行われた。また、脱精神科病院は教書が国民に向けられて発表されてから1970年あたりまでは比較的緩やかに行われた。これは前回述べたように“Opening the Backdoor”といわれる方法を採用した機関である。

脱精神科病院が急激に行われるのは1970年代以降の“Closing the Frontdoors”と表現される後期である。この期間には州立精神科病院の病床数減少や病院自体の閉鎖が行われた。その結果として多くの(元)入院患者たちがホームレス化した。本稿ではケネディ教書以降に脱精神科病院がどのように進んでいったのかを述べる。

緩やかな脱精神科病院化とは 1970年代まで

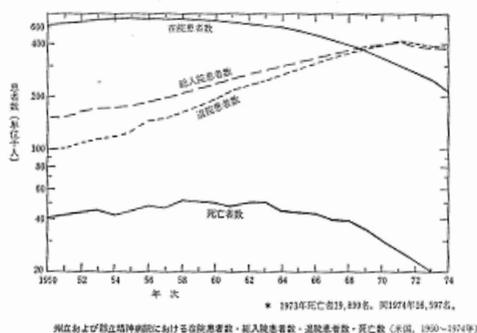
ケネディ教書以降、州立精神科病院の病床数や在院患者数の減少は加速している。そして70年代以降も病床数の減少は続いている。では、病床数・在院患者数減少の加速という点で見ると1970年以前と以後変化はない。では、なぜに70年代以降の脱

精神科病院化は緩やかであったのだろうか。

宗像が示す資料(図表1)では在院患者数は1964年あたりから減少している一方で、1950年から1971年にかけて総入院患者数と退院患者数は増加している。そして1970年を境にして在院患者数より総入院患者数・退院者数が多くなっている。在院患者数というのは入院中の患者であり、総入院患者数は新たに入院する患者のことで

あることから、病院にいる患者＝病床数は減っているが新たに入院する患者は増加している。更に退院する患者も増加していることになる。これは何を意味しているのか。病床数は減った。そして早期退院も実施している。しかし、退院はしても新たに入院してくる患者が増えた。あるいは再度入院してくる患者が増えたとも考えられる。前期の脱精神病院化が“Opening the Backdoor”と評される理由は上記のような現象からも首肯できる。早期退院しても再入院をする。そして退院し入院を繰り返す。「回転ドア」現象による病床数の減少は退院後のケアとして再入院といった仕組みが存在している。

図表 1



では「回転ドア」現象があったとしても患者たちはどこに退院していったのか。高齢患者の多くはナーシングホームに入所し、他の患者たちは安宿などの多いゲットーと呼ばれる場所に住みついたとされる。また、定住先を持たないホームレスとなって都市部の街角に暮らすものも少なくなかった。このゲットーに住んだ者やホームレスとなった元患者たちについては後述する。

次の図表 2ⁱⁱによると、1970 年には精神医

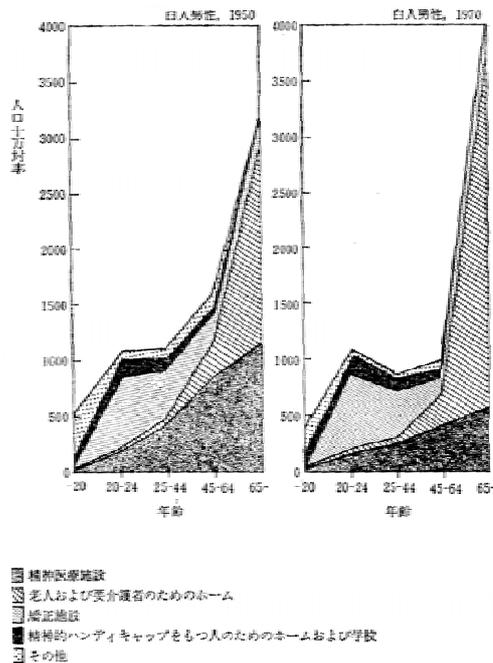
療施設利用の割合がすべての年代において少なくなっている。これは脱精神病院化が進んだものと考えられるが、1970 年には 45 歳以降の「老人および要介護者のためのホーム」の割合が増加している。

また、退院後に自立的な生活・社会復帰などを旨とするため、期限付きの住居であるハーフウェイ・ハウスも 1970 年前後から増加している。1963 年には全米で 40 ほどあったハーフウェイ・ハウスが 1963 年には 128、1971 年には 196 か所となった。アメリカ国立精神衛生研究所の調査によると 1973 年のハーフウェイハウスのベッド数は全米で 7089 床 6003 人の入所者である。

ホームレスになった元患者たちもいたが地域に住処を確保できたものも少なからずいた。しかし、再入院・再々入院を繰り返す「回転ドア」現象が起こっている。住処が確保できたとしてもそれだけでは地域生活は困難であったといえるだろう。

では、「回転ドア」現象を防ぐ手立てはなかったのか。ケネディは教書の中で精神病患者／障害者の地域ケアを可能にする拠点として「総合的地域社会精神衛生センターⁱⁱ（CMHC）」について言及している。CMHC は州立精神科病院に変わる精神病患者／障害者の拠点として構想され建設された。

次に CMHC について述べたい。



人口十万人別白人男性施設在患者数（施設形態別、年齢別）（米国、1951、1970年）

Comprehensive Community Mental Health Centers

教書の中でケネディは CMHC の活動内容について「診断、判定機関、精神科緊急病棟、外来診療所、入院設備、昼間通院施設、夜間病院、里親保護、厚生指導、地域社会の他機関への相談指導および精神衛生の広報並びに教育活動を行い、治療とともに予防も主たる活動」と述べている。

CMHC が不足なく設置され教書にあるような機能を十分に発揮していれば「回転ドア」現象は防げた可能性はある。しかし実際には当初の計画通りに CMHC が設置されることはなかった。当初計画では、収容施設化した公立病院から、その他の精神病院に代わるべきリハビリテーションを行う地域資源（alternative of mental hospitals）に移し、そこでケアを受けることが提言されていた。その基幹となるのが

CMHC であった。ケネディの計画では、人口 7.5-20 万の地域を担当する CMHC を 2000 ほど作る予定だったが、1970 年代後半でも CMHC の数は 600 ほどである。これは当時ベトナム戦争の戦費拡大にともなって地域の精神疾患ケア予算の削減という経済的原因があるとされる。

しかし、CMHC や他の地域ケアに対する資源の量的不足だけではなく、地域生活を支援するといった視点の不足でもあったとする考えもある。CMHC の基本機能として考えられたものは以下の 5 つである。

- 1:入院治療
- 2:救急サービス
- 3:部分的入院
- 4:外来治療
- 5:コンサルテーション、教育

ケア要員は医師、看護、心理、ソーシャル・ワーカーなどの他職種から構成されており、人的配置からは社会的、心理的ケアを提供できるものであった。しかし、実際には慢性患者のケアよりも危機介入に重点を置いたため、慢性患者に対応することが少なかった。また、当時の精神保健の専門家（医師、心理士、PSW）に対する訓練は診断と治療に焦点を当てたもので社会的能力の回復のため訓練はほとんどなかった。

メニンガーは結果として患者のホームレス化を生んだ脱精神科病院であるが、現代では統合失調症の陰性症状として挙げられる無気力、依存、自発性の欠如などを、施設症として捉え、退院させるとそれらの症状が軽減されると考えた。つまり、地域の新しい施設が障害の慢性化を予防するという大きな期待があったとしている。（松下

1999)

この CMHC の量的および質的問題とともに”Closing the Frontdoors”と表される (再)入院の抑制策が患者のダンピングという状況を生む。そして州立精神科病院から放出された精神病 / 障害者たちがケアを受けることなく都市部のゲッターに住み着きあるものはホームレス化した。そしてその状況に批判が集まった。

次に後期脱精神科病院化 (“Closing the Frontdoors”)における病院を放出された元患者たちの様子について当時の報道や非難を挙げることで紹介する。

急激な脱精神科病院化がもたらしたもの

1970 年に入ると脱精神科病院化は急激に進む。その理由については後述する。ここでは急激な脱精神科病院化によって退院させられた (元) 患者たちの状況を報道や脱精神科病院化を批判する論文によって紹介したい。ニューヨーク市福祉局精神保健部長のロバート・リーチは「慢性精神病者のケア- 国家的恥辱」という論文で次のように述べた。

ニューヨーク市には 5 千を超すナーシングホームのベットがあるが、その半分は精神病院を退院させられた慢性精神病者で占められている。これらの多くは失敗したモーターか、古びた旧式ホテルの転業者によって経営され、ただ、部屋と賄いを提供するだけである。……元患者の多くは、場末の簡易旅館に集まってくる。そこには売春婦、出獄者、麻薬常習者たちのねぐらである。元患者たちは最も弱いグループに属するから、彼らは容易に現代社会の掠奪者の餌食にされ、暴力の犠牲者、身体的侵害の被害者に

されてしまう。…… 孤立無援の精神障害者を敵意に満ちた地域社会に放り出そうとする現在の政策は道義に反し、非人道的である。それは、中世の精神病者が街をさまよひ、悪童たちが彼らに投石する情景の再現にほかならない。これこそまさに国家的恥辱 (national disgrace) である。

また、アメリカ精神医学会の前会長ジョン・A・タルボットは脱施設化政策の蹉跌を正し、修正するために活動を行っており、この問題に対する多くの論文をかいている。そのひとつアメリカ精神医学会の機関誌の巻頭論文「慢性精神病者のケア-それは依然として国家の恥辱である」(1975 年)で次のように述べている。

ロバート・リーチは精神病者の置かれている状況を国家的恥辱であると警告したが、その後事態は改善されていないばかりか、かえって一層悪化している。その原因は脱施設化 12) の強行にもかかわらず、地域サービスに対する連邦政府及び州政府の財政処遇が伴っていないこと、それどころか財政引き締めの的を精神保健サービスに絞っているからである……地域で自立しようとする精神障害者が必要としているのは医療サービスだけではない。就職、住居、教育、職業的、社会的リハビリテーションなどの幅広い援助サービスである (秋元 1991)

リーチの論文では、退院後多くの患者が暮らしたナーシングホームの実態 13)を知ることがでる。また、タルボットは医療や保健ではなく福祉サービスが必要であると言及している。1979 年 4 月 2 日号のタイム紙には「ニューヨーク、マンハッタン上流

の偏見の少ない地域の市民でさえも、精神病院を退院した元患者をたくさん抱え込んで悲鳴を上げている。革新の立場に立つマンハッタン選出のニューヨーク市会議員アントニオ・オリヴィエは、精神病患者のやみくものダンピング（放出）によって、いまアメリカのいたるところの都市に精神病患者の居住区・無法地帯が作り出されている。脱施設化（deinstitutionalization）などいう政策は理不尽だ」という趣旨の記事がトップに掲載され脱精神科病院政策を非難している。

なぜ脱精神科病院は急激に進んだのか ”Closing the Front doors”の要因

“Opening the Backdoor”が早期退院の促し”Closing the Front doors”は精神科病院の病床数削減という現象を表現したものである。1969年以降カリフォルニアの州立精神科病院の病床数は急激に減少した。その要因として杉野や竹端は「反施設主義」イデオロギーと州行政の財政的動機についての説を紹介している。

カリフォルニア州はケネディが教書で脱精神科病院を謳う以前より地域精神保健政策を行っていた。1920年代に早期退院とアフターケアを行っていたことは述べたが、1958年には郡政府が地域精神保健サービスを創設する際、必要経費の50%を州政府が補助するという「ショートドイル法」を（Short-Doyle Act）成立させている。ただ、ショートドイル法は任意であったため採用する郡政府は増えなかった。そこで1969年には州の負担率を90%とした。（竹端2008）また、1967年に精神科病院への非自発的入院を制限し地域の保健サービス利用

を促すランターマン・ペトリス-ショート法（Lanterman Petris-Short-act 以下LPS法）ⁱⁱⁱが成立している。

次に州行政の財政的動機について述べる。退院者の多くがナーシングホームへ移ったと述べたが、この「転施設」ともいべき現象を後押ししたものが老人医療扶助（1960 Medical Assistance for Aged）や老人医療扶助（1965 Medicare）公的医療保険（1965 Medicaid）、補足保障給付（Supplemental Security Income : SSI）などの制度であった。

これらの制度は州立精神科病院など州立の施設の利用者は給付の対象外であったため、州立精神科病院の入院患者をナーシングホームへ移すことで連邦政府の財源をそのケアへあてる動機となった。竹端によると、1965年カリフォルニア州にメディケア・メディケイドの制度が導入された後の精神保健分野の州財源負担率が下がっている。1965年には59%であった州の負担率は1971年には36%でありメディケア・メディケイドによる支出は16%になった。他方、ナーシングホームの数は1960年 1970年の間で74%増加したという。

ただSSI以外の制度については州政府の負担が存在する。従って短期的には州政府の福祉のコストは上昇する。つまり長期的な投資によって州政府は財政的恩恵が受けられる。

杉野は、SSI以外の制度については州政府の負担が存在する。従って短期的には州政府の福祉のコストは上昇するといった事情によってカリフォルニア以外の州は制度の活用を行っていなかったが、1972年に創設されたSSIは100%連邦政府負担の給付

金であったため、カリフォルニア以外の州でも積極的な導入が試みられ、全国規模で1972年以降急激な脱精神科病院化が進んだというラーマンの分析を紹介している。

精神科医療の改革と市民運動

1960年代から社会学者の調査などによって州立精神科の実態が世間に知れるにつれてその処遇の悪さに非難がなされたことは述べた。この1960年代、特にベトナム戦争の激化した60年代後半は公民権運動がおこった。そのような社会背景で身体障害者の自立生活運動が起こったことは以前に述べたが、精神科医療の領域にも市民運動・消費者の影響が及ぶ。人権擁護の考えが精神科医療領域に及んだことについて寺嶋は著作の中で次のように述べる

アメリカではベトナム戦争の激化をきたした一九六〇年代後半になってほうはいとして公民権運動が起こり、それが津波のように精神科医療の領域にも及んで来て、一方で精神科医療は政治的課題であるとしてレイン、クーパー、バサリア、サスらの主張の立場に立つ反精神医学運動が起こり、他方で患者の権利の確保、拡大に大きな関心がぶり向けられるようになった。そして市民の関心事は主として強制入院の手術と治療に対するインフォームド・コンセントの法理の問題にあった。また、一九六三年、地域精神衛生センターの発足当時は市民はほとんど関心を払わなかったが、六〇年代後半になって消費者運動、公民権運動の高まりと時を同じうしてセンターの運営諮問委員会への参加からさらにセンター管理委員会に市民が参加してゆくようになった。そのころ「カリフォルニア精神病患者の親の会」「シャトル精神病患者を守る会」などが

結成されて、精神科医療の改善に向けて発言をし、批判をするようになった。

一九七〇年代に強力な影響を及ぼしはじめたのはアメリカ市民自由連合(ACLU)の活動であった(全米に約二〇万人の会員を持つといわれる)。同連合所属の弁護士ブルース・エニスやローレン・シーゲルらは一九七〇年に初めて精神科医療訴訟(ドナルドソン訴訟)の法廷助言者として登場、一九七二年には『精神病患者の権利』と『精神医学の囚われ人』を出版し、一九七三年にレチオン対ワインバーガー訴訟に法廷助言者書面を提出した。(寺嶋 1985)

寺嶋が述べているように公民権運動が精神科医療領域にもおよび患者を原告とした「精神科医療訴訟」が起こる。この訴訟は主に国立・州立精神病院での処遇改善を求めた訴訟であり患者側の勝訴という結果を生む。そして訴訟勝利という結果は病院に処遇改善を迫ることとなった。これらの判決は病院での処遇の基準や患者の権利を認めたと同時に、州の財政が困窮している状況での処遇改善(医療従事者の増員や病院施設の改善など)を求めたということでもあり、脱精神科病院の遠因となったと考えられる。

では次に入院患者が原告となった代表的な訴訟を紹介する。

患者による訴訟

ラウス対キャメロン訴訟(1966年)

武器不法所持で起訴された被告人は精神病患者ということで無罪となり、訴訟能力を回復するまで国立セントーエリザベス病院に強制的入院させられた。そして強制入院は4年間におよんだ。争点は、刑に服して

いればせいぜい一年で自由を回復できたしかし、精神科病院では4年の拘束が続いた。入院による自由の剥奪は治療の実施という理由があるためであるが、治療を受けていない。そして強制入院は身柄の拘束だけであつたと主張して人身保護令状による釈放を請求した。

地方裁判所は請求を棄却したが、巡回控訴裁判所は次のような結論を下す。

「意思に反する強制入院の目的は治療にあつて処罰のためではない。……そこに治療がないと病院といふ所は有罪と判決されていない者を無期限に拘留する懲治場になってしまう」(寺嶋 1985)

裁判所によるこの判断は強制入院させられた患者には治療を請求する権利があることを示した初めてのケースであつた。

1968年にはマサチューセッツ州ブリズソウウォーター州立病院でも起こる。

ワイアット対スティックニー訴訟(1971年)

アラバマ州ブライズ州立病院の患者と一部職員による集団訴訟であり、「州立精神科病院に強制入院させられた患者に治療請求の権利がある」という確認を求めた訴訟であつた。この訴訟で判事であつたジョンソンの判断は、「同病院における治療は不十分である。そして精神病患者の治療として求められる最低基準にも達していないこと。患者は単位収容されるのではなく個別の治療を受ける憲法上の権利を有していること。非同意の入院が認められるのは治療が前提であり適切かつ十分な治療が施せない理由が職員・財政の不足であるとする事は認められない」というものであつた。

このジョンソン判事の判断によって、1972年にはアラバマ中央区連邦裁判所「精神障害者に十分な治療を与えるための最低限度の合憲的基準」(35項目)が制定された^{iv}。この判決後「治療を請求する権利」を求める訴訟が全米で起こりいずれも原告である患者の勝訴となつた^v。(寺嶋 1985)

オコーナー対ドナルドソン訴訟(1975年)

患者であるドナルドソンが院長と主治医を相手取つた訴訟でアメリカ連邦最高裁判所が下した判決である。

原告のドナルドソンは被害妄想があるとして父親が入院手続をとつた。当初、2-3週間の入院ということであつたが、49歳からおよそ15年間拘留された。ドナルドソンは科学者キリスト教会の信者であつたため教義に従つて投薬治療や電気治療など一切の治療を拒否しつづけた。入院中に医師と話を交わした時間は15年間で合わせて2時間足らずであり、他害行為の危険性がないとの判断から放任され身柄の監置だけがあつた。彼は病院からの退院を求めて地裁、連邦裁、最高裁に一八回も釈放請求の訴えを起こした。そして自由に対する憲法上の権利を不当に侵害して拘禁を続けたという理由で院長と主治医を相手どつて損害賠償請求訴訟を提訴した。連邦最高裁は「自分だけで、または責任ある宗族や友人が進んで行つた援助により、自由のなかで安全に生きてゆくことのできる危険のない者を単に拘禁目的で強制入院させておくことは違憲である」との判決を下した。ドナルドソンの主張は認められ被告は38500ドルの賠償金の支払いを命じられた。

この「精神病という理由あるいは治療の

必要があるという理由であっても、本人の意思に反する拘留は違憲である」という最高裁の判断は雑誌『タイム』の報道などによって全世界に知られることとなる^{vi}。

脱精神科病院を進める要因をこれらの訴訟にも求めることはできるが、訴訟がもたらしたものは「治療を受ける権利」や「入院治療より本人の意思が優先する」などの患者の権利である。これらの権利が認められる一方で、脱精神科病院政策によって病院から放出された人たちは長い間放置されていたようである。

例えば、1982年12月28日の朝日新聞には「脱精神科病院」の結果ホームレスになってしまった人について書いている。記事はワシントン特派員の「あてなき旅 “ホームレス”」という表題の以下の記事を書いている。「彼らに声をかけてみると、例外なく精神的な異常が感じられるのだ。アルコール中毒、麻薬中毒、精神異常、身体障害者、軽症の患者は、コミュニティで生活したほうが治療効果があがる、という医学的議論の結果、過去20年この方針がとられてきた。だが、ボランティア・グループには、それを理由に病院から患者を追いだしていると疑う者もいる」

1980年代に入っても「脱精神科病院」政策による問題は存在していたようであるが、これらの元入院患者への支援はどのようになっていたのだろうか。次に述べる。

カーター大統領の政策

1977年カーター大統領の政権下大統領の諮問機関として「精神衛生調査委員会」(The Commission on Mental and Health)が発足する。1977年2月17日に

発足した委員会は、トマス・ブラインアント委員長、カーター大統領夫人ロザリ・カーター(Rosalynn Carter)を名誉委員長とし、20名の委員で構成された。

委員会は、「ケネディ教書」以降の状況を調査し、最終報告^{vii}を1978年4月27日ホワイトハウスで正式にカーター大統領に提出する。報告書の内容を秋元の著作から引用し紹介する。

CMHCの整備、増設と共にそれ以外の多様な精神保健サービスが計画され、具体化されなければならない。地域の現状に見合う創意と工夫に富んだボランティアの活動が必要である。政府はそれぞれのレベルにおいて、これらのボランティアに資金援助を行わなくてはならない。地域に自然発生的に生まれた障害者家族、牧師、ボランティア、セルフヘルプグループなどの民間活動は精神障害者の地域生活の役に立っているにもかかわらず、正當に評価されていない。その助成を図ることが必要である。地域で自立しようとする精神障害者のための職業リハビリテーション及び雇用の拡大のための具体的施策が連邦、州、地方自治体に講じられなければならない。

.....

いまなお、ほとんどの精神病患者が未治療のまま社会の片隅に打ち捨てられている。アメリカはもっと多くの資金と人を彼らのために投じなければならない」(秋元1991)

「精神衛生調査委員会」の報告書の内容は、次の3つの柱からといえる。

CMHCの整備、増設と共に、それ以外の多様な精神保健サービスが計画とその具体化。

地域の現状に見合う創意と工夫に富んだボランティアの活動の必要性。

地域に自然発生的に生まれた障害者家族、牧師、ボランティア、セルフヘルプグループなどの民間活動は精神障害者の地域生活の役に立つ取り組みへの正当な評価とその助成の必要性

1980年10月7日、報告書の提言を骨子とした新しい法律「精神保健体系法 Mental Health Systems Act」が成立する。1981年から1984年の会計年度までに精神保健についての予算7億1950万ドルが計上され、その大部分が大統領委員会の報告書の勧告に基づいて地域精神保健サービスに用いられることになる。しかし、1981年レーガン政権時にCMHC法が廃止され、「精神衛生調査委員会」(The Commission on Mental and Health)の調査報告の中にある「CMHCの整備、増設」は実行されずに終わることがなくなった。ただしこれは見方を変えると、「地域ケア」が医療的・治療的といった限定的なものからリハビリテーション、福祉的なものもふくむ包括的なものへ拡大をしていく歩みが逆行することはなかった

このカーター大統領の政策の柱である「地域に自然発生的に生まれた障害者家族、牧師、ボランティア、セルフヘルプグループなどの民間活動は精神障害者の地域生活の役に立つ取り組みへの正当な評価とその助成」によって発展し今日までその活動が継続されているものにACT/PACT

(the program of assertive community treatment)とクラブハウスモデル(Clubhouse Model)がある。次にACTとクラブハウスモデルの取り組みと特徴につ

いて紹介する。

ACT/PACT

(the program of assertive community treatment)

ACTはケースマネジメント(ケアマネジメント)の一つであり、精神病患者/障害者がプログラムに参加してくるのを「待つ」のではなく、医療スタッフを中心とした多職種によって編成されたチームが「訪問」を行うことが特徴である。ACTはケースマネジメントを手法として用いるがサービスを仲介するのではなくACTはチーム自らが様々な支援を直接行う。つまり、ACTは看護師、精神科ソーシャルワーカー、心理士、作業療法士、医師、当事者のスタッフなどの多職種によってチームが編成され、その都度必要な専門家が当事者のもとへ支援に赴く。それは、ACTの対象者が長期間にわたり継続的に重い精神障害を持つ人を想定しており、彼らが入院をすることなく地域でホームレスにならずに生活するには医療だけではなく福祉や心理面など多方面のケアを必要としているからである。

ACTの起源は1960年代にウィスコンシン州マディソンの州立メンタタ病院で始められたTraining in Community Living(以下、TCL)である。しかしTCLは入院治療に代わるべくデザインされてこともあり管理的な傾向が強かった。しかし、「医学モデルで管理的である」という批判と「地域ケア」の考え方の転換などにより地域での生活を支えるサービスを取り入れた福祉的なケアを行うように変化した。

ACTチームはそれぞれ独立したオフィスを持つ。そして情報の共有化と検討が行

われ、サービスプランを作成する。サービスプランは利用者の要望や必要に応じたものであり、医療、保健、福祉と多岐にわたる^{viii}。ACTの特徴が「訪問」によつての支援であることは述べたが、ACTの「訪問」は支援が必要な場所で行われるということの意味する。訪問看護のような「訪問」支援は住む家に出向くことが多いがACTのそれは住居に限らない。職場での人間関係の調整や契約問題などの解決のために職場の上司との話し合いが必要な場合は職場に訪問を行う。家族の心理的ケアや疾病についての理解が必要な場合は家に訪問をする。そしてそれぞれの場所で支援がチーム自らにより提供される。そしてACTの支援は24時間の利用と即応が可能であるという原則があり、この点もACTの特徴である。

Clubhouse Model

1944年にニューヨーク市で州立病院を退院した4名の精神疾患を持つ人たちによって自助グループ「WANA」が作られる（「We Are Not Alone」の頭文字をとりと名付けられた）。

この「WANA」がクラブハウスモデルの原型である。当初、「WANA」は図書館や教会あるいはYMCAの集会所などを借りミーティングを行っていた。そして、入院をしている仲間や退院をしてもひとりである人たちを訪問し、励ます活動を始める。しかし、友愛訪問などの自助活動を行うには彼ら独自の場所が必要であった。1948年にボランティアらの協力によってマンハッタンにビルを購入する。

これが、最初のクラブハウス「ファウンテンハウス」であり、その後、ソーシャル

ワーカーなどの専門家が活動に加わり、「仕事」を中心に据えた活動が始まる。

1950年代に州立病院のソーシャルワーカーであったジョン・ビアード（J. Beard）が所長としてファウンテンハウスに参加したころから、クラブハウスモデルの原形である「仕事」を中心とした取り組みが始められている。ファウンテンハウスは、1977年にCMHCの助成金にてクラブハウスモデルについて研修啓発活動を行い、結果全米にクラブハウスモデルが普及する。次にクラブハウスモデルの活動はどのようなものかについて述べる。

クラブハウスモデルの特徴は、「仕事に律せられた一日」という考えを基にしたプログラムの存在。本人の意思によるプログラムへの参加。メンバー（当事者）とスタッフ（支援者）のパートナーシップをそのプログラムに反映したこと。プログラムは療法ではなく「仕事」であることを明示したことなどが上げられる。

中でもメンバー（当事者）とスタッフ（支援者）のパートナーシップをそのプログラムに反映については、スタッフとの関係については、「メンバーだけあるいはスタッフだけの会議、記録、仕事は設けない。」などの基準を設けるなど意識的な仕掛けを施している^{ix}。

仕事に律せられた一日」という考えを具現化として、クラブハウスはその活動を通常、月曜日から金曜日の1日8時間とし「仕事」をおこなうこととしている。その「仕事」は外部からの委託ではなく、クラブハウスの維持にとって必要な仕事をメンバースタッフの区別なしに行うという者である。

クラブハウスモデルでの具体的な「仕事」

の内容は各クラブハウスによって少しずつ違うが、1：日中活動であるデイ・プログラム 2：過渡的雇用（Transitional Employment） 3：夜間・休日プログラムなどがある。

1：日中活動であるデイ・プログラムの具体例としてクラブハウスを維持するために必要な会計、建物の保守整備・清掃、クラブハウスを利用する人にとって有益なニュースレターの作成・発送、食事作り、各国のクラブハウスとの情報交換とそのため翻訳作業や情報の整理などがあげられるだろう。

過渡的雇用はクラブハウスモデルの特徴的なプログラムである。通常の雇用関係においては、個人と事業主が契約し、労働とその対価である賃金が支払われる。また、職場体験などでは、雇用契約そのものが結ばれず賃金も支払われない場合もある。それに対し TA では、クラブハウスと事業所が契約を結ぶ。まず、スタッフが事業所に赴き、仕事を実際に行い、覚える。そしてすべてのメンバーができるような工夫を施し、メンバーと共に実際に仕事を行い仕事のやり方などを伝え、また分かり良いように工夫をし、マニュアルなどを作る。多くの場合、複数人のメンバーで過渡的雇用が始まる。メンバーが欠勤した場合、クラブハウスがその穴を埋める。その穴埋めもメンバーが行う。メンバーが誰もいないときはスタッフが行う。そうすることで、事業所には欠勤というデメリットをもたらせない。過渡的雇用は基本的にパートタイムであり、通常週 15～20 時間、雇用期間は 6～9 ヶ月としている。そして、雇用である以上、メンバーは最低賃金以上で、一般事業所並の

賃金を事業主から直接受け取る。職歴として履歴書等にも書くことができる。過渡的雇用の原則は、メンバーの権利として、メンバーが会社や工場で働ける機会を提供するために、クラブハウスは独自の過渡的雇用プログラムを準備する。

夜間、休日のプログラムは、過渡的雇用や一般就労、あるいは様々に理由で日中クラブハウスに来ることができない人達のために開かれることが多い。ただ、その活動にも、自助活動の考えが随所に伺える。

まとめ

3 回にわたり精神病の治療史とアメリカの脱精神科病院について述べた。現在、欧米諸国では入院治療から地域ケアにその支援方法が転換されている。しかしそれは治療そのものが否定されているわけではない。入院から地域ケアへという事象は必要なケアが治療だけではないことも示した。

他方、わが国の状況は 2002 年に政府が「入院医療中心から地域生活中心へ」という方向性を打ち出したが、欧米に比べ病床数や平均在院日数が非常に多く長い。これまで述べたアメリカにも精神科の病床は存在し入院加療のすべてが否定されているわけではない。しかし同時にケアの在り方いかんによって入院治療から地域生活中心へ移行することが可能であることも示している。

わが国の入院医療中心という状況を地域生活中心へ移行させるにはどうすればよいのか。それを実現させよう取り組みは、様々な地域で実践されている。

次回からは地域生活中心へ移行するという取り組みにいたる経緯とそれに関する

様々な主張を紹介する。次回以降論考する事柄は終わったことであるが「現在の状況」につながる。そして過去のことを整理することは「現在の状況」を確認することに役立つと考える。

まず、ケネディ教書に象徴されるアメリカの脱精神科病院をわが国の精神科医や福祉関係者がいかに評したのかについて精神科病院と病床数の増加を後押しした歴史的な出来事や政治の状況を考慮し述べたい。

参考・引用文献、資料

- 秋元波留夫 1987 『精神障害者の医療と人権』 ぶどう社
1991 『精神障害者リハビリテーション その前進のために』 金原出版
監修 共同作業所全国連絡会編 1988 『アメリカの障害者リハビリテーション』
ぶどう社 .
- Ciardello, Jean A Bell Morris D 1988 *Vocational Rehabilitation of Persons with Prolonged Psychiatric Disorders* The Johns Hopkins University Press=1990 岡上和雄・松為信雄・野中猛 監訳 『精神障害者の職業リハビリテーション 蔓延性精神分裂病をもつ人のために』 中央法規出版
- Ennis, Bruce 1972 *Prisoners of Psychiatry* Harcourt Brace Jovanovich=1974 寺嶋正吾・石川毅訳 『精神医学の囚われ人』 新泉社
- 松下正明 編 1999 『臨床精神医学講座 S1 巻 精神医療の歴史』 中山書店
編 1999 『臨床精神医学講座 第20巻 精神科リハビリテーション・地域精神医療』 中山書店
- 三野宏治 2009 「アメリカ合衆国：社会福祉の現状, 地域精神保健福祉」 『世界の社会福祉年鑑 2009』 pp190-200, 旬報社.
2010 「精神障害者クラブハウスモデルの仕事を媒介にした相互支援の考察 その仕組みと発想」 『福祉文化研究』 Vol.19
2011 「精神障害当事者と支援者との障害者施設における対等性についても研究 当事者と専門家へのグループインタビューをもとに」 『立命館人間科学研究』 第22号
2012 「対人支援関係における専門家の権力性に関する考察」 『対人援助学研究』 1

- 宗像恒次 1984 『精神医療の社会学』 弘文堂
- 杉野昭博 1994 「社会福祉と社会統制」『社会学評論』177 第 45 巻第 1 号
- 竹端寛 2008 「精神保健政策の変容 カリフォルニア州における精神保健政策の分析をもとに」『福祉社会学研究 5』
- 寺嶋正吾 1985 「精神科医療の最近の国際的動向」『人間性回復への道』 亜紀書房

i 宗像 1984

ii 原文では Comprehensive Community Mental Health Centers であり日本精神神経学会精神衛生法改正対策委員会・日本精神衛生会 訳による

iii 1967 年成立。1972 年完全施行。1967 年成立時のカリフォルニア州知事はロナルドレーガンであり、大統領であった 1984 年に CMHC の新規建設を中止している。

iv 弁護士のブルース・エニスによると全米にある州立・群立精神科病院 321 か所のうち基準を満たしているのは 16 か所であったという。

v ニューヨーク、イリノイ、マサチューセッツ、オハイオ、ミネソタ、ネブラスカ、テネシー、ジョージア、フロリダなどで訴訟が起こる。

vi 『タイム』1975 年 7 月 7 日号

vii 報告書は四巻で構成されている。一巻が勧告書、二 - 四巻が付属資料であり、勧告書は 117 項目にも及ぶ。脱施設政策の見直しと新しい精神保健サービスの創設を求め、向こう五年間に 5 億から 6 億ドルの連邦政府予算が必要であるとしている。

viii ACT が提供するサービスの具体例として、ケース・マネジメントをその手法とするサービスの立案、評価。精神科の医療サービス。就労支援。住居支援。家族への支援と教育。薬物・アルコール乱用と依存の治療サービス。地域で直接提供されるリハビリテーションなどがあげられる。

ix 筆者はメンバーとスタッフのパートナーシップに関して、肯定的な論述（三野 2010）とその困難さについての論考（三野 2012）を試みた。

ほほえみの地域づくりの泣き笑い

〜青い森のほほえみプロデュース活動奮闘記〜

ほほえみプロデューサー講習会 始動！（6）

山本 菜穂子

平成19年11月。ここまで養成された「コア笑いプロデューサー」と「笑いプロデューサー」と共に、「ほほえみプロデューサー講習会」を始めました。

前回も書きましたとおり、私の中では、講師として動いてもらうコアと笑いの仲間たちは、私にとってまだ少し守るべき存在でした。みんなまだ、一般の人を前にして研修講師になるなどという経験をしたことはほとんど無いのですから。もし、初期に失敗して受講者から苦情を言われたり嫌な思いをしたら次はもうコアも笑いも来てくれないかもしれない。「良い評価は全員で分け合うこと、そして悪い評価の責任は私にあること」を肝に銘じよう。この段階の私の中の密かな決意。

まずは練習をさせてもらえる環境を準備したいと考え、県内6地区の県合同庁舎で、主に県職員の参加を見込んで、夕方、仕事帰りに寄ってもらえる時間の開催としてホームページや県庁職員向けインフォメーションで広報して参加者を募りました。でも、なかなか人は集まってくれません。「青い森のほほえみプロデュース」「ほほえみプロデューサー講習会」このネーミングは、ターゲットのはっきりしない、内容も想像しにくい、その意味ではまったく人を呼び集めにくい名称なのでしょう。

4人、10人といった少ない参加者の前で、スタッフの人数の方が多いような状態で講習をすることもたびたびありました。実は個人的には

ちょっと寂しかったり、ガッカリしたりという気持ちでしたが、みんなには、「一人ひとりを大切にして講習をする練習チャンスだね。」と話し、「今のうちに私たちも講習に慣れておかなければ」という気持ちもあり。（この時、講習依頼が増える当てなど無かったのにね。）

<私の役割>

コアと笑いの仲間たちには練習をしてもらいながらも、私はそのまま手をこまねいているわけにもいきませんよね。人が集まらないという現実には。まあ、この時も周囲からは、動員をかけて集めるしかないんじゃないかという声も聞こえていました。でも、私、ここに関しては結構意固地になっていて。『広報しても人が集まらない』もし、この状態が続くようであれば、私たちが感じてきたこの事業の意義が、県民の想いとずれているということなのだろう。だとしたら人が集まらなくても仕方ない。人集めを強要するような方法はとりたくない。諦めよう。」と、そんなことも考えていました。

でも諦める前にできることとしてその時に意識したのは、「想いを伝える」ということでした。講習会の中で事業の目的や目指したい状態を丁寧に説明し、共感を得られるよう最大限の努力をしよう。ほほえみの7か条を伝えることと同じくらいの力点を置いて、事業のビジョン、「皆さんと一緒に、ほほえみに満ちた、あたたかくゆとりのある青森県づくり

をしたい！」ということ伝えていったのです。実はそれまでは、ほほえみプロデューサー講習会の開催に関し主役は私ではなく、コアや笑いの仲間なのだから、あまり私が表に出るのは控えようと思っていたのです。でも、その時、ほほえみ隊のSさんが、「菜穂子さんが話すべきだよ。まず、ビジョンを伝えるべきだよ。誰も、出しゃばりだなんて思わないよ。この取組が広がるためには必要なことだよ。」と助言してくれたのでした。

結果、1時間の講習の前半15分前後を、この取組に込めた想いを伝えるために使わせてもらうことにしました。ビジョンとそのために活用できる手段と一緒に提示する講習会となっていったことで、受講者にこの取り組みと一緒に参加していく意識が生まれ、後々、口コミで情報を広げてもらえることになったのではないかと考えています。

<研修講師をするということ>

徐々に口コミで講習に呼んでいただけようになるのは年が明けて、春が近くなる頃からだったと思います。それまで、地道に練習を積みながら、私たちは実力(?)をつけていくわけです。

余談です。私自身は演劇部で、とりあえず、人前に出て大きな声を出すことの経験はあったということは以前書いたと思います。

でも、研修の講師として私を育ててくれたのは、児童相談所でした。

児童相談所に勤めて4年目くらいから。当時も児童相談所には、地域から時々研修の講師依頼が来ていました。まだ虐待が騒がれ始める前、子育て支援の役割が市町村に位置づけられる前でしたので、子育て相談に関する事、子どもの発達に関する事などの一般むけや民生委員・児童委員さんむけの講演や、教職員向けに児童相談所とはどんな機関かを知らせてもらうための研修会などの依頼が来ていたと記憶しています。

当時、そういう依頼を受けると、経験年数の多い先輩の児童心理司か課長が出向いていたことが多かったと思うのですが、その頃私が所属していた児童相談所は、まだペイペイ（と自分では思っていた）の私の他に児童心理司がおらず、直属の上司は持病があってあまり外の仕事は引き受けておらず。その中で私は、次々と講師に行かされることになりました。

最初は前の日から眠れないくらい緊張して、事前に準備したことを一方的に伝えるだけで精一杯。でもそれを何回か経験すると、やっと相手が見えるようになってきて。相手の聞きたいこと、聞きやすい例示、飽きずに聞いてもらう工夫、などに配慮できるように進化していきました。聞いてくださる方を、早い段階で味方につけられると、その後とてもリラックスして話しができることなども体験的に学んできました。

当時、苦しみながら経験してきた道筋が、ほほえみプロデューサー講

習会に出向いてくれる仲間たちがたどるであろう道と重なりました。

最初は自分の伝えるべきことを一方的に伝えるだけで精一杯であるのは当然のこと。その時に私のできることは、みんなが少しでもリラックスして話せるように、集まった受講者を早く私たちの味方につけること、そして、失敗しても大丈夫だと心から思ってもらおうこと、だと考えていました。その意味でも最初にビジョンを語らせてもらえることは役に立ちました。

<コアと笑いの

プロデューサーの役割>

ほほえみプロデューサー講習会は、笑いプロデューサー等の仲間講習会スケジュールを示し、各自が都合のいい会場にエントリーしてもらおうというスタイルで講師・スタッフをお願いしました。もちろん無償です。意欲のある仲間達が仕事の合間を縫うなどして集まってくれました。

集まった仲間達は、そこで主に「ほほえみの7か条」を伝えていくのですが、その「ほほえみの7か条」は内容もさることながら、伝え方にも、聞く人を惹きつける秘密があります。

「ほほえみプロデューサー講習会」の場でこの7か条を参加者にわかりやすく伝える方法として、高柳先生から指導を受け、私たちが心がけてきたのは、

- 1 講師側が真実を自分のことばで伝えること
- 2 受講者に体験して実感してもら

うこと

- 3 寸劇などで具体的に見てもらおうこと
- 4 いずれも、受講者の年齢、性別、職業などを考慮し、どんな題材を提示するかを十分検討すること

などでした。

当初はそのシナリオの大筋を私が作成し、7か条のそれぞれの説明役、体験談を語る人、タイムキーパー、合図の鈴を鳴らす人、説明用のプラカードを持ってくれる人、寸劇の俳優さん（♪）などなどの役割をそれぞれの会場のコアを中心にそれぞれの希望をとりながら振り分け、つまずいたらいつでも私が入ってフォローする約束で始めました。

本番の1時間前には集合して、会場づくりを一緒に行い、マイクやプロジェクターなどの機材の具合を確認し、事前に知らせてあった役割で練習を行います。椅子の並べ方ひとつにしても、前の人と重なって見えなくならないように列をずらしたり、見やすさと雰囲気をつまやくするために、半円形に並べたり工夫します。それから、説明内容や話しの流れをみんなで確認し、寸劇はちゃんと立ち稽古をします。そしてできる限り暗記して（自分のことばで語れるようにして）受講者の前に立てるように準備します。終了後に渡すチラシやほほえみプロデューサーカードなども配りやすいように支度します。そのようにして本番を迎えることになるのです。もちろん、受講者が来

てくれたら、その方が緊張しないように話しかけたり、雰囲気づくりは私たちみんなの役割です。

そして講習会終了後は、その場で受講者の残してくれた感想を確認しながら、反省会を行います。

それが一連の流れです。

<コアと笑いの育ちに

奏功したもの>

1 手間をかけてもらうこと

時々、継続的な活動をしている団体などで、事務局のごく一部の人の負担だけが大きくて、共に活動の中心にいるはずの人が、いつまでもお客様として扱われている場面に出会います。そしてその「本当は最も身近にいてくれるはず」の「お客様」から、まず一番に文句が出る。名簿に間違いがあるとか、資料の提供が遅いとか。事務局として手間をかけている人は労われることもなく、仲間からの苦情にどんどん疲弊していくと。

ほほえみプロデューサー講習会に関し、県の取組ではあるものの、県担当職員が全て準備して講師として協力してくれる仲間たちをお客様のように迎えるということはいませんでした。これは笑いプロデューサーの講習会の頃から徐々に培ってきた方法です。

ほんのわずかなことですが、例えば一緒に椅子を並べること、配付用カードの枚数を数えること、そういうことに一緒に手間をかけてもらうことによって高まる仲間意識・凝集

性は、すべて準備の整ったところにやってくるという心地よさの何十倍も価値のあることでした。

仲間になってほしいときには、できるだけ相手に甘えてみることで私は思っています。もちろん、その時にこちらがそれよりも少し多く力を注いでいることが前提ですけれどね。

当日の準備作業を一緒に行いながら、私たち講師側はチームとしてまとまり、知らず知らずのうちに、是非、受講者に「ほほえみの7か条」を理解して帰ってほしいとの想いを強め、本番の1時間を迎えることになります。

慣れてきた後は、シナリオも私が作るのではなく、それぞれの会場の受講者に合わせて、子ども達には子ども達向けに、高齢者には高齢者向けに、その回のリーダーとなるコアや笑いのプロデューサーが工夫して作成するようになっていきます。講師として誰が参加できるのかを見ながら、どこで寸劇を使うか、どこに体験談を入れるか、工夫しながら。それだけの手間をかけながら毎回、唯一無二の会を創り上げていくのです。そして手間をかけた分だけ、その都度、相手を大事に思い、ほほえみを伝えたい、是非ほほえみの7か条を実践してほしいとの想いを強くし、発信する会になっているのです。

2 目指せ、笑顔の反省会

手間もかけ、一生懸命受講生に向かい合ってくれる仲間たちです。講

習会終了後の反省会では、徐々に激しいやりとりが目につくようになっていきました。寸劇のセリフを覚えてこなかったことに関して、途中で説明の意味が分かりにくくなったことに関して、受講者へのインタビューのマイクに向け方について・・・みな、真剣にやっているだけに、厳しい意見が出始めました。

このまま、こんな苦しい反省会を続けていけば、そのうち誰も講師に来たくなるのは目に見えている、そう思いました。そうやって分裂していった団体なんていくつも知っているでしょう。

だいたい、こういうことに無償で飛び込んで協力してくれる仲間たちです。基本はとても真面目で一生懸命なんです。失敗したことについては誰に何を言われなくても自分が一番よく分かっているんです。

こういうときばかりは、私の出番です。私はこの取組に関してボスなんですから。そしてやったのは、目的と方法の確認です。私たちは何をしたいかここに集まったのか、ほほえみで人と人との関係をつくり、安心して失敗をしたり安心してSOSを出せたり、そうしてあたたかい地域をつくるため。その目的のために、一生懸命勉強して受講者の前に立つ、その姿勢は無くしてはいけない、それは基本的に大事なことの一つ。でも、できていないことを相手に伝えるとき、責めるのは私たちが方法としてすべきことじゃないはず。その時にもほほえみの7か条を使いまし

よう。地域づくりなんて大きなことを語る前に、自分たちの身近な仲間との関係をほほえみで築けないのなら、ほほえみを広めることなんて無理なんです。まず、努力を認める、そして直した方がいいことがあれば伝える、そして相手がそうやってみよう、と思えるようなシメのことばをかける。PNPの実践を勉強しながら、笑顔で反省会をしましょう。と。

このことは、どの回に行ってもしつこいくらい言い続けました。私たちが理屈で述べるだけでなく、実態としてもほほえみで繋がる仲間になれたら、その時こそ、この取組は広く県民の共感を得ることができると、これは確信していましたから。だって、コアの仲間たちが一緒にやりたいと言ってくれた時、「県の担当者がほほえみで繋がっているのを見て、自分もあの仲間に入りたいと思ったから」だと教えてくれたのだから。

3 「失敗しないこと」にそんなに大きな意味はない

反省会の方法に触れましたが、実は、このほほえみプロデューサー講習会で講師側が失敗することは、失敗しないことよりも受講者に与える効果は高かったのです。

失敗しない人間なんていない、努力しても失敗してしまうことなんてたくさんありますよね。普段の生活の中で、失敗は糾弾されることが多い。だから、失敗したな～と思ったら怒られたり馬鹿にされたりするの

は嫌だから隠したくなります。そして、失敗を隠した、反省していない、とまた責められる。そしてどんどんエスカレートしていく。不毛。

ほほえみプロデューサー講習会で例えば寸劇のセリフを忘れてしまうなどの失敗が起こると、リーダーが「すみませ～ん。ちょっとストップします。さあ、今日は受講者の皆さんのために、今の部分をもう一度お見せできることになりました。ラッキーですね～。2度見る方が、しっかり意識して見ることができますね～。ではもう一度行きますよ。」など、失敗の前向きな意味を伝えることばを挟みます。ま、次から次へと失敗して、何が本当だかわからなくなる、なんていうほどひどければ論外ですが、1講習会に1回くらいのこんな失敗は御愛敬で、むしろ本当に受講者が意識を止めて考えてくれることに役に立つと思っています。もって行き方です。

まあその前提には、私たちは、講習のプロになるための集団ではないということがあるでしょう。別に特別な存在ではなく、あなたの隣に暮らしているだろう普通のおじさんやおばさんだけど、大事なことから聞いて欲しいんです、という仲間からのメッセージだから、「失敗しないこと」や「立て板に水のスムーズなことば運び」なんかより、一生懸命さが伝わることの方が好感が高いし、聞いてもらえる。そしてなにより「失敗を非難されない関係が今日の前に存在していること」を見てもらえる

ことの効果は絶大でした。

「失敗しないこと」について躍起になってしまうことは多いけれど、立ち止まって考えてみませんか。

「失敗しないこと」が実は最重要の課題ではないと、コアや笑いの仲間たちと共有できたことは、コアや笑いが育ち、この取組の理念が広がるためにとっても大きな収穫でした。

これも失敗してくれた仲間たちのお陰です。

さて、こうやってつくっていった活動が、「プロデューサーの皆さんの熱い思いを感じました。」「皆さんの笑顔に触れて、自分もこの7か条を実践したいと思いました。」などの感想を生むことになり、ロコミで講習会が広まり始めます。

そして、平成19年11月から平成21年3月まで、私たちほほえみ隊は、結局348回を数えることになる、県内全域で開催されたほほえみプロデューサー講習会全てに同行し、コアや笑いの仲間たちと、感動を共にし、反省会を共にし、すっかりお互いに人となりを理解し、信頼関係で結ばれることになりました。「やってみせ言って聞かせて、させてみて、誉めてやらねば人は育たず」か。後半のほほえみ隊はもっぱら、自ら楽しんで、誉めてばかりだったような気がします。「自ら楽しむ」そのこと、実は取組が継続するためのとっても大きい要素なんですよ。

男は 痛い !

國友万裕

第5回

僕達急行
A列車で行こう

1. さようなら、おじさん型男性学

実は、僕は2年ほど前にある男性解放を訴える社会運動家の男性と喧嘩している。

その人のことはかれこれ14年前から知っていたのだが、付き合いが本格化したのは5年ほど前からだったと思う。その男性が中心となる団体で、ミニコミをつくることになって、筆が速いことでは定評のある僕に白羽の矢が立った。その男性のほうから、「一緒にやってくれないか」と声をかけられたのだ。ミニコミは季刊だったのだが、ミニコミの原稿の他にも、その男性が主催するイベントの手伝いをしたり、参加したりして、一時期は上手くいっているようにも見えていた。その男性は、男性運動の世界では結構名前が知れていて、経験や知識もあるし、話術や文章力も達人だ。その男性の訴えることには、それなりに深いところがあったし、説得力もあった。

しかし、その男性との関係はしだいに翳っていき、憎しみの残るような別れとなってしまった。

(1) 女の下ネタ

おそらく、その導火線となったのは、2年前の新年会の時のことだったと思う。その男性の手料理を僕も含めて5人(男3人・女2人)でつつきながら会食したのだが、その席で女性の一人が露骨な下ネタを始めたのだった。下ネタが大嫌いな僕は、隣の席から何度も彼女に「やめてくれ」という態度を示したのだが、彼女は僕の気持ちなどおかまいなしにHな話を続けていく。僕が怒ると、その男性は「そんなふう言うな！ 私は下ネタが好きなんだから」と僕のほうを制して、彼女の下ネタを煽るのだった。

それだけだったら、まだ許せる。ところが、その後ブログで、その時の僕のことをネタにして、「女性が下ネタをするのは品がないと思っていらっしやるのでしょうか」と書かれた時は、さすがに怒って、「僕は女の下ネタが嫌いだななんて言っていないですよ。男でも下ネタなんてする人は嫌いですから」と激しく抗議のメールを出した。その男性は、僕が「男が下ネタするのは許されるけど、女は許されない」という古いジェンダー規範に囚われているから、彼女の下ネタに怒ったのだ、一方で自分は女の下ネタに付き合うことができる進んだ男だと思い込んでいるのだ。その男性は、10年以上も付き合いながら、結局、僕のことを何も理解してはいなかったのだった。

2. 男・おごる人 女・食べる人???

その男性が行う講座でも、これは変?と思う出来事はたびたびあった。

とりわけ隔世の思いを抱いたのは、「男がおごる」という議論になった時だ。その時は女性と付き合うときは男がおごらなくてはならないんだという囚われをもっている若い男性がゲストで現れて、それをテーマに話が進んだのだが、「一体、いつの時代の話なの???'と首をかしげたくなるような話が飛び出してくる。「僕は、彼女はいないけど、女友達はいて、先日鎌倉で彼女に会った時、何から何まで彼女におごってもらいましたよ。彼女のほうが収入多いですから」と僕が訴えても、「それは一部の話だよ」と真剣に取り合ってはもらえない.....。

「俺は異常な世界を生きているのかなあー。俺の周りだったら、男がおごるのが当たり前

なんて言うような女、一人もないけど...」

3. 男たちよ、女に白旗をあげよ!?

また当時、僕はその男性がやっている団体のHPに僕のブログをリンクしていた。当然、そこに入りしている人たちが主たる読者だった。

僕は当時ジェンダーの悩みをあれこれ綴っていて、若い頃、女性からトラウマを負わされ、女性と上手く付き合えないなど、女性に対するルサンチマンも綴ることがあった。するとその団体に関わっている男性から、こういうコメントが入った。「(女に)負けたくないだけなんちゃうのー。負けてもええんちゃうのー」。

この人は僕と同年なのだが、昔は妻君にDVしていて、当初は、夫のDVに耐えていた妻君が、フェミニスト・カウンセラーのカウンセリングを受けて、「あなたが悪いわけじゃないんだ。暴力をふるう夫のほうが悪いんだ」と諭されてから、所謂「逆転現象」がおきて、一時期は大変だったらしい。最初は自分がいられないから殴られるのだと思って、自分を責めていた妻君が、逆DVを始めたのである。で、結局、壮絶な葛藤の末、無事DVから抜け出し、妻君との間もどうにか修復できたとのことだった。

明らかにこの人は、自分自身を僕に投影してしまっていた。最初は亭主関白男だったのが、夫婦関係が壊れて、妻に暴力をふるい、激しいリベンジをされて、結局、妻に白旗をあげたことで、どうにか丸く収まったという経験をしているから、僕にも女に完全降伏す

れば上手くいくんだと進言しているのだ。

「俺は、シングルなんだよ。女性に DV もしていない。むしろ女性から傷つけられた男なんだ。あなたとは問題の次元も違っている。だから、あなたと俺を重ね合わせるのではなくて、あなたの妻君と俺とを重ねあわせて考えてくれ」とコメントを返したはずだけど、あの人が僕の言わんとすることをわかってくれたかなあー。おそらくわかっていないだろうなあー。

4 . 女の罪は男のせい! ?

さらに同じくこの団体に関わっていた女性から、次のようなコメントが来た。「女性を憎む男性たちのブログやサイトを見ていると、『女を下位のものと見做しているから、女性を許せないんだ』と感じる時があるんですが……。」という内容のものだった。「僕は子供の頃から、女の子にいじめられるような弱虫で、女性を下位の者と見做したことなんてありません。」とコメントを返した。しかし、彼女は、「でも……。」と、またしつこく突っ込みを入れてきた。

どうやらこの女性は、僕の気持ちを察するのではなく、僕のブログのなかに自分の読み取りたいことを読みこもうとしていた。おそらく、「女は男に何も悪いことはしていない、男の意識の問題なのだ」と僕に言わせたかったのだろう。女性から被害を受けたと感じるのは男性優位な意識を男が持っているからで、だから、そういう意識をもつ男が悪いのであって、女は悪くないのだと思いたいのだ。

5 . 二次被害

うーん、これでは議論が進まない。

僕は普段大学で教えているが、今の若い子は、性の問題に関してはきわめて敏感で、ちょっとしたことであっても、過剰な反応を示す子はいる。男子大学生も、下ネタをする時はある程度は場所と相手をわきまえなくてはという意識はもっている。「だって、先生、今は男同士で話をしていて、たまたま近くで女の子が聞いていただけでも、彼女がセクハラだと感じてしまったら、セクハラになっちゃうんですよ」と言われたのが10年くらい前だった。

もちろん、下ネタが好きな人同士が集まって、下ネタをするのは勝手だが、新年会の席で、隣に下ネタ嫌いの人が座っているのに、その人のことはおかまいなしにそういう話をし続けるなんて、環境型のセクハラである。またそれを煽った男性も、セクハラ教唆の罪にとわれるはずだ。

男がおごるという問題は、男のほうが入収入が多いのが当たり前の時代だったらわからなくはない。しかし、今はこの下流社会。男のほう給料が高いとは限らない。女性のほうも、そのことはわかっているだろう。それに合意のうえで付き合っておいて、お金をとることを強制してしまったら、売春と一緒に。そう思われるのは嫌なんじゃないの？ フェミニストのなかには、「男が女を養ったり、守ったりするのは女性差別だから、しないほうがいいのよ」と言う人だっているぜ! ?

僕が女性と付き合えないのは、女性になめられるタイプだからだ。僕は相手に合わせ過ぎる性分なので、付き合うのがしんどいのである。女だって、男に合わせてばかりでは身

がもたない。だからこそフェミニズムが起きたはずなわけで、男に女に対して白旗をあげさせようと先導するのは変だ。それでは男性解放ではなく、女尊男卑なのである。

世の中はまだまだ男性優位主義だというけど、現実はそのような単純なものじゃない。すべての男が社会的・経済的・肉体的・精神的・頭脳的に女性よりも勝っているとは限らない。じゃあ、女性たちに訊くけど、もし男にセクハラされたとして、その男がものすごく貧乏で、家族からも愛してもらえず、学歴もなく、ぶ男で、何の取り柄もない、かわいそうな男だったとしたら、女性は、その男のことを許せるわけ？ 多少の情状酌量はしてくれるかもしれないけど、セクハラしたこと自体は反省して欲しいと思うはず。それと同じで、万が一、僕が男尊女卑的な男で、女性を下位の者とする意識をもっていたとしても、僕が女性に傷つけられたことは事実なわけで、女性にも反省すべき部分があることも事実なのである。社会の外枠を牛耳ってきたのは男であるにしても、女性だってその枠の中で、男に影響を与えたり、色々な選択したりしてきているはずだ。だから、半分は女性の責任なのだという責任感をもってもらわなくては困るんだよなあー。

こんなわけで、せっかく男性運動に関わったのに、僕はイライラのし通しだった。河島英伍の歌に「時代遅れの男になりたい」という歌があるが、僕が男性運動で知り合った人たちは本当に時代遅れな男たちであり、そして、時代遅れな男しか知らない女性たちである。時代遅れな男を基準にして考えてしまう人ばかりだから、僕みたいに時代の先端に行く男(?)は、二次被害にあってしまう。女

性からトラウマを負わされた上に、女性から傷つけられた経験をどれだけ訴えたところで、「それは一部のことだ」「あなたが男尊女卑の意識を持っているからだ」「その原因をつくったのは男社会だ」と跳ね返してこられたのでは、議論は振り出しに戻ってしまう。僕は自分の感情を否定されて、さらにトラウマを深めることになる。

実は、僕は12年前にもまったく同じ理由で、他の男性解放運動家の男性ともめていて、もう二度と同じ失敗は繰り返すまいと思っていたのに、性懲りもなく同じ確執を繰り返してしまった。そういうアホな俺にも問題はあるけど、日本の男性解放の人って、なぜ、こんな(僕目から見れば)時代遅れな人ばかりなのか。僕はとても付き合っていられない。癒しを求めて運動に協力したのに、逆に傷つけられるというのでは何のメリットもないのである。

この頃は、N先生と親しくしているが、N先生は、僕がもめた二人の男性のこともよくご存じで、冗談半分で「第三の男にしないで」と言われている(笑)。二度あることは三度ある? いや、三度目の正直を信じたい。N先生こそ、僕とともに歩むことができる男性であると信じたいところなのだ。N先生は、僕が訴えんとすることも十分にわかっていると思う。「これまでは、おじさん型男性運動だ」とはN先生自身もおっしゃることなのである。

簡単に言ってしまうえば、今までの男性学・男性運動は、マッチョな男の人を脱マッチョさせる運動であり、僕みたいにマッチョでない男の人に手を差し伸べる運動ではない。もちろん、脱マッチョ運動も大いに結構だけど、「その理論を俺みたいなマッチョでない男に

あてはめないでくれー」と僕はずっと不満を募らせていて、それが鬱積して爆発してしまったのである。

2 『僕達急行 A列車で行こう』(2012)

『僕達急行 A列車で行こう』は、『家族ゲーム』(1983)や『それから』(1986)など、様々な傑作を生み出してきた森田芳光監督の遺作だ。森田監督は、まだ61歳の若さで亡くなったわけだが、この映画を見るとおいしい人を亡くしたと思わずにはいられない。『僕達急行』は、文句なく、僕にとって今年のベストワン映画だし、僕が時代遅れだと感じる人たちに、是非、見て欲しい。主演は松山ケンイチと瑛太。現代の日本映画を代表する若手男優2人だが、何よりも2人の友情が微笑ましくて、これからの男はこれだよ！と思わず、膝を打ってしまったのだ。

(1) 限りなくゲイに近い友情

僕は、この映画、まったくの予備知識なしで見たのだが、最初はゲイの話なのかと思った。冒頭、列車のなかの風景がスケッチされる。松山ケンイチは一緒にのっている女の子を怒らせている。一方、瑛太は外国人2人と何やら話をしている。同じ列車に居合わせた2人は初対面なのだが、この2人がニコッと微笑み合うショットの後、映画のタイトルが出るのである。松山がほほ笑み、瑛太がそれに応える。2人とも品が良くて草食系。なんとなくボーイズ・ラブを彷彿とさせる開幕である。

しかし、話が進んでいくとそうではないことがわかる。2人とも大の鉄道ファンで、鉄道が2人を結びつける共通項となるのだ。男同士が共通のもので結ばれて、友情をはぐくん

でいく。そういう話はいくらでもある。しかし、この映画で面白いのは、圭(松山)と健太(瑛太)の友情の描き方だ。

ゆで卵と焼鳥

まず、2人が食事をしながら話す場面。ゆで卵の殻をむいているアップが真上から撮られる。そして画面は横側から、健太の部屋で、小さな食卓に向かい合って座って、卵と焼鳥を食べている2人をとらえる。なぜ、卵と焼鳥なのか。森田監督らしい、わけのわからない、すっとぼけた面白さである。しかし、深読みして解釈すれば、卵と鳥は親子どんぶりの関係だ。これは、この2人が親密であることを示唆する指標となる。

いちごミルク

またちょうど映画のなかほど、博多に左遷された圭の部屋に健太が遊びに来るのだが、「何か飲む？」という圭に、健太は「いちごミルク。練乳をたっぷりかけてシェイクして」と答える。圭がキッチンに行こうとすると、「うそうそ、お茶でいいよ」と健太。しかし、「傷ついた心に優しいよ」と圭は、本当にいちごミルクをもってくるのである。ここでまた小さな卓上テーブルで向かい合って、2人の会話が始まるのだが、「お見合い断られて、落ち込んだよ。いい人だったんだけどね」と健太。「女子の気持ちは女子にしかわからない。わからないことはストレスになるから考えないのが一番だよ」となだめる圭。ここで健太は、圭が出してくれたミルクを飲み干す。

今でも男2人でパフェを食べたりするのは恥ずかしいという人がいる。僕はこれがよくわからない。男でも甘党の人はいるし、僕もパフェは大好きだ。しかし、男が食べる場合は、女性同伴、あるいは少なくとも男一人で

ないと変に見られるのだそうだ。男 2 人だったら、居酒屋か焼き肉か、そういう男っぽいところでないとあかんと思っている人はまだまだ多くて、男性差別である。甘いものには恋愛の匂いがするからだろう。しかし、圭と健太をつなぐものはいちごミルク。2 人はゲイではないのだが、こう考えてくるときわめてゲイ的な友情であることがわかるだろう。

パステル色の服

服装にしてもそうだ。圭はパステル・ブルーの服で登場する。一方の健太はパステル・ピンク。パステルカラーとは中間色であり、柔らかさを示す。深読みすれば性的にも中性であること、両性具有的であることを意味する。さらにブルーは男子の色、ピンクは女子の色だ。トイレなどは、男子用が青、女子用が赤で表示される。青と赤を薄めれば、パステル・ブルーとピンクになるわけで、そう考えれば、圭が同性愛の男役であり、健太が女役であると解釈することもできなくない。

しかし、圭も健太もフェミニン系で、どちらも男っぽい男ではない。2 人の関係には男同士の関係にありがちな攻撃性が欠けているし、両者とも受容的で、女に負けたくないとか男のほうが上位でなくてはならないという気負いはまったく感じられない。2 人はいちごミルクの仲。男同士の友情は、スポーツとか戦争とか、戦いにカムフラージュして描くケースが多いのだが、この映画は、それとは、まったく対照的な男同士の関係をさりげなく、なにげなく描いてみせる。

同じポーズ。

2 人は、福岡を旅する途中で、同じく鉄道ファンの筑後雅也(ピエール瀧)と出会う。「あなたたちいつもこうやって旅しとっと。うら

やましいねー」と筑後に言われて、2 人は同じポーズで頭をかく。この一瞬のさりげない味わいも微笑ましい。反射的に同じポーズをするという事は、女性同士ではよくあることで、お互いがシンクロしていることを示唆するものだ。異性愛でいえば、ペアルックを着ているのと一緒にいる。すなわち、2 人は女性同士、もしくは恋人同士のような男同士の関係を結んでいるのだが、そのことをまったく意識している様子がない。こういう男同士の関係は、筑後が言うようにまったくもって「うらやましい」ものなのである。

優しい男

健太が列車にのって帰る場面。ホームにいるケンイチに何度も笑顔で手を振るところも挿入される。笑顔は、感情の表出であり、相手を包み込む優しさである。30 年前に流行った中島みゆきの「誘惑」という歌があって、

優しさそうな表情は女たちの流行、崩れそうな強がりや男たちの流行と歌っていくのだが、今となっては、優しいのは男・強がるのは女だ。

(2) 草食系男の恋愛

健太のお見合いの場面。見合いの相手あやめ(松平千里)は、健太の父・哲夫(笹野高史)や彼女の母・ふらの(伊東ゆかり)も同席している見合いの席で、いきなり「私、キャバレーにつとめていたんです」と語り始める。「関心ですねー」とすっかり固くなっている瑛太は答える。「過去は問わないよな。私も息子もキャバレー好きです」と哲夫。「いや、僕は……」と健太。どうやら健太は、キャバレーのような女遊びをする場所は苦手らしい。

あゆみと健太のデートの場面でも、あくま

でも積極的なのはあゆみであり、「あゆみさんは恋愛に積極的なんですか？」とおずおずと尋ねるのは健太のほうだ。「これと思った人にはね。うふふ」とあゆみ。その後、健太はまんざら彼女のことが嫌いではないのだが、あやめのほうは「インパクトがないから」と健太との付き合いを断り、一度は寄りを戻そうとするかにもみえるのだが、やはり彼女のほうから分かれるということになる。

一方、福岡に転勤した圭は、福岡の同僚から、「中津の別嬪さんには気を付けなよ」と言われて、「趣味は列車にのって音楽を聴くことです。誤解されないように最初に言っておきます」と答える。またその後、クラブに誘われる場面でも、「僕はそういうところ行ったことないんで」と後ずさりする。

圭も、健太同様に、女性に対しては奥手であり、キャバレーやクラブのような女遊びをしたりする場所には馴染めないし、行く気にはなれない。そんなところに行く暇があるんだったら、鉄道のことを考えていたほうが楽しい。そういう男性なのである。

圭がつきあっているあずさ(貫地谷しおり)は、あゆみ同様に、恋愛に対して積極的な女性で、デートでも、「私のこと好き？好きでしょ」と迫ってくるし、「大丈夫よ。自分の分は自分で払うから。私、おごられるの嫌いな」と男におごらせることを拒否する現代的な女性だ。「私のこと好きならキスして」と迫るあずさに圭が応えて、一瞬ロマンティックなムードが高まる場面もあるが、ここで列車の音が聞こえてきて、思わず、圭は唇を離してしまい、あずさを怒らせてしまう。

2人の別れの場面では、「私と結婚する気ある？」と問うあずさに、「好きだけど、結婚今

はしたくない」と答える圭に、「私は今、したいのよ。旦那さんと色々なところを旅したいの。誰もいないところでの中途半端なキス。私、忘れないわ。」と言いだし、結婚することになった外国人の男を圭に紹介する。

男のほうが優柔不断。女のほうは、さばさばしていて、人生に対して意欲的、自分に対して不要と考えた男を未練たらしく追うことはなく、きっぱりと決断を下し、そして、相手も傷つけずにカラッと離れていくのだ。

(3) 趣味がプライオリティ。

結局、圭も健太も、女性よりも鉄道のほうに夢中だ。女性だけでなく、仕事よりも鉄道である。

2人が偶然知り合った筑後は、クラブでの再会で、圭の取引先の社長であることがわかり、圭と筑後は仕事のことやクラブの女性たちのことはそっこのけで、鉄道談義に熱中する。圭の会社の接待役・天城(西岡徳馬)は、「どうやら2人はできとりますな。鉄道の話で結びついている。あの2人は2人きりになれます。そのほうが取引は上手くいくでしょう」と社長(松坂慶子)に耳打ちすることになる。圭、健太、筑後、男たちのプライオリティは趣味なのである。

終盤、あずさに振られた圭に健太がよりそう。「僕達もてないのかなあー僕も見合い断わられたし」と健太。「関係ないよ。僕らしかわからない世界があるさ」と圭。「そうだよなあ」と健太。ここで筑後が話に割り込んでくる。「そうなんだよ。僕も仲間に入れてくれんね。あなたたちがうらやましかよ。社長になると友達がなくなるもんね」

筑後のこの台詞には社長という地位よりも、

共通の趣味をもつ友達がいる人生のほうがずっといいという想いがこめられている。

映画のファイナルは、列車にのって、一緒に駅弁を食べ、ビールを飲む仲むつまじい圭と健太のツーショットと鉄道が走っていく場面がモンタージュされる。

「休みとってどこかに行こうか」と圭。「お互い、カップル同士だったりして」と健太。「それはないよ。でも、そのほうがいい、そのほうがいい？」とふざけて、健太の顔に自分の顔を近づける圭。2人は身体の関係はないのだけでも、男同士のカップルでもいいか、それが一番楽しいんだったら……とこの結末は訴えているように思える。

2人は女性がいなくても、仕事が上手くいかなくても、鉄道と友情がある限り、十分、幸せそうに見えるのである。

3 . 新しい男たちの時代。

この映画の優れたところは、ジェンダーとセクシュアリティをちゃかしているところだ。社長を松坂慶子が存在感たっぷりに好演していて、女性がトップの会社なのだが、そのことを映画はことさらに強調してはいない。当たり前のことのように女が社長を務め、当たり前のことのように主役の男二人が同性愛的な/女性的な友情を紡いでいく。

それが、きわめてナチュラルに描かれ、新しい性の時代の幕開けを感じるのだ。しいてジェンダーを感じるのは、鉄道が2人の共通の興味であること。列車は旅のシンボル。旅するのは男なのである。これがもっと女性的な趣味だったら、さらに面白いことになっていたところだが、東映のようなメジャーな会

社で製作された映画にそこまで期待するのは酷だろう。かつてはやくざ映画というイメージだった東映が、ここまでジェンダーフリーな内容のものを世間に発表したことを高く評価したいと思う。

もう時代はここまで来ているのだ。これからは新しい男性の時代。とはいっても、まだまだおじさんたちは、30年前の中島みゆきの歌の世界を生きている。俺は、長年、男性学・男性運動をがんばってきたつもりなんだけど、まだ男性運動の内部の人からも認めてもらえない。いや、内部の人だからこそ、新しい男が見えなくなってしまうているのかなあー。本当に俺はつらいよ。あー、男は痛い！です。

援助職のリカバリー

《4》

～ダメダメ援助職のはじまり～

袴田 洋子

半年以上前になりますが、「その後の不自由
「嵐」のあとを生きる人たち」(上岡陽江・大嶋
栄子著 医学書院)という本を読みました。リ
ストカットや薬物依存の「当事者」が回復を続
ける中でも抱え続ける「課題」について、わか
りやすく書かれていました。想像はしてしまし
たが、読みながらひどく共感する自分がいて、
やはり自分は依存症という病を抱えている、と
いうよりもそう思った方が、自分を理解しやす
く、かつ自身をコントロールしやすい、という
ことも再認識しました。

この本の帯には“ちょっと寂しい”が、ちょ
うどいい」と書かれていて、自分の状態を測る
のに、なるほどと思いました。人との関係性や
距離感をうまく持てず、境界侵入しやすい自分
は「ちょっと寂しい」くらいが実際にちょうど
よく、ようやく最近、物理的に誰かと一緒にい
なくても、寂しさに囚われないようになりました。
心のバケツの穴が、今は小さくなってきて
いるのかもしれません。そしてそれは、人を信
じる事が出来るようになってきた、という事

なのかもしれません。そしてさらには、人から
拒否されたとしても、「そんなこともあるかもし
れないな」と思うことが出来るようになってき
た、という事なのかもしれません。

【実は、不採用寸前だった!】

“看護”に真摯な思いも抱かず、参加するこ
とに意義がある、かのごとくに病棟実習を終え、
大学4年の看護研究をどうにかやりすごし、ガ
ソリンスタンドでのバイトを11月くらいまで
やって、ようやく国家試験の勉強に手をつけた
のが、受験3ヶ月前。一夜漬けのような勉強の
仕方、何とか試験を終えて、4月。付属の大
学病院に就職しました。

ほとんどの看護学部生は、この付属の大学病
院に採用されるのですが、私は実は、不採用寸
前だったようでした。大学4年時に行われる看
護学部生対象の一斉に行う就職面接で、私はな
んと遅刻をしたのです。しかも服装はGパン。
実際の面接ではだらしない笑顔を振りまき、真
剣さが1ミリも感じられない話し方をし、今、

思い返しても信じ難いありさまでした。

「就職面接に遅刻してくるなんて全く自覚が足りない。態度もヘラヘラしていて、袴田は採用しない方がいいのではないかという話が出たのよ」と、学部の先生か事務か、病棟の上司か先輩か、誰かまったく覚えていないのですが、ある時そう聞かされ、自分はそんなに認められない存在なのか、とショックを受けたことを覚えています（自分のした事を反省もせずに）。

【大人の人が好き 甘えられる？】

学部生は必ず採用されるという甘い考えのもとでの面接態度であることに間違いはないのですが、後に、自分史を振り返っている時に、この不採用寸前だった情けない面接場面を思い出し、あの時、自分はどんな感情で面接に臨んでいたのか、アセスメントしました。そうしてわかったことは次のようなことでした。

「面接の場面で、あんなに複数の人（面接官）に自分について質問されるのが嬉しい。自分に興味を持ってくれるのが嬉しい。自分が話すことを真剣に聴いてくれるのが嬉しい。大人の人達が私の話を丁寧に真剣に聴いてくれるのが嬉しい。そんな感覚でした。ゆえに、あまりにも嬉しくて、しまりのない笑顔になってしまっていたのではないかと思いました。そしてまた、それはまるで、大人からかまってもらっている幼児が、ちょっとはにかみながら、でも嬉しそうに自分のことを話している姿そのもの、そんな場面とよく似ているように思いました。

ガソリンスタンドでバイトしている時、夕方は学生のバイトだけになって年代ばかりになるのですが、昼間、17時までのスタンドは経理や社員の「大人」の人たちがいました。出勤簿の印鑑押し忘れなどで、たまに日中にスタンド

に顔を出した時に「袴田さんは看護婦さんになる勉強をしているんですってね。偉いわねえ。勉強は大変なの？」などの会話をすることがあったのですが、ひどく嬉しく感じ、「私、年上の人が好きなのかも」と、はっきり思ったのを覚えています。

【認める前に、認められたいナース】

そんな自己理解を通して自分の承認欲求の強さ、愛着を強く求める自分を改めて思い、ため息をつくしかありませんでしたが、それだけで済むわけではありません。

そんなにも承認欲求が強すぎる援助職は、言うまでもなく、援助実践の場において、よい支援を行うのは難しいように思います。なぜなら、「こんなにも自分は一生懸命やっているのに、なぜ認めてくれないの？なぜわかってくれないの？もっと認めてちょうだいよ」という感覚が「患者を援助・支援する」というミッションよりも強く出てしまうからです。

患者のケアよりも、自分がケアされることを望んでいる状態と言えるかもしれません。それに気付いていれば、対処の方法はあるかもしれませんが、まだまだこの時点では、自分の不健全さには気付いていないので、周囲を困らせる、というよりは不愉快にさせる人生を歩むこととなります。

【サイアク新人ナース誕生】

希望どおりに配置された病棟（救命救急センター）で、案の定、私は上司や先輩、同期ナースを困らせる素行不良な新人看護師になりました。就職したての5月、再び妊娠、中絶をした私は、ただでさえ持っていない自己肯定感をさらに失くしていったようでした。

患者には優しくできない、先輩にはああ言えばこう言う、反抗する、上司からの注意にはむくれる、仕事はめんどくさがる、だらだら歩く、始業ぎりぎりに来る、不満が多い、愚痴も多い、陰口をたたき、嫌みをいう、準夜勤なのに気持ちが沈んで出勤出来ずにいるところに、同期の同僚ナースがアパートまで迎えに来る、など、過去を消しゴムで消せるならごっそり消したい、と本気で思います。(この状態、やはり「新型うつ」によく似ているように思うのですが、どうでしょう?)

【先輩ナースたちを手こずらせる】

当時、その病院では、新人ナースを教育するために「おねえさんナース」がマンツーマンで組まれ、私にも先輩ナースのAさんが指導してくれることになりました。そしてその病棟には、大学時代の友人Bもいました(私は留年したのでBより1年遅れて就職、Bの仕事ぶりを大学4年の時に見たり聞いたりしながら、救急の仕事はカッコいいなあ、私も救急で働きたいなあと思い、救急病棟を希望したのでした)。

すなわち、私の指導ナースAさんと私の友人Bは同期の関係であり、友人Bは、私の指導ナースAさんから、私を指導するにあたっての苦労話をずいぶん聞かされていたであろうことが想像できました。というのは、ある時、Bから「Aさん、袴田のこと『私には教えられない、もう私にはどうしたらいいのかわからない』って言っていたよ」と聞いたからでした。

友人のBからそんな事を言われて、あんなに優しいAさんがそんなふうになっていたのかと、突き放されたようなショックを受け、とても情けなく恥ずかしい思いをしましたが、負けず嫌いの性分が作用し、その場は軽くやり過ごした

ように記憶しています。

そうしてまた別の時には、Bから「主任が『どうでもいいけど、袴田、もう少し働いてくれないかしらね!』って言っていたよ」と聞きました。この時も深く追求せずにやり過ごしたように思います。今、思えば、これ以上自分を傷つかせないために、防衛的であったということでしょう。

【必要だよ、と言ってほしかった】

数年前、自己嫌悪のままに生き続けることの限界を感じたことをきっかけに、なぜ、こんなどうしようもない自分が出来上がってきたのか、自分を客観的にみて理解したいと考え、自分史を振り返っている時に、新人ナースの頃を思い返しました。

あの頃は気付いてはいなかったけれど、今、当時の感情を正直に言語化すれば、「認めてもらいたい、褒めてもらいたい、私は必要な存在だと言ってもらいたい、でも、そんなことはあるわけない、なぜなら私はどうしようもない出来損ないのダメなナースで、要らない人材なのだから」です。

でも、当時の私を認めてほめることができる人がいるとすれば、それはもしかしたら、少年院で診察する児童精神科医くらいかもしれせん。私は本当に扱いにくい人間でした。だから当時、私の周囲にいた人たちに、お詫びしたい気持ちでいっぱいになります。

そして、今でも援助職を続けている理由は、贖罪の思いが強くなるように思います。まったく良いナースではなかった為に、患者さんや職場の人たちに不利益を生じさせてしまった、その償いをしなければならぬ、という思いがあります。そして同時に、私のように不器用に、

他者評価にすぎた生き方をしている人がいたならば、もう少し楽に生きられる方法があるかもしれないよ、とおこがましく感じながらも、声をかけたい気持ちになります。

【常に鎧をまとして、完全防衛】

他者評価に依存するということは、常に自分が正しく、常に自分が勝って、「周囲から認められる」状態でいなければならない生き方ですから、何より自分を疲弊させます。また、批判や注意を受けたときには、自分が負けてはいけなないので、過剰に防衛的になり、議論の主旨を巧みにすり替えて、結果として相手をねじ伏せていきます。

重たい分厚い鎧を身にまといながら、これ以上自分を傷つける相手は、絶対に許さない。そんな新人ナースから始まった援助職の私は、不器用な生き方をこの後も続けていってしまいます。

【ダメナースが不要なのは、当然】

救急病棟で2年が過ぎようとしている時、婦長との面談で、「他の病棟に異動してほしい、あなたは他のスタッフとうまくやれてないようだから」みたいなことを言われました。しかし、病棟が変わるのは病院が変わるくらいの違いがある＝大変だ、と聞いていたので、何とかもう1年はこのまま救急病棟に居させてほしいと伝え、ぎりぎりそのまま残ることを許されました。が、その翌年、「はい、1年経ちました。約束したとおり、異動してくれるわね」とわずか1分ほどで婦長との面談は終わり、希望した循環器内科・腎臓内科の混合病棟へ異動になりました。私のコミュニケーションパターンに変化がないので、組織運営に支障があるスタッフは排除し

たいという組織の意向は当然です。うすうす分かってはいたながらも、やはり情けなさともじめな気持ちに沈んでいきました。

大学病院4年目、重たい気持ちのまま、私は不要な人材なんだという思いを抱きながら、循環器・腎臓内科病棟に異動した私は、救急病棟よりもはるかに過酷な業務状況の中で、ますますストレスを募らせていき、その2年後には退職をすることになります。

しゅう せん か にっ き 周旋家日記 ④ 乾 明紀

絵師決定—退蔵院襖絵プロジェクト—

退蔵院襖絵プロジェクトは、400年前に描かれた襖絵を模写するものでもデジタルで複製するものでもない。また、ライトアップなどで見せ方を工夫するものでもない。400年前の退蔵院がそうであったように新しい才能による価値創造を目指したプロジェクトである。

この目的のために我々プロジェクトチームは、京都造形芸術大学の中から公募によりその才能の発掘に取組んだ。公募条件は次の6項目である。

1. 平成23年4月から平成25年10月公開まで、すべての生活を制作に捧げること
2. 京都造形芸術大学の学部もしくは大学院を4月時点で卒業していること
3. 基本的に退蔵院に住み込み、数多くの作品を短期間に制作できること
4. 禅の世界を理解し、ディレクターとの協働に柔軟に取り組めること
5. 墨（モノクローム）による線描を得意とし、題材を選ばずに描けること（※特に水墨画に習熟していることは求められない）
6. 将来絵師として自立する決意を有し、かつ指導教授の推薦状を用意していること

平成23年2月、この条件を満たす大学生、大学院生8名の応募があり、ポートフォリオなどによる書類審査を経て、男性1名、女性2名の3名が面接に挑んだ。面接日は3月23日。春分とはいえ、寒さが堪える方丈で行われた。私も同席したが、終始ダウンジャケットを着たまの面接であった。昼の上とはいえ、禅寺は底冷えするものだとつくづく感じた。面接で合格した学生は、この底冷えする禅寺で日々の作務を行いながら襖絵を描いていくことになる。

さて、面接の時間。学生たちの集合時間は朝8時半。まず、妙心寺法堂に向かい、狩野探幽が8年の歳月をかけて制作した雲竜図を眺めることが最初の関門だ。この大迫力の大作を前に学生たちは何を感じるのか。覚悟かそれとも恐怖か。



その後、控室に入り、学生たちは静寂の中、名前が呼ばれるのを待つことになる。面接の会場は、自らが描いた襖絵が納められることとなる方丈である。ひとりひとり呼ばれ、ご本尊を右手に戴いて着座し、面接官より質問を受ける。

面接官は、松山副住職、国立国際美術館学芸員の中井康之氏、そして現代美術作家の椿昇氏の3名。さすがに禅問答はなかったが、面接官は、応募の理由、学生時代に制作した作品への想い、今後の創作活動への覚悟などを尋ねていく。雲龍に睨まれた後の面接は、学生それぞれの個性を引き出されたように思う。創作への熱い想いを語る者、体調の不安を隠しきれない者。そして、ひとり自然体で飄々としながらも創作への想いを語る女性がいた。その女性は、無限に溢れ出るような線画を描く大学院生だ。ポートフォリオに収められた数々の作品や彼女が描く線画からは、寝ても覚めても創作に打ち込んできたことが伝わってくる。それは圧倒的な創作意欲のエビデンスだ。退蔵院は、剣豪宮本武蔵が修行した場所としても知られているが、私は、この彼女が武蔵のように生涯をかけて道を究めていくのではないかと思った。

面接が終り私の体は芯まで冷え切っていた。私と面接官は控室に戻り、このプロジェクトを誰に託すのかを話し合った。そして、度胸の良さと思いきった線が魅力であることから村林由貴さんを絵師として採用することが面接官の一致した意見となった。私が飄々とした人柄と評した村林由貴さんが、退蔵院のお抱え絵師に決まった瞬間である。

この面接から3カ月ほど後、彼女に会い

に行った。彼女は、訪問直前に体験ではない本気の修行を道場で受け、老師からの「あなたになんて描けない」との言葉に座禅しながら泣いたという。そんな辛い経験もあったようだが、副住職から見た修業後の彼女は、自然を見る目がするどくなり、庭を掃くのがとても上手くなったようだ。

この日、彼女は次のようなことを語ってくれた。彼女は高校時代の部活動（ハンドボール部）で冷静にプレーすることができず、「やりきった」と思えなかったことへの後悔から大学での創作に打ち込んだが、周囲には優秀な学生も多く、満足できない日々が続いた。しかし、友人たちが創作する姿を間近で見て「諦めない」気持ちを感じたという。彼女は、これ以降、努力だけでも負けないようにしようと多くの時間を創作に費やした。そうすることで、ようやく4回生になって創作活動の中で「やりきった」を感じられるようになったそうだ。その後、両親を説得し、入学金の半分を賞金で賄うことを条件に大学院に進学し、このプロジェクトと出会うことになる。絵師に採用された今、何を感じているのかを尋ねたところ、彼女は「目の前にあることを一生懸命やっていくとつながっていく」、そして「自分の人生に根性は馴染まない。感謝の心を持っていたい」と語ってくれたことが印象的だった。

面接の日から1年と8ヶ月ほど経過した先日、退蔵院から、村林さんの活動の中間報告をプロジェクト関係者にお披露目する会のお誘いがあったので、久しぶりに彼女に会いに行った。そこには、袴姿で達磨を描く彼女の姿があった。



400年後も襖絵が残るように筆、墨、和紙、建具、表具などを司る一流の職人たちも一堂に集まっていた。このプロジェクトは、一流の職人の技の伝承にも貢献しているのだ。

彼女は今、妙心寺山内「壽聖院」の書院をアトリエに制作活動をおこなっている。

この日は、アトリエとなった書院の襖に描かれた彼女の作品を見せていただいた。そこには、彼女の気持ちと感性が春夏秋冬となって描かれてあった。四季の中に彼女の心の動きが投影されているようで観ていて面白かった。

現在、村林さんを中心に多くの専門集団が脇を固めこのプロジェクトは推進されている。私がきっかけを作ったプロジェクトによって、ひとりの才能が発掘され、職人の技術の伝承と新しい価値創造に貢献できたことは生涯の誇りである。ある学生が「先生がきっかけを作らなかったら、彼女の今はなかったんですよね」と言ってくれたこ

とを思い出し、この日は、周旋家冥利に浸った。退蔵院の襖絵の創作は、間もなく始まるようである。私にはプロジェクトメンバーとしての役割はないが、きっかけを作った周旋家として、これからの彼女の活躍と作品の完成が楽しみでしかたがない。

<退蔵院襖絵プロジェクト 完>



トランスジェンダー

をいきる

(3)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

幼少期(2)

前回は、自己の性自認が男の子であると確信し、祖母との暮らしを通じて、自己の性別のあり方や行動様式を規定した結果、独特で時代錯誤的な様相を持った定義の仕方をしていったところまで記述した。

その一方で、男の子でありながら、他の男の子とは相容れない性質におぼろげながら気づき始めた時期でもあった。今回は、そうした時期を、「陰の側面を感じた時期」として捉え、自己物語の記述に基づいて詳述する。

1 「なんか違うでえ」

自己の性自認が男の子であると革新していながら、一方で、他の男の子とはどこか異質な側面がある、という感じ方を、当時の心境になって率直に表現すれば、「なんか違うでえ」になる。特に、兄貴と同じような行動をしたとき、父方の祖母や両親は、必ず女の子であることを理由に私を叱責した。一見自明のことのように思われるこの厚意が、当時の私にとってはいつも納得のいかない結果を残すだけであった。その腹いせに、例えば兄貴とのおもちゃの取り合いや、テレビのチャンネル争いの際に、殴る・蹴る・噛み付くなどの暴力となって、兄貴の身体を攻撃することでストレスを解消していた。

しかし、そうした暴力性の裏側で、常に心理的不安定さにさいなまれていたことも事実

であった。それが「なんか違うでえ」という表現から生み出された「なんか」であり、その「なんか」は、容易に言語化できない迷路のような複雑な感情、いや、もっといえば、言語化してはいけないタブー感であった。そしてこの複雑な感情やタブー感は、素朴な疑問として率直に大人たちにぶつけることをためらわせ、この時期にありがちなさまざまな「なんで？」という質問リストから自然に締め出してしまった。

他の男のことは「なんか違うでえ」という感じ方は、その後、次項から詳述するように、徐々に明確化して、自己の身に降りかかることになる。

2 独特で奇妙な恋愛事情

「初恋の時期は？」と聞かれると、ほとんどの人たちが3, 4歳ごろから小学生のころの年齢のようだ。私もご他聞に漏れず、初恋は3歳から4歳ごろであった。しかし、このころから、私の恋愛の特徴が独特かつ奇妙であることに気づかされる。

ある音楽番組を視聴していたとき、ダークダックスやボニージャックスの歌が流れてきた。いずれも、男性ばかりのグループであるが、私はテノールパートを歌っていた男性のやさしい歌い方に心を引かれ、胸騒ぎや動悸・心理的搔痒感を覚えた。そして、番組終了後、しばらくの間、その歌を思い出したとき、無意識のうちにそのような感情を抑えるかのように、部屋の中を走り回りたくなるような荒々しい衝動に駆られ、悪戯や物を破壊したいという粗暴な行動に出てしまい、父方や両親の怒りを買ひ、女の子らしくすることを求められ、そのたびに極端な「恥辱感」に陥る羽目になった。このサイクルは、一定期間継続し、やがては自然消滅していった。

おりよく、当時、「恋する、、、」という文言のCMが、執拗にテレビから流れていた。私はこの「恋」という言葉にこめられている意味が、ダークダックスやボニージャックスの歌を聴いたときの一連の「症状」なるものと、その後の荒々しい行動や粗暴な態度、そこから派生する父方の祖母や両親からの怒りを買うことや、女の子らしくすることを要求された際に生じる極端な「恥辱感」という構図とが一致していること、つまり、ダークダックスやボニージャックスのテノールパートを歌っている男性が「好き」という恋愛感情を抱いていることを、子供心に知らされ、これが「初恋である」と確信したきっかけとなった。

しかし、この初恋のあり方が、当時メディアや周囲の大人たちによって植え付けられていた「恋心を抱いたときの女の子の心」、すなわち、「しとやかでうつむき加減、ケア役割を發揮する」などの行動様式とは程遠いと感じていた。それは、特にその後の恋愛に陥った際に、兄やいとこの男の子たちと遊んでいたとき、確かに一連の「症状」なるもの、不必要な荒々しい行動や粗暴な態度は軽減するものの、「男の子を性愛の対象とする女の子の私」を演出しなければならないという苦痛や、FTMゲイの恋愛は容認されない、という疎外感や恥辱感といったものは、軽減されるどころか、ますます顕著になっていった。当時、兄に好きな女の子がいたかどうかは別として、兄を含めた周囲の男の子たちの私に対

するまなざしが、「男の子を好きになり、その男の子のために、女の子としてかいがいしく世話をする」という図式によって規定されていると感じさせられた瞬間、(確かに男の子は好きだが、それは女の子としてではなく、男の子として好きなんだ)というFTMゲイの側面を否定せざるを得ないという疎外感が、自ら恋愛市場への積極的介入を阻んだといえるだろう。

3 女の子の身体であることへの違和感と、男の子のジェンダーであることの不一致の始まり

私は父や兄と一緒にいることが大好きであった。プロレスごっこのような遊びを通した身体接触も楽しかったが、3人で食事をしたり、ただ一緒にいること事体に、男の子としての性自認を強め、満足していた。

あるとき、父と兄の3人で、家の近くの川で立ち小便をしようということになり、誰の小便が一番飛ぶかを競うゲームをした。子供のころから、何かにつけて兄と競争して勝つことを目標にしていたので、このゲームも絶対に勝つと決め込んでいた私は、立ち小便をした際、自己の小便が父や兄のとは異なり、下にだらしなく地に落ちたことにショックを受けた。そこで父に、「なせ、私の小便は飛ばないのか」と聞いてみた。すると、父からあっさり、「お父さんやお兄ちゃんはちんちんがあるから、おしっこが飛ぶんや。お前は女やからちんちんがないし、それでおしっこが飛ばへんのんや」と言われた。そこですかさず、「でも、私にもそのうちちんちん生えてくるやろ?」と聞いてみると、またまたあっさり、「お前は女やから、ちんちんは生えてきいひん」と言われた。このような父との会話は、一見すると4、5歳の子供と父との何気ない会話に聞こえるかもしれない。しかし、当時の私は父の「お前は女やから、ちんちんは生えてきいひん」という言葉は、単に「ペニスは生えてこない」という以上に、父からの「ペニスを持たない体としての宣告」として、私の前に立ちはだかった。それは、父と兄とは相容れない性質、つまり、「男」ではなく、「女」であることで、男性同士のホモソーシャルな関係性から排除されたことへのショックと悲哀を意味した。

しかし、私も気持ちの上で負けてはいなかった。将来ペニスが生えてくることへの一縷の望みを抱きつつ、なおも父に食い下がった。しかし、父からの答えは変わらなかった。

父に「ペニスを要求する」という行為は、どう考えても無謀である。しかし、当時の私の父に対するこのような行為は、父からの「男ではない」、つまり、「女であること」の宣告を受けたショックと悲哀におののいている自己を鼓舞するための叱咤激励であった。しかし、そのような自己への叱咤激励も、父からの2度にわたる「ペニスを持たない体としての宣告」によって見事に打ち砕かれ、それ以上食い下がってペニスを要求することを許されなかった。自己の身体の性別に強烈な違和感を覚え、かつ、ジェンダーの性別との間の不一致を証明させられた瞬間であった。

このような体験は、FTMの、特に身体的違和感が著しいトランスセクシュアル(TS)に

において顕著に見られ、さまざまな手記やインタビュー調査を基にした研究論文においても、ペニスへのこだわりや欠損感についての語りが見受けられる。

4 「自己物語の記述」から見えてくる光と影

以上詳述したように、自己の独特かつ奇妙な恋愛のあり方と、身体が女の子であることへの違和感・それに伴う男の子のジェンダーであることの不一致によって、他の男のことは異なった様相が明確になり、「なんか違うでえ」という感じ方の「なんか」の正体が鮮明になってきた。「自己物語の記述」を元に、前回の投稿と合わせて次のように考察する。

自己の不の側面や感情を赤裸々に記述し、論じることによる「影の重要性」の焦点化「自己物語の記述」に当たってのルールとして徹底して行っていたのは、「自己にとって都合のよいエピソードだけではなく、負のエピソードも含めて記述する」ということであった。そこで、今まで封印し、決して語ってはならないとしてきた、あるいは社会から要請され、教え込まれてきた負の感情や負の部分を赤裸々に論じたことによって、自己の中に内面化している暴力性や排除の構造が露呈してきた。兄への暴力行為という負の行動様式の中に存在していたのは、他の男の子とは「なんか違うでえ」の「なんか」の側面が、容易に言語化できなかつたことによる過活動・行動化として表出したものであり、「身体が女の子」という社会的立场上許されないことの裏返しであることが明らかになってきた。このようにして、負の感情や負の側面を、その時期の「影の部分」として赤裸々に語り、論じることであえて焦点化することによって、今まで気づかなかつた自己の行動様式に隠されていた重要な問題性に気づかされた。

自己の体験を社会化する

「自己物語の記述」によって、自己の体験を可視化するという作業を通じて、その可視化した自己の体験を、単なる個人の体験に留めるのではなく、そこから浮かび上がってきた問題を社会化することで、社会の負の仕組みにも目を向けるようになり、あらゆる視点が開かれるようになった。恋愛市場への消極的かわりというものは、すでにこの時期において、異性愛中心であること、FTM ゲイである自己野恋愛のあり方それ自体への忌むべき感情が、すでにこのころから存在していたことが明らかになり、社会の恋愛のあり方に対する厳格で排他的な側面を垣間見ることができた。「恋愛は二人でするもの」、「男の子にはペニスがあり、女の子にはペニスがない」という事柄が、性別二元論に基づいて自明のように語られることによって、社会に対して身動きが取れないような閉塞感を抱き始めたのもこのころからである。

このようにして、特にこの時期の影の部分を考察することで、その影の部分から光を見出し、その後の行動様式の傾向性を省察することができるのである。

5 終わりに

「光があれば、陰もある」。これは一見すると自明なことであるが、ともすれば光に多く

の焦点が当たりがちになり、陰の部分を排除してしまいたくなる。しかし、「自己物語の記述」は、焦点が当たりやすい「光」よりは、むしろ「影」の部分に焦点を当てるというスタイルによって、そのエピソード特有の問題性が浮かび上がってくる。更に、その問題を社会科することで、社会の負の仕組みをも垣間見ることができ、今まで光であると思っていた事柄が、実は影の部分を構成していることにも気づかされた。

次号からは小学生時代のエピソードを分析するが、ますます「影の部分」への考察によって、更に問題が明らかになってくる。どうかお楽しみに。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士過程）

科後期博士過程）

役場の対人援助論

(3)

岡崎 正明

(広島市)

「明日から使える窓口対応S S T」

とある役場のある日の午後5時過ぎ。

上杉「みんなも知ってのとおり、今年から2週間に1回、終業後に窓口対応力UPのためのミニ研修をすることになった」

伊達「職員アンケートで『対応のうまい職員の技を盗める方法があります』って提案があったアレですか」

上杉「そう。これまでは窓口業務って経験だとか人柄だとかで片づけていたんだが、コミュニケーションもひとつの技術・スキルだというんだ。だからそれを具体的・論理的に学ぶ方法があるらしい。あるなら仕事の半分以上が窓口なわけだから、勉強しない手はないだろうという話になってな」

今川「いいことなんでしょうが、この年になると新しいことが頭に入るかどうか・・・」

島津「なんて名前でしたっけー。たしかN T T? みたいな」

真田「S S Tでしょ」

上杉「最近では企業や学校で取り入れてるところもあるらしい。今日は初回だから講師が来てる。毛利さん、よろしくお願いします」

毛利「研修センターから来た毛利です。よろしくお願いします。まあそんなに構えないでください。みなさんもすでに経験されてきた、ごく当然の手法をもとに練習したり話しあったりするだけなんで」

上杉「経験してきたことですか」

毛利「そうです。この中に生まれたときから日本語が喋れた人はいませんよね。みなさん親や周囲の人が話す言葉を、聞いて真似して次第に覚えたはずですよ」

真田「そうね。親と喋り方がソックリで落ち込むことがしょっちゅうよ」

毛利「知らない間にC Mソングを口ずさんでることありませんか。あれも繰り返し見聞きすることで、自然と身につく典型例です。コミュニケーションの技術は反復学習と模倣から始まるんです。S S Tとは、その理論の応用みたいなもので

す」

島津「それなら私でもやれるかも・・・」

毛利「でしょ。実際基本的なやり方を覚えてしまえば簡単ですし、具体的で前向きな考え方のクセがつきます。まあ口で説明するより、体験してみましょう。今日は私がリーダー役をやりますが、慣れてきたらみなさんで役割分担してくださいね。まずはルールを説明します。いつでも『パス』できます 良い所・できている所に目を向けましょう 良い練習ができるように、他の人を助けましょう 質問はいつでもどうぞ。この4つだけです。ホワイトボードに書いておきましょう。上杉課長、板書係をお願いできますか」

上杉「それくらいなら」

毛利「ではさっそく話し合いを始めます。まず今日取り上げてほしい窓口対応で日頃困っていることや、苦手な場面はありますか。こんなことでお客さんとトラブルになってしまった、とか」

伊達「えーっと、正しい説明しているつもりなのに、なんかよく怒られるんですよね」

今川「しょうがないさ。相手の都合の悪いことでも言わにゃならんし」

伊達「でも課長が出てきてくれたら、納得して帰って行かれて。島津さんが同じ説明してもあまり怒られてないみたいで・・・自分の言い方が悪いのかな、とったり」

島津「そうかしら。私だって怒られることあるよ」

毛利「具体的にはどんなやりとりがあって、どういう風に怒られるんですか」

伊達「例えば自分が『Aの手続きには 証明が必要ですから、すみませんが今日の申請はお受けできません』といった感じで言うと、『こないだはそう言われなかった』とか『ここまで来るのも大変なのに』と。お客さんの気持ちも分かるんですが、かといって制度やルールを僕の一存で変えられませんし・・・」

毛利「なるほど、それで」

伊達「それでも納得してもらえないと、課長とか今川さんに変わってもらったり」

毛利「きちんと助けを呼ぶんですね」

伊達「まあ、自分がそれ以上説明してもかえって怒らせてしまうかな、と」

毛利「なるほど。上杉課長、今の伊達さんの説明を板書しておいてください」

上杉「分かりました」

毛利「ではより場面のイメージを膨らませるために、ちょっとここでその場面を再現してみようと思います。伊達さん、今いるメンバーの中で、怒らせてしまうお客さんのイメージに近い人っていますか」

伊達「うーん。どっちかというとなりが多いので、この中であげるとすれば今川さんですかね」

毛利「では今川さん。ご指名ですのでご協力をお願いできますか」

今川「今の伊達君の話みたいな感じで、怒り出せばいいんですか？」

毛利「そうです。では他のみなさんに見えやすいようにちょっとお2人前を出ていただいて。はい。窓口はイスに座って話されるんですよね。そうしたらイスをこちらに持ってきて、向かい合わせましょう。じゃあお2人とも座ってください。伊達さん。うまくやろうとしなくていいので、普段通りでやってください。今川さんはお客さんとして怒ってくださいね。私の合図で始めてください。みなさんは伊達さんのやり方をよく見ていてください。そして、できている点や良い点を見つけてくださいね。あとで聞きますから。では、どうぞ！」

伊達「すみませんが、証明書がないとこの申請はできませんので・・・」

今川「この前電話で聞いたら、そんなこと言われませんでしたよ。平日休みがめったにないんで、なかなか来られないんですよ！」

伊達「申し訳ないです。ただ、どうしても証明書が必要ですので・・・」

毛利「はい、そこまで。ありがとうございます。まずはお2人に拍手を（全員拍手）ではみなさん、伊達さんのできている点、良い点を教えてください。課長、板書をお願いしますね」

島津「丁寧に謝れてましたよ。ちゃんと頭も下げて」

真田「きちんと証明書がないとできないと言えてたし。相手の目を見て」

毛利「『してないこと』もいいです。こういうマズイことをしていない、というのも良い点ですから。課長、何か見ている気がしました？」

上杉「変な反論はしてなかった。この前の電話がどんな話だったか誰にも分からないけど、相手はそう受け取ってしまったのだから『そんなことは言っていない』なんて下手にいうとマズイから」

毛利「お客さん役はいかがでした？」

今川「謝られているのでこれ以上言いにくいなあ。でも納得できない点もあるんだよなあ・・・。お客さんってこんな気持ちになんてすね。やってみて分かりましたよ」

毛利「そうなんです。SSTの良いところは、テーマを出した人だけでなく、参加者みんな気が付く点なんです。周りで見ている人も、客観的に自分のコミュニケーションを振りかえられますし。さて伊達さんはいかがですか？みなさんから結構できている点があるということでしたが。この後は、それでもお客さんが納得しないようなら、他の人に変わってもらおうという対応でしたよね」

真田「それもいいんじゃない。相手が変わると落ち着いたりするし」

伊達「できたらもう少し自分でなんとかしたいと思うんですよ。うまい説明というか、説得というか。いつも課長がいるとは限らないですし・・・」

毛利「なるほど。ではみなさん、伊達さんとしてはもう少しご自分の対応で、お客さんの納得を得たいとの思いがあるようです。なのでいろいろとアイデアを出してあげてください。さらにこうしたら良い、という提案を。その時、あまり伊達さんにできそうか、そうじゃないかとかいったことは考えなくていいです。どの案を採用するかは、伊達さんが考えますから。できるだけたくさんアイデアがあった方がいいです。ちょっと奇抜かな？とか、ほんとうに何でも結構です」

真田「私だったら、可能なものなら今日受け取れる書類だけ受け取って、『あとは郵送でも対応しますよ』とか言うかしら。2度も足を運ばせたら、怒る人多いし」

島津「私は相手が言いたいことがありそうだったら、とりあえず聞くの。できるできないは変えられないけど、言いたいこと言うだけでスッキリする人も多いし」

今川「とりあえず以前の説明が悪かったことは謝罪するかな。どう説明したかはともかく、そのように思わせてしまったのは間違いはないんだから」

上杉「まずは事情を聞くことも大事じゃないか？お急ぎの理由とか。その上でできる対応を一緒に考えるとか」

毛利「みなさんたくさん提案をありがとうございます。伊達さん、どうですか。明日からでも伊達さんが『これならできそう』なものがありましたか」

伊達「どれもいい提案です。特に今川さんの話しはなるほどと。自分はただ『すみま

せん』いうばかりで、何が悪いかはっきりいってなかったんで。あと状況が許せば、真田さんのアイデアも使わせてもらいたいです」

毛利「なるほど。早くも伊達さんなりの工夫をお考えですね。ではここで早速練習してみようと思います。練習した方が、本番での成功率が上がりますから。ただ、いきなりやるのが不安でしたら、誰かにお手本をみせてもらうのもひとつです。『見てマネる』のが学習の第一歩ですから。どうしますか？」

伊達「じゃあお願いします」

毛利「伊達さんがお願いされていますので、どなたか見本をみせてもらっていいですか？先ほど伊達さんがやってみたいと言われていた、今川さんと真田さんのアイデアを組み合わせた形で・・・」

真田「じゃあ提案したので私が。自分がやっているやり方でよければ」

毛利「もちろんです。普段の真田さんのやり方をみせてください。それがとても参考になるので。ではもう一度今川さんにも協力をいただいて・・・はい、スタート！」

真田「では今日のところはこちらの書類をお預かりしておきますね。すみませんが申請にはあと証明書が必要ですので、後日ご提出いただけませんかでしょうか」

今川「この前電話で聞いたら、そんなこと言われませんでしたけど」

真田「誤解を受けるようなご説明をしたようで、大変申し訳ございません。ただ、申請のためには証明書がかかせませんので、すみませんをお願いいたします。代理の方がお持ち頂いても、ご郵送でも構いませんので」

毛利「はいありがとうございました。(全員拍手) どうですか、伊達さん」

伊達「はじめから全部ダメというより、このほうがいいと思います。まだ納得してもらえないんじゃないかと・・・」

毛利「できそうですか。では練習してみましよう。今川さん、最後にもう一度だけお付き合ってくださいね。それでは、スタート」

伊達「ではこちらの書類は揃ってますのでお預かりしておきます。ただすみませんが申請には 証明書が必要ですので、後日ご提出いただけませんかでしょうか」

今川「この前電話で聞いたら、そんなこと言われませんでしたけど」

伊達「それは大変失礼いたしました。ただ、証明書がないとこちらの審査ができません。ご本人様のご来所が無理でしたら、代理の方でもご郵送でもよろしいのですが」

毛利「はい、ストップ。(全員拍手) うまく言えてましたねー。どうですかみなさん」

島津「いいタイミングで代案を出せてました」

上杉「最初より自信もって言えてた感じがしたね」

毛利「本当にいろんなアイデアが出て、他の方も気づきがもらえた良いSSTができたと思います。では伊達さん。次回までに機会があれば、ぜひ今日練習したことを試しにやってみてください。それが宿題です。そこでまた新たな課題が出れば、またこの場で考えていきましょう。他の方も何かテーマにしたいことがあれば出してくださいね。みなさんありがとうございました。お疲れ様でした(全員拍手)」

・・・てな感じでうちの職場のみならず、いろんなお役所の窓口でやったらどうか。小さな誤解やトラブルの芽を摘めて、職員にもお客さんのためになるんじゃないかと思う、今日この頃です。

通過・不通過									
新版 K 式発達検査をめぐって					その 2				
					大谷 多加志				

前回から「新版 K 式発達検査をめぐって」をテーマに連載を開始しました。私の仕事の1つである「新版 K 式発達検査」についてご紹介し発達検査について対人援助に携わる方に広く知って頂くこと、また発達検査と対人援助の共通部分について考えてみたいということが、連載の意図でした。今回が 2 回目、未だ手探りの感覚がありますが、焦らずに自分が日々発達検査に携わる仕事をする中で感じていることを丁寧に言葉にしていく機会にできればと思っています。

通過・不通過

発達検査、知能検査にはたくさんの種類があります。またそれぞれの検査は数多くの検査項目(下位項目と言ったりもします)から構成されています。それぞれの検査の持つ「発達観」「知能観」に基づいて、発達や知能を多面的に捉えるために、道具を扱う課題、言葉を用いる課題など、多種多様な検査項目が用意されているわけです。

各課題をクリアしたことをどのように表現

するかは、検査によって異なります。「正答」「誤答」のような表現もありますし、「合格」「不合格」という表現もあります。新版 K 式発達検査では、1983 年に発行された新版 K 式発達検査増補版では「合格」「不合格」という表現が用いられていました。しかし、2002 年、新版 K 式発達検査 2001 に改訂された時に、「通過」「不通過」と表現が変更されました。1つ1つの検査項目について「通過基準」を設け、基準をクリアするような反応が見られた場合、その項目を「通過」とします。逆に、基準に合致しない反応の場合は、その項目は「不通過」と判断します。

この「通過」「不通過」という表現が、私はとても好きです。「通過」という言葉からはあるところを通過した後の、その先にあるものが見えてきますし、「不通過」からは通過点までの道のりが見えてくるような気がします。ある1点で評価を二分しなければいけないというのは検査として仕方がない部分なのですが、「発達」は簡単に二分して考えられるようなものではありません。新版 K 式発達検査の「発達を連続体とし

てとらえる」という姿勢が、この「通過」「不通過」から伝わってくるように思います。

通過・不通過をめぐる

話が少し変わりますが、検査の講習会ではこの項目の「通過」「不通過」が、1つの大きなテーマになります。判断の基準はマニュアルには示されているのですが、実際の子どもたちの反応というのは本当に多様です。そもそも考えてみると、検査の基準となる標準化のデータは 2677 名の協力者の検査結果がもとになっているのですが、臨床の場に行われている検査の数は、当然それをはるかに超えていることでしょう。標準化の時には想定しなかったような反応が出てくることも、十分に考えられます。講習会では、マニュアルの基準だけでは判断に迷うような反応について「これは通過ですか？不通過ですか？」という質問を数多く受けることになるわけです。

原則的にはマニュアルの基準に則してご質問の内容を吟味しながら答えていくのですが、それでもなお、判断に迷うことはあります。例えば、描画に関する課題では、「線の間隔は〇cm 以下であること」や「角 A の角度は 90° 以下であること」など、かなり厳密な基準が設けられているものもありますが、 90° と 90.1° を見分けることは事実上不可能です。形は違っても、他の項目でもこのような見分けがほとんど困難な反応に出会うことは、やはりあります。自分が検査者の時は、最後は自分の

責任で「えいやあ！」と判断するのですが、講習会というフォーマルな場で、質問に応じるという形になると、まったく違った緊張が走ることになります。この際の「通過」「不通過」の判断は、当然検査結果（発達年齢や発達指数）に影響しますので、特に行政の場で判定業務に携わる方にとってはシビアにならざるを得ない問題だと思えます。

マラソン

最近、「通過」「不通過」という言葉から、マラソンのチェックポイントをイメージするようになりました。20km 地点、30km 地点にチェックポイントがあつて、22km まで走った人がいたとしたら、その人は 20km 地点は「通過」、30km 地点は「不通過」です。

先ほどの「通過」「不通過」の判断が難しい反応をマラソンに例えると、20km 地点まであと 1m のところの人と 20km 地点を 1m 過ぎた人とを比べているような話に思えてきます。20km と 1m 走れた人が明日は 20km に到達できないということも起こりそうですし、今日は 20km に 1m 届かなかった人が明日は 20km に到達することも、十分起こりそうです。そういう意味では、今日の記録では 20km 地点を「通過」「不通過」と結果が分かれましたが、走力に本質的な違いがあるとは必ずしも言えないように思えます。

一方で、21km まで走れた人と 29km まで走れた人が同じように 20km 地点は「通

過」、30km 地点は「不通過」となる場合もあります。この時は「通過」「不通過」の記録は同じでも、両者の間に力量の違いがあるかもしれない、と考える必要があるかもしれません、と考える必要があるかもしれません。

「通過」「不通過」はもちろん重要な判定です。しかしそこはあくまで発達をとらえるための1つの点、チェックポイントです。不通過から通過に至る過程や、さらにその先に続く道にも目を向けていくことが大切だと思います。

ペースメーカーがいれば

先に提示したような「通過点を超えたか微妙」という反応以外にも、判断に迷う反応に出会うこともあります。

講習会などでよく受ける質問の1つが、「定められた手続き実施した時は不通過になるけれど、〇〇という条件にすると通過できるという場合、どう判断したらよいか？」というものです。

先ほどのマラソンに例えて考えてみます。普通に走ると 20km にも届かずリタイアしてしまう人がいたとします。ただ、この人の横をペースメーカーが並走すると、20km はもちろん 42.195km を完走することまでできてしまうのです。質問の形式に合わせて「普通に走ると 20km も走れないのですが、ペースメーカーと一緒に走れば完走できる人がいたのですが、この人の走力をどう理解すればいいのでしょうか」ということになります。

マラソンを走る上で、ペースを作ることは

非常に大切です。いくら体力や脚力がずば抜けている人でも、後先を考えずにスパートを繰り返していればすぐにバテてしまうでしょう。マラソンを走る力は、単に体力や脚力を足し合わせたものではなく、それを最大限に発揮できるようなペース作りの力も含まれる、総合的な力だと言えるでしょう。

仮にペースメーカー並走でよい記録を出せる選手がいたとしても、その記録をそのまま実力と受け取ってマラソン大会に送り出すことはできません。自分でペースがつかめるようなトレーニングが必要かもしれませんし、場合によってはその人が実力を発揮できる距離に種目を変更することも1つの手かもしれません。

話を発達検査の場面に戻すと、「〇〇の条件ならできた」という時、そのまま無条件に「通過」とは判断できないと思います。「〇〇の条件で試してみよう」という発想は、検査者の臨床的なセンスによるものです。それだけに、その試みから得られる情報は非常に有益です。マラソンの場合と同じく、パフォーマンスを左右した「条件」について考えることが、子どもの特性に合わせた配慮や支援につながっていくように思います。

発達を総合的に捉える

発達検査で理解しようとしている子どもの「発達」も、マラソンの場合と同様に「総合的な力」であると考えています。初めて知能検査を作成したビネーの知能観につ

いて、松下・生澤（2003）は次のように述べています。

「19 世紀に自然科学がおさめた成功のもとで、当時の社会では要素還元主義的な世界観が支配的であった。そのような世界観を反映して、人間の精神作用も感覚や知覚、あるいは反射速度など単純な心的過程に分析できると考えられた。しかしビネーは、単純な心的作用を厳密に測定してそれを総合しても、人間の高度で複雑な知的活動をとらえることはできないと考えて、判断力、注意力、推理力というような複雑な知的活動そのものを測定しようとした。ビネーはそれらの知的活動のサンプルになるような、日常的で、具体的な知的作業を広く集め、それを実際にやらせてみる、という方法をとった。」

この考え方と手法は、新版 K 式発達検査にも受け継がれています。「〇〇ができないのは××だから」というように人間を単純化して考えない姿勢は、子どもに限らず、人間を理解しようとするときに欠かせないものだと思います。

引用文献

松下裕・生澤雅夫（2003）
新版 K 式発達検査（1983 年版）から
新版 K 式発達検査 2001 へ
京都国際社会福祉センター発達療育研
究 2003.5 別冊

★まえがき

私は応用人間科学研究科に2期生として在籍しました。そこで学んだことは一言では言い表せませんが、最も大きな学びは、その人の生き方のありのままを尊重し、各々の生き方に合わせた支援の枠組みを考えるといった視点でした。私は大学院入学まで保健師として働いていた事もあり、それぞれのケースの弱点、援助が必要な点ばかりに目が行きがちになっていました。研究対象とした10代の母親に至っても同様でした。また、日本での10代の母親に関する論文も、リスクを中心にした論調が殆どでした。しかし、10代の母親のインタビューを進めていく中で、こうした論調に違和感を覚えるようになりました。いわゆる「望まない妊娠」ではなく、主体的に出産を選択した母親もいます。また、同世代の横のつながりを生かして子育てをすることができたり、母親となることが新たな社会とのつながりを作るきっかけとなるなど、10代で出産する事の「強み」もあるとわかりました。さらに、社会的に不利な環境に置かれてきた方達も少なからずいます。このことから、彼女たちが出産を決意する背景を明らか

にし、10代の母親を支える社会の仕組みのあり方はどういったものかを考えたいと思い、修士・博士を通じて研究をしてきました。今回の連載でその一部をご報告させていただき、10代の母という生き方がライフスタイルの一つとしてあることを、多くの皆様に知っていただければ幸いです。

初回である今回は、10代の出産数の推移について見ていきます。

★10代での出産は増えている？

10代での出産は増えているのでしょうか？実は、10代での出産は1985年の17,877人をピークに毎年減っていて、2010年は13,546人です。これは全出生率の1.26%であり、10代の母親は非常に少数派であることがわかります。人口千対出生率で見ても、近年では2000年の5.5%から2009年は5.0%まで下がっており、10代での出産は数・率ともに減っています。

一方で、10代の人工妊娠中絶件数は1995年以降急激に上昇した後、2000年の46,511件をピークに2002年に初めて減少に転じ、2010年は20,650件と10年で半減しました。2011年は、20,903件と10年ぶりに増加に転じて

います。10代の人工妊娠中絶件数が減少し続けた当時は、産婦人科医師など関係職種が話題として取り上げていた程度でしたが、増加した途端にYahooのトップニュースに現れた時は、私も驚きました。こうした取り上げられ方を見ても、10代の性に対してメディアがどのような関心を持っているのかが垣間見られます。

過去10年間の出産数と人工妊娠中絶数の関係を見てみますと、人工妊娠中絶件数は過去10年で半減していますが、出産数は2002年の21,401人から2010年の13,546人と、それほど大きな増減は見られません。

2000年～2010年までの人工妊娠中

絶件数、出産数、さらに出産数と中絶件数を足して、その年に妊娠した人数と仮定し、出産数から妊娠した人数を除いたものを出産割合として値を計算したものを[図1]に示しました。この図から、10代で妊娠した時に出産を選択する人、人工妊娠中絶を選択する人の割合がおおよそわかります。2000年は出産する人の割合が30.8%と、3人に1人に満たない数でした。このことから、10代で妊娠した際に人工妊娠中絶を選択した人が3人に2人以上いたことがわかります。10代の出産率は年々増えていきましたが、2010年から減少に転じ、2011年では38.9%と、出産する人がおよそ4割という状況です。

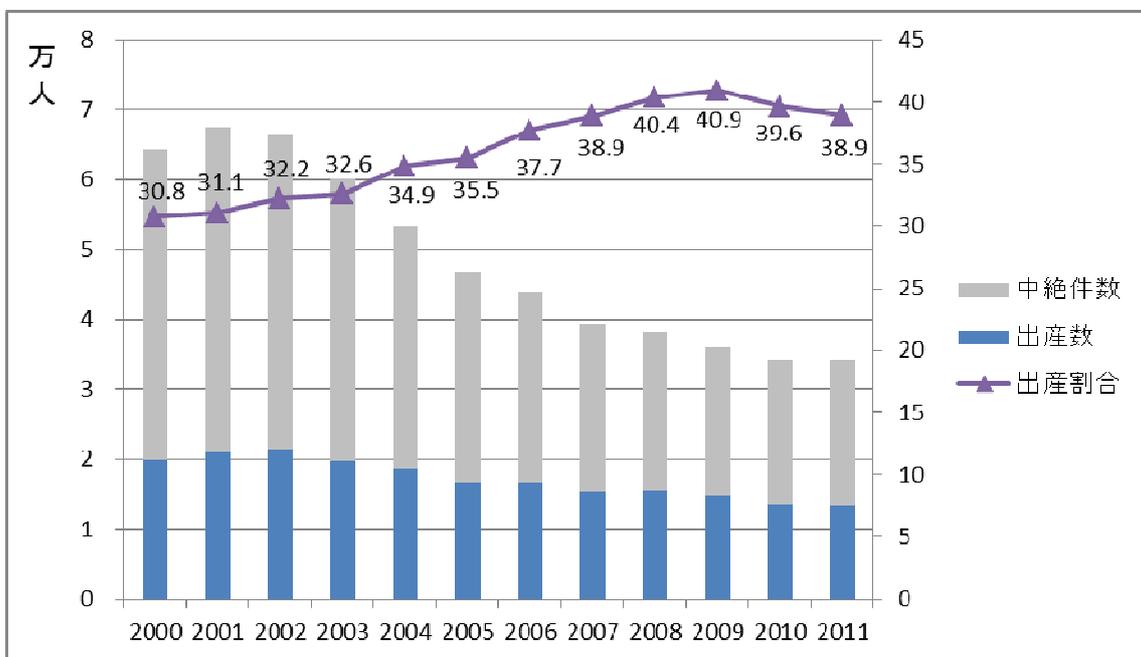


図1 2000～2010年の10代の出産数、中絶件数、出産割合(人口動態統計及び衛生行政報告例から筆者作成)

★10代の出生率に影響を及ぼすものは何か

10代の人口千対人工妊娠中絶実施率と、人口千対出生率、高校3年生女子の性交経験率¹⁾(以上左軸)、10代の結婚期間が妊娠期間より短い出生(いわゆる「できちゃった結婚」)が嫡出第1子に占める出生構成割合の率：以下、結婚期間が妊娠期間より短い出生：右軸)を示し、1955年から5年おきに比較したものを[図2]に示しました。性交経験率は毎年調査されていないため、便宜的に1974年の実施結果を1975年、1981年を1980年、1987年を1985年、1993年を1990年及び1995年、1999年を2000年、2012年を2009年と、比較的近い年に記載していま

す。

図2から、1975～1980年の間に人工妊娠中絶率が出生率と逆転しており、出生率よりも中絶率の方が高くなり、現在も同じ状況で推移していることがわかります。出生率は、1955年からみても増減幅はわずかでほぼ横ばいです。10代の人工妊娠中絶件数の増加には性交経験率の上昇が背景にあることが指摘されているように(玉城ら,2007)、人工妊娠中絶率は性交経験率が急上昇した2000年に上昇しています。しかし出生率は、この時もそれほど大きな変化は見られません。このことから、性交を経験する人が増加しても、出産する人数は増えなかったと言えます。

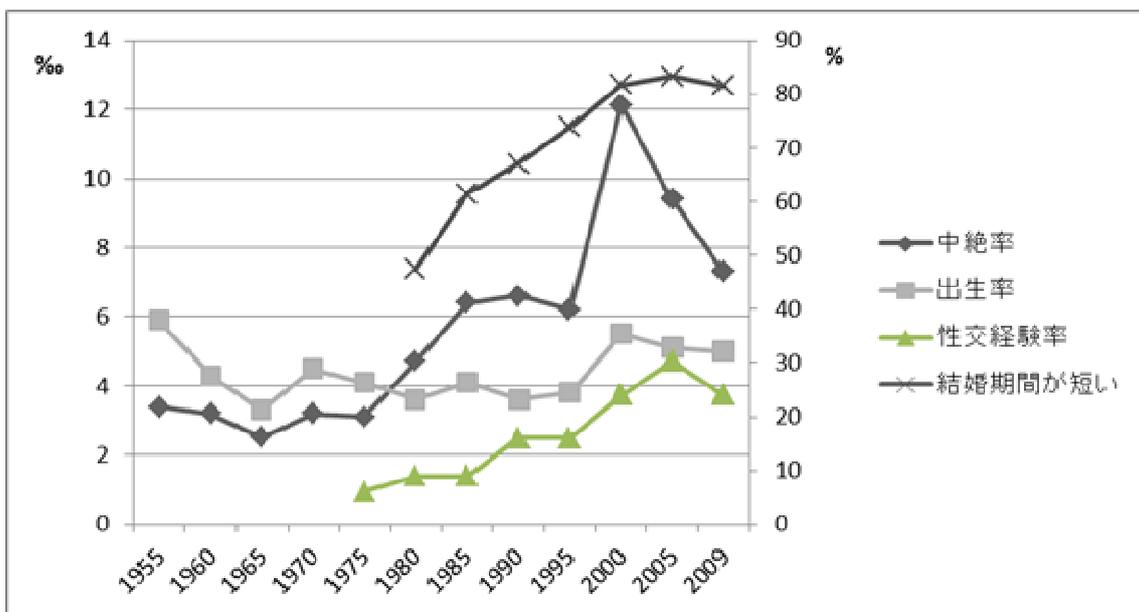


図2 10代の人工妊娠中絶実施率、出生率、性交経験率と結婚期間が妊娠期間より短い出生が嫡出第1子に占める出生構成割合

人工妊娠中絶率は 2002 年から減少していますが、この理由についてピルの普及(佐藤, 2005)や、地方行政における支援の促進(森田, 2008a)が指摘されています。しかし、国内の 16~49 歳のピル普及率はわずか 3%です。さらに、産婦人科受診が必要で 1 ヶ月の価格は 3000 円とやや高額でもあることから、若年層にピルがそれほど普及したとは考えにくい状況です。若年層の人工妊娠中絶の減少は、ピル普及というよりも、図 1 で示したように、妊娠した時に出産を選択する割合が増えていることが理由の一つとして考えられるでしょう。

また、結婚期間が妊娠期間より短い出生は、全年齢中で 15~19 歳が最も高く、2000 年以降は 80%台を超えて推移しています。このことから、近年では 10 代では妊娠前に婚姻するケースは少なく、妊娠後に婚姻したケースが極めて多いことがわかります。結婚期間が妊娠期間より短い出生は 2000 年までは上昇傾向にありましたが、現在は横ばいです。結婚期間が妊娠期間より短い出生が増加したことにより、妊娠した際に、結婚して出産を選択するケースが多いのではないかと考えましたが、結婚期間が妊娠期間より短い出生が増加しても、出生率の変化はほとんどみられませんでした。

このことから、10 代女性の出生率は妊娠者数が多い年に減少する傾向はありますが、性交経験率の上昇や人工妊娠中絶率の増減、結婚期間が妊娠期間より短い出生の増加などに左右されず、過去 50 年間大きな増減はなく、ほぼ一定の割合で推移していることがわかります。10 代の出産は、婚姻制度にのっとらず、ピルの普及で減少することもなく、また人工妊娠中絶件数の増減にも左右されないということになります。それでは、10 代女性の出生率が影響を受けている要因は何なのでしょう。

北村(1995)は、十代における妊娠は、多くの社会的要素の相互作用によるものであるとし、貧困な母親達への社会福祉・生活保護システムや住宅政策、義務教育等一見して家族計画に直接関与していないかのような政府政策も、重要な関わりを持っていると言います。こうした中、先進国中で 10 代での出産が極めて多いアメリカやイギリスは、10 代の母親を取り巻く社会的要因に注目しています。アメリカでは、若年母親の人生の道筋は、幼少期に始まり 30 歳まで持続する不平等な人生の遺産を反映している(Smithbattle, 2007)とされています。また、イギリスでは若年出産は地理的要因や社会経済的地位と関連があること(Babb, 1994)、さらに若年母親全員

が貧困の経験をしていた(Phoenix, 1991)ことが指摘されています。さらに、イギリスで2010年に策定された「若年妊娠防止のための戦略」(Teenage Pregnancy Strategy) (DH, DCSf, 2010) では、経済的機会の欠如や貧困が若年妊娠につながる要素であることが報告されています。このことから、アメリカやイギリスでは、若年出産の背景にある社会経済的地位や生育歴などに関心が向けられていることがわかります。こうし

た10代の母親の背景にある社会的要因は、日本でも同じようにみられるのでしょうか。

今回は海外に目を向け、先進国中で最も若年出産が多いアメリカと、EU諸国の中で若年出産が最も多く、若年出産を社会的排除の対象と位置付け、様々な取り組みが行われているイギリスの10代の母親の社会的背景を記述し、日本の状況と比較したいと思います。

【注】

1) 2005年から調査項目に変更があり、中学生には質問の文言「性交」を「性的接触(性交)」と変えて調査をしている。また、高校生には「性交経験の有無」を直接問うことを止め、「初交の動機」を問うことで「性交経験ありを間接的にとらえるようにした」(2005年版児童・生徒の性)

【引用文献】

Babb, P. 1994, Teenage conceptions and fertility in England and Wales, 1971-1991, *Population Trends*, 74, pp12-17.

Department of Health, Department for children, schools and families, 2010, *Teenage Pregnancy Strategy Beyond 2010*, Department for children, schools and families Publications.

北村邦夫, 1995, 十代の望まない妊娠防止対策に関する研究 1. 世界各国の十代妊娠、中絶、流産、避妊等に関する現状調査, pp148-159, 2. 日本十代女性の性、妊娠、避妊、出産に関する現状調査, 平成7年度厚生省心身障害研究 望まない妊娠の防止等に関する研究報告書, pp160-179.

森田明美, 2008a, 若年出産・子育ての現状と福祉的支援の課題, *思春期学*, 26(1), pp134-139.

佐藤郁夫, 2005, 望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究, 厚生労働科学研究研究費補助金子ども家庭総合研究事業, 望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究 平成16年度総合研究報告書, pp1-14.

SmithBattle L., 2007, Legacies of Advantage and Disadvantage: The Case of Teen Mothers, Public Health Nursing, 24(5), pp409-420.

玉城清子, 上田礼子, 2007, 若年母親の申請時に対する知覚と育児行動, 沖縄県立看護大学紀要, pp9-15.

東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会, 2005, 児童・生徒の性, 東京都幼・小・中・高・心障学級・養護学校の性意識・性行動に関する調査報告, 学校図書.

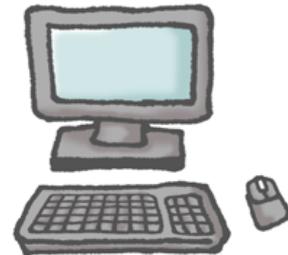
電腦援助

ver.1.0

浅田 英輔

対人援助職に必要なのは、対人援助技術・知識である。それはたぶん、確かだと思う。

でも、それ以外にも必要な知識や技術はたくさんある。その部分を少し伝えていきたい。パソコン周辺のことに関心の強いひとにはカンタンすぎる知識かもしれないけれど。



私は、対人援助職をしているのに「パソコンはちょっと難しくて」などという人に疑問を持っている。相談に来る人の多くはインターネットから知識を得る術を知っている。子どもたちに起きる問題は、長じるほどケータイやネットが絡んでくる。すべてわかっていなくとも、「そういうもんだよな」という理解は必要だ。

また、研修会や学会の情報やらなんやらも、ネットを通して得られるものも多い。「みんなが知っているものは知っているべき」もどうかと思うが、誰でも知り得る情報を手に入れる方法は知りたい。

そういう人の助けになれたらいいなあと思っている。だから難しいことは書かないので、ちょっとだけ踏み出してみたい。

さて、第1回はWebメールのお話。



対人援助学マガジンを読んでいる多くの方は、インターネットにつながる環境があると思う。家でも職場でもどこでもいいけど、インターネットにつながったパソコンをみることができて、簡単な検索ができて、PDFファイルのダウンロードができる人だろう。家にも職場にも、ある程度自由に使えるインターネットにつながっているパソコンがある人もいるだろう。最近だとスマートフォンでみているという人もいるかもしれない。自分では持っていないけど、家族が使っているものをちょっと借りているという人もいるかもしれない。

そういういろいろな人たち誰でも有用なのが「Web メール」だ。Web メールというのは、インターネット上にある「保管庫」にメールの情報やらを保存しておくタイプのメール。

「普通のパソコンメール」というのは「プロバイダ」に契約して、プロバイダの保管庫を借りたり、自分のパソコンに保存したりするものを指す。これはメールアドレスの「@」の後ろになにながついているかで簡単に見分けることができる。

so-net は「@ナントカ.so-net.ne.jp」

biglobe だと「@ナントカ.biglobe.ne.jp」

nifty だと「@nifty.com」といった具合である。



これはインターネット回線を契約するときセットでついてくるもの。10年ほど前はこれを使うのが一般的であった。これはこれでいいと思うし、ちゃんと契約して使っていますよ、という身分証明的な意味合いもある。

これに対して Web メールと呼ばれるものは、多くの場合は無料で、簡単な登録をするだけで使えるメールである。

@の後ろは「@gmail.com」「@yahoo.ne.jp」

「@hotmail.co.jp」などである。見たとおり、Google や Yahoo、hotmail (Microsoft) などがサービスを提供している。これらは誰でも取得できるので、自由に使える反面「信用できない」と捉えられる場合もあったりする。



①どこでもみられる



一番の利点は「どこでもみることができる」こと。職場でも家でもスマホでも、ID と Password さえ入力すれば同じメールをみることができるのだ。「家で仕事のメールなんて見たくない」という人もいるかもしれないが、こういう雑誌を読んでいる人は「仕事のうちなんだけど、本来業務ではない」ようなことも多いのではないかな。そういうメールは家でみることもあるだろう。「児相研メール」と

か「臨床心理士会メール」とか「家族支援研究会メール」とかそういうやつである。土曜の研修会の場所どこだっけ！と悩んでも、職場に行くのはめんどくさいのである。仕事のメールアドレスを業務外のものに登録していいのか、という話題も以前起きていた。

②メールアドレスはかわらない

もうひとつの利点は、ずっとかわらないということである。Gmailであれば、Googleが潰れないかぎりはいじょうぶだろう。たぶん、まだまだつぶれない（たぶんね）。仕事をやめても、職場のアドレスがかわっても、ずっと使える。研修会の取りまとめなどをやっていると、結構やっかいなのが「メールアドレスかわりました」の連絡。いいから Gmail 使ってよ！とか思ったりする。



③用途によって使い分け



あとは、無料なのでアドレスをたくさん持つこともできる。通販サイトなど、登録するのはいいけどセールスメールがたくさん来てしまうものもある。「tuuhanasada@～」でアドレスを持ってもいいわけだ。単発研修会取りまとめ用のアドレスもいい。IDとPasswordを共有すれば、「実行委員全員が見られるアドレス」というのもアリだ。ちなみに、私はWebメールアドレスは6つぐらい持っていたりする。用途によって使い分けることもできるのだ。一般向けの研修会で、イマドキメール申し込みができないのはどうかと思う。

また、スマートフォンがかなり普及しており、「Android」であればGoogleのアカウントは持っていると思う。そのメール、パソコンから見ることもできるんですよ。

そんな便利なWebメール、ひとつぐらいは登録してみてもはどうだろうか。

私の師の一人がよく「とりあえずやってみればいい」というようなことを言いますよね。「少しあわてんぼうでいいのだ」と。無料で、便利そうだし、であればやってみようよ。使えなかったらやめればいいじゃん。使えそうなら続けてみればいい。「よく理解してから」っていうけど、「よく理解できたとき」はたぶん来ない。まあ、こないよね。このあたりは実に対人援助の方法と同じである（強引）。おためしあれ！

疑問・感想は dennouenzyo@gmail.com まで！（←いま作った）

編集後記

編集長(ダン シロウ)

第11号です。今号からの新執筆者は、浅田英輔さんと大川聡子さんです。前号では休載を余儀なくされた脇野さんも戻ってきました。そして、村本邦子さんの連載は10号で一区切りしました。又、新企画での登場を期待しています。

今号は200の大台を超えて、216頁になりました。第10号まで、執筆者の方々にお届けしていた印刷版も、一区切りとさせていただきます。この影響で、誌面に少し新たな展開もあります。

モノクロ印刷版を少数でも制作していると、印刷では出にくい色調は、タイトルなどでは避けておかなければなりません。そこが解禁です。

執筆者の方々も、カラフルな写真やイラストなども入れたいと思われたら、原稿とは別データでお送りください。編集させていただきます。

執筆者短信を読みながら、あらためて、それぞれの方達が対人援助領域の様々な場所で、良い仕事をしておられるなぁと思って感動しています。

私たちはいろんな理由で自分の今いる場所にたどり着いています。そして、そこで行うべき事を行って生きています。それでなければならなかった人もあるのでしょうか、大多数の人は巡り合わせでしょう。

私の場合、今いる場所も、果たしている役割もまったくその通りで、どこにも必然はありません。もし、二十歳の私に、未来を予想させたとしたら、妄想であっても、現在の私にかすりもしないでしょう。想像も出来ない事や場所を、目標に出来るはずがありません。

つまり今の私や、周囲にあるものは、何一つ目指して獲得したものではありません。

つまり、どこかから与えられた、文字通りの賜物(たまもの)です。だから、できる事がある間は精進しようと思います。

口ではいろんな事が言えますが、要するにどう行動するかです。それが分かっているので、ゴタゴタ言っていないで行きます。やり続けたことだけが満足してくれます。これに気づくのに、随分かかってしまいました。

編集会議と称する座談をこの時期にはいつもします。編集員・千葉晃央と新編集員・大谷多加志の三人で、宅配モノなどつまみながら仕事場D・A・Nでだべるのです。

今回は千葉編集員が、自分が担当する紙面のレイアウト・デザインを大幅に変更したいと提案しました。理由は、ちょっとゴチャゴチャしすぎていて、飽きるモノがあるといえます。

私はフムフムと聞いていました。そして彼の言うことはほぼ正しいと思いました。こういう作業はやっている内に、いろんな気掛かりが出てくるものです。それがセンスだと思います。

初期に分担を決めてスタートした各連載は、いろんなレイアウト経過を持っています。

最初に我々がレイアウト・デザインしたままを維持しているモノ。執筆者が写真や表を多く入れた原稿を制作するようになったので、そのまま使うことになったモノ(これはタイトル文字デザインも変更になりました)。そして今回、千葉君担当のいくつかは、修正したいという希望で変更になります。しかし、いくつかは今のままが良いと思うので、そのまま残すことにしました。

私の担当しているモノにも、修正の余地ありだと考えているモノがあったので、少しですが手を入れました。

尋ねられると、並べているだけの編集のような言い方をしていますが、実際は試行錯誤を楽しんだり、残念がったりしています。そしてドンドン執筆陣は増えていっています。

三年間、無事務めた(何もしなかった)学会理事長から、無事、降りさせていただきま

した。これで、晴れて「対人援助学マガジン・編集長」一本です。本誌の充実のため、いっそう、頑張りたいと思います。どうぞよろしく。

対人援助学会 in 横須賀でのマガジンWS参加者は四名でした。全体の参加者が少ない大会だったので、それぞれのプログラムも小さくしっぼりと話し込みました。

そこで話題になったのが、どんどん厚くなるマガジンの執筆内容に関する、編集者の役割のことでした。これだけ多岐に渡る分野の執筆ですから、執筆内容について編集長が、網羅して点検するのは難しいと思っています。

投稿論文ではないので査読が入っているわけでもありません。全ては連載執筆者の責任において記述して貰っているわけです。引用、参考文献を明示した連載をしている方もありますが少数です。

どなたも連載であることで、書いたものへの読者の反応に対する責任が自動的に生じているとも考えています。引きつづき、更に拡大路線をいきます。そのような位置づけのマガジンとして、大いに皆さんの学びに、業務発展にご活用下さい。

編集員(チバ アキオ)

浜松のNPO法人クリエイティブサポートレッツ主催の「ドキュメント展 佐藤は見た！！！！！！」という展覧会にいった。障害領域の事業所を運営しているレッツさんは、福祉事業所だけでなく、地域に働きかけていく場(たけし文化センター)も複数展開し、とてもエネルギーである。今回の展覧会名の「佐藤」とは職員の名前です。つまり展示されているものは職員が現場で見ているものを展示というかたちで社会に伝える試みです。利用者が真っ黒に塗ってしまったミッキーマウスあり、ビニールテープでぐるぐる巻きにしてしまった人形あり、注射として嫌がるドライバーがあり…。その「もの」とそのエピソードを絵や文を交えて展示されていました。また、映像としてとらえた日常の実践場面、いつも施設で聞いている利用者の方の

話す物語を音で展示したのもありました。

これらのことは福祉現場では文書でまとめられてきたものです。しかも事業所内だけで。そこでは、課題として、やったことと文書とが違うという実践と文面との隔たり、文章能力が求められ、文章能力がある人がよき援助者とは限らない、文章ばかりに時間をとられる…などなど負の側面がたくさん指摘されてきました。

今回の「佐藤は見た！！！！！！」では今までとは違う何かを希求するスタンスを感じることができ、仕事のおもしろさも伝わってくるとても価値のあるものだと感じました。

現場ではスタッフ一人一人がハンディカメラを持っているそうです。先日、仙台の事業所もユニットごとにカメラを準備している話をききました。動画記録をして、年間報告時に保護者への取材なども加えた番組を作り職員で共有しているとのことでした。今あるやり方だけがその方法ではなく、違うものを模索し、探究していく姿勢はだいすきです。このマガジンもそうですから。

11号になり、新しくチャレンジをした執筆者の方々の姿勢も素敵です。(自画自賛！含む)

編集員(オオタニタカシ)

第10号からの新人編集員です。マガジンを読んでまず感じるのは、切り口と視点の多様さ。日々自分が関わっている仕事は、ごく限られたフィールドだ。連載陣を見て、広大なフィールドを前にしばし立ちすくんだが、そんな世界につながってられることはきっと幸運なのだろうと思う。編集についてはド素人に何ができるのかとも思うが、不思議と不安はなく、何か自分にできる「めぐり合わせ」があるのだろうと、楽しみに待つ心持ちでいる。

編集会議2回目にして、何かがフィットし始めた感覚がある。連載を始めたきっかけは編集長に声をかけてもらったことだったが、書いてから気づいたのは、その内容が前々からどこかで言いたいと思っていたことばかりだということ。「書きたい人が、書きたいこと

を書く場」であるマガジンが、新しいステージのように思えて心が躍る。執筆者の方たちと、いつかどこかで会えることも、これからの楽しみの1つになった。

マガジンを通じて、どう「つながり」が広がっていくのかに期待しつつ、まずは自分の持ち場で力を尽くしておこうと思う。

ご意見・ご感想

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

印刷版対人援助学マガジン(1号~10号)が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。在庫確認の上、メール便で発送します。

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻11号

第三巻 第三号

2012年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第十二号は2013年3月15日

発刊の予定です。

原稿締め切りは2月25日!

新規連載者も募っています。

執筆企画をお知らせ下さい。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

あなたも、ぜひ

学会にご加入下さい

どなたも参加できます

入会問い合わせ・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内

TEL/FAX 学会専用 :06-6910-0103

表紙の言葉

このイラストは、新聞連載用に書いていた文章のために描いたカットの一部分だ。

いつごろからだろう、絵と文の両方を引き受ける仕事が増えた。文章を依頼されて、「出来ればカットも一枚・・・」と打診されることが多い。

これが自分の執筆機会づくりには有利に働いていることに気づいたのは、大分たってからだった。

自分の文章を格別どうというモノだとは思っていない。出版の機会に恵まれているが、文章力をどうこう考えたことはあまりない。

ただ、掲載紙面のことを考えたとき、マガジンの編集長作業をしながら、画と文を上手くアレンジして紙面を仕上げてくれる執筆者は有り難いと思う。

だから、意図していたわけではないが、結果的に執筆機会が増えていたのだろう。

2012/12/15 団士郎